

東海大学大学院平成 26 年度博士論文

ブルガリア前期青銅器時代土器の編年と地域間交流
デヤドヴォ遺跡の資料分析を中心として

指導 金原 保夫 教授

東海大学大学院文学研究科
史学専攻

千本 真生

目次

第1部 序論	1
第1章 本論の目的と対象	2
1. 1. 本論の目的	2
1. 2. 本論の分析対象	4
1. 3. 本論の構成	5
第2章 問題の所在と分析方法の提示	6
2. 1. ブルガリアの地理と地域区分	6
2. 2. ブルガリア先史時代の概要	7
2. 2. 1. 旧石器時代・中石器時代 (前140万年～前7千年紀前半)	7
2. 2. 2. 新石器時代 (前7千年紀後半～前6千年紀末)	8
2. 2. 3. 銅石器時代 (前5千年紀初頭～前5千年紀末)	8
2. 2. 4. 銅石器時代から青銅器時代への「移行期」 (前5千年紀末～前4千年紀末)	9
2. 3. 前期青銅器時代の枠組み	9
2. 3. 1. 前期青銅器時代の上限と下限	9
2. 3. 2. チェルナヴォダIII文化の年代的位置付けについて	11
2. 4. 上トラキア平野東部における前期青銅器時代研究のあゆみ	13
2. 4. 1. 第1期：先史時代研究の黎明期 (19世紀～1946年)	13
2. 4. 2. 第2期：カラノヴォ遺跡第1次調査とカラノヴォ編年の確立 (1946年～1961年)	14
2. 4. 3. 第3期：エゼロ遺跡発掘調査と時期区分の試み (1961～1989年)	14
2. 4. 4. 第4期：緊急調査による墳丘墓、中期青銅器時代集落、「聖域」の発見 (1989年～)	16
2. 4. 5. ブルガリア各地の前期青銅器時代研究概観	17
1) 上トラキア平野西部	17
2) 黒海西岸域	18
3) ブルガリア西部・南西部	19
4) 北ブルガリア	19
5) ロドピ山塊地域	20
2. 5. 問題の所在と分析方法	20
2. 5. 1. 問題点の抽出	20
2. 5. 2. 分析方法の提示	22

第Ⅱ部 土器の編年と地域性	25
第3章 前期青銅器時代デヤドヴォ遺跡の時期区分と土器の変遷	26
3. 1. はじめに	26
3. 2. 遺跡調査の概要	27
3. 2. 1. テル北部における試掘調査	27
3. 2. 2. 日本隊による前期青銅器時代集落の調査と「中央住居群地区」	27
3. 2. 3. 中央住居群地区における主要な調査遺構	28
3. 3. 前期青銅器時代の層序	29
3. 4. デヤドヴォ遺跡の土器にみられる特徴	32
3. 4. 1. 器形分類	32
1) 深鉢	32
2) 浅鉢	33
3) 水差し	33
4) 壺	34
5) アスコス	34
6) カップ	34
7) 注口付土器	34
8) 漏斗状土器	35
3. 4. 2. 装飾分類	35
1) 孔列文	35
2) 刺突文	35
3) 刻目文	35
4) 凸帯文	35
5) 貼付文	36
6) 刻線文	36
7) 縄目文	36
8) 押引文	36
3. 5. 土器と層位	36
3. 5. 1. 深鉢	36
3. 5. 2. 浅鉢	37
3. 5. 3. 水差し	38
3. 5. 4. 壺	39
3. 5. 5. アスコス	39

3. 5. 6. カップ	39
3. 5. 7. 注口付土器	39
3. 5. 8. 漏斗状土器	40
3. 6. 土器による時期区分	40
3. 7. 放射性炭素年代の検討	41
3. 8. まとめ	43

第4章 デャドヴォとエゼロにおける前期青銅器時代土器の年代的考察 45

4. 1. はじめに	45
4. 2. エゼロ遺跡の報告書と時期区分に関する問題の所在	45
4. 2. 1. エゼロ遺跡とその調査	45
4. 2. 2. エゼロ遺跡調査報告書の検討	46
4. 2. 3. エゼロ遺跡調査後の編年的所見	48
1) 前期青銅器時代層の2段階区分論	48
2) ガラボヴォ遺跡の発見とエゼロ遺跡上層資料の調査	48
3) エゼロ遺跡資料の再検討	49
4) 絶対年代からのアプローチ	49
5) 小結	50
4. 3. エゼロ遺跡における前期青銅器時代土器の特徴	51
4. 3. 1. 深鉢	51
4. 3. 2. 浅鉢	52
4. 3. 3. 水差し	53
4. 3. 4. 壺	54
4. 3. 5. アスコス	54
4. 3. 6. カップ	54
4. 3. 7. 注口付土器	55
4. 3. 8. 漏斗状土器	55
4. 4. デャドヴォとエゼロの比較	55
4. 4. 1. 深鉢	55
4. 4. 2. 浅鉢	56
4. 4. 3. 水差し	57
4. 4. 4. 壺	58
4. 4. 5. アスコス	58

4. 4. 6. カップ	58
4. 4. 7. 注口付土器	59
4. 4. 8. 漏斗状土器	59
4. 5. 上トラキア平野東部における編年学的指標と時期区分	59
4. 6. まとめ	62

第5章 ブルガリア前期青銅器時代の土器編年：デヤドヴォ、エゼロと他遺跡資料の比較分析 64

5. 1. ブルガリア各地域の前期青銅器時代土器資料	64
5. 1. 1. 上トラキア平野東部	65
1) 集落遺跡	65
2) 埋葬遺跡	73
3) 環溝遺跡	76
5. 1. 2. 上トラキア平野西部	78
1) 集落遺跡	78
2) 埋葬遺跡	83
3) 環溝遺跡	84
5. 1. 3. 黒海西岸域	85
1) 集落遺跡	85
2) 埋葬遺跡	87
5. 1. 4. ブルガリア西部・南西部	88
5. 1. 5. ブルガリア北東部	91
1) 集落遺跡	91
2) 埋葬遺跡	91
5. 1. 6. ブルガリア北部	93
1) 集落遺跡	93
2) 埋葬遺跡	94
5. 1. 7. ブルガリア北西部	95
1) 集落遺跡	95
2) 埋葬遺跡	98
5. 2. 各地域における土器の年代的位置付けと地域性	98
5. 2. 1. 上トラキア平野東部	99
5. 2. 2. 上トラキア平野西部	106
5. 2. 3. 黒海西岸域	112

5. 2. 4. ブルガリア西部・南西部	113
5. 2. 5. ブルガリア北東部	116
5. 2. 6. ブルガリア北部	117
5. 2. 7. ブルガリア北西部	118
5. 3. まとめ	121

第III部 土器文化の成立と展開 125

第6章 上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりとエゼロI期土器の系譜 126

6. 1. はじめに	126
6. 2. 研究の背景	126
6. 2. 1. 「間層」の発見	126
6. 2. 2. いわゆる「移行期」について	127
6. 2. 3. 後期銅器時代から前期青銅器時代への変遷に関する3つの仮説	128
6. 2. 4. エゼロ文化の起源に関する解釈と問題点	129
6. 3. エゼロ文化の遺跡と周辺地域の諸文化	131
6. 3. 1. 分析対象としてのエゼロI期遺跡	131
6. 3. 2. 周辺地域文化の様相	132
6. 4. エゼロI期土器について	133
6. 4. 1. 器形と装飾要素	133
6. 4. 2. カラノヴォ遺跡の土器について	134
6. 5. 土器装飾の比較と系統関係	135
6. 5. 1. ブルガリア北部・北東部とドナウ川下流域との比較：チェルナヴォダIII系装飾	135
6. 5. 2. 黒海北西岸域とギリシア・アナトリア西部との比較：ウサトヴォ系装飾	136
6. 5. 3. 葬送儀礼関連の遺構から出土したエゼロI期土器	137
1) 副葬品としてのエゼロI期土器	137
2) ゴリヤマ・デテリナ4号墳丘墓出土の土器	138
6. 6. エゼロI期土器の系譜と成立	139
6. 6. 1. カラノヴォ遺跡資料の時間的位置付けについて	139
6. 6. 2. エゼロI期土器の形成過程	140
6. 6. 3. 葬送儀礼に用いられたエゼロI期土器	141
6. 7. まとめ	142

第7章 前期青銅器時代における土器生産と産地推定：デヤドヴォ遺跡資料の胎土分析をもとに 145

7. 1. はじめに	145
7. 2. ブルガリア前期青銅器時代研究における土器胎土分析	145
7. 3. 分析方法と対象	146
7. 3. 1. 分析方法	146
1) 岩石学的方法	146
2) 分析化学的方法	148
7. 3. 2. 分析対象	148
1) 考古資料	148
2) 粘土試料	149
7. 4. 岩石学的方法の結果と考察	150
7. 4. 1. 土器資料	150
7. 4. 2. 粘土試料	150
7. 4. 3. 実体顕微鏡観察	151
7. 4. 4. 小結	151
7. 5. 分析化学的方法の結果と考察	152
7. 5. 1. 分析値について	152
7. 5. 2. EDXRF による分析結果と考察	152
7. 5. 3. ICP-AES による分析結果と考察	153
7. 5. 4. 小結	153
7. 6. 考古学的解釈	154
7. 6. 1. I類胎土と原料産地に関する民族誌との比較	154
7. 6. 2. 非I類胎土の位置付け	155
7. 7. まとめ	156

第8章 ブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の変遷：デャドヴォ遺跡の事例を中心として

8. 1. はじめに	157
8. 2. 縄目文土器研究の背景	157
8. 2. 1. 縄目文土器をめぐる議論：「移住民搬入説」と「施文法伝播説」	157
8. 2. 2. 縄目文土器研究の問題点	158
8. 2. 3. 縄目文土器研究の対象と方法	159
8. 3. デャドヴォ遺跡の縄目文土器	159
8. 3. 1. 縄目文土器の型式学的特徴	159
1) 器形	160

2) 装飾	160
3) 施文具：縄の撚りの方向	160
4) 施文具：縄圧痕の幅	160
5) 施文具と器形	161
8. 3. 2. 縄目文土器の出土層位	161
8. 4. 縄目文土器の年代と地域性	162
8. 4. 1. 編年的位置付けの検討	162
8. 4. 2. 分布上の特徴に関する検討	163
8. 4. 3. 地域性の検討	164
1) 上トラキア平野西部	164
2) 黒海西岸地域	164
3) 小括	165
8. 4. 4. 縄目文土器の起源に関する検討	165
8. 5. 縄目文土器の胎土と特徴の推移	166
8. 6. ブルガリア前期青銅器時代縄目文土器の変遷	168
8. 6. 1. 縄目文小鉢の製作地域と移動	168
8. 6. 2. 縄目文土器の「在地化」	169
8. 7. まとめ	170

第IV部 結論

第9章 ブルガリア前期青銅器時代土器にみる地域間交流

9. 1. 本論の成果	174
9. 2. 上トラキア平野における前期青銅器時代土器の歴史的 position 付け	179
1) エゼロⅠ期における土器群の形成過程と北方からの影響	179
2) エゼロⅡ期における地域文化と北方系要素の融合	183
3) エゼロⅢ期における文化変化と南方からの影響	187
4) 小結	192
9. 3. 課題と展望	194

謝辞

参照文献

図表

巻末

図版一覧

- 図1 ブルガリアとその周辺国および地域の位置
- 図2 ブルガリアの地勢と地域区分
- 図3 「移行期」と前期青銅器時代の金属製短剣
- 図4 カラノヴォ遺跡の層位断面とカラノヴォ編年
- 図5 本論文で言及する主要な前期青銅器時代遺跡
- 図6 デャドヴォ遺跡および周辺地区の地形測量図と日本隊調査区範囲
- 図7 「中央住居群地区」とテスト・トレンチおよびテスト・ピット
- 図8 中央セクション壁断面と AMS 年代測定値
- 図9 デャドヴォ遺跡における前期青銅器時代住居址の平面プランと配置 (2008 年調査)
- 図10 デャドヴォ遺跡のカマドと構造の概念図
- 図11 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器 (深鉢)
- 図12 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器 (浅鉢)
- 図13 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器 (水差し、壺、アスコス)
- 図14 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器 (アスコス、カップ、注口付土器、漏斗状土器他)
- 図15 前期青銅器時代デャドヴォ遺跡の縄目文土器
- 図16 デャドヴォ遺跡における前期青銅器時代の有文土器およびカップ把手と注口付土器
- 図17 デャドヴォとエゼロ遺跡における深鉢の変遷
- 図18 デャドヴォとエゼロ遺跡における浅鉢の変遷
- 図19 デャドヴォとエゼロ遺跡における水差し、壺、アスコス、カップ、注口付土器、漏斗状土器の変遷
- 図20 デャドヴォ遺跡における前期青銅器時代土器の特徴とその変遷
- 図21 エゼロ遺跡の立地
- 図22 エゼロ遺跡の地形図と調査区
- 図23 エゼロ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図24 エゼロ遺跡ミコフ調査区と北東区から出土した前期青銅器時代土器
- 図25 エゼロ遺跡における深鉢の出土比率
- 図26 エゼロ遺跡出土の深鉢に施文される装飾の推移
- 図27 エゼロ遺跡の深鉢に施文される孔列文と刻目凸帯文の推移
- 図28 エゼロ遺跡における縄目文深鉢の推移
- 図29 エゼロ遺跡の浅鉢に施文される装飾の推移
- 図30 エゼロ遺跡における縄目文浅鉢の推移
- 図31 エゼロ遺跡における刻線幾何学文および刺突充填幾何学刻線文小型鉢の推移

- 図 32 エゼロ遺跡における縄目文小型鉢の推移
- 図 33 デャドヴォとエゼロ遺跡における各段階の指標資料
- 図 34 カラノヴォ遺跡の地形図と調査区
- 図 35 カラノヴォ遺跡第 1 次調査出土の前期青銅器時代土器
- 図 36 カラノヴォ遺跡第 2 次調査出土の前期青銅器時代土器
- 図 37 ノヴァ・ザゴラ・ツイガンスカ・モギラ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 38 ノヴァ・ザゴラ平地型集落遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 39 ビコヴォ・ドンチョヴァ・モギラ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 40 オフチャリツァ II 遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 41 マドレツ・グジョヴァ・モギラ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 42 ゴリヤマ・デテリナ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 43 ズナメノセツ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 44 ボルスキ・グラデツ・モギラ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 45 ガラボヴォ遺跡出土の前期青銅器時代から中期青銅器時代への移行段階および中期青銅器時代初頭の土器
- 図 46 ガラボヴォ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 47 アッサラ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 48 ミハリッチ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 49 スヴィレングラット・ブランティーテ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 50 スヴェティ・キリロヴォ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 51 カラスラ・ルプキテ・カレ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 52 クラン遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 53 ヴェセリノヴォ・マレヴァ・モギラ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 54 ドラマ・カイリャク遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 55 ベレケツカ・モギラ平地型集団墓出土の前期青銅器時代土器 (1)
- 図 56 ベレケツカ・モギラ平地型集団墓出土の前期青銅器時代土器 (2)
- 図 57 ゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓の平面図と断面俯瞰図
- 図 58 ゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓出土の前期青銅器時代土器
- 図 59 ゴリヤマ・デテリナ 4 号墳丘墓における埋葬址と祭祀遺構の位置
- 図 60 ゴリヤマ・デテリナ 4 号墳丘墓から出土した土器
- 図 61 メドニカロヴォ墳丘墓群出土の前期青銅器時代土器
- 図 62 オフチャルツィ・ゴリヤマタ・モギラ墳丘墓出土の前期青銅器時代土器
- 図 63 ドルノ・サフラネ墳丘墓 6 号墓出土の前期青銅器時代土器
- 図 64 コニョヴォ・ユルガンズィスキ遺跡出土の前期青銅器時代土器

- 図 65 ドラマ・メルジュメキヤ遺跡環溝（遺構番号 009）出土の前期青銅器時代土器
- 図 66 ユナツィテ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 67 ユナツィテ遺跡の前期青銅器時代土器にみられる特徴的な属性とその推移
- 図 68 オグニャノヴォ・マルテペ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 69 ダベネ・サロフカ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 70 プロヴディフ・ネベト・テペ遺跡 10 層出土のアスコス
- 図 71 プロヴディフ・ヤサ・テペ I 遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 72 プロヴディフ・レストランタ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 73 マノレ・ラスコパニツァ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 74 ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓 16 号祭祀遺構出土の前期青銅器時代土器
- 図 75 チェルナ・ゴラ 1 遺跡平面図と前期青銅器時代土器
- 図 76 エゼロヴォ II 遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 77 ソゾボル遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 78 キテン・ウルドヴィザ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 79 ラドミル・ヴァホヴォ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 80 ヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 81 ネヴェスティノ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 82 ペルニク・クレポスタ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 83 ホトヴォ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 84 コヴァチェヴォ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 85 トウトラカン遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 86 マダラ墳丘墓群（1 号墳、3 号墳）の平面図および断面俯瞰図と前期青銅器時代土器
- 図 87 カルゲリツァ墳丘墓（5 号墳）の平面図および断面俯瞰図と前期青銅器時代土器
- 図 88 ブラチドル I 墳丘墓の平面図と断面図および 7 号墓出土の前期青銅器時代土器
- 図 89 ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 90 オスマンキン・ドル遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 91 デヴェタキ洞窟遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 92 バティン平地型集団墓出土の前期青銅器時代土器
- 図 93 サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 94 サドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 95 レピツァ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 96 バガチナ遺跡出土の前期青銅器時代土器
- 図 97 マグウラ洞窟遺跡出土の前期青銅器時代土器

- 図 98 タルナヴァ 1 号墳の平面図と断面俯瞰図および副葬された前期青銅器時代土器
- 図 99 ブルガリア前期青銅器時代遺跡の編年的位置付けと併行関係
- 図 100 第 6 章で言及する主要遺跡分布と年代的関係
- 図 101 後期銅石器時代から「移行期」における各文化の土器
- 図 102 南東ヨーロッパから西アナトリアにおける「移行期」併行の遺跡分布
- 図 103 南東ヨーロッパにおけるチェルナヴォダ III 文化およびウサトヴォ文化と前期青銅器時代の遺跡分布
- 図 104 第 6 章で言及するエゼロ I 期土器の器形と装飾の概念図
- 図 105 エゼロ I 期土器の器形と装飾要素
- 図 106 「移行期」からエゼロ I 期にかけての装飾要素の変遷 [チェルナヴォダ III 系]
- 図 107 「移行期」からエゼロ I 期にかけての装飾要素の変遷 [ウサトヴォ系]
- 図 108 ギリシアおよびトルコにおける孔列文土器
- 図 109 副葬品および儀礼に用いられた土器
- 図 110 エゼロ I 期土器の系譜と形成過程
- 図 111 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器と胎土類型
- 図 112 デャドヴォ遺跡 の位置と周辺地域の地質および粘土試料採取地点
- 図 113 デャドヴォ遺跡およびその周辺の粘土試料採取地点
- 図 114 粘土試料 (上) と前期青銅器時代土器 (下) の接写写真および偏光顕微鏡写真
- 図 115 実体顕微鏡観察による土器胎土の分類結果
- 図 116 MgO、Al₂O₃ の ICP-AES と EDXRF の相関
- 図 117 EDXRF による代表的な主成分組成図 (上 : MgO-Al₂O₃、下 : SiO₂-CaO)
- 図 118 ICP-AES による前期青銅器時代土器の代表的な主成分組成図 (上 : SiO₂-Al₂O₃、下 : SiO₂-MgO)
- 図 119 居住地から原料産地までの距離と民族誌の事例数
- 図 120 デャドヴォ遺跡から 10km 圏内で採取可能な原料
- 図 121 第 8 章で言及するブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の分布
- 図 122 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代縄目文土器
- 図 123 撚りの方向と縄目痕の幅の相関関係
- 図 124 デャドヴォ遺跡における縄目文土器の変遷
- 図 125 エゼロ遺跡の縄目文土器
- 図 126 エゼロ遺跡の縄目文土器にみられる各器形の変遷
- 図 127 ブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の地域性
- 図 128 デャドヴォ遺跡の在土器胎土と粘土試料
- 図 129 縄目文土器の施文具と胎土類型の相関関係
- 図 130 フリントおよび玉髓原産地の分布と II 類胎土の偏光顕微鏡写真

図 131 ブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の変遷

図 132 ブルガリア前期青銅器時代における地域間関係と遺跡類型の分布と変遷

図 133 カップ類と環溝遺跡の分布範囲

表一覧

表 1 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代住居址と建築層

表 2 デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代層から検出した炭化物試料の AMS 年代測定結果

表 3 デャドヴォとエゼロ遺跡の層位と時期区分

表 4 集落遺跡と環溝遺跡の基本情報一覧

表 5 上トラキア平野東部における指標資料の分布

表 6 上トラキア平野西部における指標資料の分布

表 7 黒海西岸域における指標資料の分布

表 8 ブルガリア西部・南西部における指標資料の分布

表 9 ブルアリア北東部における指標資料の分布

表 10 ブルアリア北部における指標資料の分布

表 11 ブルアリア北西部における指標資料の分布

表 12 ブルガリアおよび周辺地域における前期青銅器時代編年

表 13 代表的な土器資料と粘土試料の偏光顕微鏡観察結果

表 14 デャドヴォ遺跡における前期青銅器時代の縄目文土器

図版出典

- 図1 筆者作製
- 図2 Копралев 2002, фиг. 1.1 に筆者加筆
- 図3 Vajsov 1992, abb. 2 に筆者加筆。短剣のヒ素含有量を示した値は、エゼロ遺跡は Георгиев и др. 1979, таб. 23, обр. 109、ホトニツァ・ヴォドパダ遺跡は Vajsov 1993, 115ff.を参照。
- 図4 Fol & Lichardus 1988, abb. 13
- 図5 筆者作製
- 図6 東海大学トラキア発掘調査団から提供を受けた図版をもとに筆者作製
- 図7 東海大学トラキア発掘調査団から提供を受けた図版をもとに筆者作製
- 図8 禿 2014、図 48 に筆者加筆
- 図9 禿、千本 2008b、fig. 14 に筆者加筆
- 図10 写真（上）は禿 2005、Pl. 5:2、図（下）は筆者作製
- 図11 東海大学トラキア発掘調査団から提供を受けた図版をもとに筆者作製
- 図12 東海大学トラキア発掘調査団から提供を受けた図版をもとに筆者作製
- 図13 東海大学トラキア発掘調査団から提供を受けた図版をもとに筆者作製
- 図14 1-Лещаков 1997, обр. 18:ж; 2-обр. 23:з; 3-обр. 22:б; 4-обр. 17:е; 5-обр.23:а; 6-обр. 18:б; 7-обр. 17:з; 8-обр. 20:д; 9-обр. 24:з; 10-обр. 24:к; 11-обр. 21:и; 12-обр. 21: 3; 13-обр. 21:г; 14-обр. 21: м; 15-обр. 18:з; 16-обр. 18:и
- 図15 東海大学トラキア発掘調査団から提供を受けた資料をもとに筆者作製
- 図16 東海大学トラキア発掘調査団から提供
- 図17 筆者作製
- 図18 筆者作製
- 図19 筆者作製
- 図20 筆者作製
- 図21 Лещаков 2006, обр. 8. 1 に筆者加筆
- 図22 Лещаков 2006, обр. 8. 2 に筆者加筆
- 図23 1-Георгиев и др. 1979, обр. 174: ж; 2-обр. 174: з; 3-обр. 175:д; 4-обр. 189:б; 5-обр. 179:в; 6-обр. 174:д; 7-обр. 185:а; 8-обр. 178:в; 9-обр. 187:в; 10-обр. 188:г; 11-обр. 186:е; 12-обр. 172:а; 13-обр. 175:б; 14-обр. 183:д; 15-обр. 183: ж
- 図24 1-Лещаков 1997, обр. 5:н; 2-обр. 5:с; 3-обр. 10:к; 4-обр. 4: м ;5-обр. 5:ф; 6-обр. 7:д; 7-обр. 4:ж; 8-обр. 4:д; 9-обр. 4:н; 10-обр. 11:в; 11-обр. 6:в; 12-обр. 8:в; 13-обр. 6:з; 14-обр. 6:а; 15-обр. 8:б; 16-Лещаков 1999, II.54. 16 は筆者再トレース
- 図25 Георгиев и др. 1979, таб. 42, 51, 60, 69, 78, 87, 96, 105, 114, 122, 130, 137 をもとに筆者作製
- 図26 Георгиев и др. 1979, таб. 147 をもとに筆者作製
- 図27 Георгиев и др. 1979, таб. 156, тип 1, 4~6, 7а; таб. 158, тип 9, 11, 15 をもとに筆者作製

- 図 28 Георгиев и др. 1979, таб. 194, тип 24~33; таб. 198, тип 34~38 をもとに筆者作製
- 図 29 Георгиев и др. 1979, таб. 151 をもとに筆者作製
- 図 30 Георгиев и др. 1979, таб. 189, тип 1~8; таб. 191, тип 9 をともに筆者作製
- 図 31 Георгиев и др. 1979, таб. 169, тип 13~16; таб. 178 тип 26~28 をもとに筆者作製
- 図 32 Георгиев и др. 1979, таб. 191, тип 10~17; таб. 192, тип 19~23 をもとに筆者作製
- 図 33 筆者作製
- 図 34 千本 2012, 図 2
- 図 35 1-Лещаков 1997, обр. 26:б; 2-обр. 26:а; 3-обр. 26:г; 4-обр. 26:д; 5-обр. 26:и; 6-обр. 26:ц; 7-обр. 26:ф; 8-обр. 26:ш; 9-обр. 26:п; 10-обр. 26:н; 11-обр. 26:м; 12-обр. 26:о; 13-обр. 26:ю; 14-обр. 26:а1
- 図 36 1-Hiller 1997, taf. 147:13; 2-taf. 144:15; 3-taf. 145:1; 4-taf. 144:21; 5-taf. 144:14; 6-taf. 144:19; 7-taf. 144:3; 8-taf. 145:5; 9-taf. 143:5; 10-taf. 145:23; 11-taf. 148:7; 12-taf. 146:24; 13-taf. 146:23; 14-taf. 148:2; 15-taf. 148:21; 16-taf. 147:16; 17-taf. 145:9; 18-taf. 145:11; 19-taf. 143:3; 20-taf. 143:8; 21-taf. 143:6; 22-taf. 143:10; 23-taf. 152:14; 24-taf. 155:2; 25-taf. 143:4; 26-taf. 159:1; 27-taf. 143:9; 28-taf. 150:18
- 図 37 1-Катинчаров 1974, обр. 24:а; 2-обр. 25:а; 3-обр. 26:а; Лещаков 1997, 4-обр. 12:и; 5-обр. 12: м; 6-обр. 12:р; 7-обр. 12:д; 8-обр. 12: т; 9-обр. 12:в; 10-обр. 12:н; 11-обр. 12:о
- 図 38 1-Кънчева-Русева & Лещаков 2008, обр. 24:5; 2-обр. 14:4; 3-обр. 24:6; 4-обр. 13:3; 5-обр. 21:6; 6-обр. 14:1; 7-обр. 22:12; 8-обр. 12:3; 9-обр. 12:2; 10-обр. 23:5
- 図 39 1~4-Детев 1954, обр. 53; 5, 6-обр. 52; 7-обр. 41
- 図 40 1-Leshtakov et al. 2001, fig. 27:b; 2-fig. 29:c; 3-29:f; 4-fig. 29:i- 5-29:d; 6-27:f; 7-fig. 28:a; 8-fig. 28:b; 9-筆者作製
- 図 41 1-Leshtakov et al. 2001, fig. 26:b; 2-fig. 26:f; 3-fig. 25:g; 4-Leshtakov 2004a, abb.10:11; 5-Leshtakov et al. 2001, fig. 26:e; 6-Leshtakov 2004a, abb:10:8; 7-Leshtakov et al. 2001, fig. 26:h; 8-Leshtakov 2004a, abb.10:4, 9-abb. 10:3; 10-abb. 10:6; 11-abb. 10:7; 12-Leshtakov et al. 2001, fig.25:e; 13-Leshtakov 2004a, abb. 10:14; 14-Leshtakov 2004a, abb. 10:16; 15-abb. 10:15; 16-Leshtakov et al. 2001, fig. 25:f
- 図 42 1-Leshtakov et al. 2001, fig. 31:h; 2-fig. 31:k; 3-fig. 31:j
- 図 43 1-Leshtakov et al. 2001, fig. 33: a; 2-fig. 33:g; 3-fig. 33:f; 4-fig. 33:h; 5-fig. 33: i
- 図 44 1-Leshtakov et al. 2001, fig. 34:d; 2-fig.34:b; 3-fig. 34:f; 4-fig. 34:g
- 図 45 1-Leshtakov 2002a, fig. 11:1; 2-fig.13:1; 3-fig. 7:3; 4-fig. 5:7; 5-fig. 6:1; 6-fig. 11:3; 7-fig. 11:7; 8-fig. 12:1; 9-fig. 13:3; 10-fig. 9:3; 11-fig. 9:1; 12-fig. 7:2; 13-fig. 7:5
- 図 46 1-Leshtakov 1996, fig. 9:7; 2-fig. 12:7
- 図 47 1-Leshtakov 2004b, fig. 10:2; 2-fig. 10:3; 3-fig. 10:7; 4-fig. 10:6; 5-fig. 10:4; 6-fig. 10:5; 7-15:7; 8-fig. 12:7; 9-fig. 15:1; 10-fig. 12:4; 11-fig. 12:2; 12-fig. 16:6; 13-fig. 20:7; 14-fig. 15:8; 15-fig. 6:9; 16-fig. 6:7; 17-fig. 11:14; 18-fig. 18:5; 19-fig. 21:8; 20-fig. 11:3; 21-fig. 15:6
- 図 48 1-Лещаков 1997, обр. 35:т; 2-обр. 35:п; 3-обр. 36; 4-обр. 35:и; 5-обр. 35:о; 6-Stefanova 2000, fig. 4:1; 7-fig. 4:3; 8-fig. 4:2; 9-fig. 4:4;

- 10-Stefanova 2004, abb. 1:1; 11-abb. 1:6
- 図 49 1-筆者作製, 2-Valentínova & Nenova 2008, таб. X:1; 3-таб. X:2; 4-таб. X:3; 5-таб. X:4; 6-筆者作製, 7-таб. III:6; 8-таб. I:7; 9-таб. II:4; 10-таб. VII:1; 11-таб. VII:6; 12-таб. VII:11; 13-таб. VII:8; 14-таб. XI:1; 15-таб. XI:13; 16-таб. VI:1; 17-таб. VI:4; 18-筆者作製
- 図 50 1-Лешаков 1997, обр. 31:к; 2-обр. 31:л; 3-обр. 31:н; 4-обр. 31:с; 5-обр. 31:п; 6-обр. 31:ж; 7-обр. 31:д; 8-обр. 31:е; 9-обр. 31:ф
- 图 51 1-Bertram 2002, taf. 49:9; 2-taf. 49:8; 3-taf. 53:1; 4-58:1; 5-taf. 56:6; 6-taf. 56:12; 7-taf. 55:1; 8-taf. 55:2; 9-taf. 54:3; 10-taf. 49:10; 11-taf. 43:8; 12-taf. 46:1; 13-taf. 45:5; 14-taf. 44:3; 15-taf. 46:10; 16-taf. 46:14; 17-taf. 47:11; 18-taf. 48:2; 19-48:5; 20-Георгиева 1994, обр. 21:3
- 图 52 1-Karastoyanova 2004, taf. 2:1; 2-taf. 2:2; 3-taf. 2:5; 4-taf. 2:9; 5-taf. 2:10
- 图 53 1-Лешаков 1997, обр. 29:в; 2-обр. 29:м; 3-обр. 29:к; 4-обр. 29:л; 5-обр. 29:с; 6-обр. 29:з; 7-обр. 29:и; 8-обр. 28:и; 9-обр. 28:з; 10-обр. 28:к; 11-обр. 28:а; 12, 13-обр. 28:б; 14-обр. 28:г
- 图 54 1-Лихардус и др. 2001, таб. 41:7; 2-таб. 41:2; 3-таб. 41:8; 4-таб. 41:10; 5-таб. 41:4
- 图 55 1-Kalčev 2002, taf. 3:3; 2-taf. 3:5; 3-taf. 4:4; 4-taf. 4:3; 5-taf. 5:7; 6-taf. 5:5; 7-taf. 8:2; 8-taf. 8:3; 9-taf. 8:4; 10-taf. 11:1; 11-taf. 11:3; 12-taf. 11:5; 13-taf. 11:6
- 图 56 1-Kalčev 2002, taf. 14:2; 2-taf. 14:1; 3-taf. 14:4; 4-taf. 14:6; 5-taf. 15:6; 6-taf. 15:7; 7-taf. 15:1; 8-taf. 16:1; 9-taf. 16:3; 10-taf. 16:6; 11-taf. 16:2
- 图 57 Кънчев 1995, обр. 3~5 をもとに筆者作製
- 图 58 1-Кънчев 1995, обр. 22:б; 2-обр. 22:в; 3-обр. 21:в; 4-обр. 20:в; 5-обр. 20:г; 6-обр. 13:в; 7-обр. 15:д; 8-обр. 15:в; 9-обр. 15:б; 10-обр. 8:б; 11-обр. 10:в
- 图 59 Лешаков & Борисов 1995, обр. 2, 3 に筆者加筆
- 图 60 1-Лешаков & Борисов 1995, обр. 11:б; 2-обр. 10:а; 3-обр. 10:б
- 图 61 1-Панайотов & Александров 1995, обр. 4:б; 2~4-обр. 10; 5-обр. 11:б
- 图 62 1- Kalčev 2002, taf. 24:1; 2-taf. 24:2; 3-taf. 24:3
- 图 63 1-Лешаков 1994, обр. 1:а
- 图 64 1-Николов 2004, обр. 6:2; 2-обр. 6:1; 3-обр. 6:5; 4-обр. 6:8; 5-обр. 6:11; 6-обр. 6:10; 7-обр. 6:12
- 图 65 А-Лихардус и др. 2001, фиг. 5; В-фиг. 6; 1-Лихардус и др. 2001, таб. 2:2; 2-таб. 2:4; 3-таб. 1:1; 4-таб. 1:6; 5-таб. 2:3; 6-таб. 2:5; 7-таб. 2:7
- 图 66 1-Мишина 2011, рис. 3:6; 2-рис. 3:8; 3-рис. 3:4; 4-рис. 3:2; 5-рис. 3:3; 6-рис. 3:1; 7-Катинчаров & Мацанова 1993, обр. 7; 8-Мишина 2011, рис. 6:4; 9-рис. 5:1; 10-рис. 6:2; 11-рис. 6:5; 12-рис. 5:4; 13-Němejcová-Pavúková 1999, abb. 8:14; 14-abb. 8:11; 15-Мишина 2011, рис. 5:5; 16-Němejcová-Pavúková 1999, abb. 8:8; 17-abb. 8:1; 18-Мишина 2011, рис. 6:6; 19-рис. 5:3; 20-рис. 2:5; 21-Катинчаров & Мацанова 1993, обр. 15; 22-обр. 17; 23-Мишина 2011, рис. 4:7; 24~26-Катинчаров & Мацанова 1993, обр. 17
- 图 67 1-Мишина 2011, гр. 3; 2-гр. 4; 3-гр. 5; 4-гр. 6; 5-гр. 7Б; 6-гр. 7А; 7-гр. 8
- 图 68 1-Leshtakov 2000, fig. 16.3:6; 2-fig. 16.4:2; 3-fig. 16.11:8; 4-fig. 16.21; 5-fig. 16.10:2; 6-fig. 16.10:3; 7-fig. 16.10:4; 8-fig. 16.10:6;

- 9-fig.16.16:2; 10-fig.16.12:2; 11-fig.16.12:1; 12-fig.16.18:4; 13-fig.16.13:2; 14-fig.16.13:8; 15-fig.16.8:6; 16-fig.16.18:6; 17-fig.16.15:4; 18-fig.16.15:1; 19-fig.16.15:2; 20-fig.16.18:1; 21-fig.16.15:3; 22-fig.16.16:1
- 図 69 1-Nikolova 2000b, fig. 15.12; 2-fig. 15.11:5; 3-fig. 15.11:2; 4-fig. 15.11:8; 5-fig. 15.14; 6-fig. 15.11:6; 7-Nikolova 1996, fig. 15:1; 8-Nikolova 2000b, fig. 15.20:2; 9-fig. 15.16:2; 10-fig. 15.17:1; 11-fig. 15.21:1; 12-Nikolova 1996, fig. 19:7; 13-fig. 15.18:1; 14-fig. 15.25:7; 15-fig. 15.25:9; 16-fig. 15.24:1; 17-fig. 15.29:1; 18-fig. 15.29:2; 19-fig. 15.29:4; 20-fig. 15.29:5; 21-fig. 15.29:6
- 図 70 Пейков 1995, обр. 6
- 図 71 1-Детев 1959, обр. 87; 2~5-обр. 88; 6-обр. 89
- 図 72 1-Koleva 2000, fig. 17.4:1; 2-fig. 17.4:2; 3-fig. 17.5:1; 4-fig. 17.5:2
- 図 73 1-Detev 1981, fig. 32:3; 2-fig. 32:4; 3-fig.45:6; 4-fig. 33:2; 5-fig. 46:3; 6-fig. 45:3; 7-fig. 45:5; 8-fig.45:2; 9-fig. 34:4; 10-fig. 27:6; 11-fig. 27:1; 12-fig. 29:1
- 図 74 1-Христов 2012, обр.6:1; 2-обр.6:5; 3-обр.6:2; 4-обр.6:3; 5-обр.6:4; 6-обр.7:1; 7-обр.7:5; 8-обр.7:3; 9-обр.7:6; 10-обр.8:1; 11-обр.8:3; 12-обр.8:2; 13-обр.9:2; 14-обр.9:3; 15-обр.9:1
- 図 75 A-Leshtakov 2006, fig. 2 に筆者加筆 1-Leshtakov 2006, fig. 14:16; 2-fig. 14:13; 3-fig. 14:15; 4-fig. 11:2; 5-fig. 14:9; 6-fig. 11:4; 7-fig. 11:1; 8-fig. 11:6; 9-fig. 11:7
- 図 76 1-Roman et al. 1992, taf. 32:3; 2-taf. 37:4; 3-taf. 43:1; 4-taf. 41:6; 5-taf. 41:7 5-taf. 40:1; 6-Roman et al. 1992, taf. 46:4; 7-Tončeva 1981, fig. 18:2a; 8-Roman et al. 1992, taf. 50:3; 9-筆者作製; 10-Tončeva 1981, fig. 18:11; 11-Roman et al. 1992, taf. 35:1; 12, 13-筆者作製
- 図 77 1-Draganov 1995, fig. 10:2; 2-fig. 10:4; 3-fig. 10:1; 4-fig. 10:3; 5-fig. 10:13; 6-fig. 10:7; 7-fig. 10:12; 8-fig. 10:10
- 図 78 1-Draganov 1995, fig. 5:3; 2-fig. 4:6; 3-fig. 3:6; 4-fig. 4:8; 5-fig. 2:4; 6-fig. 2:3; 7-6:4; 8-fig. 4:10
- 図 79 1-Alexandrov 1994, pl. III:1; 2-pl. III:6; 3-pl. III:3; 4-pl. III:4; 5-pl. III:9; 6-pl. III:7; 7-pl. IV:5; 8-pl. IV:6; 9-pl. IV:4; 10-pl. IV:1; 11-pl. V:2; 12-pl. V:6; 13-pl. V:5; 14-pl. V:7; 15-pl. VI:8; 16-pl. VI:7; 17-pl. VI:4; 18-pl. VI:5; 19-pl. VI:1; 20-pl. VI:3; 21-pl. V:1; 22-pl. VIII
- 図 80 1-Генадиева 2001, рис. 82:11; 2-рис. 82:12; 3-рис.83:5; 4-рис. 83:2; 5-рис. 83:3; 6-рис. 84:4; 7-рис. 84:1; 8-рис. 83:12; 9-рис. 85:14; 10-рис. 85:1
- 図 81 1-Генадиева 1994, обр. 3; 2-обр. 5:7; 3-обр. 4:3; 4-обр. 6:8
- 図 82 1-Радунчева 1981, обр. 31:4; 2, 5-обр. 34:3; 3, 4, 6-обр. 34:1; 7, 8-обр. 35:3; 9, 10-обр. 35:2; 11-обр. 30:6; 12-Alexandrov 1998, fig. 4:4; 13-fig. 4:8
- 図 83 1-Alexandrov & Gotzev 1990, fig. 2:1; 2-fig. 2:8; 3-fig. 2:7; 4-fig. 2:3; 5-3:5; 6-fig. 6:7; 7-fig. 5:3; 8-fig. 8:1; 9-fig. 9:2; 10-fig. 11:8; 11-fig. 11:5; 12-fig. 11:1; 13-fig. 11:3
- 図 84 1-Kulov 2011, fig. 3:2; 2-fig. 3:6; 3-fig. 11:1; 4-fig. 3:11; 5-fig. 9:5; 6-fig. 12:7; 7-fig. 11:3; 8-fig. 8:8; 9-fig. 4:4; 10-fig. 6:6 11-fig. 6:4; 12-fig. 12:9; 13-fig. 8:10; 14-fig. 5:2; 15-fig. 5:5; 16-fig. 13; 17-fig. 10:13; 18-fig. 10:24; 19-fig. 10:18; 20-fig. 10:4
- 図 85 1-Alexandrov et al. 1998, pl. 1:1; 2-pl. 1:2; 3-pl. 1:4; 4-pl. 1:6; 5-pl. 1:10
- 図 86 А-Панайотов 1989, обр. 14 に筆者加筆; В-обр. 18 に筆者加筆; 1-обр. 22; 2-обр. 16; 3-обр. 19; 4-обр. 20
- 図 87 А-Панайотов 1989, обр. 25 に筆者加筆; 1-обр. 26; 2-обр. 27; 3-обр. 28
- 図 88 А-Панайотов 1989, обр. 77, 78A に筆者加筆; В-обр. 90; 1-обр. 91

- 図 89 1,2-筆者作製
- 図 90 1~4-筆者作製, 5-Илчева 2002, таб. 64:10; 6-таб. 64:12; 7-таб. 64:15; 8-таб. 65:15; 9-таб. 65:3; 10-таб. 66:2; 11-таб. 66:1
- 図 91 1-Миков & Джамбазов 1960, обр. 92:d; 2-fig. 82:b; 3-fig. 82:a; 4-fig. 82:c; 5-fig. 92:h
- 図 92 1-Nikolova 1999, fig. 9.3.1:2; 2-fig. 9.3.1:4; 3-fig. 9.3.1:3; 4-fig. 9.3.1:1
- 図 93 1-Todorova 1992, abb. 14:21; 2-abb. 14:23; 3-abb. 14:20; 4-abb. 14:14; 5-abb. 14:8; 6-abb. 14:11; 7-abb. 14:12; 8-Todorova 1968, abb. 13:7; 9-abb. 13:5; 10-abb. 13:13; 11-abb. 13:3; 12-abb. 12:4; 13-abb. 12:7; 14-taf. 3:4
- 図 94 1-Merkyt 2007, fig. 13:1; 2-fig. 13:2; 3-fig. 13:3; 4-fig. 13:8; 5-fig. 13:5; 6-fig. 13:12; 7-fig. 13:13; 8-fig. 13:10; 9-fig. 13:11; 10-fig. 13:17
- 図 95 1-Hristov & Hristova 2004, abb. 2:1; 2-abb. 2:2; 3, 4-abb. 2:6
- 図 96 1-Alexandrov 2007, pl. I:1; 2-pl. I:2; 3-pl. IV:5; 4-pl. III:5; 5-pl. III:2; 6-pl. III:8; 7-pl. VI:1; 8-pl. VI:4; 9-pl. VI:2; 10-pl. III:1; 11-pl. VIII:11; 12-pl. VIII:12; 13-pl. X:3; 14-pl. X:1; 15-pl. VII:3; 16-pl. VII:5; 17-pl. VIII:7
- 図 97 1-Джанбазов & Капинчаров 1974, обр. 17:г; 2-обр. 17:е; 3-обр. 20:и; 4-обр. 13; 5-обр. 14:а; 6-обр. 25:д; 7-обр. 25:д; 8-обр. 19:о; 9-обр. 10:д; 10-Nikolova 1999, fig. 9.4
- 図 98 А-Панайотов 1989, обр. 34, 35 に筆者加筆, 1-обр. 37; 2-обр. 38; 3-обр. 39; 4-обр. 40; 5-обр. 41; 6-обр. 42; 7-обр. 45; 8-обр. 48; 9-обр. 49; 10-обр. 50
- 図 99 筆者作製
- 図 100 Manzura 2003; Morintz & Roman 1968; Nikolova 1999; Лещаков 2006 をもとに筆者作製
- 図 101 1-Georgieva 1988, abb. 15:8; 2-abb. 15:12; 3-abb. 12:12; 4-abb. 12:1; 5-13:7; 6-Petrova 2004, fig. 4:1; 7-fig. 4:3; 8-fig. 4:8; 9-fig. 4:6; 10-fig. 4:10; 11-Илчева 2002, таб. 52:3; 12-таб.48:5; 13-таб.54:2; 14-таб.56:7; 15-таб. 50:4; 16-51:1; 17-fig. 7.28:10; 18-fig. 7.30:7; 19-fig. 7.29:8; 20-fig. 7.28:9; 21-fig. 7.21:4; 22-fig. 7.26:10; 23-Lichardus & Iliev 2001, taf. 12:1; 24-taf. 9:2; 25-taf. 5:2; 26-taf. 11:1; 27-Патокова 1979, рис. 17:2; 28-рис. 26:3; 29-рис. 26:2; 30-рис. 31:9; 31-рис. 26:7
- 図 102 Aslanis 1985; Coleman 1977; Hanschmann & Milojevic 1976; Joukowsky 1986; Manzura 2003; Morintz & Roman 1968; Petrakis 2002; Sampson 2002; Tončeva 1981; Waisshaar 1989; Дергачев 1978; Збенович 1974 をもとに筆者作製
- 図 103 図 102 と同じ
- 図 104 筆者作製
- 図 105 1-関根、禿 1999, fig. 35:1; 2-関根、禿 2000, fig. 19:8; 3-関根、禿 1999, fig. 35:9; 4-関根、禿 2000, fig. 11:6; 5-関根、禿 1999, fig. 38:1; 6-Hiller 1997, taf. 144:14; 7-Kalčev 2002, taf. 9:4; 8-taf. 11:3; 9-taf. 16:6; 10-taf. 16:7; 11-taf. 3:3; 12-fig. 8:6; 13-Leshakov et al. 2001, fig. 27:b; 14-Hiller 1997, taf. 148:7; 15-taf. 148:21; 16, 17-海大学トラキア発掘調査団提供; 18-関根、禿 2000, fig. 19:9; 19-関根、禿 1999, fig. 42:9; 20-東海大学トラキア発掘調査団提供
- 図 106 1-Илчева 2002, таб. 51:6; 2-Manzura 1999, fig. 7.17:2; 3-fig. 7.13:6; 4-Manzura 2003, fig. 10.20:1 をもとに筆者作製; 5-Morintz & Roman 1968, abb. 35:5; 6-Lichardus & Iliev 2001, taf. 3:3; 7-taf. 3:2; 8-Morintz & Roman 1968, abb. 29:20; 9-Драганов 1990, фиг. IV:11 を筆者トレース; 10-Hiller 1997, taf. 148:7; 11-taf. 145:1; 12-taf. 144:23; 13-Георгиев и др. 1979, таб. 166, тип39; 14-関根、禿 1999, fig. 35:9; 15-関根、禿 2000, fig. 19:8; 16-関根、禿 1999, fig. 42:9; 17-東海大学トラキア発掘調査団提供

- 図 107 1-Manzura 1999, fig. 7.20:7; 2-Паотокова 1979, рис. 51:1; 3-рис. 31:3; 4-Паотокова 1980, рис.1:3; 5-Дергачев 1978, рис. 11:1; 6-Збенович 1974, рис. 4:1; 7-関根、禿 1999, fig. 45:4; 8-東海大学トラキア発掘調査団提供; 9-東海大学トラキア発掘調査団より提供を受けた図面を筆者トレース; 10-東海大学トラキア発掘調査団提供; 11-関根、禿 2000, fig. 19:9
- 図 108 1-Hood 1981, fig. 119:18; 2-fig. 141:431; 3-Weisshaar 1989, taf. 41:10; 4-taf. 32:3; 5-Joukowsky 1986, fig. 389:9; 6-Aslanis 1985, taf.9:12; 7-taf. 95:13; 8-taf. 107:11; 9-taf. 88:9
- 図 109 1-Manzura 1999, fig. 7.4:8; 2-Паотокова 1979, рис. 29:10; 3-рис. 29:5; 4-Паотокова 1980, рис. 1:1; 5-Kalčev 2002, taf. 13:8; 6-Кънчев 1995, обр. 22:б; 7-Лещаков & Борисов 1995, обр. 11:б; 8-обр. 10:1
- 図 110 筆者作製
- 図 111 東海大学トラキア発掘調査団より提供を受けた資料をもとに筆者作製
- 図 112 Цанков и др. 1992 をもとに筆者作製
- 図 113 筆者作製
- 図 114 柴田氏が撮影した写真画像をもとに筆者作製
- 図 115 筆者作製
- 図 116 金成氏が作製した図面に筆者加筆
- 図 117 金成氏が作製した図面に筆者加筆
- 図 118 ジャンバゾフ氏が測定した値をもとに筆者作製
- 図 119 Arnold 1985, tab. 2.1, tab. 2.2 をもとに筆者作製
- 図 120 筆者作製
- 図 121 筆者作製
- 図 122 筆者作製
- 図 123 筆者作製
- 図 124 筆者作製
- 図 125 筆者作製
- 図 126 Георгиев и др. 1979, таб. 189; таб. 191, тип 9~17; таб. 192; таб. 194, тип 24~31; таб. 198, тип 34~38, 41, 42 をもとに筆者作製
- 図 127 エゼロヴォ II 遺跡の土器図版は Roman et al. 1992, taf. 43:1; taf. 44:12、ユナツィテの土器図版は Мишина 2011, рис. 2:5 より抜粋
- 図 128 土器図版は東海大学トラキア発掘調査団より提供を受けた資料をもとに筆者作製。偏光顕微鏡写真は柴田氏より提供
- 図 129 筆者作製
- 図 130 左の図版は Nachev 2009, fig. 1 に筆者加筆。右の薄片写真は柴田氏から提供
- 図 131 筆者作製
- 図 132 筆者作製
- 図 133 筆者作製

表出典

表1 筆者作製

表2 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 2014、表1、2をもとに筆者作製

表3 筆者作製

表4 筆者作製

表5 筆者作製

表6 筆者作製

表7 筆者作製

表8 筆者作製

表9 筆者作製

表10 筆者作製

表11 筆者作製

表12 筆者作製

表13 柴田氏の協力のもと筆者作製

表14 筆者作製

第 I 部 序論

第1章 本論の目的と対象

1. 1. 本論の目的

青銅器時代の研究は、19世紀前半、クリスチャン・トムセンによる三時代区分の提唱に端を発する。それから150年以上経過した今日にいたるまでに蓄積された成果は、ヨーロッパ青銅器時代研究の手引き書といえる *The Oxford Handbook of the European Bronze Age* (Fokkens & Harding 2013) からうかがいしることができる。この著作を紐解くと、「西欧」が中心となってヨーロッパ青銅器時代研究の基礎を築き、発展させてきたことを目の当たりにする。「東欧」と「西欧」に割かれた頁数の割合をくらべてみても、「東欧」が研究上の表舞台で中心的な役割を演じてきたとはいえないことは明白である。

だからといって、「東欧」で青銅器時代研究が疎かにされてきたわけではない。しかし、社会主義時代における考古学研究は、国家政策に位置づけられた文化事業の一環として行われてきた影響で、隣接する国や地域であっても異なる編年体系や物質文化の名称が採用されていた。「ベルリンの壁」崩壊後、「西欧」諸国の研究者の目に「東欧」の考古学事情がより鮮明にうつってくると、ヨーロッパ青銅器時代の物質文化とその研究上のコンテクストはそれまで以上に複雑な様相を呈していることが分かってきた。その結果、一連の状況は、今日のヨーロッパに亜大陸全体をつらぬく前期青銅器時代の明確な定義がないという指摘につながることとなる (Heyd 2013, 9ff.)。

「東欧」の一角を占めるブルガリア¹の青銅器時代研究にも相応の蓄積をみとめることができるものの (Panayotov 1995; Todorova 2003; Катинчаров 1975)、実際には使用言語や出版事情などの影響でその成果が正当かつひろく受け入れられていない。その典型的な例がエゼロ遺跡 (Езеро) である。エゼロ遺跡はヨーロッパ考古学研究においてブルガリア前期青銅器時代を代表する標準遺

¹ 本論の主題となるブルガリアは、今日、バルカン半島南東部を占める共和国家である。先史考古学研究では、当時存在しない国名を冠して対象地域として表題に記すことは通常避けられる傾向にある。しかし、第二次世界大戦後、東欧の考古学研究は国家単位で行われ、これがそのまま研究上の地域区分の単位となった経緯がある。その点を踏まえたうえで本論文では便宜上、ブルガリアを対象地域として研究題目に採用することとする。ただし、今日のブルガリアの範囲を規定する国境線は、北東部のダブルジャ地方を除いて、ドナウ川、スタラ・プラニナ山脈、ロドピ山塊、黒海などに沿って引かれており、地理的な特徴がまったく無視されている訳ではない。なお、本論で採用する地域区分については第2章第1節で言及する。

跡として知られ、エゼロ遺跡の土器をもとに編年体系が構築されてきた経緯がある。ところが、報告書には土器の実測図は提示されておらず、掲載された写真の印刷も良質というにはほど遠く、土器の外形や装飾をおおまかに把握すること以上の助けになっていない。さらに本文はブルガリア語で書かれており、この言語に慣れていない場合は、文末のロシア語とドイツ語の抄訳に頼り、遺物に関する統計表を「読み解く」必要に迫られる。このようにエゼロ遺跡の報告書は資料的価値の点で優れているものの、第3者の検証を困難にし、さらにブルガリア前期青銅器時代研究の基盤となる編年体系の根幹を批判的に考察する機会を妨げていることから、その実態がどの程度詳細に把握されてきたのか、という疑念が生じる。

それにもかかわらず、この編年体系は今日まで基本的枠組を維持しながら受け入れられ（例えば Nikolova 1994; Лещаков 1997）、これをもとに前期青銅器時代の歴史的な評価が進められてきたことは認められなければならない。こうした評価のなかには、半世紀近く関心を集めてきた、印欧語族の祖先といわれる牧畜民の到来に関する見解がある。黒海北岸草原地帯に由来する牧畜民の移動が、青銅器時代の始まりと印欧語族のヨーロッパ進出と密接に関連していたと考えられてきたのである（例えば Anthony 2007; Gimbutas 1970）。しかし、大方の議論は20世紀前半の伝播論全盛期の遺産であるといえ、一次資料の詳細な分析をもとにした論考はかならずしも多くない。仮説だけが先行して受け入れられ、検証作業が追いついていないのが内実である。

このような状況は、とりわけ「東欧」の黒海北岸地帯に隣接するバルカン半島で顕著であり、同半島を対象としたモノに即した実証的検討が急務である。なかでも今日のブルガリア地域には、地勢上、ユーラシア草原地帯や西アジアから人、モノ、情報がいち早く到達していたはずである。ヨーロッパ青銅器時代がどのようなプロセスをへて幕を開けたのか、そのとき集団やモノの移動、情報の伝達は実際に起きていたのか、起きていた場合はどのようにヨーロッパ各地へと展開していったのかという問いにこたえるためには、このプロセスの初期段階にあたる物質文化の様相をブルガリア地域の資料を調べて把握することが重要な鍵となる。

こうした背景のもと上記の課題に取り組むために、本論文では南東ヨーロッパの先史時代、とくに前4千年紀後葉から前3前年紀末にかけての前期青銅器時代ブルガリアにおける土器文化の成立過程を、土器の編年と地域間交流という視点から読み解くことを目的とする。具体的にはブルガリア南部、エゼロ遺跡の近くに位置するヂャドヴォ遺跡（Дядово）を中心に土器を分析し、エゼロ遺跡資料とそれに依拠する研究状況を原点に立ち返って検討する。そして、ブルガリア前期青銅器時代における土器編年を組み直して、その背後にある集団やモノの移動の様相と地域間関係およびその歴史の変遷を復元する。そのうえで一連の考察を通じて本論文をヨーロッパの青

銅器時代像の一側面を明らかにするための基礎的研究と位置づける。

1. 2. 本論の分析対象

本論文の目的を達成するために、はじめにエゼロ遺跡とそれを取りまくブルガリア前期青銅器時代研究に関わる基本的な点を検討する。そしてエゼロ遺跡と同様の遺跡形態、文化層堆積を擁し、かつ層位的調査が実施されている対象として、デアドヴォ遺跡資料を中心的な分析対象とする。デアドヴォ遺跡がエゼロ遺跡資料との相互評価に適していると考えられる理由には次の点が挙げられる。第1に、両遺跡ともにテル型集落遺跡であり、長年にわたる層位的調査によって、比較的まとまった資料が収集されている。第2に、デアドヴォ遺跡の調査に筆者自ら参加した経緯があり、調査資料を直接観察、分析する機会を得ている。第3にデアドヴォ遺跡とエゼロ遺跡の位置する上トラキア平野は南東ヨーロッパのなかで前期青銅器時代にテル型集落が集中して分布する唯一の地域であり、数多くのテル型集落が調査されてきたことで豊富な比較資料が得られている。第4に、上トラキア平野ではテル型集落だけではなく、さまざまなタイプの遺跡が調査されてきたため、同平野の事例をモデルにしてブルガリア前期青銅器時代の歴史的様相をより詳細に評価することができると予測される。デアドヴォ遺跡では調査が長年にわたり継続して進められているため、最終的な見解が提示されるには至っていないものの、エゼロ遺跡と並んでブルガリア前期青銅器時代研究を代表する資料を提供するものと思われる。

分析資料には、土器を採用する。バルカン半島に農耕社会が成立した新石器時代に出現してから、もっとも頻繁に製作、使用され続けてきた道具の1つであり、前期青銅器時代もその例外ではない。土器は材料となる粘土をどこでも獲得できるという普遍的な性格をもつだけでなく、粘土そのものが可塑性に富むため、作り手にとって意識的あるいは無意識的に土器の形や装飾をこまかく作り分けられやすいという性質をもっている。また物性的にも壊れやすいため、土器は生産、使用(再利用)、廃棄という比較的短い期間でサイクルする。このような特質をもつ土器は、各時代の文化変化や地域間の関係、製作者が属する社会を解読するにあたり重要な媒体となる(西田 2008; 松本 2011)。

つまりは、前期青銅器時代ブルガリアにおける土器文化の成立過程を本論文で明らかにするために、まずデアドヴォ遺跡の土器をおもな分析対象とし、従来の編年体系を検証して新たな年代的枠組を提示する。そしてその枠組に基づいてブルガリアと周辺地域の土器群を比較分析し、上トラキア平野で前期青銅器時代の土器文化が成立、展開した経緯を地域間の交流関係から検討する。

1. 3. 本論の構成

本論文は4部構成となっている。第I部が「序論」、第II部が「土器編年と地域性」、第III部が「土器文化の成立と展開」、第IV部が「結論」である。第I部の「序論」では、第1章で本論文の基本的な目的と工程を示す。第2章では本論文の時空間的な枠組を整理したうえで、前期青銅器時代にいたるまでにどのような歴史的な変遷を辿ってきたのか確認するために、ブルアリア先史時代を通史的に概観する。同時に上トラキア平野を中心にブルガリア前期青銅器時代研究の足跡を辿り、研究の到達点と本論で明らかにすべき課題とその解決方法について論じる。

第II部の「土器編年と地域性」(第3～5章)では、ブルガリア前期青銅器時代の編年体系について検討する。まず、デヤドヴォ遺跡の調査資料を対象に、層位区分と土器の型式学的特徴を明らかにし、その変遷をもとに時期区分について検討する(第3章)。それからブルガリア前期青銅器時代研究の標準遺跡であるエゼロ遺跡調査の問題点を指摘したうえで、デヤドヴォ遺跡とエゼロ遺跡の土器を相互に比較し、前期青銅器時代編年研究の指標資料を提示する(第4章)。第3章と第4章の成果をもとに、交差年代法によりブルガリア各地の遺跡資料の年代的位置付けを検討しながら、各地域に認められる土器の地域性を明らかにする(第5章)。このことによって、デヤドヴォ遺跡をはじめとする上トラキア平野の前期青銅器時代における土器の歴史的な位置付けについて評価する。

第III部の「土器文化の成立と展開」では、デヤドヴォ遺跡の位置する上トラキア平野東部に焦点をあわせ、前期青銅器時代における土器群の成立過程について検討する(第6～8章)。第6章では、青銅器時代開始期における土器の系統関係を周辺地域の土器群と対比して、上トラキア平野東部の前期青銅器時代における土器文化の系譜について論じる。第7章ではデヤドヴォ遺跡から出土した土器を対象に胎土分析と民族誌の所見を援用しながら、前期青銅器時代における在地土器の生産について検討する。第8章では黒海北西岸域に由来する上トラキア平野の縄目文土器に着目し、第7章の成果を参照しながら外来系土器の受容とその後の展開を明らかにする。

第IV部の「結論」では、本論文で明らかにした点を整理し(第9章第1節)、上トラキア平野東部を中心にブルガリア前期青銅器時代各段階の土器文化の特質と歴史的な位置付けについて評価する(同第2節)。そして本論文で明らかにすることのできなかつた課題をまとめ、今後の展望を提示する(同第3節)。

第2章 問題の所在と分析方法の提示

2. 1. ブルガリアの地理と地域区分

今日のブルガリアはバルカン半島南東部の一角を占めている（図1）。北はドナウ川とダブルジャ南部をはさんでルーマニア、西はセルビアとマケドニア、南はギリシアとトルコ、東は黒海に囲まれている。首都ソフィアは北緯42度40分のところにあり、日本の札幌に近い。近年は温暖な大陸性気候地帯、大陸性気候の漸移地帯、大陸-地中海性気候地帯の3つの気候地帯に分類されている（Копралев 2002, 155f., фиг. 2.14）。国土面積は約11万km²を測り、日本のおよそ1/3である。

ブルガリアは地形学上、ミズィア丘陵-高原地帯、スタラ・プラニナ地帯、山岳-盆地漸移地帯、マケドニア-ロドピ山塊地帯、黒海西岸地帯の5つの地域に大別されている（Копралев 2002, 29）。半島名の由来となったスタラ・プラニナという山脈（バルカン山脈）はブルガリア中央部の西から東の黒海沿岸までのび、スタラ・プラニナ地帯を形成している。スタラ・プラニナ地帯の北からドナウ川にかけてひろがるミズィア丘陵-高原地帯はドナウ台地として知られている。台地にはスタラ・プラニナに水源をもつ河川が幾筋にもドナウ川へと注ぎこんでいる。比較的水量のあふる河川として、西からロム川、オゴスタ川、スカト川、イスカル川、ヴィト川、オサム川、ヤントラ川、ベリヤ・ロム川²が挙げられる。本論では北ブルガリアをヴィト川とヤントラ川によって北西部、北部、北東部にわける。北西部はブルガリア-セルビア間の国境からヴィト川流域まで、北部はヴィト川流域からヤントラ川流域まで、そして北東部はヤントラ川流域から黒海沿岸域手前の台地東端部までとする（図2）。

スタラ・プラニナ地帯と南のマケドニア-ロドピ山塊地帯のあいだには、山岳-盆地漸移地帯がひろがっている。西部の高地にはソフィア盆地、ラドミル盆地、ペルニク盆地、東部の低地には上トラキア平野がある。スタラ・プラニナと上トラキア平野のあいだには、スレドナ・ゴラとよばれる山脈がスタラ・プラニナと並行するように東西にのび、その間は通称「薔薇の谷」と呼ばれている。

² ベリヤ・ロム川は下流でチェルニ・ロム川などと合流するとルセンスキ・ロム川とよばれる川としてドナウ川へ注いでいる。

上トラキア平野は北にスタラ・プラニナ、西にイフティマン・スレドナ・ゴラ地域、南にロドピ山塊が位置し、中央のチルバン高地により東西に二分される。西部は西のパザルジク平原と東のプロヴディフ平原からなり、スタラ・プラニナとスレドナ・ゴラのあいだにはストリヤマ川が流れ、プロヴディフ平原で国内最長のマリツァ川と合流する。上トラキア平野東部は、スタラ・プラニナとスレドナ・ゴラのあいだの「薔薇の谷」をトゥンジャ川が流れ、トルコ領内でマリツァ川と合流し、エーゲ海へといたる。

南のマケドニア-ロドピ山塊は、西からリラ山脈、ピリン山脈、ロドピ山塊、そしてサカル山地、ストランジャ山地から構成されている。ブルガリアの西部から南西部に当たるダルダン山塊、リラ山脈、ピリン山脈の間をストルマ川が、ロドピ山塊の西部ではメスタ川が南下し、エーゲ海へと注いでいる。ロドピ山塊東部の標高の低い地域（東ロドピ地域）ではアルダ川が西から東へ流れ、トルコ・ギリシア国境線近くでマリツァ川と合流している。

黒海西岸地帯は大きく 3 つに区分されている。最北部はルーマニア南東部と地続きのドブルジャ地方の沿岸域である。スタラ・プラニナ北側にはプロヴァディア川とカムチャ川の下流域がひろがり、南側にはトルコ間との国境近くにいるまで小規模の川が黒海へと注いでいる。本論文では便宜的に、それぞれ都市の名称からヴァルナ沿岸域とブルガス沿岸域とし、取り扱う考古資料がほとんどないドブルジャ地方の沿岸域は前者に含めることとする。

2. 2. ブルガリア先史時代の概要

2. 2. 1. 旧石器時代・中石器時代（前 140 万年～前 7 千年紀前半）

ブルガリアの旧石器時代遺跡は北ブルガリアにひろがる石灰岩のカルスト台地や、スタラ・プラニナ、ロドピ山塊に分布する洞窟遺跡を中心に確認されている (Ivanova & Sirakova 1995)。近年では、ブルガリア北西部のコザルニカ洞窟 (Козарника) で 140 万年前の前期旧石器時代にヒトの生活痕跡が残されていたとして注目されている³。バチョ・キロ洞窟 (Бачо Киро) やテムナタ・ダプカ洞窟 (Темната Дъпка) では、中期旧石器時代から後期旧石器時代の石器製作伝統が、ヨーロッパにおける旧人から新人への「交代劇」を明らかにする重要な証拠として取りあげられている (西秋 2013)。

ブルガリアの中石器時代は旧石器時代と新石器時代のあいだに位置づけられている。幾何学状細石器を主とする中石器時代資料は、ブルガリア北東部のヴァルナ湖西岸に位置するポビティ・

³ コザルニカ洞窟ではブルガリア-フランス隊による合同調査が継続して行われている (Сираков и др. 2014)。

カマニ地区 (Побити Камъни) で表採されたものに限られている (Gatsov 2006, 154)。表採資料は型式学的にはエピ・タルディ・グラヴェティアン伝統に類似すると指摘されている。しかし、この伝統を特徴づける砲弾型石核が見つかっていないこと、幾何学形細石器が後期新石器時代の遺跡から出土していることから、ポビティ・カマニ遺跡の資料を中石器時代のものとする確証は失われている。このため今日のブルガリアには確度の高い中石器時代資料が見当たらなくなり (Gatsov 2006, 155)、こうした状況は続く新石器化の始まりに関する議論に大きく影響している。

2. 2. 2. 新石器時代 (前 7 千年紀後半～前 6 千年紀末)

新石器時代は紀元前 7 千年紀後半に幕をあける。中石器時代の資料に乏しいブルガリアでは、大局的にはアナトリアからの影響によって新石器化がはじまったと考えられている (千本 2013)。中石器時代資料が豊富なエーゲ海地域とは状況が異なり、ブルガリアで在来集団による食糧生産経済の開発という議論は積極的に展開されていない。

新石器時代にはいと、各地でヒツジやヤギを中心とする牧畜と、ムギ・マメ類などの栽培を組み合わせた食糧生産経済を示す動植物遺存体をはじめ、石皿や石刃、土器や土偶などの「新しい」遺物が各地で検出されるようになる (Тодорова & Вайсов 1993)。上トラキア平野にテル型集落が出現するのもこの時代である。新石器時代初頭から海洋性の貝製品やブルガリア北東部産のフリントといった資源を通じた交流が盛んに行われていた (Gurova 2012; Тодорова & Вайсов 1993)。また、ヴァルナ沿岸域ではドウランクラク集団墓遺跡 (Дуранкулак) に代表されるように新石器時代後半にいち早く集団墓が形成され、沿岸域と内陸部で文化的な違いが表面化しはじめると、終末期には各地で物質文化の地域的特徴がより顕著にあらわれるようになる (Тодорова 2002)。

2. 2. 3. 銅石器時代 (前 5 千年紀初頭～前 5 千年紀末)

紀元前 5 千年紀前半、新石器時代的な生活様式は銅石器時代にはいってもしばらくのあいだ続いていたが、徐々に変化の兆しが顕在化してくる。ブルガリア北東部と上トラキア平野では、防御施設、住居、通路が計画的に配置された集落が出現する (Тодорова 1982)。後期銅石器時代には集落構造の変化と併行して、ブルガリア北東部を中心に集落の隣に集団墓がセットで営まれるようになる (Тодорова 1986)。

後期銅石器時代を代表する遺跡に、黒海沿岸に位置するヴァルナ墓遺跡 (Варна) がある。ここから 310 基の埋葬址が検出され、総重量 6.5kg の黄金製品や銅製品をはじめとする多様な副葬

品が大量に見つかった(Ivanov 2000; Slavchev 2010)。豪華な副葬品が一部の埋葬地に集中していることから、内陸部の平等的な社会とは異なり、階層的な社会が営まれていたと考えられている。さらに、金製品はスタラ・プラニナ東部とサカル山地の河床に、貝製品はエーゲ海に、そして銅製品はスレドナ・ゴラ山中にあるアイ・ブナル銅鉱山、ストランジャ山地、ブルガス沿岸域に産する資源が利用されており、多様なネットワークを介した交流関係が成立していた様子が明らかとなってきている。また、これらの資源および製品を獲得するための交換財の1つとして、近年、プロヴァディヤ・ソルニツァタ遺跡（Провадия Солницата）で生産された塩が注目されている（ニコロフ 2010）。このようにブルガリア東部と南部では社会の様相が複雑になっていく一方で、西部では小規模集落での新石器時代的な生活様式が引き続き営まれており、対照的な地域性がより鮮明になっていった。

2. 2. 4. 銅石器時代から青銅器時代への「移行期」（前5千年紀末～前4千年紀末）

ブルガリア東部と南部における銅石器時代の繁栄は紀元前5千年紀末に終焉を迎える。テル型集落は放棄され、集団墓は利用されなくなった。テル型集落では後期銅石器時代と前期青銅器時代のあいだで物質文化の内容に明確な違いが見出され、層位的にも両時代のあいだに考古資料を包含しない「間層」の存在が指摘されている。さらに、いくつかのテル型集落では両時代のあいだに数百年から1000年ほどの時間差があることが放射性炭素年代により明らかにされている（Görsdorf & Bojadzhiev 1997; 千本、禿 2014）。

ブルガリアでは、この後期銅石器時代と前期青銅器時代のあいだの文化的断絶期は「移行期」とよばれ、ヒ素銅製品の有無をもとに前半と後半に区分されている（Вайсов 1992; Георгиева 1987; Тодорова 1979）。「移行期」における生活様式の変化は、気候の温暖化とそれに伴う環境の変化が要因として挙げられている（Todorova 1995）。ただし、顕著な変化が認められた黒海沿岸部、ブルガリア北東部、上トラキア平野とは対照的に、ブルガリア北部と西部では点在する小規模集落が銅石器時代から「移行期」にかけて営まれていたことも分かってきている。この期間、ブルガリアでは移動性の高い生活様式が取り入れられていたか、あるいは場所によっては居住地として放棄された地域もあったのかもしれない（Todorova 1995, 89ff.）。しかし、こうした状況も上トラキア平野における定住生活の再開によって終焉をむかえる。青銅器時代の始まりである。

2. 3. 前期青銅器時代の枠組み

2. 3. 1. 前期青銅器時代の上限と下限

「移行期」のあとに位置づけられる青銅器時代は、前期、中期、後期に区分されている (Лешаков 2006)。本論文の対象となる前期青銅器時代の編年的枠組はこれまで多くの研究者によって論じられてきたが、いまだ最終的な合意には至っていない (Bertemes 1998; Nikolova 1999; Panajotov 1988; Panayotov 1995; Todorova 2003; Катинчаров 1974; Лешаков 1997; 2006; Панайотов 1991; 2003)。とくに枠組の上限については2つの立場にわかれる傾向がある。1つは、「移行期」のあとにテル型集落での定住生活の再開を契機とする従来の「再居住説」である (Georgiev 1961; Лешаков 2006)。いま1つは90年代以降に提起された「社会変動説」⁴であり、これはヒ素銅製品を携える移動性の高い集団が社会変化を引き起こしたという解釈に基づいている (Nikolova 1999; 2005)。端的に言えば、前者は銅石器時代からの文化伝統の断絶が顕著にみとめられた南ブルガリアに、後者は銅石器時代の伝統を残しながら漸進的に変化した北ブルガリアに着目したことが、解釈の違いを生み出す要因の1つとなっている。なお、「再居住説」では前期青銅器時代の始まりが紀元前4千年紀終末に、「社会変動説」では紀元前4千年紀半ばに設定されている。

こうした背景を踏まえつつ、本論では前者の説を採用する。その主な理由はセトルメント・パターンとヒ素銅製品の2点に関連している。1点目に関しては、デヤドヴォ遺跡やエゼロ遺跡などで確認されたように、テル型集落における定住生活の再開を重視する。「移行期」に恒常的な居住を目的としてテル型集落が営まれていなかったことは、両時期のあいだでセトルメント・パターンと生業活動に明確な違いがあることを反映している。こうした社会経済的な変化を時代区分の一要素として評価する。

2点目に関しては、ヒ素銅製品の出現を冶金の始まりと結びつけた時代区分案が論じられているが、この技術的系統関係が前期青銅器時代に成立するのにかまだ確証がえられていない (図3)。この説では、ブルガリア北部に位置するホトニツァ・ヴォドパダ遺跡 (Хотница Водопада) やヴァアルナ沿岸域のドゥランクラク集団墓遺跡から出土したヒ素銅製の短剣がとりあげられている (Vajsov 1992; 1993; Nikolova 2008)。短剣を発光分光分析した結果、いずれもヒ素の成分が8%以上認められたことから意図的な合金と解釈されている (Vajsov 1993, 114ff.; Вайсов 1992, 48f.)。比較の対象に挙げられたエゼロ遺跡の金属製品 (計33点) にもヒ素が含まれているものの、その含有量はほとんどが1%前後であり、3%を越えることはない (Георгиев и др. 1979, 171—183, таб. 23)。

この程度の数値ではヒ素が自然に混合していたのか、あるいは意図的に合金したものか明らか

⁴ L.ニコロヴァはH.トドロヴァやI.ヴァイツフのいう「移行期」の用語を採用せず、その前半を終末期銅器時代 Final Copper Age、後半を前期青銅器時代第1段階と称している (Nikolova 1999, 71 tab. 6.1)。

ではない⁵。さらに、両遺跡から出土した短剣の形態的特徴が異なっていることもさることながら、ホトニツァ・ヴォドバダ遺跡とエゼロ遺跡の年代差が500年以上に及ぶことも看過されてはならない。したがって、時代区分の根拠としてあげられたヒ素銅製品の製作技術伝統が従来の前期青銅器時代に引き継がれた明確な証拠は乏しく、両時期間の系統関係を認めることはできない。

一方の前期青銅器時代の下限は、ガラボヴォ遺跡（Гълъбово）で発見された中期青銅器時代の資料と二度目のテル型集落の放棄によって印される。第Ⅱ部第5章でも述べるように、上トラキア平野東部のガラボヴォ遺跡では青銅器時代層最上層から、中期青銅器時代のアナトリアとの関係をしめす搬入品が出土している（Панайотов и др. 1991）。この発見はブルガリアにおいて文字史料をもつ地域との併行関係を示す最初の具体的な事例となった（Leshtakov 1996）。これと同時に、ガラボヴォ遺跡と併行する資料がブルガリアの集落遺跡でほとんど確認されていないことも明らかとなった。最終的な結論を下すにはさらなる調査が必要であるが、「移行期」に続いて前期青銅器時代終末においてもテル型集落が再度放棄され、セトルメント・パターンに変化がおきた可能性が高い。このように文字社会からの搬入品とセトルメント・パターンの変化がブルガリア前期青銅器時代の下限を定めるメルクマークになると言える。なお、ガラボヴォ遺跡の¹⁴C年代値と搬入品の相対的な年代をもとに、下限の年代値は紀元前2千年前後に当たると推測されている（Leshtakov 2002a）。

2. 3. 2. チェルナヴォダ III 文化の年代的 position について

前期青銅器時代の上限を論じる上で、チェルナヴォダ III 文化⁶についても所見を述べておかなければならない。チェルナヴォダ III 文化はルーマニア南東部に位置するチェルナヴォダ遺跡（Cernavodă）での調査によってはじめて明らかにされた物質文化で、ドナウ川下流域を中心に遺跡の分布が確認されている（Morintz & Roman 1968）。この特徴的な文化要素には薄い文化層をもつ平地型集落、墳丘のない平地型の墓址、刻目文、凸帯文、凹線文の装飾や縦位トンネル状把手をもつ浅鉢と深鉢から成る土器群が挙げられる。

ブルガリアで発見された当該文化期の集落や土器が紙上で論じられ始めたのは、90年代以降のことである。資料数は限られ、研究の蓄積はなお浅いにもかかわらず、ブルガリアでは前期青銅器時代に位置づけて論じられることが通例となっている（Nikolova 1999; Вайсов 1992; Тодорова

⁵ デャドヴォ遺跡の金属器を化学分析したところ、銅の成分が主体でヒ素は検出されなかった（金成他 2014）。

⁶ なお本論文では考古学的な「文化」という用語に、G.チャイルド（Childe 1956）が定義した用語を採用する。佐原眞の言葉を借りれば、それは「基本的な遺物・遺構の種類がいつも共存して発見される場合」、あるいは「基本的な遺物・遺構の何種類かの分布圏が一致する場合、その遺物・遺構の総体」を考古学的な「文化」として理解する（佐原 1985, 133f.）。

1986)。その根拠について体系的に論じられる機会がほとんどないまま、ニコロヴァはこの年代付けをホトニツァ・ヴォドパダ遺跡のヒ素銅製品と土器を根拠に積極的に推し進めている (Nikolova 1999; 2001; 2005; 2008) ⁷。しかし、当該遺跡のヒ素銅については先に述べたとおり、いわゆる前期青銅器時代資料との系統関係が認められないだけでなく、チェルナヴォダ III 期の遺跡からも出土していない。また土器についても、ホトニツァ・ヴォドパダ遺跡では彩文土器や高台付土器に銅石器時代の伝統が色濃く残っており (図 101:11~16) (Илчева 2002, обр. 51:5, 6; 52:3, 53:3, 52:1, 2, 4, 7) ⁸、従来の前期青銅器時代やチェルナヴォダ III 期の土器とは異なる様相を呈している。

ブルガリアに分布するチェルナヴォダ III 期の資料についてはこれまで断片的にしか接することができなかったが、近年、上トラキア平野東部のドラマ・メルジュメキャ遺跡 (Драма Мерджмека) (図 65) ではじめて報告書として詳細な調査成果が公表されている (Gleser & Thomas 2012) ⁹。それによるとチェルナヴォダ III 期の平地型集落がテル南東側の袖部で発見されている。同様の事例はヴァルナ沿岸域のミロフツイ遺跡 (Мировци) やドゥランクラク遺跡でも確認されている (Драганов 1990; Змейкова 1992)。これらの遺跡における生活様式は顕著な定住性を示すエゼロ遺跡などのテル型集落とは対照的に、むしろ移動性の高い「移行期」的なものとみてよいように思われる。

これらの痕跡からチェルナヴォダ III 期を前期青銅器時代の枠組で捉える積極的な理由を見出すことはできない。ただし、セトルメント・パターンや冶金技術の違いは時間的な要因だけではなく、社会や経済の背景の違いを求めることも可能である。これまでもエゼロ遺跡下層とチェルナヴォダ III 期が時期的に併行すると指摘されている (Zmeykova 2001, 220)。しかし、ドラマ・メルジュメキャ遺跡¹⁰で紀元前 4 千年紀半ばから後半という較正年代がチェルナヴォダ III 期の値として示されたのに対し (Gleser 2011, tab. 3, abb. 7)、デヤドヴォ遺跡やエゼロ遺跡では前期青銅器時代下層の較正年代は古くても紀元前 3200 年あたりである (第 II 部第 3、4 章参照)。注意すべき点は、チェルナヴォダ III 期の年代値について参照資料が少ないこと、ドラマ・メルジュメキャ遺跡の事例がチェルナヴォダ III 期の全期間を反映しているわけではないこと、そしてこの事例に

⁷ ドラマ・メルジュメキャ遺跡の報告書では具体的な議論を避け、ニコロヴァの説が採用されている (Gleser & Thomas 2012)。一方、同遺跡の調査を担当していたリハルドゥスらはチェルナヴォダ III 期を銅石器時代に位置づける案を提示している (Лихардус & Илиев 2004, 32f)。

⁸ 一方で、高い縦位ループ状把手をもつカップ、貼付装飾、断面が滑らかな S 字状を呈する鉢が前期青銅器時代の土器スタイルに合致すると指摘されている (Nikolova 2001, 239)。

⁹ 同遺跡の報告は 2001 年にすでに予備的な報告としても公表されている (Лихардус и др. 2001)。

¹⁰ ドラマ・メルジュメキャ遺跡ではチェルナヴォダ III 期を「初期青銅器時代」(Initial Bronze Age) と呼び、従来の前期青銅器時代 (Classical Early Bronze Age) と区別している。ただし、こうした呼称法は研究者のあいだでも評価が定まっていない。

してもエゼロ遺跡下層と一部時期的に併行する可能性が残されていることが挙げられる。

以上の点を総合的に判断して、本論文ではブルガリアでチェルナヴォダ III 期とエゼロ I 期のあいだに大きな画期があったことを認め、テル型集落が再度営まれる時期から放棄されるまでの時期を前期青銅器時代とする。その年代は紀元前 4 千年紀後葉から紀元前 2 千年前後におさまる。なお、周辺地域の時期を呼称するときは混乱を避けるため、該当する文化名で代用する¹¹。

2. 4. 上トラキア平野東部における前期青銅器時代研究のあゆみ

ブルガリア前期青銅器時代研究は 1 世紀以上にわたり行われ、遺跡調査や研究の成果が各地で示されてきた。このことから多くのテル型集落が調査された上トラキア平野東部が研究上で主要な役割を果たしてきたといえる。本節ではこれまでの成果を 4 つの時期に分け、その足跡を辿りながら研究の到達点を整理する。課題の詳細は各章にゆずり、ここでは第 3 章以降でとりあげる論点の背景を明らかにする。

2. 4. 1. 第 1 期：先史時代研究の黎明期（19 世紀末～1946 年）

19 世紀末に、シュコルピル兄弟をはじめとする外国人研究者らの活躍によってブルガリア先史時代研究の幕が開ける（Тодорова 1986）。20 世紀前半には先史時代研究の指標的資料を多数擁するスヴェティ・キリロヴォ遺跡（Свети Кирилово）、ヴェセリノヴォ・マレヴァ・モギラ遺跡（Веселиново Малева Могила）、カラノヴォ遺跡（Караново）、ミハリッチ遺跡（Михалич）、ユナツィテ遺跡（Юнаците）などの発掘調査を、V.ミコフ、G.カツァロフ、P.デテフらブルガリア人研究者が中心となって進めた。この時期に上トラキア平野に位置するテル型集落で規模の小さい発掘が行われるようになり、先史資料が蓄積し始めた。しかし、調査では資料の出土地点に十分な注意が払われなかったため、編年体系の枠組みは確立することはなかった¹²。

アメリカ人研究者 J.ゴールは第二次大戦で落命する前に新石器時代と銅石器時代を中心に通時的な概説書を博士論文としてまとめている（Gaul 1948）。この著作はブルガリア先史時代研究最初の資料集成であり、集落遺跡を中心に層位的見解に沿った資料の事実記載と図示が丹念に行われている。前期青銅器時代の位置付けについてはとくに記されていないが、新石器時代と銅石器

¹¹ ルーマニアやセルビアではブルガリアと異なる編年体系が用いられている。例えば、ブルガリア前期青銅器時代はルーマニアでは銅石器時代から青銅器時代の移行期、セルビアでは銅石器時代と呼ばれている（Morintz & Roman 1968; Tasić 1995）

¹² 例えばヴェセリノヴォ・マレヴァ・モギラ遺跡では、後期新石器時代と前期青銅器時代の土器が混同されていた（Миков 1939）。

時代の全体的な様相が整理されたことで、青銅器時代資料との対比と区別に有効な手段を提供した点において重要な役割を果たしたといえる。

2. 4. 2. 第2期：カラノヴォ遺跡第1次調査とカラノヴォ編年の確立（1946年～1961年）

1946年、上トラキア平野東部に位置するカラノヴォ遺跡で発掘が開始された¹³。足かけ10年にわたる大規模発掘の結果、ヨーロッパ先史編年体系の1つとして知られるカラノヴォ編年が公表されるにいたった（Georgiev 1961）。前期青銅器時代研究の観点からみたカラノヴォ編年構築の意義は、前期青銅器時代層が前期新石器時代から連続堆積した文化層（厚さ 12.4m）の最上部に位置することが、1遺跡の同じ調査区で層位的にはじめて明らかにされた点にある（図4）。いま1つ重要な点は、後期銅石器時代層と前期青銅器時代層のあいだに「間層」（無遺物層）が確認され、両時期のあいだに明瞭な文化的断絶があるという解釈を裏付けたことである（Mikov 1959, 89）。

しかし、カラノヴォ遺跡の調査によって飛躍的に進展したのは、実際のところ新石器時代と銅石器時代の編年研究であった（例えば Георгиев 1974）。前期青銅器時代層の資料は各地の年代付けに有効であったが、詳細な時期区分や地域間交流などの議論が深まることはなかった。こうした議論が実質的に始まるのは、エゼロ遺跡の調査と報告書の刊行まで待たねばならない。

2. 4. 3. 第3期：エゼロ遺跡発掘調査と時期区分の試み（1961～1989年）

カラノヴォ編年の基礎が築かれた年に、カラノヴォ遺跡の南東に位置するエゼロ遺跡でブルガリアーソ連の共同調査隊による大規模調査が始まった（Мерперт & Георгиев 1973）。このテル型集落は13層からなる厚い堆積を擁する前期青銅器時代層に、住居址、カマド、ピトス、石罌、そして数々の遺物を包含していた。調査の結果、ブルガリア前期青銅器時代の集落構造とその変遷の様相がようやく具体的な形で明らかにされることになった。

エゼロ遺跡の調査成果はゲオルギエフらによって1冊の報告書として1979年に刊行されている（Георгиев и др. 1979）。報告書では土器の統計分析による前期青銅器時代3時期区分論¹⁴や、中央ヨーロッパ、西アナトリア、エーゲ海地域、黒海北部ステップ地帯との交流を示す資料が明らかにされた。このことによりエゼロ遺跡は南東ヨーロッパとアナトリア前期青銅器時代研究のなかで、ブルガリア前期青銅器時代を代表する標準資料として受け入れられるようになった。

¹³ カラノヴォ遺跡の調査概要については千本2012を参照。

¹⁴ ゲオルギエフやレシュタコフは第1段階をエゼロ段階、第2段階をミハリッチ段階、第3段階をスヴェティ・キリヴォ段階と称している（Georgiev 1972; Leshtakov 1993）。

ブルガリア青銅器時代研究の草分け的存在である R.カティンチャロフはエゼロ遺跡調査を足がかりに、上トラキア平野に位置するノヴァ・ザゴラ・ツィガンスカ・モギラ遺跡 (Нова Загора Циганска Могила)、ユナツィテ遺跡、カザンラク遺跡 (Казанлък) を調査した。エーゲ海地域の資料を中心に参照して青銅器時代編年研究を進め (Katinčarov 1972; 1978; Катинчаров 1974)、エゼロ遺跡の調査成果に対案を出す形で前期青銅器時代 2 期区分論と中期青銅器時代「ノヴァ・ザゴラ文化」を提示した。しかし、今日にいたってこの提案は最終的な遺跡調査報告が公表されなかったこと、のちにガラボヴォ遺跡が発見されたことにより、ほとんど普及することはなかった¹⁵。

編年や地域間交流について盛んに論じられなかで、例外的な研究事例として、いわゆるプロセス考古学的手法をとりいれた R.デネルらによるサイトキャッチメント研究がある (Dennell 1978; Dennell & Webley 1975)。動植物遺存体の種類と遺跡内での出土パターン、そして遺跡付近の土壌の特性に着目し、前期青銅器時代ノヴァ・ザゴラ地域におけるセトルメント・パターンの解明を試みた。デネルは規模に大きな差異のないテル型集落の分布が河川沿いに 5~7km の間隔をあけて分布することをモデルで示し、ブルガリア地域におけるセトルメント・パターン研究の礎を築いた。ただし、デネルの研究成果には肝心の遺跡の位置や名称に少なからず不備が認められたことから、金原と M.カンチェフはデネルが扱ったノヴァ・ザゴラ地区を中心にテル型集落の位置関係を再確認している (カンチェフ 1990; 金原 1987)。とりわけ金原はテル型集落の分布だけではなく、遺跡の立地と自然環境 (地形、気候、土壌) との関係からアプローチを試みた。両者の成果はおおむねデネルのそれを追認するものであったが、先史時代のテル型集落を中心とした分布状況をより正確かつ詳細に把握することに成功している。

80 年代にはいると、各地でブルガリア考古学研究所と国際調査隊によるプロジェクトが盛んに進められるようになった¹⁶。デャドヴォ遺跡をのぞいて、各プロジェクトのおもな調査対象は必ずしも前期青銅器時代ではなかったが、組織的な調査方法と報告書の出版により続々と資料が公表された。たとえば、ブルガリア南西部のコヴァチェヴォ遺跡 (Ковачево) ではブルガリアで最古段階に比定される新石器時代の集落遺跡 (Lichardus-Itten et al. 2002)、上トラキア平野東部のカラスラ・カレット遺跡 (Карасура Калето) では先史時代集落から古代の城塞址や中世教会址 (Wendel 2001) が調査されている。こうした成果をつうじて前期青銅器時代の資料も大幅に増加しており、

¹⁵ ドラマ遺跡群を調査していたブルガリア-ドイツ隊では引き続き、ノヴァ・ザゴラ文化の用語が採用されている (例えば Bertemes 1998)。

¹⁶ ドイツのマルティン・ルター大学によるカラスラ・カレット遺跡 (1981 年開始) ドイツのザールラント大学によるドラマ遺跡群の調査 (1983 年開始)、オーストリアのザルツブルク大学によるカラノヴォ遺跡の再調査 (1984 年開始)、オランダのライデン大学と日本の東海大学によるデャドヴォ遺跡 (1984 年開始)、フランスのパリ第 1 大学によるコヴァチェヴォ遺跡 (1986 年開始)。

前期青銅器時代研究の進展におおきく寄与した。

2. 4. 4. 第4期：緊急調査による墳丘墓、中期青銅器時代集落、「聖域」の発見（1989年～）

社会主義政権によるエネルギー問題の解決を目的に、国家プロジェクトとして上トラキア平野東部のマリツァ・イストク地区¹⁷で火力発電所の建設と燃料となる石炭の採掘が1950年代から大々的に進められていた（Борисов 1991a）。プロジェクトに伴う緊急調査の成果は、ブルガリアが民主化した翌年にラドネヴォ考古学博物館研究紀要という形で公表された。調査成果をつうじて、新石器時代から中世までの膨大な考古資料が収集、記録された¹⁸。

一連の調査のなかでとくに重要な成果は、一定の地理的範囲のなかで前期青銅器時代のテル型集落、平地型集落、墳丘墓が有機的な関係性を有していることが明らかにされた点にある（Leshtakov et al. 2001; Кънчев 1995, Лещаков & Борисов 1995; Лещаков & Попова 1995; Панайотов & Александров 1995）。上トラキア平野ではそれまでテル型集落を中心に調査研究が進められた経緯があり、先史時代の社会構造に関する理解もそこに力点が置かれてきた。墳丘墓と平地型集落の発見により、黒海北岸ステップ地帯から到来したヤムナ文化（またはヤムナヤ文化、土壙墓文化、Pit Grave Culture）集団と在地集団のあいだで、より複雑な交流関係や社会組織の様相を検討する必要性が生じることとなった。

ヤムナ文化に関しては I. パナヨトフがブルガリア全域の墳丘墓資料を集成し、その基本的な特徴と地域性を示しながら、その溯源が黒海北岸ステップ地帯に求められると指摘している（Панайотов 1989）。このことによりブルガリア前期青銅器時代の社会は在地集団と墳丘墓をもつ外来集団が共住する形態をとっていたと考えられる契機となった（例えば Nikolova 1999; Лещаков 2006）。一方、V. ガイダルスカはデネルの成果を発展させるように、マリツァ・イストク地区の古環境および集落と墳丘墓の立地に着目し、GIS を用いて遺跡間の距離と可視性を明らかにすることで、遺跡間の関係性を空間配置から読み解く試みを行っている（Gaydarska 2007）。

マリツァ・イストク地区での調査成果でもう1つ重要な発見は、第2章第3節で述べた中期青銅器時代資料の発見である（Панайотов и др. 1991）。テル型集落のガラボヴォ遺跡で青銅器時代層上層の住居内などから出土した土器群が、中期青銅器時代のアナトリアからもたらされた搬入品であると指摘された（図 45）。これをうけてレシュタコフはアナトリアからエーゲ海において綿密な調査を実施し、中期青銅器時代アナトリアとブルガリアとのつながりを具体的な資料をも

¹⁷ マリツァ・イストク地区の範囲は図5中の遺跡番号8～12、23～25が分布する範囲に概ね相当する。

¹⁸ 博物館研究紀要は第6号（2002年）まで出版されている。

とに立証し、エーゲ海域をふくむ両地域間の交易路を復元した (Leshtakov 1996; 2002)。その結果、ガラボヴォ遺跡の発見がこれまで具体的に明らかにされてこなかった前期青銅器時代終焉の様相解明にむけた大きな一歩となった。

レシュタコフはガラボヴォ遺跡の発見を皮切りに、上トラキア平野における前期青銅器時代終末段階の資料を整理し、年代的位置付けについて考察を重ねている (Leshtakov 2004a; 2004b; Leshtakov et al. 2001; Лещаков 1997)。その結果、ガラボヴォ遺跡をのぞいて、上トラキア平野のテル型集落で中期青銅器時代の居住を示す確証をえることはできなかった。一方、出土した土器をもとに、青銅器時代層最上部が後世に攪乱されたことで、本来堆積していたはずの前期青銅器時代終末、あるいは中期青銅器時代の文化層が失われた可能性を指摘している (Лещаков 2006, 181f.)。

ブルガリアの民主化以降、高速道路、鉄道、ガスパイプラインといったインフラ整備と年々増加する盗掘ともなう緊急調査の対象はブルガリア各地へと拡がった。その結果、集落址や墳丘墓のほかに、新しいタイプとして環溝遺跡が上トラキア平野のチェルナ・ゴラ 1 遺跡 (Черна Гора) とドラマ・メルジュメキャ遺跡で発見された (Лещаков и др. 2002; Лихардус и др. 2001)。これらの遺跡では住居址や墓址の代わりに、環状にめぐる溝が、土器の埋納、動物骨や土製品などの集積とともに検出された。資料の出土状況をもとに環溝は祭祀的性格を帯びた「聖域」として解釈され (Лещаков и др. 2002)、土器と ^{14}C 年代から前期青銅器時代後葉 (紀元前 3 千年紀後葉) に比定された (Leshtakov 2006, 420ff.)。類似した構造をもつ環溝が上トラキア平野を中心に分布していることから、この地域で古代に居住していたトラキア人を子孫にもつ集団が特別な宗教儀礼をとりおこなっていたと推測されている (Leshtakov 2002b; Nikolov 2010)。

2. 4. 5. ブルガリア各地の前期青銅器時代研究概観

1) 上トラキア平野西部

20 世紀前半から上トラキア平野西部のパザルジク-プロヴディフ平原では、P. デテフと V. マツァノヴァらが中心となって先史時代遺跡を調査していた。ユナツィテ遺跡の調査を皮切りに前期青銅器時代資料の存在が明らかにされた。マノレ・ラスコパニツァ遺跡 (Манолe Разкопаница) などのテル型集落と、プロヴディフ市内に点在する平地型集落の発掘をつうじて資料は蓄積されたが、公表内容は限られている。レシュタコフはデテフらの未公表資料を調査し、年代的位置付けの再評価を試みている (Leshtakov 2000; Лещаков 2006)。ユナツィテ遺跡ではブルガリア-ロシア隊の調査により、前期青銅器時代の基本層序と集落構造の変遷が明らかにされた (Россиская

академия наук институт археологии 2007)。ただし、遺物については研究報告や資料紹介で記載されるに留まり、遺跡全体での様相はなお公やけにされていない。

ストリヤマ川上流域ではニコロヴァがダベネ・サロフカ遺跡 (Дъбене Саровка) の調査を 90 年代に実施している。その遺跡調査報告書はまだ刊行されていないが、調査資料の概要は数回にわたり公表されている (Nikolova 1995; 1996; 2000b)。ニコロヴァは当該遺跡の資料を、上トラキア平野西部を代表する「ユナツィテ文化」としてまとめ、西ブルガリアと中央ヨーロッパとの密接な交流関係について言及している (Nikolova 1996; 2000a; 2000b)。また、1999 年に BAR シリーズとして刊行された *The Balkans in Later Prehistory* では、紀元前 4 千年紀から 3 千年紀にいたる銅石器時代終末期から前期青銅器時代の ^{14}C 年代測定による較正年代と考古資料をもとに、バルカン半島の広域にわたる編年、地域間交流、社会構造が網羅的に論じられている (Nikolova 1999)。

ダベネ・サロフカ遺跡の近郊に位置するダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓 (Дъбене Балинов Горн) は、金製の短剣や首飾り、銀製の箱をはじめ、数万点に及ぶ金製ビーズが出土したことで知られている (Hristov 2010)。2004 年から始まった発掘により、この遺跡が墳丘墓と祭祀遺構から構成されていること、出土土器から前期青銅器時代後葉に比定されることが明らかにされた。調査はなお継続中であるものの、公表された構造物や装飾品はダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓の特殊性を如実に物語っている。

2) 黒海西岸域

黒海西岸域では前期青銅器時代の遺跡が通常の調査でわずかにしか認められていないのに対し、遺跡が水中から発見されている点はこの地域特有のことである。たとえば、エゼロヴォ II 遺跡 (Езерово)、キテン・ウルドヴィザ遺跡 (Китен Урдовиза)、ソゾポル遺跡 (Созопол) は港湾の工事とともに偶然発見されている。エゼロヴォ II 遺跡では浚渫船によって大量の遺物が引き揚げられたため、層位的な所見は得られなかった。(Tončeva 1981; Маргос & Тончева 1962) 一方のキテン・ウルドヴィザ遺跡とソゾポル遺跡では水中考古学による調査が実施され、前期青銅器時代の集落址が層位的に調査されている (Draganov 1995; 1998)。

黒海沿岸域ではこれまでいくつかの年代的位置付けに関する考察 (Leshtakov 1994; Nikolova 1999) が試みられてきたものの、編年体系が十分に整えられているという状況には至っていない。その最大の理由は層位情報をもつ公表資料が限られているからである。ヴァルナ沿岸域では墳丘墓と平地型集団墓が数基調査されているものの (Vajsov 2002; Иванов 1972; Тончева 1967)、その時期的な位置付けについては最終的な結論がなかなか得られていない。なお、南のブルガス沿岸

域では明確な前期青銅器時代の埋葬址は認められていない¹⁹。

3) ブルガリア西部・南西部

ブルガリア西部と南西部ではこれまで少なくとも 30 基の集落遺跡が確認されている (Genadieva 2007; Kulov 2011; Александров 2003)。集落遺跡はいずれも平地型集落であり、高台の平坦面や傾斜を利用して立地している。文化層堆積はテル型集落の前期青銅器時代層にくらべると薄く、通例、建築層も僅か数枚しか確認されていない。また集落遺跡の発掘件数は数えるほどであり、そのほとんどは狭い範囲の調査しか行われていない。そのため上トラキア平野のように編年に関する議論はそれほど活発に行われてこなかった。

ストルマ川上・中流域ではこれまでのところ、ラドミル・ヴァホヴォ遺跡 (Радомир Вахово) やヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡 (Ваксево Студена Вода)、コヴァチェヴォ遺跡などで前期青銅器時代層が検出されている (Alexandrov 1994; Genadieva 2007; Александров 1994; 2003; Генадиева 1994; 2001)。とりわけラドミル・ヴァホヴォ遺跡の調査成果は、この地域ではじめて前期青銅器時代層が複数の層にわたって堆積していたことが層位的に確認された点で重要である (Alexandrov 1994)。S.アレクサンドロフがこの資料をもとに編年研究に着手したことで、ようやくブルガリア西部に基本的な編年的枠組が提示されることとなった (Alexandrov 1995; 1998; Александров 2003)。それと同時に、この地域の土器にはチェルナヴォダ III-ボレラス・グループをはじめ、バルカン半島中央部 (コストラッツ文化、ブバニ・フム文化、ヴチェドル文化) と上トラキア平野西部からの影響が及んでいることが明らかにされている。

4) 北ブルガリア

ブルガリア北東部から北部にかけては銅石器時代にテル型集落が分布していたが、前期青銅器時代にはこうした集落での居住痕跡は認められなくなる。これまでに実施された調査では、前期青銅器時代の平地型集落 (Alexandrov et al. 1998; Еленски 2012; Илчева 2002) や洞窟遺跡 (Гергов 1979; Джанбазов & Катинчаров 1974; Миков & Джанбазов 1960) での居住痕跡が北部を中心に散発的に確認されている。北部のヤントラ川流域を中心に分布調査を実施した R.クラウスもまた、前期青銅器時代遺跡の希薄な分布状況について言及している (Krauß 2006)。このようにブルガリア北部と、とりわけ北東部では層位的発掘による遺跡資料の数が少ないため、今日においても地域編年の体系は整備されていない。

北西部では B.ニコロフがマグウラ洞窟 (Магура) の出土資料をルーマニア南西部に展開するコ

¹⁹ ブルガス沿岸域では緊急調査によりデベルト墳丘墓遺跡 (Дебелт) で青銅器時代の埋葬址が 2 基 (3 号墓、29 号墓) 検出されている。レシュタコフはこの埋葬址を中期青銅器時代に位置づけている (Leštakov 1995, 43)。

ツォフェニ系土器と比較したところ、類似点が数多く認められたためマグウラ洞窟の資料をマグウラ・コツォフェニ土器文化と称した（ニコロフ 1981）。パナヨトフとアレクサンドロフが当該文化の基本的特徴を明らかにしたあとに（Панайотов & Александров 1988）、アレクサンドロフは土器をもとに各遺跡の年代的位置付けを試みながら、この地域の考古資料をマグウラ・コツォフェニ期の土器として区別するのではなく、コツォフェニ期そのものに属すると論じた（Alexandrov 1995; 1998）。その際、コツォフェニ期のあとに後期グリナを据えて、前期青銅器時代を3つの段階に区分している（Alexandrov 1995, tab. 1）。それによると、前期青銅器時代第1段階にコツォフェニⅠ期（オルリヤ・サドヴェツ期）、第2段階前半にコツォフェニⅡ期、後半にコツォフェニⅢ期、第3段階に後期グリナが配されている²⁰。

埋葬址に関しては、北ブルガリアでヤムナ文化の墳丘墓がひろく分布していることが明らかにされている。なかでも北東部に位置するプラチドルⅠ（Плачидол）の1号墳1号墓から木製車輪の圧痕が検出され、牧畜を営むヤムナ文化集団と車馬を結びつける資料として注目されている（Панайотов 1989）。一方の北西部では墳丘墓のほかに、コツォフェニ文化に特徴的な火葬墓が確認されており、2つの葬墓制の存在が異集団の共生を示す証拠と解釈されている（Александров 1994, 85ff; Панайотов 1989, 256）。

5) ロドピ山塊地域

この地域では前期青銅器時代遺跡の調査がほとんど進んでおらず、当該期の研究がもっとも遅れている。近年の緊急調査により、東ロドピ地域のセドラリ遺跡（Седрали）から出土した土器は、上トラキア平野西部と北ギリシアとの密接な関係があったことを示している（Нехризов 2010; Нехризов & Иванов 2011）。この事例は東ロドピ地域の地域的特徴を考えるうえで重要である。一方、標高の高い山塊部の地域ではいまだに当該期の様相は明らかにされていない。

2. 5. 問題の所在と分析方法

2. 5. 1. 問題点の抽出

ブルガリア各地の研究史を概観した結果、実質的な前期青銅器時代研究の幕明けはエゼロ遺跡の調査が契機となったこと、今日にいたるまで上トラキア平野で遺跡調査が集中して行われてきたことを確認した。平野での調査件数はただ多いだけではなく、テル型集落をはじめ、平地型集落や墳丘墓、環溝遺跡といった性格の異なるタイプの遺跡が集中して分布していることも明らか

²⁰ なお、アレクサンドロフもまたチェルナヴォダⅢ期を青銅器時代初頭に位置づけている。

にされた。そして一連の調査成果をもとに上トラキア平野が研究の要諦をなし、90年代以降は実質的に、平野地域をフィールド調査の対象とするレシュタコフとニコロヴァが前期青銅器時代研究を牽引してきたといえる。そこで本節ではこの2人の成果に焦点を絞りながら、ブルガリア前期青銅器時代研究が抱える今日的な問題点を指摘し、その解決方法を示すこととする。

レシュタコフは上トラキア平野東部の前期青銅器時代後葉から中期青銅器時代に関する論考を数多く提出している。編年研究をはじめ (Leshtakov 1993; 2002a; 2004a; 2004b; Лещаков 1988; 1997)、上トラキア平野とアナトリア・エーゲ海域間の交易研究 (Leshtakov 1996)、分業制的な社会構造の考察 (Лещаков 2006)、環溝遺構の解釈に「宗教」と「聖域」という視点を取り入れるなど (Leshtakov 2002b; 2006)、青銅器時代の新たな歴史像を精力的に提示し続けている。

ニコロヴァは上トラキア平野西部に位置するダベネ・サロフカ遺跡で調査を進めながら、銅石器時代終末段階から前期青銅器時代のバルカン半島中央部から東部にかけて幅広い範囲を総括的に扱っている (Nikolova 1999; 2000c; 2005; 2008)。¹⁴C年代測定による較正年代を積極的に活用して前期青銅器時代を3段階に大別し、各時期の指標として凹線文土器、象嵌文土器、無文土器を取りあげて、地域間の交流関係について言及している。一連の研究では広い視野にたって論が展開され、「移動性の高い牧畜社会」→「定住社会の定着」→「階層性社会の誕生」という社会発展モデルが導き出された (Nikolova 1999)。社会変容のプロセスがニコロヴァの時期区分に沿ってダイナミックに描出されたといえる。

レシュタコフとニコロヴァの研究対象は多くの点で共通しているものの、両者のアプローチ方法は対照的である。レシュタコフは前期青銅器時代後半における上トラキア平野東部からエーゲ・アナトリア地域の資料を実証的かつ帰納的にとらえているのに対し、ニコロヴァは前期青銅器時代前半における上トラキア平野西部からバルカン中央部、そして中欧地域まで視野にいれながら巨視的かつ演繹的に考古学的現象をとらえる傾向にあるといえる。こうした両者の論説のあいだには、まだ論じられていない点、あるいは論じられているが、なお検討が必要である点を認めることが可能である。

たとえばレシュタコフによる一連の考察は、上トラキア平野の前期青銅器時代後葉以降に重点がおかれている。そのため前期青銅器時代前葉から中葉に関する研究はほとんど行われていない。とりわけ、前期青銅器時代後葉に至るプロセスや、中葉段階との対比による後葉段階の歴史的な位置付け、そしてアナトリアやエーゲ海域だけではなく、そのほか周辺地域からの上トラキア平野の評価に関してこれまでくわしく論究されていないのである。

一方のニコロヴァは、解釈へのアプローチ方法の性格上、個別具体的な考古資料の検討が十分

になされてきたとは言いがたい。たとえば、上記した凹線文土器、象嵌文土器、無文土器以外にも多種多様な土器群が各地に認められるものの、そうした土器は体系的に分析されているようには思われない (Nikolova 1999, 175—245; 2008)。また、前期青銅器時代中葉における階層性社会の出現について、象嵌土器やアプス型住居²¹がエリート階層の出現の証拠であると指摘されているものの、その理由は提示されていない。くわえてチェルナ・ゴラ 1 遺跡の環溝やダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓といった新資料は、上トラキア平野西部における前期青銅器時代文化を論じる上で重要であるものの、一連の資料に関する評価について詳細な言及がない。

他方、上トラキア平野以外の地域に関しては、90 年代以降にようやく黒海西岸域や西ブルガリアの資料をもとに編年研究の成果が提示され始めたものの、地域単位での年代的位置付けに留まっている。さらにブルガリア北部・北東部にいたっては、研究の進展そのものから後れをとっているのが現状である。

このようにブルガリア前期青銅器時代研究の成果は地域によって偏りがあるだけではない。周辺地域の土器群との型式学的特徴の比較が十分になされていないケースが少なからず認められ、編年的位置付けだけでなく、地域間での関連性とその背景を読み解く試みもまた少ない。このことはブルガリア前期青銅器時代全体を見据えた、具体資料に基づいた研究がまだ十分に実施されていないことを意味している。さらには、これまでに示した一連の研究は、基本的にエゼロ遺跡資料による編年体系を基にしている。すでに記したように、この編年的枠組そのものの検証もまた十分に行われていないのである。ヨーロッパ青銅器時代の開始過程を、前期青銅器時代ブルガリアにおける物質文化の研究をつうじて紐解くためには、ここで述べた問題点を解決することが有効な方法となる。つまり、本論文で取り組むべき課題とは、土器による編年と地域間交流の様相解明であり、そのうえで上トラキア平野をモデルにした前期青銅器時代における地域社会の形成と展開のプロセスを評価することである。

2. 5. 2. 分析方法の提示

本論文では、ブルガリア前期青銅器時代の編年体系を構築し、それをもとに上トラキア平野における土器文化の成立過程とその歴史的背景を解明する。こうした課題に取り組むための措置として、従来の考古学的分析方法である型式学的方法を採用する。また、その方法にくわえて土器の製作地域と土器間の関係性を補足するために、デャドヴォ遺跡資料を対象に胎土分析を実施す

²¹ 住居短軸側の壁面一辺が湾曲する矩形プランの住居址を「アプス型住居」と称する。

る。胎土分析の方法について詳細は第 III 部第 7 章にゆずり、本項では上記の課題を解明するための枠組を記すこととする。

型式学的方法については国内外で長年にわたって論じられてきており、その方法論上の有効性についてはこれまですでに多くの場で指摘されていることから、ここでは代表的な文献の提示に留めておく（たとえば大塚 2004; 小杉 1995; 小林達雄 1989; 小林行雄 1959; 田中 1978; 横山 1985; Orton et al. 1993; Rice 1987; Shepard 1956）。本論文では型式学的方法として土器の形態、装飾、製作技術（器面調整、胎土）という 3 つの属性に着目し、土器の年代的、地域的特徴を示す属性を抽出する。それを各遺跡の層位学的所見と照らし合わせながら、資料間の比較分析をつうじて土器を構成する属性間の類似点と相違点の組み合わせにパターンを見いだし、土器の時間的な位置付けや併行関係、地域的なまとまりや地域間の関係性として読み解いていく。

遺跡によって公表資料の多寡に相違はあるが、断片的な資料であっても、年代的な位置付けおよび地域的特徴の評価を試みる。そしてそれらの時空間的な分布のありかたから、土器間および地域間の関係性について検討する。その際、遺跡間や地域間に認められる土器要素の類似は、人、モノ、情報の移動と受容過程の関係によって成立すると仮定し、交流関係に関する解釈は資料間の関係性、つまり要素間の類似点のあり方と相関性をもつと考える。たとえば、全く同じような特徴を持つ土器が見い出されれば、その背景として直接的なもののやりとりや、人の移動および移住が想定されうるし、それに対し部分的な類似に留まれば、モノや情報の移動および伝播という形で関係性が理解されうる。これと同時に部分的な類似に留まった場合、それも資料間の関係性を反映するものと把握することが可能である。それに対して、全く異なる特徴の土器群から構成されている場合、土器に関していえば、両者の関係性が把握できないということを意味する。以上の理解にもとづき、資料間の関係から遺跡間および地域間の交流の様態を解釈する可能性を見いだすこととする。

土器の年代について論じるためには型式学的検討とならんで、資料の層位的位置が重要となる。この点に関しては基本的に「地層累重の法則」と「地層同定の法則」に則る。ただし、本論文で言及する遺跡の調査報告には、ほとんどの場合、各文化層の成り立ちについて詳しく論じられていない。よって、本論文ではさしあたり詳細な成層過程については立ち入らず、報告の記載に従って各資料の出土層位を扱うこととする。

資料の出土状況に関しては、各研究者によって公表された調査成果に依拠するが、各々の調査では土器資料は区分された層単位でとりあげられることがほとんどであり、副葬品や一部の例外を除いて、埋納や住居内の「一括遺物」として示されることはない。つまり、一時に廃棄された

ことを保証する層位資料は非常に限られている。「一括遺物」にしてもそれが「製作時の同時性を保証しているものではない」（鈴木 1969, 9f.）ものの、本論文で取り扱う資料の多くはそれ以前に「一括遺物」という出土状況としての定点をもっていない。したがって、現状では、たとえば特定の器形の形態的特徴あるいは文様帯の変遷を遺構単位で「一括遺物」を採用しながら追跡し、精密な編年的指標を得るといような資料操作を対象地域ごとで行うことは困難である。そこで本論文では当面、編年考察には年代を示す指標資料を複数提示し、その組み合わせと層単位の位置関係から年代的位置付けを検討し、それを地域ごとに遺跡各層の出土資料を比較することによって、編年学的ものさしとしての蓋然性をえる方法をとることとする。

第 II 部 土器の編年と地域性

第3章 前期青銅器時代デャドヴォ遺跡の時期区分と土器の変遷

3. 1. はじめに

ブルガリア前期青銅器時代の編年研究はカラノヴォ遺跡の調査によって本格的にはじまり、エゼロ遺跡の調査をつうじて基礎が築かれた。今日にいたるまで、厚い前期青銅器時代層と豊富な考古資料を擁するエゼロ遺跡は、ブルガリア前期青銅器時代編年研究において中心的な役割を担ってきた。しかし、編年研究の根幹をなすエゼロ遺跡そのものの時期区分の検証は十分に行われてきたとはいえない。主な理由は2つある。1点目は、ブルガリア前期青銅器時代の編年の枠組がエゼロ遺跡資料につよく依拠して組み立てられてきた経緯がある。2点目は、エゼロ遺跡のように長期間にわたる前期青銅器時代文化層をもつ遺跡の調査事例とその公表資料はほぼ皆無であり、これまで十分な比較研究が行われてこなかった。

そこで本章では、第4章で上トラキア平野東部のエゼロ遺跡資料との比較をつうじて前期青銅器時代編年について検討するために、デャドヴォ遺跡の層序と土器を基本資料として時期区分を行う。デャドヴォ遺跡は人間集団による諸々の生活痕跡が長期間堆積した文化層を擁するテル型集落であり、エゼロ遺跡同様、前期青銅器時代各段階の資料が文化層に含まれていることがすでに確認されている(Катинчаров и др. 1980)。また一定程度の調査面積を確保した層位的調査²²が実施されていることで、時間的変遷を定点的に追跡することを可能にする資料が得られている。次節ではまずデャドヴォ遺跡における前期青銅器時代の層序を、住居床面を基準にして分層する。そして各層から出土した土器を器形と装飾をもとに分類して、層序と相互に対比させながら年代的な指標となる土器の属性を抽出する。土器の変遷をつうじて時期区分を試み²³、加速器質量分析(Accelerator Mass Spectrometry。以下AMSと略称)法による¹⁴C年代値を参照しながら、相対的な年代的な位置付けについて検討する。

²² ただし前期青銅器時代層の最下部はわずかな範囲の調査(約5 m)で確認されている。

²³ 筆者はこれまでデャドヴォ遺跡の編年に関する所見を提示してきた(千本2006; 2009)。しかし2010年から2012年に、遺跡の層位堆積とAMSによる絶対年代測定の再調査を行った結果、これまでの所見を修正する必要が生じたため、本論文でデャドヴォ遺跡における前期青銅器時代の年代的な位置付けに関する改訂案を提示する。

3. 2. 遺跡調査の概要

3. 2. 1. テル北部における試掘調査

デヤドヴォ遺跡はブルガリア南部の上トラキア平野北東部に位置するテル型集落である（図5；図6）。規模は東西220m、南北140mを測る。今日残存しているテルの形態は東西に長軸をもつ楕円形を呈している。テル頂部とその周辺地形における比高差は13～18mである。

1977～78年にテル北部で試掘調査が行われたあとに、古代ギリシアの時代に上トラキア平野を中心に展開していたトラキア人の起源を探るという国家プロジェクトの主要な柱として、ブルガリア-オランダ（オランダは1990年に脱退）隊による本格調査が始まった²⁴。日本隊が調査に合流したのは1984年のことで、途中中断をはさみながら2012年まで発掘調査は行われている。

試掘調査（100 m²）はカティンチャロフの指揮のもと、文化層堆積の内容を確認する目的で行われた（Катинчаров и др. 1980）。調査の結果、文化層は大きく3層に区分された。地表層直下のA層は中世に、B層は中期青銅器時代初頭と前期青銅器時代に、C層は後期銅石器時代に比定された。B層とC層の間には厚さ35～40cmの「間層」が確認されている。この調査では地表面から深さ4.5m地点まで掘り進められたが、地山は検出されなかったため、テル最下層の文化的様相は明らかではない²⁵。

厚さ2.4mを測る青銅器時代のB層は16層に区分され、土器をもとに下層からXVI～XIII層（厚さ約75cm）、XII～VII層（厚さ約50cm）、VI～I層（厚さ約110cm）の3段階に分けられた。カティンチャロフはXVI～VII層を前期青銅器時代に、VI～I層を中期青銅器時代に位置づけたが（Катинчаров и др. 1980, 17）、近年では前期青銅器時代第1段階から第3段階に年代付ける案がひろく受け入れられている（Лещаков 1994）。

3. 2. 2. 日本隊による前期青銅器時代集落の調査と「中央住居群地区」

中世の集落と墓域を対象にしたブルガリア-オランダ隊による発掘調査が、テル全域で1979年から進められた（調査面積8000 m²）。中世層の発掘調査は1983年に終了し、その成果は報告書として公表されている（Fol et al. 1989）。報告書からは青銅器時代文化層上部の一部が、中世層調査時にすでに掘り下げられていた様子が窺える（Fol et al. 1989, figs. 15～20）。実際、海拔標高140.4mの基準杭から深さ0.7m～1.9m地点（海拔標高139.7～138.5m）で、前期青銅器時代の建築層が少

²⁴ デヤドヴォ遺跡調査の経緯や調査内容の概要は、参照文献に示した東海大学トラキア発掘調査団による概報や、Dyadovo Studies シリーズおよび禿2004と2011に詳しい。

²⁵ テル東斜面では後期銅石器時代層が地山上に堆積していることが確認されており、デヤドヴォ遺跡ではこれより古い層はいまのところ認められていない（禿, 千本 2009）。

なくとも4枚検出されたと指摘されている（Лещаков 1997, таб. V）。日本隊が調査に参加したのはこの2年後のことであるから、日本隊の調査資料は当初から前期青銅器時代層上部のものを部分的に欠いていた可能性があるという点に注意を要する。

日本隊による前期青銅器時代集落を対象とした調査は2012年までに23度にわたって実施された。テル頂部には南北に軸をとる幅5mの「中央セクション壁」が、文化層堆積状況の確認を目的にのこされている。セクション壁の北東側に隣接するように日本隊の調査区が、そしてその南東側と西側にはブルガリア隊による調査区が設置されている。日本隊の調査面積はおよそ350㎡を測る。ここから住居やカマドなどの遺構が数多く検出されたことから、この調査区は「中央住居群地区」と称されている（禿 2004）。

中央住居群地区では中央セクション壁際に設けられたテスト・トレンチとテスト・ピット1と3における調査により、前期青銅器時代層下部と下層の「間層」²⁶と、後期銅石器時代層の一部が確認されている（図7）。前期青銅器時代文化層の厚さはセクション壁の南側（N区）で2.1m、北側（K区）で3.0mを測る（図8）。海拔標高に換算すると、南でおおむね139.6m～137.5m、北で139.7m～136.7mということになる。2012年に調査された25号住床面（K/24・25区）の海拔標高がおよそ137.8mであったことから（禿 2014）、その時点で前期青銅器時代層の下限まで0.3～1.1mほどの堆積が残されていることになる。

3. 2. 3. 中央住居群地区における主要な調査遺構

中央住居群地区では、これまで住居、カマド、溝などの遺構が前期青銅器時代層から見つかっている。26基相当の住居址はいずれも平地式で、方形に配された柱穴列と粘土床から成る（図9；表1）。壁を構成する柱穴は径10cm以下と小形であり、床面も全面的に検出されていないため、ほとんどの場合、住居プラン全体の様相は把握されていないが、住居の規模は長軸7～8m、短軸4～5mほどであると推定される。

デヤドヴォ遺跡でもっとも数多く検出されている遺構はカマドであり、その数はおよそ240基におよぶ。その多くが径40～200cm弱規模の円形プランをもつ（図10）。カマドは地中に凹みを掘って、そこに粘土、土器片、礫を詰めて基礎とし、その上に硬質の燃焼面（硬化面）が設けられている²⁷。燃焼面のまわりには、黄色粘土によるカマドの壁体が巡っている。上部構造に関し

²⁶ 前期青銅器時代および後期銅石器時代の層では遺構や大量の遺物が出土しているに対し、両時代の間に堆積した「間層」では居住痕跡や遺物がほとんど出土していない。

²⁷ カマド土器敷き面の土器片は構築材として二次的に利用されたものである。よって、カマドの構築時期と土器敷き面

ては、確かな痕跡が得られていないため明らかになっていない。

中央住居群地区から1基の溝が調査区を南北に二分するように検出された(L・M区)(図9)。調査範囲の関係で全体の様子は明らかにされていないが、検出された溝の平面プランが湾曲を呈していたことから、テル上で円を描くように展開していたことが予測されている(東海大学トラキア発掘調査団 1990, 54, fig. 1)。溝上端の幅は155~185cm、深さは100~130mを測る。断面形はV字を呈する。溝は2号住居直下層に構築され、そのあとに2号住居が構築されるまえには埋められたと考えられている(東海大学トラキア発掘調査団 1990, 52ff.)²⁸。

このほかに中央住居群地区では、黄色粘土を貯蔵するための土坑(円形粘土遺構)、カメの甲羅や半欠の土器を据えた土坑(「カメ甲羅土坑」「土器埋設遺構」)が検出されている。埋葬関連の遺構は乏しく、幼児埋葬が1例だけ確認されている。

3. 3. 前期青銅器時代の層序

本論では前期青銅器時代層とそこに包含される考古資料の層位的な位置を整理するために、「生活面」と「建築層」という用語を採用する。例をあげて整理すると、A号住居址がB号住居址の下層に位置すると仮定した場合、A号住居址の床面とそれと層位的に対応する全ての遺構はA号住居址の「生活面」に属する。そして、A号住居址からB号住居址直下までの間の堆積層をA号住居址の「建築層」とする。つまり、生活面は建築層の境界面に相当する。ただし、生活面の認定基準は住居の床面にだけ限られることではない。例えば、集落構造において重要な役割を果たしていた溝などは、それに当たる。

これまで検出された住居址に対応する生活面を、調査区全体で1つ1つ正確に復元することは容易ではない。その主な理由として残存状況が良好ではないため住居床面の検出範囲が限られていること、前期青銅器時代文化層がところどころ攪乱を受けていることがあげられる。また堆積層は調査区の北部から南部にかけて傾斜し、場所によって文化層の厚さが異なっている。具体的には、前期青銅器時代の文化層は南のN区からL区のなかほどまで比較的水平に推移しているが、そこからJ区のある北に向かって前期青銅器時代以前のテル基盤層が低く傾斜するとともに前期青銅器時代の堆積の厚さが増している(図8)。テル型集落では中央から縁辺にかけて層位堆積が低く傾斜する現象はよく見受けられる。すでに言及されているように(東海大学トラキア発掘調

に利用された土器の製作時期のあいだには時間的なギャップがあることが予測される。

²⁸ 溝の機能に関しては不明な点が多く残されているが、防衛的性格を想定する意見もある(Лещиков 2006, 166)。なお、前期青銅器時代の溝は少なくともさらに2基確認されている。1つは中央住居群地区の南隣に位置するブルガリア隊調査区から検出されている(Гергова 2008)。いま1つは日本隊によるテル東斜面の調査で認められている(禿, 千本 2009)。

査団 1996, 91)、海拔標高をもとに調査区のひろい範囲で建築層を設定しようとする層位堆積の現状に反した結果を招くおそれがある (Schier 2001)。

この点に注意しながら中央セクション壁を観察すると、調査区南部の L～N 区では住居址の床面に敷かれた粘土面が北部に比べて数多く重なっている。住居址の建て替えや改修が頻繁に行われていた様子が窺え、これまで調査された住居址の半数以上が L 区から南側で検出されてきたという点と整合している。実際にこの区画では南北方向に軸をもつ複数の住居址が隣接して検出され、有機的なまとまりを形成していたと考えられている (禿 2001)。この住居群は少なくとも 6 枚の建築層からなり、堆積厚は約 60cm を測る。

調査区北西部の J・K/23 区では 2 号住、7 号住、9 号住が検出されている。南区とは対照的に、住居址のあいだには比較的厚い堆積をみてとることができる。具体的には、2 号住の下約 70cm のところに 7 号住、そこからさらに約 40cm 下に 9 号住が検出されているという具合である。このように文化層の堆積状況は調査区の北と南で異なっていることが分かる。

以上の点を考慮し、これまでの調査所見と中央セクション壁の堆積状況を参考にしながら、中央住居群地区の生活面および建築層を整理する。比較的多くの住居址が検出された L～N 区では住居址間の先後関係を住居間の平面的な配置関係、重複関係、床面の標高をつうじて把握しやすい。それに対し、調査区北 (J・K 区) の住居址と南 (L～N 区) にある住居址間の層位的な対応関係を把握することのほうがより困難である。この関係を中央セクション壁の断面で追跡することは、古代から中世における攪乱と動植物による損傷がとりわけ上層ではげしいため容易ではないものの、調査区北の住居址のなかで攪乱の影響がもっとも少ない 9 号住がこの対応関係を検討するには適している。それによると、9 号住は 90 年検出住居、とくに床 B と対応する可能性が高い。

続いて、9 号住と 7 号住の間のレベル差 (約 40cm) が 90 年検出住居床 A (138.43m) と 90 年検出住居床 B (138.36m) の間のレベル差 (10cm 未満) より大きい点を考慮すると、7 号住は 90 年検出住居床 A よりも上層に位置すると考えられる。また、中央住居群地区における層序基準の役割を担っている 2 号住に関しては (東海大学トラキア発掘調査団 1990, 52ff.; 1996, 89ff.)、調査区南の住居址との対応関係が攪乱のため判然としないものの、文化層の堆積厚を考慮すると、2 号住が発掘調査の行われた住居址のなかで最も上位に位置するものと判断できる。

以上の方法で生活面を数えると 12 となるが、実際にはそれよりも多くなる。まず、住居址床面のなかで最も下層に位置する 99 年検出住居床 B から「間層」まで、およそ 30cm の堆積がある。また 2 号住から前期青銅器時代層最上部までには 70cm 以上の堆積があり、少なくとも 2、3 枚の

建築層を包含すると指摘されている（Лещаков 1997, таб. V）。さらには、2号住居址と7号住居址のあいだの層で検出された溝も集落構造上重視して、生活面の1つに加える。

その結果、前期青銅器時代の建築層は少なくとも16を数えることとなる。まず2号住居址は調査団によって層序決定の基準としてIII層と定められていることから、本論でもその所見を踏襲する（東海大学トラキア発掘調査団 1990）。2号住居址より上層に関しては、日本隊が調査に参加する前からすでに発掘が進められていた経緯もあり、住居址に関する情報が乏しいため、「I/II層」としてまとめておく。中央住居群地区で東西にのびるように展開していた2号住居址下層の溝をIV層とする。続いて、下層の7号住居址から順に番号を振っていくと、住居址として最下層に位置する99年検出住居址床BはXV層となる。その下層ではとくに住居址の床面は確認されていないため、ここではXVI層にまとめておく。なお、生活面を指示する場合は、「III面」、「IV面」と記す。

以上の点をまとめると、建築層および生活面と住居址との関係は上層から順に以下の通りとなる（表1）。

I/II層：2号住居上層

III層：2号住居

IV層：溝

V層：7号住居

VI層：90年検出住居A

VII層：9号住居、90年検出住居B

VIII層：4号住居、5号住居、6号住居

IX層：11号住居

X層：15号住居、16号住居

XI層：13号住居床A、17号住居、18号住居、19号住居、23号住居

XII層：13号住居床B、20号住居、21号住居、22号住居、24号住居床A

XIII層：14号住居、24号住居床B（以下24号住B）、25号住居

XIV層：99年検出住居床A

XV層：99年検出住居床B

XVI層：99号住居床B下層

「間層」

3. 4. デャドヴォ遺跡の土器にみられる特徴

3. 4. 1. 器形分類

本論では中央住居群地区の前期青銅器時代層から出土した土器を基本的な分析対象とする。ただし、I/II～IV 層の上層については下層にくらべて日本隊の資料に限りがあるため、レシュタコフによってまとめられたブルガリア隊の調査資料も参照する (Лещаков 1994; 1997. 39—54)²⁹。本研究で観察した中央住居群地区の土器資料はおよそ 9 千点である³⁰。デャドヴォ遺跡の土器は形態的な特徴によって、深鉢、浅鉢、水差し、壺、アスコス、カップ、注口土器、漏斗状土器の 8 つの器形³¹に大別される (図 11～14)。土器の成形にロクロを用いた痕跡は認められない。器面の色調は黒色、褐色あるいは灰褐色で、焼きムラをもつものが多い。器面調整は磨きとナデが優勢である。胎土については第 7 章で詳述するが、花崗岩質岩由来の粗粒粒子を含む胎土が多く見受けられる。

1) 深鉢

深鉢は口径に比して器高が大きく、胴張りのものとする (図 11)。把手は縦位ループ状把手やこぶ状把手が少量認められる。断面形態と器面調整によって 4 類に分けることができる。なお、口径と器高の値が同等のものについては、断面形態から判断して深鉢か浅鉢のどちらかの名称を用いる。

A 類は口縁部から胴部までの断面形態が緩やかな S 字状を呈し、口縁部がやや外反するものである。A 類は器面調整によってさらに細分することが可能である。A1 類は器面を磨研調整かナデ調整が施されるもの、A2 類は口縁部から頸部にかけて磨研調整が施され、胴部には粗いナデを施した器面をもつ。本論では A1 類を「S 字深鉢」(図 11:1～4)、A2 類を「粗胴深鉢」とする (図 11:5, 6; 図 14:15, 16)。A1 類は深鉢のなかで最も多く認められる器形である。

B 類は口縁部が外側にむかって屈曲する。本論では「外屈深鉢」とする (図 11:7)。

C 類は口縁部が胴部からゆるやかに内傾し、断面形が弧状を呈する。口径は胴径に比して小さ

²⁹ レシュタコフが提示した土器資料の第 IV～I 層は、第 3 章第 3 節で示した層序と対応している (Лещаков 1997, 44ff.)。ただし、レシュタコフの II 層と I 層は本章では I/II 層にまとめている。

³⁰ この点数は器形認定の可能な口縁部を伴う破片、部位の明らかな大きな破片、把手、有文片の数を示しており、無文であり、かつ器形が明らかでない破片は含まれていない。また明らかに同一個体と判断可能な複数の破片は 1 点と数えた。

³¹ 各器形は量量によって用途が異なる可能性は十分想定される。その一方で同程度の大きさや形態を呈していても器形の名称や用途が異なるという民族誌からの報告もあり (Miller 1985)、用途と器形の名称を一概に関連づけることはできない。こうした課題に応えるためには土器に残された残留物や被熱などの痕跡、出土状況といった情報を複合的に検討する必要があるが、本論ではこの点を保留し、断面形態、口径、胴部径、器高の関係をもとに土器を分類し、一応の器形名を付与することとする。

い。本論では「内閉深鉢」とする。C類は断面形をもとに細別が可能である。C1類として、口縁部がやや弓なりに反るもの（図 11:8）、C2類として最大径部が胴部の中間あたりにあるもの（図 11:9）、最後に C3類として最大径部が C2類にくらべて口縁部近くによるもの（図 11:10）が挙げられる。

2) 浅鉢

浅鉢は器高に比して口径が大きいものとする（図 12）。断面形態と平面形態から 4類に分類される。

A類は内弯する口縁部を有する（図 12:1, 2）。把手がつく例は比較的少ないが、形態的には舌状（図 12:3）、縦位ループ状（図 12:4, 8）、横位ループ状（図 12:5）を呈するもののほかに、いわゆるトンネル状把手（図 12:6）と擬トンネル状把手（図 12:7）がある。本論では「内弯浅鉢」とする。

B類は口縁部が内側に屈曲し、稜線を内外面に認めることができる。基本的に把手がつくことはない。本論では「内屈浅鉢」とする（図 12:9, 10）。

C類は底部からほぼ直線状あるいはやや弓なりに広がる口縁部をもつ。最大でも口径が 20cm 程度で小振りの皿状のものを「小型鉢」とする³²。口縁部は単純口縁、内面肥厚口縁、外反口縁をもつ。器面の色調は黒色から暗褐色を呈するものが多く、内外面は丁寧に磨研される。小型鉢は刻線文や縄目文による装飾が特徴的である（図 12:11, 12; 図 15:1, 2）。

D類は底部から口縁部にかけて直線状に、ほぼ垂直に立ち上がる。口径と底径はほぼ等しく、側面観はたらいのような形状を呈している。本論では「盤状浅鉢」とする（図 12:13）。

E類は口縁部と底部の平面形が明らかな楕円形を呈する。底部から口縁部にかけて直線状に開き、口縁部には孔のある二叉の舌状突起がつくことがある。その形態的な特徴から「舟形土器」と称することとする（図 12:14）。

3) 水差し

縦位のループ状把手と注ぎ口を、器壁の対称的な位置に 1つずつもつものを水差しとする（図 13:1~7）。胴部の断面形は壺と類似して丸みを帯びている。注ぎ口は把手の付いている部位よりも高く、液体を別の容器等に移すことを目的に形作られている。断面形態と法量から 2類に分類できる。

A類は器高が 10~20cm 前後の小形のものである。おもに食卓用を意図したものと推察される。

³² 小型鉢よりも大振りのものを「開口浅鉢」としておくが、デヤドヴォ遺跡ではわずかしこ認められていない。本器形は本論文をつうじてそれほど重要ではないため、ここではその提示に留めておく。

本論では「小型水差し」とする (図 13:1~6)。

B 類は A 類に比して大形で、器高は 30cm 近くあり、胴部はずんぐりとした丸みをもつ。その大きさから判断して、運搬および貯蔵に利用されたものであろう。本論では「大型水差し」とする (図 13:7)。

4) 壺

胴部径に比して口径は非常に小さく、頸部は一定程度の高さをもつものとする。器高は大きく、口縁部はおおむね水平で、明確な注ぎ口をもたない (図 13:8~11)。胴部は丸みを帯びている。壺には把手が肩部から胴部にかけてつく場合があり、把手を 1 つもつものを「片把手付壺」(図 13:12)、2 つもつものを「アンフォラ様壺」とする (図 14:13, 14)。なお、資料の残存状態によって壺と水差しの区別が困難なものが少なからずある。本論では明確に区別ができない場合、便宜的に壺として扱うこととする。

5) アスコス

アスコスは元来古代ギリシアで用いられていた水差し的一种を指す名称である (図 13:13; 14:1)。形態的にはやや扁平で丸みのある胴部に、水差しと類似した注ぎ口と 1 つのループ状把手がつく。

6) カップ

カップは小型の容器で、口縁部と胴部につく縦位ループ状把手を 1 つ、あるいは 2 つをもつものとする。

A 類はいわゆる「キリロヴォ・カップ」と称される小型容器である (図 14:2, 3)。水差しのような注ぎ口、口縁部よりも高い縦位ループ状把手、丸底をもつものとする。器高は 10cm に満たない。

B 類は双耳状の把手をもつカップ³³である (図 14:4)。胴部がやや丸く張出し、そこから口縁部にむかってほぼ直行する。把手の高さは口縁部の器高とほぼ同等である。底部は平底かやや丸みをもつものがある。本論では「双耳状把手付カップ」とする。

7) 注口付土器

筒状の注口部を口縁部に 1 つ取り付けられたものとする。断面形態から、2 類に分けることができる。

³³ アレクサンドロフはこのタイプのカップを、セルビア東部を中心に分布するブバニ・フム III (Bubanj Hum) タイプと称し、その類例にデャドヴォ遺跡の事例をとりあげている (Alexandrov 1998, 224, fig.4)。さらに同様の形態的特徴をもつカップをヴェツィナ・マラ (Vecina Mala) タイプと称し、時期と地域の点でブバニ・フム III タイプとは異なるという所見を示している (Alexandrov 1998, 224, fig.6:5)。本論文では両タイプのカップ間で形態的に有意な違いを見いだすことができないため、「双耳状把手付カップ」に統一する。

A 類はやや扁平な断面形態をもつ浅鉢状のものである。本論では「扁平型注口付土器」とする(図 14:5)。

B 類は A 類よりも器高が大きく、胴部が丸みのある断面形態をもつ。本論では「球型注口付土器」とする(図 14:6)。

8) 漏斗状土器

断面は上端の口径が大きく、下端の口径が小さい逆円錐形を呈し、底部をもたない(図 14:7)。本論文では「漏斗状土器」とし、器としての用途を持たない可能性もあるが土器として扱うこととする。

3. 4. 2. 装飾分類

デアドヴォ遺跡では土器の装飾として孔列文、凸帯文、刺突文、刻目文、貼付文、刻線文、縄目文、押引文が認められる。デアドヴォ遺跡では、これまでのところおよそ 3600 点の有文土器片が確認されている。多くの装飾は単独ではなく、複数の要素から構成されている。

1) 孔列文

孔列文とは直径 5~8mm ほどの円形の孔を最大 1cm 程度の間隔をあけて、口縁部に列状に施したものである。デアドヴォ遺跡でもっとも多く見られる装飾で、おもに深鉢と浅鉢の口縁部に施文される(図 11:3; 12:1)。また把手への施文も認められる(図 13:2)。有文土器のうち単独での施文は約 1/4 を、刻目文や凸帯文と組みあわせる事例は約 1/6 を占める(図 11:1, 3, 9)。

2) 刺突文

円形や三角形、方形の押捺によって施される装飾である。刺突痕の大きさは 1mm 前後の細かいものと 3~5mm 程度のものに分けられ、前者を「微細刺突文」(図 11:4; 図 13:13; 図 14:1)、後者をそのまま「刺突文」(図 12:11)とする。また、貝殻の背を利用した「貝殻押圧文」もある(図 16:2)。施文部位は口縁部から胴部にかけて認められる。

3) 刻目文

先端がやや広く、平たいへら状の施文具、あるいは爪による刻み装飾である(図 11:1~3, 8)。口唇部から胴部に認められる。数量的には孔列文に続いて多い施文法で、とくに深鉢、浅鉢、水差しを装飾する。また凸帯に伴う事例も数多く認められる。

4) 凸帯文

凸帯文は幅 1~2cm 前後の粘土紐を器面に貼り付けた装飾である。凸帯には刻目を施すものと施さないものがある。デアドヴォ遺跡では前者が多い(図 11:1, 2, 5, 6, 8, 9; 図 13:10)。施文部位

は口縁部から胴部にかけて認められ、基本的には深鉢と壺に施文される。加えて、把手に施されることもある（図 14:11）。

5) 貼付文

貼付文には3種類ある。1つは幅約1cm、長さ約3~5cm程度の短い粘土紐を器面に貼り付ける装飾である。これは「棒状貼付文」であり、刻目を伴うことがある（図 12:10）。いま1つは円形や馬蹄形などの幾何学形を呈する粘土塊を器面に貼り付けて施文する装飾である（図 16:3）（禿 2005, fig. 9:4; fig. 10:3; 関根、禿 1998, fig. 6:17; 29:10）。3つ目はボタン状、円錐状、舌状、角状の突起を口唇部や把手端部に貼り付ける装飾がある（図 12:14; 図 14:2, 11）。

6) 刻線文

刻線文は先の細い施文具をもちいて線状に刻んだ装飾である（図 12:9, 12; 図 13:10; 図 14:10, 12）。おもに壺、水差し、小型鉢、内弯浅鉢などの口縁部から胴部や体部に施文される。文様には斜格子充填の三角文様や鋸歯文様のほかに、円形刺突文と組みあわせることもある。

7) 縄目文

縄目文は撚りをかけた紐状原体の側面圧痕による装飾である（図 15; 図 122）。口縁部から胴部および体部に施文される。横線文といった単純なものから斜格子充填幾何学文といった複雑な文様がある。

8) 押引文

押引文は先端の形状が平坦な道具で刺突を施したあとに、施文具を器面から完全に引き抜かず、そのまま横に移動させて装飾を施すものである（図 14:9）。口縁部に施文されることが多い。

3. 5. 土器と層位

3. 5. 1. 深鉢

S字深鉢（深鉢 A1 類）はデャドヴォ遺跡を代表する器形の1つで、前期青銅器時代層を通じて認められる。口唇部に施される刻目文、口縁部に施される孔列文と刻目凸帯文が特徴的である（図 11:1~3）。刻目文と孔列文（図 17:1）あるいは刻目文と刻目凸帯文（図 17:2）の組み合わせは最下層より現れる。孔列文はIV層以降に減少するのに対し、凸帯文は増加する（Лещиков 1997）。孔列文と刻目凸帯文の組み合わせはXIII~III層にかけて認められる（図 17:3）。

S字深鉢の胴部には前期青銅器時代層を通じて刺突文が比較的多く見受けられる。微細刺突列による懸垂文（図 11:4）はXVI層（図 17:4）、貝殻押圧文はXIV層（図 16:2; 図 17:5）、孔列文と円形浮文の組み合わせ（図 16:1）はX~VII層（図 17:6）、口縁部の馬蹄形貼付文（図 16:3）は

VII層(図17:7)に認められる。微細刺突列懸垂文に関しては、器形は不明だが、XVI～XIV層にかけて集中して出土している。

縄目文はV～IV層で口縁部外面に施文される(図15:5～7; 図17:8)。S字深鉢口縁部へのこぶ状貼付文、あるいはこぶ状貼付と凸帯文の組み合わせはIII～I/II層で発見されている(図17:9)。粗胴深鉢(深鉢A2類)はV～I/II層より出土している(図11:5; 図17:14)。縦位ループ状把手のつく事例はIV層から上層で確認されている(図14:15, 16; 図17:15)。

外屈深鉢(深鉢B類)はXVI～VII層で見られる。無文のもの(図11:7)は下層のXVI～XIV層で多く(図17:10)、口唇部刻目文と孔列文はXII層から装飾される(禿 2006, fig. 13:22)。

内閉深鉢(深鉢C類)はXI～III層を中心に出土している。そのなかで口縁部がやや弓なりに反るC1類(図11:8)はXI～V層で認められ(図17:11)、V層のものは肩部に段のつく稜をもっている。胴部張りの樽状を呈するC2類(図11:9)はVII～VI層で(図17:12)、口縁部に把手がつき、最大径部が口縁部近くにあるC3類(図11:10)はIII層で確認されている(図17:13)。

3. 5. 2. 浅鉢

内弯浅鉢(浅鉢A類)はS字深鉢と同様、デャドヴォ遺跡における基本器形の1つで、前期青銅器時代層を通じて認められる。この浅鉢には口唇部に刻目文、口縁部に孔列文が比較的多く施文されており、XVI～V層で確認されている(図12:1; 図18:1)。口縁部に1本の鋸歯状刻線文と刺突文の組み合わせがVIII～VII層(図16:4; 図18:2)、刺突充填山形刻線文がVIII層(図16:5; 図18:3)、刻線による斜格子充填逆三角文がVII～V層(図16:6; 図18:4)、口縁部の三角刺突列文がVII層(図16:7; 図18:5)にみられる。出土層位は明らかではないが、1984年の調査で口縁部に4～6本の刻線による垂線文をもつ内弯浅鉢が見つかっており、この類例がブルガリア調査隊によってIV層から認められている(図14:10; 図18:6)。

縄目文(図18:7)は口縁部外面に施文される多条鋸歯文、斜線文(図15:3, 4)、懸垂文がVII～IV層で、押引文がIV～I/II層から出土している(図14:9; 図18:8)。このほかに1～3本の棒状貼付文が口縁部に施文される内弯浅鉢が前期青銅器時代層を通じて認められる。

内弯浅鉢につく把手は縦位ループ状把手、横位ループ状把手、舌状把手が代表的である。縦位ループ状把手はXII～VII層とIV～III層で認められる。下層の把手は小形であるのに対し(図12:4)、上層の把手は大形である(図12:8; 図14:8; 図18:9)(Лещаков 1997, обр. 19:а, б; 20:г; 22:в; 24:м)。舌状把手はXV～V層(図12:3; 図18:10)、横位ループ状把手(図12:5; 図18:11)はXVI～V層より出土している。

続いてトンネル状把手と呼ばれる、筒状を呈した把手が浅鉢口縁部付近に横位に貼り付けられている事例と、これを模した、穴のあいていない擬トンネル状把手も数点認められる。トンネル状把手(図 12:6)は XV~XIII 層に(図 18:12)、擬トンネル状把手(図 12:7)は XII~IV 層(図 18:13)で散発的に出土している。

内屈浅鉢(B類)は内弯浅鉢と同様、下層から上層で少量認められる。装飾が施されることはほとんどないが、多条鋸歯状刻線文(白色象嵌)は VII~VI 層で見られる(図 12:9; 図 18:14)。

小型鉢(C類)は XVI 層から認められるが、数量的には少ない。多くの小型鉢には丁寧な器面調整と装飾が施され、とくに刻線文、刺突文³⁴、縄目文が特徴的である(図 12:11, 12; 図 15:1, 2)。刻線文に関しては、幾何学文様(幾何学刻線文)と、円形刺突文が充填された幾何学文(刺突充填幾何学刻線文)が特徴的である。幾何学刻線文は XVI~VI 層にあり(図 18:15)、とくに IX~VI 層に多く見受けられる。文様構成としては刻線による斜格子文を充填した三角文や帯状文がある。刺突充填幾何学刻線文は円形刺突文を充填した帯状文、三角文、台形文から成り、XIII~VI 層より出土している(図 18:16)。縄目文に関しては、刻線文と同じような斜格子充填幾何学文が内外面全体に施文されている点が特徴的であり、XIII~XII 層、VII 層、V 層から出土している(図 18:17)。

盤状浅鉢(D類)と舟形土器(E類)の出土数はともに少ない。盤状浅鉢は VIII~V 層(図 12:13; 図 18:18)、舟形土器は XI~VII 層(図 12:14; 図 18:19)より出土している。

3. 5. 3. 水差し

水差しは A 類と B 類ともに前期青銅器時代を通じて出土している。水差しの断面形態は全体的に丸みを帯びたものが多い。そのなかで V 層から上層で肩部に段のある水差しが出土している点は注目に値する(図 13:4~6; 図 19:1)。装飾は深鉢や浅鉢にくらべて少ない。特徴的なものとして、IV 層から胴部に多条の山形文と鋸歯状文の刻線装飾をもつ水差しがブルガリア調査隊によって発見されている(図 14:12; 図 19:2)。

水差しを特徴付ける重要な要素の 1 つは把手である。把手には孔列文、刻目凸帯文、刺突文、刻線文、貼付文が施される(図 13:2, 3; 図 14:11, 12)。把手の軸に沿って施される 1 条の孔列文は XVI~VI 層までである(図 19:3)。両側縁刻目文は XIII~XI 層で(図 19:4)、斜格子充填刻線文は

³⁴ いわゆる、ミハリッチ・タイプである。ブルガリア前期青銅器時代第 2 段階を代表する資料として知られている(Лещаков 1997)。このタイプを命名したのはレシュタコフであると思われる(Лещаков 1994; Кънчева-Русева & Лещаков 2008)が、定義の内容は必ずしも明確ではない。

VII層で認められる(図19:5)。さらに背面に刻目凸帯文の施される把手はX~III層(図14:11; 図19:6)、頂部にボタン状突起をもつ把手はVII~II層で確認されている(図13:3; 図14:12; 図19:7)。

3. 5. 4. 壺

壺には刻線文と刺突文が施される(図13:9, 10)。斜格子充填帯状文と斜格子充填逆三角文はXII層に、斜格子充填帯状文はVIII~V層を中心に(図19:8)、肩部に2条の刺突列と刻線による刺突充填三角文の配された文様はVII~V層で確認されている(図19:9)。また肩部に段をもつ壺が氷差しと同様にV層で認められている(図13:8, 11; 図19:10)。2つの縦位ループ状把手をもつアンフォラ様の壺がIV層とI/II層で確認されている(図14:13, 14; 図19:11)。

3. 5. 5. アスコス

中央住居群地区での出土例はこれまでのところ数点の破片資料に限られている。これらの出土層はXVI層から得られている。アスコスの完形品は試掘調査で前期青銅器時代層下層から出土している(図14:1; 図19:12)。アスコスの装飾としては、微細刺突列による懸垂文が唯一確認されている(図13:12)。なお、同様の装飾が施された深鉢はXVI層で認められている(図17:4)。

3. 5. 6. カップ

キリロヴォ・カップの把手は1985年の調査で1点だけ確認されている(図16:8)。出土層位は明らかではないが、調査年を考慮すると少なくともIV層より上層であると推測される(東海大学トラキア発掘調査団1986, 20ff.)。この種のカップはブルガリア調査隊によって数点発見されており、いずれもIV層以降の資料である(図14:2, 3; 図19:13)。

双耳状把手付カップはブルガリア調査隊によって発見されている(図14:4)。出土層位はI/II層でのみ確認されている(図19:14)。この種のカップには装飾は施されていない。

3. 5. 7. 注口付土器

注口付土器の注口部が1985年の調査で1点のみ確認されている(図16:9)。上記したキリロヴォ・カップと同様に、少なくともIV層より上層に属することが推測される(図14:5, 6; 図19:15)。ブルガリア調査隊資料にも注口付土器が数点認められ、すべてIV層より上層から出土している(Лешаков 1997, обр. 16:и, л; 17:б; 18: б; 23:а)。そのなかでも扁平型はIV層(図14:5)、球型はII層(図14:6)に認められる。

3. 5. 8. 漏斗状土器

出土事例はわずかであるが、I/II 層から 1 点確認されている (図 14:7; 図 19:16)。漏斗状土器には装飾は施されていない。

3. 6. 土器による時期区分

前節で土器の器形と装飾を層位毎にみたところ、その消長関係をもとに前期青銅器時代層を 5 つの段階に区分することができる。各段階と層位の関係は、第 1 段階が XVI~XIV 層、第 2 段階が XIII~VIII 層、第 3 段階が VII~VI 層、第 4 段階が V 層、そして第 5 段階が IV~I/II 層という具合である。以下で段階ごとに土器の詳細を示す。なお、図 17~19 中の破線はこの区分を示す。

・第 1 段階 (XVI~XIV 層)

この段階から刻目文と孔列文あるいは刻目文と刻目凸帯文のある S 字深鉢 (図 17:1, 2)、刻目文と孔列文のある内弯浅鉢 (図 18:1) をはじめ、外屈深鉢 (図 17:10)、横位ループ状把手、舌状把手、トンネル状把手のつく内弯浅鉢 (図 18:10~12)、孔列文把手 (図 19:3)、幾何学刻線文の小型鉢 (図 18:15) が認められる。トンネル状把手をのぞくすべての要素が第 3 段階から第 4 段階まで続けて見られる。さらに第 1 段階のみに特徴的な資料は、微細刺突列による懸垂文とその文様の施された小型深鉢 (図 17:4) とアスコス (図 19:12) である。縄目文はこの段階では認められない。

・第 2 段階 (XIII~VIII 層)

装飾要素が増加し始める段階で、とりわけ縄目文小型鉢 (図 18:17) と刺突充填幾何学刻線文の小型鉢 (図 18:16) によって特徴付けられる。S 字深鉢には孔列文と刻目凸帯文 (図 17:3) が組みあわせて施文されるようになる。このほかには孔列文と円形浮文の施される S 字深鉢 (図 17:6)、内閉深鉢の C1 類 (図 17:11)、鋸歯状刻線に円形刺突文の施される内弯浅鉢 (図 18:2)、刺突充填山形刻線文 (図 18:3) 小型の縦位ループ状把手 (図 18:9)、擬トンネル状把手 (図 18:13)、盤状浅鉢 (図 18:18)、舟形土器 (図 18:19)、両側縁刻目文把手 (図 19:4)、凸帯文把手 (図 19:6)、斜格子充填带状刻線文の壺 (図 19:8) が出現する。微細刺突列懸垂文は第 2 段階には見られなくなる。

・第 3 段階 (VII~VI 層)

文様の種類がもっとも多く認められる段階である。とくに内弯浅鉢、内屈浅鉢、壺、把手に刻線や刺突による三角文、鋸歯状文、斜格子充填刻線文などの幾何学文がよく見受けられる (図 18:4, 14; 図 19:5, 8, 9)。またこの段階の特徴として、縄目文のほどこされた内弯浅鉢 (図 18:7) と頂部

に突起がつく把手（図 19:7）がある。深鉢に関しては孔列文と刻目凸帯文のほかに、内閉深鉢の C2 類と馬蹄形貼付文の S 字深鉢（図 17:7, 12）が特徴的である。

・第 4 段階（V 層）

この段階には装飾が衰退しはじめ、粗胴深鉢や有稜の土器（図 11:5, 6; 図 13:4, 8）に器面調整や断面形態に変化が窺えるようになる。とくに粗胴深鉢（図 17:14）と、肩部に段をもつ内閉深鉢の C1 類、壺、水差しの新出要素によって特徴づけられる（図 17:11; 図 19:1, 10）。単純な文様が施文された縄目文をもつ S 字深鉢（図 17:8）もこの段階の特徴である。一方、幾何学刻線文の小型鉢（図 18:15）、外屈深鉢（図 17:10）と舟形土器（図 18:19）はこの段階には衰退あるいは消失する。

・第 5 段階（IV～I/II 層）

これまでの段階でみられた土器の様相とは一線を画す。装飾は全体的に衰退傾向を示す。とくにデャドヴォ遺跡で典型的な S 字深鉢と内弯浅鉢の刻目文と孔列文は著しく減少する（図 17:1; 図 18:1）。縄目文土器は全体的に減少し、小型鉢（図 18:17）はこの段階には認められなくなる。また、斜格子充填刻線文と円形刺突充填幾何学文のある小型鉢、孔列文把手、盤状浅鉢もこの段階に見られなくなる（図 18:16, 18; 図 19:3）。

新出要素には、キリロヴォ・カップ（図 19:13）、双耳状把手付きカップ（図 19:14）、注口付土器（図 19:15）、アンフォラ様の小型壺（図 19:11）、内閉深鉢の C3 類（図 17:13）、漏斗状土器（図 19:16）がある。把手に関しては、内弯浅鉢の舌状把手（図 18:10）と横位ループ状把手（図 18:11）が消失し、大形の縦位ループ状把手が現れる（図 18:9）。深鉢、とくに粗胴深鉢にもそれまで認められなかった縦位ループ状把手がつくようになる。また、S 字深鉢、粗胴深鉢には、こぶ状貼付文と横位または縦位の刻目凸帯文の組み合わせ（図 17:9）が目立つようになる。内弯浅鉢には前段階まで見られなかった多条垂線文（図 18:6）と押引文（図 18:8）、水差しには多条鋸歯文（図 19:2）が出現する。

3. 7. 放射性炭素年代の検討

デャドヴォ遺跡では 2010 年から 2012 年の 3 ケ年調査計画の一環として、中央住居群地区で採取された層位情報を伴う炭化物試料を対象に AMS 法による年代測定が実施された。年代測定の方法と結果に関してはすでに公表されている（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 2014）。前期青銅器時代層の測定試料は 49 点を数える（表 2）。試料の種類は炭化材と炭化種実である。

測定試料は XVI～IV 層で採取したが、そのほとんどは前期青銅器時代層下部のものである。試

料の内訳は XVI～XIV 層が 21 点、XIII～VIII 層が 19 点、VII～VI 層が 7 点、V 層が 1 点、IV 層が 1 点となっている。

試料の測定値と層位を考慮した結果、前期青銅器時代の年代として上限が較正年代で前 3200/3100 年、下限が前 2450 年に求められ、このあいだの年代幅は 650～750 年となる。上限の値はデヤドヴォ遺跡における前期青銅器時代層の開始時期に相当する。この値は上トラキア平野に分布する他のテル集落で得られた前期青銅器時代層最下部の年代値とおおよそ併行していることから、平野における前期青銅器時代の開始時期を示している可能性が高い (Görsdorf & Bojazhiev 1997; Schwenzler 2005; Российская академия наук институт археологии 2007)。

試料を採取した住居址とその層位的な位置関係を下層から順に示すと、次のようになる。括弧内の数値は床面の平均海拔標高である。なお、99 年検出住居床 B から下層の「漸移層」までは 30cm ほどの堆積が、そして 2 号住から前期青銅器時代層の上端までは 70cm ほどの堆積が認められる。

99 年検出住居床 B (XV 層、137.67m) →17 号住居・19 号住居 (XI 層、137.95m) →4 号住居 (VIII 層、138.20m) →90 年検出住居 A (VI 層、138.43m) →2 号住居 (III 層、138.85m)

各層の較正年代は XVI～VI 層が前 3200 年～前 2880 年、V 層が前 2870～2590 年、IV 層が前 2570～2460 年の範囲におさまっている。9 号住居 (VII 層) と 7 号住居 (V 層) の測定値は得られていないが、前 2900～2500 年のあいだにおさまると推測される。XVI～VIII 層と VII～V 層の建築層の数を比べると、前者のほうが建築層の数が圧倒的に多いものの、堆積厚をみると、いずれも 110～120cm とほぼ同じである。これは XVI～VIII 層で比較的頻繁に住居の改修や改築が行われていたため、数多くの建築層が生じる結果となったと考えられる。それに対し、建築層の数が下層より少ない 9 号住居から 2 号住居では、検出された住居址の数も上層に比べ非常に少ない。

前節で区分した前期青銅器時代の建築層に AMS 年代を対比させると、以下のような区分が可能となる。

第 1 段階 (XVI 層～XIV 層)・第 2 段階 (XIII 層～VIII 層)：前 3200/3100 年～前 2900 年
第 3 段階 (VII 層～VI 層)・第 4 段階 (V 層)：前 2900 年～前 2500 前
第 5 段階 (IV 層～I/II 層)：前 2500 年～。

第 1 段階と第 2 段階の境界となる年代値を、測定試料から明らかにすることはできなかった。アスコス、微細刺突による懸垂文、縄目文小型鉢、盤状浅鉢、舟形土器が両段階を区分する重要な要素となる。

第 3 段階に関しては、VII 層と VI 層の測定値が前 3090～前 2880 年の範囲を示しており、その

下限値が第3段階の始まりに相当すると考えられる。その理由として、まず下層の第1段階と第2段階の測定値が前3200/3100年～前2900年におさまり、そのうちVIII層(PLD-23436)の炭化種実を試料とする測定値が80%以上の確率で前3030～2890年の範囲を示している。また、同じく炭化種実を試料としたV層(PLD-23435)の測定値は前2870～2590年におさまっている(表2)。

第4段階と第5段階に関しては測定試料が1点ずつしかないため、第1段階から第3段階に比べると非常に少ない点に留意が必要であるものの、しいて第4段階と第5段階の境界となる測定値を想定するならば、前2500年あたりが有力となる。その理由に、第4段階の測定試料は第V面で採取したものであるから、この試料がV面の年代を示すならば、その測定値を第4段階の終わりとみなすことはできない。また、第5段階の試料は古い値で前2570年を示しているが、試料そのものが炭化材であり、古木効果で実際の値より古くなっている可能性がある。

前期青銅器時代の終末は前2000年ごろと考えられているが(Panayotov 1995; Катинчаров 1975)、ブルガリアでこの年代を示す遺跡はまだほとんど知られていないのが現状である。デヤドヴォ遺跡も例外ではなく、第5段階の下限については手元の資料から明らかにすることはできない。IV～I/II層までおよそ1mの堆積が残されており、下層における堆積厚と一連の絶対年代の期間から類推すると、第5段階は少なくとも300年以上は継続していたと推測される。このことから第5段階はさらにいくつかの段階に細分される可能性が残されているといえる。

3. 8. まとめ

本章では建築層と土器要素の消長関係をもとに、デヤドヴォ遺跡の前期青銅器時代層を5段階に区分した。次章でデヤドヴォ資料とエゼロ資料を比較し時期区分についてあらためて検討するが、ひとまず図20に各段階の特徴的な土器とその変遷を示した。デヤドヴォ遺跡の位置する上トラキア平野東部は平野の北側にのびるスタラ・プラニナが半島東端で途切れるため、北方の黒海ステップ地帯からの影響を受けやすい。そのことをよく示す資料が墳丘墓や縄目文土器である。第III部で詳述するように、とりわけ上トラキア平野東部における前期青銅器時代の始まりと展開に関しては、この地域との関係性が重視される。このようにステップ地帯に由来する縄目文の波及、定着、変容、衰退という変遷は、前期青銅器時代における土器文化にとって重要な要素の1つと考えられるため、以下では縄目文土器の変遷をデヤドヴォ遺跡の時期区分として較正年代とともに5つの段階にまとめた。下線部を付した較正年代はまだ検証が済んでいない目安としての値である。

- ・第1段階（XVI層～XIV層：前3200/3100年～前3000年）

縄目文土器の出現以前。

- ・第2段階（XIII層～VIII層：前3000年～前2900年）

縄目文の波及と縄目文小型鉢の出現。

- ・第3段階（VII層～VI層：前2900年～前2700年）

縄目文浅鉢の出現。

- ・第4段階（V層：前2700年～前2500年）

縄目文深鉢の出現。

- ・第5段階（IV層～I/II層：前2500年～）

縄目文小型鉢の消失と縄目文の衰退。

第5段階は注口付土器の扁平型から球形への移行、双耳状把手付カップと漏斗状土器の出現によってさらに時期的細分が可能である。ただし、デャドヴォ遺跡では上層資料が下層資料にくらべ少ないため、次章でエゼロ遺跡資料との比較をつうじて両遺跡の年代的位置付けについて検討する。

第4章 デャドヴォとエゼロにおける前期青銅器時代土器の年代的考察

4. 1. はじめに

前章で前期青銅器時代デャドヴォ遺跡の土器と絶対年代を層位と対比させながら、文化層を5つの段階に区分した。前期青銅器時代の編年研究はカラノヴォ遺跡の調査を皮切りに、エゼロ遺跡調査によっておおきく進展した。およそ半世紀前にテルの半分ほどが層位的に調査され、報告書には土器の統計分析をもとにした編年の所見がおおやけにされた（Георгиев и др. 1979）。これによって、今日にいたるまでエゼロ遺跡がブルガリア前期青銅器時代の年代学的ものさしを擁する標準遺跡としてみなされてきたのである。

こうした状況は裏を返せばこれまでの編年研究がエゼロ遺跡資料につよく依存してきたことを物語っている。しかし、各自が関心のある資料をエゼロ遺跡の資料と比較し、部分的に参照することはあっても、エゼロ遺跡の調査成果そのものを検証する取り組みは十分に行われてこなかった。その主な原因はエゼロ遺跡に匹敵する良好な資料がこれまで得られてこなかったことにあり、そのためエゼロ遺跡調査成果にかかわる問題点や課題が見過ごされてきたものと推測される³⁵。

こうした課題に取り組むために、本章ではまずエゼロ遺跡の調査報告書に認められる問題の所在とその後の研究動向を整理する。そして第3章で提示したデャドヴォ遺跡の分類案にそってエゼロ遺跡の土器資料の特徴を層位ごとに検討し、デャドヴォ遺跡資料と相互に比較する。そのうえで上トラキア平野東部における前期青銅器時代編年体系の基礎資料を提示する。

4. 2. エゼロ遺跡の報告書と時期区分に関する問題の所在

4. 2. 1. エゼロ遺跡とその調査

エゼロ遺跡はデャドヴォ遺跡から北へ約7km、ノヴァ・ザゴラ市内から南東へ約3kmのところに位置する。テルの規模は200×145m、高さ10mを測り、デャドヴォ遺跡とほぼ同規模である（図

³⁵ 残念なことに、2014年春に筆者がソフィアを訪れた際に、ブルガリア-ソ連隊によって調査されたエゼロ遺跡資料が散逸したという知らせを聞いた。エゼロ資料はブルガリア考古学研究所の収蔵庫で長年管理されていたが、近年、収蔵庫が放火による被害に見舞われ、そのとき収蔵資料と出土状況を記したラベルの多くが失われてしまったらしい。研究員らの尽力により、被災した資料と情報の復元作業が進められたものの、エゼロ遺跡に関しては、層位情報が復元された資料数は報告書に記載された1万点をはるかに下回っている。収蔵庫資料の現状は大変厳しいものであるが、この件によってデャドヴォ遺跡資料の重要性があらためて問われることになるものと思われる。

21)。報告書によると、文化層の厚さは最大で 13m におよぶ。最初の発掘調査は 1952～58 年に V.ミコフと N.コイチェフによって行われた。テル中央部で地表面から深さ 1m から 3.1m まで掘り下げられたものの (Георгиев и др. 1979, 7)、この調査の成果は詳細が公表されていない。

1961～71 年にはブルガリアアソ連隊がテルの中央部 (図 22:①、調査面積 2800 m²)、南西部 (同:②、120 m²)、北東部 (同:③、450 m²) に 3 つの調査区を設けて発掘を行った。前期青銅器時代層は最大で厚さ 3～4m に達すると推測されている。中央区と南西区の調査はミコフの調査区を継続して掘り下げる形で行われたため、はじめから文化層が 1m ほど取り除かれた状態であった (Георгиев и др. 1979, 14)。ところがこの 1m の堆積は前期青銅器時代資料の包含層であり、13 層に分けられた中央区の建築層のうち、上層の 1 層と 2 層の一部がこの堆積層に割り振られた。中央区の資料は編年研究の基礎資料としての役割を担っているものの、ミコフが調査した資料は分析対象に含まれなかった。結果として、報告書に示された統計分析は 13～3 層の資料をもとに行われることになったのである。つまり、エゼロ遺跡ではブルガリアアソ連隊によって上層資料を一部欠いた状態で調査が行われ、その成果が刊行されているのである。

4. 2. 2. エゼロ遺跡調査報告書の検討

エゼロ遺跡の前期青銅器時代層の時期区分と編年研究は、60 年代の調査を担当した N.メルペルトと G.ゲオルギエフらが中心となって進められた。調査当初より前期青銅器時代層は 3 段階に区分され、調査の進展にともなって修正が加えられてきた³⁶。最終案は 1979 年に出版されたエゼロ遺跡調査報告書に掲載されているが、そこには性格の異なる 2 つの区分案が提示されている。報告書ではまず前期青銅器時代層の区分案として、1 万点を数える土器の器形と装飾をもとに、13～9 層を A 段階、8～7 層を AB 段階、6～1 層を B 段階に分けてから、13～12 層を A1 段階、11～9 層を A2 段階、8～7 層を AB 段階、6～4 層を B1 段階、3～1 層を B2 段階に細分した。その一方で、中央ヨーロッパとアナトリア・エーゲ海地域との関係をもとに、13～9 層が第 1 段階、8～5 層が第 2 段階、4～1 層が第 3 段階にまとめられている (Георгиев и др. 1979, 498)。

本来ならばはじめに、エゼロ遺跡の資料をもとに近隣遺跡との比較をつうじて地域編年の確立を試みるのが定石であった。エゼロ遺跡の場合、報告書出版当時、良好な比較資料が上トラキア平野に見当たらなかったため、遠方の資料を参考にするほかなかったという事情は考慮されてし

³⁶ まず第 1 案では、前期青銅器時代層の 12～7 層は第 1 段階に、6～4 層は第 2 段階に、4～1 層は第 3 段階に配された (Georgiev 1967, 123ff)。続いて、1969 年にニトラで開催された国際シンポジウムでは、第 1 段階が 13～8 層、第 2 段階が 7～5 層、第 3 段階が 4～1 層に分けられた (Мерперт & Георгиев 1973, 233)。

かるべきである。しかし、結果的には地域編年と広域編年の関係が検討されるまえに、広域編年の枠組がブルガリアを代表する時期区分案として受け入れられることとなった。

報告書にはさらにいくつかの問題点がある。その1つに時期区分の認定基準がはっきりしていない点が挙げられる。具体的には第2段階と第3段階の帰属層位が問題となっている (Георгиев и др. 1979, 367, 498)。報告書第8章「時期区分と編年」を執筆したメルペルトは第2段階を8~5層、第3段階を4~1層としたのに対し、第4章「土器」のまとめの部分を執筆したゲオルギエフは前者を8~4層、後者を3~2層としている。齟齬の理由は報告書で明らかにされていない。一方ではエゼロ遺跡の時期区分は中央区から出土した土器の統計分析結果をもとに行われながら、もう一方では統計分析の対象に含まれていない資料として、メルペルトは北東区から出土した蓋付き小型壺を (図 24:10) (Георгиев и др. 1979, 508)、そしてゲオルギエフはアスコスや盤状浅鉢などを重視したと思われる記載が見受けられる (Георгиев и др. 1979, 362ff.)。また、報告書には統計分析の結果から、A1 と A2 段階、B1 と B2 段階の細別は困難であるとも記されている (Георгиев и др. 1979, 299, 507)。このように報告書では時期区分の認定基準として統計分析と特徴的な資料のどちらを優先しているのか、分かりづらくなっている。

次に指摘する問題点は統計分析の方法に関わることである。報告書ではエゼロ遺跡中央区の各層で500~1000点ほどの資料が分析の対象とされている (Георгиев и др. 1979, 227)。しかしエゼロ遺跡の調査面積と堆積層の厚さを考慮すると、この分析数はあきらかに少ない。これは土器を全点分析したのではなく、選択した資料を対象としていたためと推測される。したがって、報告書の分析結果は調査区の土器全体ではなく、意図して抽出された資料の分析結果を反映したものと理解できる。さらには、すでに一部言及したように、多条垂線刻線文や微細刺突列懸垂文のように、報告書に写真図版として掲載されているものの統計分析の対象に含まれていないものがある。また、エゼロ遺跡ではデャドヴォ遺跡で着目した粗胴深鉢や有稜の土器といった製作技術に関わる属性は分析上まったく考慮されていない。

このようにエゼロ遺跡の調査報告書には、これまでほとんど指摘されることのなかった問題点があることは明らかである³⁷。ブルガリア前期青銅器時代の編年はエゼロ遺跡資料をもとに組み立てられた経緯もあり、その後の編年研究に与えた影響はけっして看過できるものではない。次項では報告書出版後に提示された主要な研究成果について整理する。

³⁷ やや細かい点ではあるが、表 152 と表 156 のように土器の統計分析では同じ文様を扱った表の数値が統一されていない箇所が散見される。

4. 2. 3. エゼロ遺跡調査後の編年的所見

1) 前期青銅器時代層の2段階区分論

エゼロ遺跡資料による前期青銅器時代層の時期区分は、発掘調査開始から今日にいたるまでおもに4名の研究者により検討されてきた。そのうちの1人であるカティンチャロフはエゼロ遺跡調査に従事していたメンバーであったが、前期青銅器時代層の3段階区分ではなく、2段階区分案を採用した（Катинчаров 1974）。その区分案によると、エゼロ遺跡の第1段階は前期青銅器時代前半に、第2段階は後半に、そして第3段階は中期青銅器時代に比定されている。

こうした区分案を提示するきっかけとなった遺跡の1つは、エゼロ調査後にカティンチャロフが調査に着手したノヴァ・ザゴラ・ツィガンスカ・モギラ遺跡であった。カティンチャロフはここで青銅器時代層上層の土器がそれまで知られていた前期青銅器時代の土器とは明らかに異なること、青銅器時代文化層上層から有孔斧と槍先の鋳型、突起付把手をもつ丸底カップ（キリロヴォ・カップ）が出土したことに着目し、一連の資料を「ノヴァ・ザゴラ文化」としてまとめた（Катинчаров 1974）。

年代に関してはとりわけ丸底カップと、上トラキア平野西部のユナツィテ遺跡で発見された、いわゆるユナツィテ・カップの存在を重視していた（図 66:24, 25）。ユナツィテ・カップとは平口縁または注ぎ口と把手をもつ尖底のカップのことで、カティンチャロフはこれと丸底カップを併行資料として取り上げたうえで、ユナツィテ・カップをトロイ遺跡などで知られるデパス・アンフィクペロン（Depas Amphikypellon、以下デパス・カップと称する）の後継型式とみなした（Катинчаров 1974, 17）。このようにして尖底カップと丸底カップは中期青銅器時代の指標となると考えたのである。さらにエゼロ遺跡後半段階の白色象嵌刻線装飾をとりあげ、エーゲ海域の中期ミノア第I段階（中期青銅器時代）と併行させるという見解も示している（Katiňarov 1978）。

カティンチャロフによる一連の時期区分論はクレタ島をはじめとするエーゲ海諸島との関係から導き出されたが、ガラボヴォ遺跡での発見によりカティンチャロフの見解のほとんどは退けられることになる。

2) ガラボヴォ遺跡の発見とエゼロ遺跡上層資料の調査

レシュタコフは当初カティンチャロフの2段階区分案を採用していたが（Лещиков 1988）、ガラボヴォ遺跡の緊急調査で転機を迎えた。このテル型集落では15層からなる青銅器時代文化層が確認され、それまでレシュタコフがカティンチャロフに倣って「ノヴァ・ザゴラ文化」と称していた資料包含層の上層（3～1a層）から、ピルグリム・フラスコ、シリア・ボトル、ロクロ製土器が発見された（図 45）（Панайотов и др. 1991）。一連の資料がキュルテペ遺跡（Külütepe）やア

リシャル・ヒュユク遺跡 (Alişar Hüyük) などに代表される中央アナトリアからの搬入品であるとみなされ、ガラボヴォ遺跡上層が中期青銅器時代に位置づけられることとなった (Leshtakov 1996)。こうして中期青銅器時代「ノヴァ・ザゴラ文化」と2段階区分論は、ゲオルギエフの3段階区分案を支持していたレシュタコフによって代替案が提示されることとなった。つまり、「ノヴァ・ザゴラ文化」はエゼロ遺跡の前期青銅器時代第3段階に配され、名称もスヴェティ・キリロヴォ段階に変更されたのである (Leshtakov 1993, 557ff.; 2002, 175)。

レシュタコフは上トラキア平野の前期青銅器時代第3段階を中心とした資料調査を精力的に行った。その一環として、ミコフらが1950年代に調査したエゼロ遺跡上層資料を再調査している。結果的に、1層の上層にB2段階に属する建築層が少なくとも2枚あり (1a層と1b層)、建築層は計15枚になると論じた (Лешаков 1997, 12—26)。レシュタコフの調査により上トラキア平野における前期青銅器時代第3段階に関する様相は大幅に整理されることとなったが、当該段階に関する研究のスタート地点ともいえるべき1997年の成果そのものは、後述するニコロヴァの成果 (Nikolova 1996; 1999; 2000a; 2000b) にくらべひろく評価されていないように思われる。

3) エゼロ遺跡資料の再検討

H. パーツィンガーは1993年に出版した大著『編年』のなかで、エゼロ遺跡前期青銅器時代層の時期区分を試みている (Parzinger 1993, 115ff.)。報告書に掲載された文様の統計データを用いて、13～11、10～6層、5～1層に区分した。この成果の主な問題点は、パーツィンガーがとりあげた文様データのなかに、報告書のデータ (Abb. 8. 31, 8. 32, 8. 34, 8. 35, 8. 42) との対応関係が明らかでない資料があったり、あるいは対応するデータが明らかでない場合でも数値に齟齬が見受けられたりしていることである。また、3層と2層では後半に典型的な文様要素が減少し (Abb. 8. 29～45)、新しい文様要素は認められないと論じているが、報告書の表をみると、上層資料は一部欠落しているにもかかわらず、19もの新出要素を数えることができる。さらに、パーツィンガーは結論として自身が提示した区分案は偶然の産物であるかもしれないとも述べている (Parzinger 1993, 118)。この点については、レシュタコフが指摘するとおり、パーツィンガーの時期区分案は区分のための区分という批判を免れないと言える (Leshtakov 2002a, 173)。

4) 絶対年代からのアプローチ

ニコロヴァによる研究の特色は、前期青銅器時代の時期区分に絶対年代を最大限活用した点にある (Nikolova 1996; 1999)。ニコロヴァは基本的に前期青銅器時代の3段階区分案を採用しながら、過去に測定された絶対年代の補正值を参考にして、エゼロ遺跡の前期青銅器時代層を13～11層、10～4層、3～2層の3段階に分けている (Nikolova 1994; 1999)。同時に、前期青銅器時代の

開始を較正年代でそれまでの前 3100 年前後から前 3500 年まで大幅に引き上げ (第 2 章参照)、当該時代の期間を前 2000 年までの 1500 年間とした。そして、3 つの段階を 500 年で区切ってから、さらに 100 年刻みで細分し、遺跡の文化層と指標となる土器をこまかく配置している (Nikolova 1999, tab. 1)。

ニコロヴァの説明は 1999 年の著作に代表されるように、単純明快であり、わかりやすいという利点をもっている反面、例えば前期青銅器時代第 II 段階 B1~3 フェイズのように細分に次ぐ細分を試みている。しかし、AMS 導入以前の測定精度で一律に 100 年単位のタイムスケールを設けているうえに、そこに詳細な出土コンテキスト情報をもたない遺物を組み込んで編年体系を構築しようとする手法にはやや難がある。くわえて、絶対年代はどの遺跡でも測定されているわけではない。測定されている場合でも、各遺跡の年代測定試料の種類や出土コンテキストについてはほとんど検討されていない。さらには年代値を優先するあまり、土器をはじめとする考古資料の比較分析が十分またはほとんど行われていないケースもしばしば見受けられる (Nikolova 1999)。こうした点が都合のよい年代値を自らの解釈にひきつけて採用しているようにうつり、批判を招いているものと思われる (Schwenzer 2005; Лещаков 2006)。ニコロヴァの成果は一見して受け入れられやすいものにみえるが、1 つ 1 つの資料解釈をもとにした編年学的所見には慎重を期す必要がある。

5) 小結

以上のようにエゼロ遺跡の調査成果そのものが批判的に検証されないままに、研究者はおのこの時期区分案を提示しており、その編年的考察の試みはなお十分ではないことがわかった。とくにニコロヴァの成果は前期青銅器時代を俯瞰するうえで参考になるものの、研究の基盤となる年代的考察に関してはその方法自体に問題があることを指摘することができた。それに対し、レシュタコフは同時代第 3 段階の様相を鮮明なものにしているものの、第 1 段階と第 2 段階についてはエゼロ遺跡による時期区分をそのまま踏襲しており、前期青銅器時代をつうじた編年的考察をしていない。また第 2 段階から第 3 段階にかけて認められる土器属性 (例えば粗胴深鉢) をあたかも第 3 段にのみ認められる特徴のように扱っており、レシュタコフによる土器属性の位置付けには改善点も認められた。

エゼロ遺跡報告書出版当時は、遠方の資料を探索する方法しかなかったが、今日にいたってはデャドヴォ遺跡とエゼロ遺跡を軸にして地域編年を論じるための条件が整いつつある。本章ではエゼロ遺跡の資料として、1979 年出版の調査報告書とミコフ調査資料をまとめたレシュタコフの成果 (Лещаков 1997; 1999) を採用する。そして、両遺跡資料を相互に比較して、年代学的な指

標資料を策定し、上トラキア平野東部における編年体系の基礎を構築する。なお、レシュタコフによって提示されたエゼロ遺跡上層の資料のうち（Лещаков 1997, таб. II; III）、1層より上層の Ia 層と I6 層に関する情報はレシュタコフ論文で参照する資料にすべて反映されていないため、便宜上 1 層にまとめる。4 層から 2 層に関してはそのまま採用する。

4. 3. エゼロ遺跡における前期青銅器時代土器の特徴

4. 3. 1. 深鉢

エゼロ遺跡では深鉢は 4 つのタイプに分けられており、そのうちの 3 つがデヤドヴォ遺跡の深鉢 A～C 類に対応する（Георгиев и др. 1979, таб. 144）。具体的には S 字深鉢（A1 類）はエゼロのタイプ Ia、外屈深鉢（B 類）はタイプ Ib、内閉深鉢（C 類）はタイプ I6 という具合である（図 23:13；図 24:13）。これらのタイプはいずれも 13～2 層で確認されているものの、タイプ Ib の外屈深鉢が 13～12 層、タイプ I6 の内閉深鉢が 11～7 層、タイプ Ia の S 字深鉢が 6～2 層でそれぞれ相対的に優勢となっている（図 25）。粗胴深鉢（A2 類）はほぼ完形に復元されたものが 7 層から認められ、これより上層で増加する（図 23:14, 15；図 24:14）。

深鉢のおもな装飾は口唇部の刻目文、口縁部の孔列文と刻目凸帯文であり、前期青銅器時代層をつうじて認められる（図 26）。刻目文と孔列文、刻目文と孔列文と刻目凸帯文の組み合わせとといった孔列文を伴う装飾は 13～8 層で優勢であり、上層にかけて徐々に減少していくのに対し、刻目凸帯文および刻目文と刻目凸帯文の組み合わせとといった凸帯文を伴う装飾は 7 層から上層で優勢となる（図 27）（Георгиев и др. 1979, таб. 156 тип 1～6, 7a; таб. 158 тип 8, 9, 11, 12, 15）。その他に、口縁部の馬蹄形貼付文が 13～6 層、横位および縦位に配される刻目凸帯文とこぶ状貼付の組み合わせが 12 層と 9～2 層、孔列文と円形浮文の組み合わせが 9 層で認められる（Георгиев и др. 1979, таб. 156 тип 2; таб. 160 тип 17; таб. 162 тип 31）。こぶ状貼付のつく粗胴深鉢は 1 層から出土している（Лещаков 1999）。

縄目文（図 125:13～18）は 11 層からわずかに出土しているが、おもに 6～3 層で特徴的であり、2 層から質、量ともに衰退傾向にあると考えられる（図 28）（Лещаков 1997, 15ff.）。微細刺突文が深鉢に施文される事例は知られていないが、器形不明の破片資料は 13～10 層まで認められる（Георгиев и др. 1979, обр. 145:a）³⁸。胴部に施される貝殻押圧文は 12～7 層で（Георгиев и др. 1979, таб. 185 тип 15）、口縁部と肩部に施される円形と三角形の刺突列文は下層から上層にかけて認め

³⁸ エゼロ資料の一部を実見した際に破片資料を確認した。

られる (Георгиев и др. 1979, таб. 181)。

深鉢には基本的に把手がつくことはほとんどないが、エゼロ遺跡では4つのタイプの把手が出土している (Георгиев и др. 1979, таб. 153)³⁹。そのうち舌状把手は11～7層、馬蹄形把手は13～6層、縦位ループ状把手は5～2層で見られ、7層および6層を境にして把手タイプに変化が窺える。粗胴深鉢と内閉深鉢 C3 類には2～1層で縦位ループ状把手がつく (図 24:13)。

4. 3. 2. 浅鉢

エゼロ遺跡では浅鉢は断面形態により7つのタイプに細分されている (Георгиев и др. 1979, таб. 40)。内弯浅鉢はエゼロ遺跡のタイプ Шв と Шд、内屈浅鉢はタイプ Ше と Шж、小型鉢はタイプ Ша に該当する。この3種類の浅鉢がエゼロ遺跡の前期青銅器時代層を通じて、ほぼ8割を占めている。タイプ Шб はS字状断面をもつ浅鉢 (S字浅鉢) であり、13～2層から出土している (図 23:6)。デアドヴォ遺跡ではこの種の浅鉢はいまのところ認められていない。一方、報告書では盤状浅鉢は「Цилиндричен съд」、舟形土器は「Черпак」と記され、浅鉢の範疇に含まれていない (Георгиев и др. 1979, 366)。

内弯浅鉢は全体的に無文のものが優勢であるが、有文資料の多くは13～6層から出土している (Георгиев и др. 1979, таб. 151)。特徴的な装飾は口唇部刻目文であり、それに口縁部孔列文、刻線文、縄目文、刺突文、押引文が続く (図 29)。刻目文と孔列文は13～2層で認められるが、両者の組み合わせは13～6層で確認され、上層で衰退する (Георгиев и др. 1979, таб. 156 тип 7)。

刻線文は、多条鋸歯文と斜格子充填三角文が11～6層、鋸歯文と刺突文の組み合わせが10層と5～4層、刺突充填山形文が6層から検出されている (Георгиев и др. 1979, таб. 167, тип 4, 6, 7; 178, тип 21, 24)。それに対し、上層にのみ認められる装飾に1層から出土した多条垂線刻線文がある (Лещаков 1999, П29, П30, П34)。刺突文に関しては、貝殻押圧文が13～6層、三角刺突列文が9～6層、円形刺突列文が7～2層で認められる (Георгиев и др. 1979, таб. 178, тип 19; 183, тип 18, 22)。押引文は4～2層で見られる (Георгиев и др. 1979, таб. 151)。

縄目文の施された内弯浅鉢は11層から認められるが、おもに7～2層で特徴的である (図 30; 図 125: 9～12)。そのうち多条鋸歯文は8層と6層、斜線文は6層と3層、懸垂文は5層と1層で認められる (Георгиев и др. 1979, обр. 187:д; Лещаков 1997 обр. 4:в)。凹線文が12～11層でわずかに

³⁹ このうち上層での出土が確認されている二又のこぶ状把手は、こぶ状貼付文に類するものであるため、ここでは特に言及しない。

見受けられる⁴⁰。口縁部内面に施文される器形はタイプ III6 の S 字状断面をもつ浅鉢である (Георгиев и др. 1979, таб. 166, тип 39)。

内弯浅鉢につく把手はおもにループ状把手、舌状把手、トンネル状把手、擬トンネル状把手の 4 タイプからなる (Георгиев и др. 1979, таб. 153)。ループ状把手は縦位と横位につくものにわかれ、縦位の把手はさらに小形と大形に細分される。小形の縦位把手は 13~2 層、大形の縦位把手は 12~5 層と 3 層より上層から出土している (図 24:12)。上層の大型縦位ループ状把手 (Лешаков 1999 II.65) は側面観の点で、12~5 層の把手と分けることができる。具体的には、上層の把手側面観は丸みがあるのに対し、下層のものはやや角張っている。もう一方の横位ループ状把手は、筆者が資料を実見したところ、13 層と 8 層から出土していることを確認した。舌状把手とトンネル状把手はいずれも 13~2 層で、擬トンネル状把手は 11~2 層で認められている (Георгиев и др. 1979, таб. 155; таб. 202 тип 1; таб. 203 тип 1; таб. 206 тип 1, 3)。

小型鉢は 13 層から上層にかけて出土しているが、おもに 13~9 層に多く、上層にかけて減少している (Георгиев и др. 1979, таб. 146)。小型鉢には刻線、刺突、縄目による比較的複雑な文様が施される。なかでも幾何学刻線文と刺突充填幾何学刻線文は 13 層から出現し、11~7 層でピークを迎える (図 23:7; 図 31)。縄目による斜格子充填幾何学文は 11~7 層に認められる (図 23:8; 図 32; 図 125:1~8)。

内屈浅鉢、盤状浅鉢 (図 23:11) と舟形土器 (図 23:12) の数は少ない。内屈浅鉢の多条鋸歯文はおもに 7 層から出土している (Георгиев и др. 1979, таб. 167, тип 4)。盤状浅鉢は 6~5 層から、舟形土器は 13~6 層で認められる (Георгиев и др. 1979, 366)。下層の舟形土器には内面に縄目文が施されているものがある (Георгиев и др. 1979, таб. 196 тип 49)。

4. 3. 3. 水差し

水差しは前期青銅器時代層を通じて出土している。報告書では 7 つのタイプに分類されているが (Георгиев и др. 1979, таб. 145)、小型と大型の区別や、肩部における段の有無については特に言及されていない。断面形態に関しては、下層では口縁部から胴部にかけて滑らかに推移するも

⁴⁰ ネメイコヴァ・パヴコヴァはエゼロ遺跡から出土した 2 点の凹線文土器を 13~12 層の資料として紹介している (Němejcová-Pavůvková 1982, 164, abb. 5: 1, 2)。図示された資料は外反する口縁部内面に斜線文が施されている。土器の特徴はゲオルギエフらが提示した凹線文土器とよく似ているだけではなく、その数量も同じである (Георгиев и др. 1979, таб. 166, тип 39)。両者の所見には出土層位に相違がうかがえ、ゲオルギエフらはこの土器を 12~11 層として計上している。ニコロヴァはエゼロ遺跡 11 層で凹線文土器を確認したと述べ、これを基準の 1 つとしてエゼロ遺跡 13~11 層を前期青銅器時代第 1 段階に位置づけている (Nikolova 1999, 194ff)。資料の帰属層位については報告書の内容が優先されるべきだが、上記した凹線文土器の事例に関しては若干の混乱がある点に留意する必要がある。

のが特徴的であるものの（図 23:3）、3 層から上層で肩部に段のある水差し（図 24:5）が確認できるようになる（Лещаков 1999, II.28, II.38, II. 39, II. 41, II. 43, II. 55, II. 56）。

水差しは無文のものがほとんどである。装飾は口唇部の刻目文が多く、これは下層から上層で見られる。このほかに刺突列文が 13～6 層から（Георгиев и др. 1979, таб 176; 181 тип 1～2）、多条山形刻線文が 1 層から出土している（図 24:6）（Лещаков 1999, II. 43）。縄目文は 9 層から確認されている（Георгиев и др. 1979, таб 196）。

水差しを特徴づける要素の 1 つに把手がある。いずれも口縁部から肩部につく縦位ループ状把手で、その一部には装飾が施されている。代表的なものは、孔列文（13～7 層）、刻目凸帯文（12～2 層、おもに 5～2 層）、斜格子充填刻線文（9 層）、両側縁刻目文（12～7 層）、縄目文（おもに 7～3 層）、把手頂部につく円形突起（7～2 層）である（図 24:5）（Георгиев и др. 1979, таб. 200 тип 3-5, 13; таб. 211 тип 1-5; таб. 212 тип 11; таб. 213 тип 20; таб. 214 тип 1; таб. 216 тип 1; таб. 217）。

4. 3. 4. 壺

壺は前期青銅器時代層を通じて出土する。無文のものがほとんどであるが、刻線文が胴部上半に施文されることがある。下層から中層には、斜格子充填帯状文（13～7 層）、斜格子充填帯状文・逆三角文（11～6 層）、2 条刺突列文と刺突充填三角刻線文の組み合わせ（7～6 層）がある（Георгиев и др. 1979, таб. 180 тип 16; таб. 216 тип 23, 24）。多条山形文は 4 層から認められている（Лещаков 1997 обр. 187:в）。

肩部に明瞭な段をもつ壺は 6 層から確認されている（図 23:10）（Георгиев и др. 1979, обр. 185:г）。また、片把手をもつ壺や、2 つの縦位ループ状把手をもつアンフォラ様の壺は、3 層から上層で出土している（図 24:15）（Лещаков 1999, II.27, II.42, II.64, II.66, II.71, II.72, II.74, II.76）。

4. 3. 5. アスコス

アスコスは 12 層と 9 層から出土している（図 23:1, 2）（Георгиев и др. 1979, таб. 200: тип 12）。エゼロ遺跡のアスコスには文様は施されていない。破片資料のためアスコスである確証はないが、微細刺突による懸垂文が 13～12 層で見受けられる（Георгиев и др. 1979, обр. 135:a; обр. 138:a）

4. 3. 6. カップ

エゼロ遺跡では 3 層からキリロヴォ・カップが出土している（図 23:4; 図 24:1～3）。またキリロヴォ・カップのものと推測される把手は 4 層から認められる。（Георгиев и др. 1979, таб. 200: тип

13; Лещаков 1997 обр. 5)。基本的に無文であるが、把手には突起のつくものとつかないものがある⁴¹。双耳状把手付カップに関しては精確な層位情報は得られていないが、少なくともキリロヴォ・カップと同じように3層から出土しているとされている(図 24:4) (Лещаков 1999, 73)。このカップも装飾は施されず、無文である。

4. 3. 7. 注口付土器

エゼロ遺跡では報告書に注口付土器の図や写真は示されていないが、全体的な形態が明らかなのは3層から上層のものに限られている(図 24:7, 8, 11) (Лещаков 1997)。注口付土器の多くは基本的に無文であるが、ときおり口縁部に刻線文をゆうする資料が認められる(図 24:8)。エゼロ遺跡では扁平型と球型の注口付土器が3層から2層にかけて出土したと記録されているため、記録上層位的な相違点を見出すことができない(Лещаков 1999, 68—85)。

4. 3. 8. 漏斗状土器

エゼロ遺跡では唯一の事例が1層から出土している(Лещаков 1999, 79, II.54)。口縁部に舌状の張出をもち、そこに孔が穿たれている。

4. 4. デャドヴォとエゼロの比較

4. 4. 1. 深鉢

エゼロ遺跡では外屈深鉢(図 17:10)が13~12層、内閉深鉢(図 17:11~13)⁴²が11~7層、S字深鉢が6~2層において優勢であった。デャドヴォ遺跡では外屈深鉢はXVI~VII層のうちXVI~XIV層に多く、内閉深鉢はC1類とC2類がXI~V層に集中し、内閉深鉢C3類がIII層から出土している。S字深鉢はXVI~III層で確認され、出土層位に特別な傾向は認められなかった。デャドヴォ第4・5段階に現れる粗胴深鉢(図 17:14)はエゼロ遺跡の事例に鑑みると、その初現はやや古くなる。このことから両遺跡では外屈深鉢(デャドヴォ第1段階)→内閉深鉢C1類(同第2段階)→内閉深鉢C2類と粗胴深鉢(同第3段階)→縦位ループ状把手をもつ深鉢(同第4段階)→縦位ループ状把手をもつ粗胴深鉢(図 17:15)と内閉深鉢C3類(同第5段階)が各段階を特徴

⁴¹ レシュタコフのキリロヴォ・カップの定義はかならずしも定まっていない。一方では丸底で、球形胴部に突起付把手が1つつくものとしたが(Leshtakov 1993, 558)、その一方で、平底や突起のない把手をもつものもキリロヴォ・カップの範疇で捉えられている(Лещаков 1997; 1999)。

⁴² エゼロ遺跡の報告書では内閉深鉢は細別されていないため、さしあたり図 17:11~12のエゼロ資料に関してはいずれも同じ範囲を棒線で表現する。また図 17:13の縦位ループ状把手付内閉深鉢C3類に関しては、報告書のなかでとくに言及されていないため、エゼロ資料に関しては図上で提示しないこととする。

づけているといえる。

深鉢の刻目文と孔列文(図 17:1) および刻目文と刻目凸帯文(図 17:2) の組み合わせはデアドヴォ遺跡の第 1 段階から、孔列文と刻目凸帯文(図 17:3) の組み合わせは第 2 段階から認められた。エゼロ遺跡ではいずれも 13 層から確認されているものの、13~12 層では刻目文と孔列文および刻目文と刻目凸帯文のある深鉢は、孔列文と刻目凸帯文の組み合わせに対し 2~3 倍以上多い(図 27)。こうした出土数の違いがデアドヴォ遺跡資料に反映されている可能性がある。孔列文はエゼロ遺跡 5 層から、刻目文は 3 層から非常に少なくなるのに対し、刻目凸帯文は 5 層から急増する。デアドヴォ遺跡でも IV 層あたりから同じような傾向が見受けられる。

縄目文(図 17:8) はデアドヴォ遺跡では V~IV 層、エゼロ遺跡では 6~3 層と前期青銅器時代層の上層から多く出土している。胴部の貝殻押圧文(図 17:5) はデアドヴォ遺跡 XIV 層とエゼロ遺跡 11~8 層に、孔列文と円形浮文の組み合わせ(図 17:6) は X~VII 層と 9 層、口縁部の馬蹄形貼付文(図 17:7) は VII 層と 13~6 層で見られ、いずれも両遺跡の下層と中層より出土している。

上層で特徴的な資料には、エゼロ遺跡では縦位ループ状把手をもつ S 字深鉢と内閉深鉢がありこれらは 5 層以降から認められるのに対し、粗胴深鉢は 2 層あるいは 1 層から看取される。一方のデアドヴォ遺跡では IV 層から粗胴深鉢に縦位ループ状把手がつく。深鉢口縁部に横位と縦位に配される刻目凸帯文とこぶ状貼付文の組み合わせ、およびこぶ状貼付単独の把手(図 17:9) は、デアドヴォ遺跡では上層に限られていたが、エゼロ遺跡では下層および中層からすでに認められるため、必ずしも上層特有の要素とはいえない(Cf. Лещиков 1997)。

4. 4. 2. 浅鉢

デアドヴォ遺跡の内弯浅鉢に施文される装飾の多くは第 1 段階から第 4 段階に認められ、エゼロ遺跡では 13~6 層で優勢である。両遺跡で内弯浅鉢にもっともよく認められる刻目文と孔列文の組み合わせ(図 18:1) は、深鉢と同じようにデアドヴォ遺跡 V 層、エゼロ遺跡 6 層から衰退、消失している。単線鋸歯状刻線文と刺突文の組み合わせ(図 18:2)、刺突充填山形刻線(図 18:3)、斜格子充填逆三角刻線文(図 18:4)、三角刺突列文(図 18:5) は第 3 段階と第 4 段階に多く、エゼロ遺跡でも中層に比較的集中する。

縄目文(図 18:7) はデアドヴォ遺跡 IV 層では少量であるのに対し、エゼロ遺跡では 3 層の数がもっとも多い。縄目による多条鋸歯文、斜線文、懸垂文はデアドヴォ遺跡 VII~IV 層に、エゼロ遺跡では 8~3 層と中層から上層にかけて認められる。

多条垂線刻線文 (図 18:6) と押引文 (図 18:8) はいずれも両遺跡で上層から出土している。内屈浅鉢 (B 類) については多条鋸歯状刻線文 (図 18:14) がデアドヴォ遺跡 VII~VI 層、エゼロ遺跡ではおもに 7 層で確認されている。また、S 字状断面をもつ浅鉢口縁部内面に施される凹線文は、デアドヴォ遺跡ではいまのところ認められていないものの、エゼロ遺跡 12~11 層から出土していることから下層に特徴的といえる。

内弯浅鉢の把手に関しては、舌状把手 (図 18:10) は両遺跡でおおむね下層から上層にかけて出土している。トンネル状把手 (図 18:12) と擬トンネル状把手 (図 18:13) がエゼロ遺跡では下層から上層にかけて認められるのに対し、デアドヴォ遺跡では下層から中層に集中している。これらの把手はエゼロ遺跡では一定数の出土数が認められるため、デアドヴォ遺跡での出土状況の偏りは時期的な問題ではなく、調査区の位置的關係など別の要因を想定するべきかもしれない。また両遺跡で下層から上層で認められる舌状把手も時間的な指標資料とみなすことはできない。

縦位ループ状把手 (図 18:9) は III 層の大形で丸みのあるものがエゼロ遺跡 3~1 層の把手と類似し、12~5 層の角張った把手とは特徴を異にする。横位ループ状把手 (図 18:11) はデアドヴォ遺跡 XVI~V 層から出土し、エゼロ遺跡では 13 層と 8 層で確認されていることから、前期青銅器時代下層から中層に特徴的な把手といえる。

小型鉢は、幾何学刻線文 (図 18:15) と刺突充填幾何学刻線文 (図 18:16) が両遺跡で最下層から認められ、デアドヴォ遺跡で XIII~VI 層、エゼロ遺跡で 11~7 層で数的に優勢となる。縄目による斜格子充填幾何学文 (図 18:17) もまたデアドヴォ遺跡 XIII 層以降から、エゼロ遺跡では 11~7 層で認められる。このことから、これら小型鉢の装飾はおもにデアドヴォ遺跡第 2 段階から第 3 段階に特徴的といえる。

盤状浅鉢 (図 18:18) はデアドヴォ遺跡 IX 層~V 層、エゼロ遺跡 6~5 層から、舟形土器 (図 18:19) はデアドヴォ遺跡 XI~VII 層、エゼロ遺跡 13~6 層から出土している。盤状浅鉢はおもにデアドヴォ遺跡第 3~4 段階、エゼロ遺跡では中層に特徴的である。舟形土器はいずれも下層から中層で認められることから、これまで指摘されてきたような下層の指標資料と見なすことはできない (Cf. Лещаков 1997, 36)。

4. 4. 3. 水差し

水差しは壺と同様、前期青銅器時代層を通じて出土しているが、口縁部や胴部の形態的な変化に乏しく、デアドヴォ、エゼロ両遺跡で時期区分の要素に適していない (Георгиев и др. 1979, 265)。例外的に、肩部に段のある有稜の水差し (図 19:1) はデアドヴォ遺跡第 4~5 段階の V、III 層、

エゼロ遺跡の6層から上層で確認することができる。装飾に関しては、多条山形文(図19:2)がデャドヴォ遺跡第5段階のIV層、エゼロ遺跡1層から出土しており、上層の特徴として挙げられる。

把手に関しては、両遺跡で孔列把手(図19:3)に入れ替わるように突起付き把手(図19:7)が現れる。凸帯把手(図19:6)はともに下層から見受けられるが、おもに上層の要素である。そのほかに、両側縁刻目文把手(図19:4)と斜格子充填刻線文のある把手(図19:5)は両遺跡で下層から中層にかけて出土している。

4. 4. 4. 壺

壺に関しては、斜格子充填帯状文、斜格子充填帯状文と斜格子充填逆三角文の組み合わせといった刻線文が両遺跡で下層から中層(デャドヴォ遺跡XII層/エゼロ遺跡11~6層)にかけて看取される(図19:8)。中層から上層で多く見受けられたものは、2条刺突列文と刺突充填三角刻線文の組み合わせ(同VII~VI層/7~6層)(図19:9)と、肩部に段をもつ有稜の壺(同V層/6~1層)(図19:10)である。さらに上層では、アンフォラ様の丸底小型壺(同IV、I/II層/3~1層)と把手のある壺(同IV~I/II層/1層)(図19:11)が特徴的である。

4. 4. 5. アスコス

デャドヴォ遺跡ではアスコス(図19:12)はXVI層の代表的な資料で、エゼロ遺跡では12層と9層から出土している。またデャドヴォ遺跡ではアスコス片に微細刺突懸垂文が認められ、エゼロ遺跡でも同様の文様が13~12層で確認されている(図17:4)。このことからアスコスは前期青銅器時代層下部に特徴的な資料と判断できる。

4. 4. 6. カップ

キリロヴォ・カップ(図19:13)はデャドヴォ遺跡IV層から、そしてエゼロ遺跡でも4層から上層で確認されている。双耳状把手付カップ(図19:14)は、デャドヴォ遺跡ではI/II層、エゼロ遺跡では正確な出土層位は不明であるが、少なくとも2層の上層より出土している。このことからキリロヴォ・カップと双耳状把手付カップは前期青銅器時代層上層の指標的資料とみなすことができる。

4. 4. 7. 注口付土器

注口付土器（図 19:15）はキリロヴォ・カップと同様に、デヤドヴォ遺跡の IV 層から、エゼロ遺跡の 3 層から特徴的な資料である（Leshtakov 1993, 558; Лещаков 1997, 15ff.）。これも上層の指標的な資料であるといえる。さらに、エゼロ遺跡では詳細に出土層位が記録されていないものの、デヤドヴォ遺跡では扁平型（IV 層）が球型（II 層）に先行する形で確認されている。

4. 4. 8. 漏斗状土器

これはデヤドヴォ遺跡 I/II 層、エゼロ遺跡 1 層で確認されていることから、前期青銅器時代層最上部において特徴的である（図 19:16）。

4. 5. 上トラキア平野東部における編年的指標と時期区分

デヤドヴォ遺跡とエゼロ遺跡の土器に認められる諸特徴の推移をみたところ、その内容はおよそ同じ傾向を示している。このことから両遺跡の前期青銅器時代土器群は類似した土器指標の組合せをもつと考えられる。両遺跡の土器群は、深鉢と浅鉢に水差しと壺を加えた器形の基本的な組み合わせを有し、この器形に刻目文、孔列文、刻目凸帯文を主とする装飾を特徴とする。これらの要素に比べて数は少ないが、時期区分を行ううえで重要な要素として縄目文、微細刺突文（懸垂文）、アスコス、幾何学文小型鉢、盤状浅鉢、肩部に明確な稜をもつ土器、キリロヴォ・カップ、双耳状把手付カップ、注口付土器、漏斗状土器、各種把手などが挙げられる。なかでも縄目文は黒海北岸ステップ地帯に系譜をもつ外来系土器として知られており⁴³、こうした要素を混在させながら両遺跡の土器群は構成されている。

デヤドヴォ、エゼロ両遺跡における前期青銅器時代土器は上トラキア平野を代表する資料である。両遺跡の併行関係と上トラキア平野東部の前期青銅器時代における位置付けを表 3 に示した。表では各段階を代表して縄目文土器の推移と各層の時間的關係を表した。前期青銅器時代の区分案については 3 時期区分を採用し、上トラキア平野東部の標準遺跡をもとにエゼロ I～III 期に大別して、さらに各時期を 2 つに細別して 6 つの段階を設けた。

デヤドヴォ遺跡とエゼロ遺跡における土器要素を検討した結果、その変遷は大枠でおなじ様相を示していたが、なかには、内弯浅鉢に施文される単線鋸歯状刻線文と刺突文の組み合わせ（図 18:2）や刺突充填山形刻線（図 18:3）のように、両遺跡の出土層位に親和性を欠いた土器要素も

⁴³ 縄目文土器に関しては第 8 章で詳述する予定である。

見受けられたため、そうした資料は年代的な考察から除くこととする。また前章の内容から重要な変更点もいくつか認められた。まずすでに表3で示したように、第II部第3章で設定したギャドヴォ遺跡の第5段階を2つにわけ、第6段階を設けた。さらに図20に幾つかの要素を新たに加え、一部の要素に関しては年代的な位置付けをあらためた。具体的には、エゼロ Ia 期に S 字浅鉢にみられる凹線文を、エゼロ IIb 期に縦位ループ状把手をもつ深鉢を加える。そして、円形刺突充填幾何学刻線文の小型鉢と舟形土器をエゼロ Ib 期からエゼロ Ia 期に、粗胴深鉢をエゼロ IIb 期からエゼロ IIa 期へ遡らせることとする（図33）。

①エゼロ Ia 期

前期青銅器時代第1段階前半に該当する時期である。上トラキア平野では後期銅石器時代と前期青銅器時代のあいだの「移行期」が1000年近く続いていたことが明らかとなっている（千本、禿 2014）。事実、エゼロ Ia 期の土器は後期銅石器時代の土器とは明らかに特徴を異にしていることから、上トラキア平野の銅石器時代土器に系譜をもつとは考えられない。このことからエゼロ I 期土器の成立の要因はほかに求められるわけだが、この詳細については第6章で論じる。

エゼロ Ia 期を特徴づける資料として特記すべきは、微細刺突懸垂文とその文様の施されたアスコスおよび S 字深鉢である。これらは Ia 期にのみ見られる指標的資料である。深鉢に関しては外屈深鉢が優勢である。装飾には刻目文、孔列文、刻目凸帯文が口縁部に施文され、刻目文と孔列文および刻目文と刻目凸帯文の組み合わせが多い。孔列文と刻目凸帯文の組み合わせは認められるが、数は少ない。また孔列文をもつ水差しの把手もエゼロ I 期に現れ、IIa 期まで続く。そのほかには胴部に施される貝殻押圧文もこの段階から認められる。

浅鉢は内弯浅鉢が多く、続いて小型鉢、舟形土器が少量認められる。内弯浅鉢につく把手のほとんど（縦位ループ状把手、横位ループ状把手、舌状把手、トンネル状把手）はすでにこの段階から現れている。S 字浅鉢の口縁部内面に施文される凹線文はエゼロ Ia 期から Ib 期に、内弯浅鉢の刻目文と孔列文の組み合わせはエゼロ IIb 期まで継続する。小型鉢には幾何学刻線文、円形刺突充填幾何学刻線文の装飾が施文される。

②エゼロ Ib 期

前期青銅器時代第1段階後半に該当する時期である。基本的な特徴はエゼロ Ia 期から継続している。微細刺突文そのものはこの段階までつづくが、微細刺突懸垂文は消失し、アスコスに微細刺突文は施されなくなる。Ib 期は縄目文小型鉢の出現と、幾何学刻線文および円形刺突充填幾何学刻線文の施される小型鉢の増加によって特徴づけられる。深鉢は外屈深鉢が減少するのに対し、内閉深鉢 C1 類が現れる。エゼロ Ia 期から継続して認められる S 字深鉢には、孔列文と刻目凸帯

文の組み合わせが増える。浅鉢では引き続き内弯浅鉢に刻目文と孔列文が施文される。擬トンネル状把手はこの段階からエゼロ III 期まで認められる。壺に関しては、斜格子充填帯状文および斜格子充填帯状文と逆三角文の組み合わせがこの段階に現れ、エゼロ IIb 期まで認められる。

③エゼロ IIa 期

前期青銅器時代第 2 段階前半に該当する時期である。全体的に装飾が多様化し、複雑な文様が盛行する。深鉢に関しては粗胴深鉢と内閉深鉢 C2 類が出現し、土器製作技術に一定の変化が窺える。浅鉢は刻目文や孔列文のほかに、多条鋸歯状刻線文、三角刺突列文、斜格子充填三角文がエゼロ IIa 期ないし IIb 期にかけて見られる。縄目文の小型鉢はおもにエゼロ IIa 期まで続くが、デャドヴォ遺跡では IIb 期までわずかに継続している。縄目文に関してはエゼロ IIa 期から多条鋸歯文と斜線文で装飾される内弯浅鉢が現れ、IIIa 期で衰退する。盤状浅鉢はおもにエゼロ IIa 期と IIb 期に見られる。水差しに関してはこの段階から突起付把手があらわれ、III 期まで継続する。壺に関しては、刻線による斜格子充填帯状文が減少し、2 条刺突列文と刺突充填三角刻線文の組み合わせが認められる。

④エゼロ IIb 期

前期青銅器時代第 2 段階後半に該当する時期である。この時期になると前代まで続いていた土器要素に変化の兆しが見られるようになる。深鉢は孔列文が減少しはじめる一方で、S 字深鉢と刻目凸帯文が優勢になる。新要素として深鉢の口縁部および胴部に縦位ループ状把手がつく。また、深鉢をはじめ、壺、水差しの肩部に段状の有稜部が形成されるようになることから、エゼロ IIa 期に続いて IIb 期にも土器製作技術に変化がうかがえる。水差しに関しては深鉢で見受けられたように、エゼロ IIb 期から認められていた凸帯文把手が増加する一方で、孔列文把手が認められなくなる。縄目文に関しては、IIb 期から深鉢への施文が増加し、代わって縄目文小型鉢が衰退、消失する。同様に刻線文および刺突充填刻線文の小型鉢と舟形土器もこの段階には認められない。

⑤エゼロ IIIa 期

前期青銅器時代第 3 段階前半に該当する時期である。この時期の特徴はエゼロ IIb 期までの土器内容が大きく変化している点である。新たな器形が出現して組み合わせが多様化する一方で、装飾は全体的に質素になることから 1 つの画期とみなすことができる。新器形の代表的なものにはキリロヴォ・カップ、扁平型注口付土器、アンフォラ様壺、内閉深鉢 C3 類がある (Cf. Лешаков 1997, 103f.)。

深鉢に関しては、S 字深鉢の刻目文、孔列文が前段階から引き続き衰退し、代わりに刻目凸帯文がピークを迎える。粗胴深鉢や有稜の土器もエゼロ IIIa 期に見られるが、粗胴深鉢にはこの時

期より縦位ループ状把手がつく。内弯浅鉢に関しては、縦位ループ状把手がつく大型浅鉢、多条垂線文、押引文が新たな要素として認められるようになる。壺や水差しには多条の山形文や鋸歯文が施文され、アンフォラ様の壺や把手をもった壺が出現する。縄目文土器に関してはこの時期以降、全体的に複雑な文様からより単純な文様へと代わり、装飾の質が粗悪になる (Leshtakov 1993, 558)。

⑥エゼロ IIIb 期

前期青銅器時代第3段階後半に該当する時期である。両遺跡では最上層の資料はかならずしも層位的コンテクストが良好であるわけではなく、公表資料の数も下層にくらべて少ないものの⁴⁴、基本的な特徴は IIIa 期から継続するものと思われる (Лещаков 1997, 103f.)。この段階の特徴にはキリロヴォ・カップや扁平型注口付土器のほかに、双耳状把手付カップ、漏斗状土器、球型注口付土器が出現し、縄目文土器はほとんど認められなくなる点を挙げるができる (Лещаков 1997, 12ff, 44ff.)。またエゼロ Ia 期から長期にわたりつづいていた孔列文土器もこの段階になるとほとんど見られなくなる。

4. 6. まとめ

本章ではデアドヴォ、エゼロ両遺跡の土器群にみられる型式学的特徴とその変遷を、層位的所見をもとに検討した。結果的にエゼロ遺跡の時期区分はゲオルギエフらによる A1 段階から B2 段階の5段階細分案とおおむね近いものとなったが、本章ではおおきく3つの時期に区分して、さらに6つの段階に細分した。ゲオルギエフらによる検討からもれていた上層の資料を、レシュタコフの成果 (おもに Лещаков 1997; 2002) を参考にして補い、各段階の指標資料の組合せを明らかにした。また、デアドヴォ遺跡の土器と比較したことにより、エゼロ遺跡資料だけでは明らかにされてこなかった各段階の新たな指標 (たとえば微細刺突懸垂文など) を見いだすことができただけではなく、年代的指標とされた資料の位置付けを改めることができた点 (たとえば粗胴深鉢、トンネル状把手など) は重要である。それと同時に、各段階の指標資料の多くは複数の段階で存在していることが分かったため、年代的考察の際には単独の指標ではなく、複数の指標をもちいる方法が有効であると言える

本節ではまとめにかえてエゼロ遺跡で測定された絶対年代をデアドヴォ遺跡の年代と比較して、年代考察の参考とする。エゼロ遺跡の年代値についてはこれまで数人の研究者によって論じられ

⁴⁴ なお、レシュタコフはデパス・カップをもとにエゼロ III 期に併行する前期青銅器時代第3段階の時的細分案を示している (Лещаков 1997, 76)。

てきた。おのおのの所見は前期青銅器時代の始まりを、校正年代で紀元前 3200 年±100 年に求めるということで共通している (Görsdorf & Bojadziev 1997; Schwenzler 2005; Weninger 1995)。この値はデアドヴォ遺跡で測定した結果とおおむね一致していることから、絶対年代の点でも両遺跡の前期青銅器時代の上限はほぼ併行しており、土器の所見と整合的である。

下限に関しては、研究者間で意見に相違が見受けられる。ヴェニンガーはエゼロ遺跡 2 層の校正年代を前 2800 年と算出した。ただし、ヴェニンガーの解釈では、建築層 1 層当たりの想定期間次第で、下限の値が大きく影響を受けてしまう。デアドヴォ遺跡の堆積状況から明らかなように、建築層の堆積にみられる粗密は遺跡内でも必ずしも一様ではないため、建築層をもとにした計算には慎重を期す必要がある。このようにデアドヴォ遺跡の年代値と両遺跡における土器の併行関係を考慮すると、ヴェニンガーの説をそのまま受け入れることはできない。

ゲールスドルフとシュヴェンツァーはエゼロ遺跡 4 層に前 2800～2500 年という幅のある値を提示している。前 2500 年という値はデアドヴォ遺跡第 5 段階の開始期 (IV 層) とおおよそ併行する。すでにみてきたように、エゼロ遺跡 4 層とデアドヴォ遺跡 IV 層は土器において同様の型式学的変化が顕著に認められる段階であり、両者の同時性は蓋然性の高いものと判断できる。このことからエゼロ IIIa 期は前 2500 年あたりから開始すると考えらえる。したがって、両遺跡では上層の測定試料が下層にくらべて少ないものの、エゼロ遺跡における年代値を参照したところ、エゼロ Ia 期の開始期はおよそ前 3200/3100 年、IIIa 期の開始期が紀元前 2500 年あたりに求められる蓋然性が高まったと考えられる。

第5章 ブルガリア前期青銅器時代の土器編年： デャドヴォ、エゼロと他遺跡資料の比較分析

5. 1. ブルガリア各地域の前期青銅器時代土器資料

これまでブルガリア前期青銅器時代編年研究の基礎資料として、デャドヴォ遺跡とエゼロ遺跡の土器と層位の関係を検討した。その結果、前期青銅器時代を3時期6段階に区分し、各段階の指標資料の特徴を明らかにした。本節ではまずブルガリア各地でこれまでに調査されたその他の遺跡の土器資料を提示し、次節ではデャドヴォ、エゼロ両遺跡で論じた指標資料と対比させながら各遺跡資料の年代的位置付けと地域の特徴について検討し、編年体系を構築する(図5; 図99)。

本章では各遺跡を「集落遺跡」、「埋葬遺跡」、「環溝遺跡」にわけて論を進める。「集落遺跡」とは、住居址やカマドなどの居住痕跡をとどめる遺構や遺物が発掘調査によって確認された遺跡をさす。「集落遺跡」にはデャドヴォ遺跡のように丘状の文化層堆積を有する「テル型集落」と、それとは対照的に丘状の堆積をもたない「平地型集落」にわけられる。高台に立地する遺跡もテルのような堆積が確認されていない場合は、「平地型集落」とする。「洞窟遺跡」は洞窟内で生活痕跡を留める場合、それを居住遺跡に含めた。

「埋葬遺跡」は埋葬址が一定の空間を占め、集落の範囲外に位置するものとする。「埋葬遺跡」には「墳丘墓」と「平地墓」がある。「墳丘墓」とは当時の地表面を掘り込んだ土壙墓のうえに土を盛って構築されたものである。これとは別に盛り土を掘り込んで土壙墓が構築されることもあり、通例、前者が後者より先に築かれる。「平地墓」は基本的に複数の埋葬址からなる集団墓であり、墳丘墓のような盛り土は認められない。

「環溝遺跡」は環状およびそれに準ずる平面プランを有する溝が検出される遺跡であり、ここでは「集落遺跡」のような住居址をはじめとする生活遺構が伴うことがない⁴⁵。遺跡は2つの立地パターンを有する。1つはテル型集落を利用したもの、いま1つは平地に新たに設けられたものである。

上記の遺跡類型のうち「集落遺跡」と「環溝遺跡」からは比較的豊富な資料がえられているが、

⁴⁵ 「環溝遺跡」には環溝を伴う集落址を含まない。集落遺跡の一部を溝が構成する場合(たとえばデャドヴォ遺跡やミハリッチ遺跡など)は、その遺跡資料を「集落遺跡」として扱う。

「埋葬遺跡」、とりわけ墳丘墓では副葬品そのものの事例が多くない。また、墳丘墓の被葬者や埋葬施設、土器以外の副葬品などの属性は時期的細別を視野に入れた編年研究⁴⁶においてそれほど有効ではないため (Панайотов 1989)、ここで取り扱う埋葬址は土器の副葬されたものとする。なお、墳丘墓では人骨は伴わないが、動物骨や土器を包含する土坑の報告事例が知られている。本論では便宜上、こうした土坑資料も埋葬遺跡のものとして扱う。

遺跡資料の年代的位置付けについて、第3、4章で検討したように、デヤドヴォ、エゼロ両遺跡の指標資料は、微細刺突懸垂文や球型注口付土器などをのぞいて、その多くが複数段階にまたがって認められている。そこで指標資料の検討により各遺跡資料に一定の時間幅が認められる場合は、各遺跡の年代をエゼロ I 期やエゼロ IIa~III 期などと記す。なお、公表された資料をもとに埋葬遺跡を除いた各遺跡の範囲、調査面積、前期青銅器時代文化層の厚さを表 4 に示した⁴⁷。一連の情報は本節で遺跡ごとに示した文献を参照している。また本章で述べる各地域の指標資料と遺跡資料の併行関係については表 5~11 と図 99 に示した。

5. 1. 1. 上トラキア平野東部

1) 集落遺跡

①カラノヴォ遺跡 (図 5・99:6) (Georgiev 1961; Hiller 1997; Hiller & Nikolov 2000)

スレドナ・ゴラ南麓に位置するテル型集落である。文化層の堆積厚は最大で 12.4m を測る (図 4; 図 34)。第 1 次調査はテルの東部と南部で実施され、厚さ約 2m の前期青銅器時代層 (カラノヴォ VII 層) は下層の VIIa 層と上層の VIIb 層に二分された。

第 1 次調査では VIIa 層からアスコス、凹線文土器、斜格子充填文の縄目文小型鉢が出土している (図 35:1~5)。VIIb 層からはキリロヴォ・カップ、注口付土器、有稜の水差し、多条垂線刻線文、アンフォラ様壺、多条山形刻線文の施文された水差しが出土した (図 35:6~14)。デヤドヴォ、エゼロ遺跡資料と対比すると、第 1 次調査の VIIa 層はエゼロ I 期に、VIIb 層はエゼロ III 期に比定される。

第 2 次調査はテル南部で実施され、径 0.75~3.5m、深さ 0.8~3.9m を測る 5 基の土坑 (B、C、D、H、S) から前期青銅器時代土器が出土している。土坑は 2 つの段階に属し (Hiller 1997, 346ff)、古い資料を含む土坑 B と H には、口唇部に刻目文、口縁部に刻目凸帯文の施された外屈深鉢 (図

⁴⁶ ブルガリアで数少ない研究事例として Alexandrov 2010 がある。

⁴⁷ すべての遺跡で各項目に関する情報が明示されていたわけではないため、その場合、表中では横線 (-) で示した。また各面積の値に関しては下一桁の数値が切り捨てられていない場合は、概算値を採用していることを意味している。

36:1, 2) と S 字深鉢をはじめ、凹線文土器 (図 36:11~16)、微細刺突文 (図 36:17, 18)、アスコス (図 36:10) が確認されている。これらの要素の多くはエゼロ I 期に特徴的であるが、土坑 B と H の資料中に孔列文が欠落している点は注目に値する。

土坑 C、D、S からは、キリロヴォ・カップ (図 36:19~21)、扁平型注口付土器 (図 36:25)、多条山形文の施された水差し (図 36:22)、多条垂線刻線文のある内弯浅鉢 (図 36:24)、縦位ループ状把手をもつ深鉢 (図 36:28)、突起付き把手、多条 M 字刻線文 (図 36:23) が出土している。上記の点からこの土坑資料は第 1 次調査の VIIb 層資料と同様に、エゼロ III 期に比定される⁴⁸。

②ノヴァ・ザゴラ・ツィガンスカ・モギラ遺跡 (図 5・99:3) (Катинчаров 1974; 1999; Лещаков 1997)

ノヴァ・ザゴラ市内に位置するテル型集落である。前期青銅器時代の文化層は 8 枚の建築層からなり、最下層の 8 層と 7 層のあいだに間層を挟む。上層の 3~1 層は後世に攪乱され、良好な層位情報は得られていない。

この集落址の公表資料は限られている。8 層から「ミハリッチ段階」に典型的な刻線文土器と縄目文土器が出土したと指摘されている (Лещаков 1997, 28)。刻線文に関しては幾何学文の小型鉢であると推測されることから、8 層はエゼロ IIa 期に併行すると考えられる。

7 層では縄目文土器が認められなくなる一方で、高い把手をもつ水差しと 2 つの把手をもつ小型壺が出土している。扁平型の注口付土器 (図 37:3) が 6 層と 2 層から、キリロヴォ・カップ (図 37:1)、段状の有稜部と突起付把手をもつ水差し (図 37:2)、アンフォラ様壺 (図 37:7) は 5 層から、そして粗胴深鉢 (図 37:9~11) は 5 層と 3 層から出土している。さらに球型注口付土器 (図 37:8) が 6~1 層のいずれの層から出土している。このことから 7 層から上層はエゼロ IIIa~IIIb 期に位置付けられる。

③ノヴァ・ザゴラ平地型集落遺跡 (図 5・99:4) (Кънчева-Русева 2000; Кънчева-Русева & Лещаков 2008)

テル型集落に隣接する平地型集落である。厚さ 1m の文化層は、上層の一部から鉄器時代の資料が、下層から前期青銅器時代層が検出された。下層上部は中世から現代に至るまでの攪乱を受けている。地山は 4 層の下で確認された。

⁴⁸ 筆者は実際に一次資料の報告を確認していないが、M. フリストフによると、近年行われたカラノヴォ遺跡での調査で、上トラキア平野西部でエゼロ III 期併行期に特徴的な尖底カップ (ユナツィテ・カップ) が出土したと報告されている (Христов 2012, 15, ft. 14)。

4層で刻目文凸帯文の施されたS字深鉢、粗胴深鉢、刻目凸帯文のある縦位ループ状把手が認められ、1層まで継続してみられる(図38:1, 3, 7)。押引文が4層(図38:10)、多条垂線刻線文が3層と1層(図38:4)、縦位ループ状把手のつく深鉢が2層と1層(図38:2)、大型縦位ループ状把手のつく内弯浅鉢が1層(図38:6)から確認されている。また詳細な層位は不明であるが、胴部上半に多条鋸歯文をもつ水差球型注口付土器(図38:8)と球型注口付土器(図38:9)が4~1層のいずれかの層から出土している。4~1層の土器はその特徴からエゼロIII期に比定される。

④ビコヴォ・ドンチョヴァ・モギラ遺跡(Биково Дончова Могила)(図5・99:5, Georigiev 1961; Детеv 1954)

ノヴァ・ザゴラ市ビコヴォ村から南2.5kmに位置するテル型集落である。発掘調査をつうじて銅石器時代層(8.5m厚)と青銅器時代層(1.5m厚)が検出された。公表された土器について正確な層位情報は与えられていないが(Детеv 1954, 177ff.)、孔列文の深鉢、孔列文把手、突起付き凸帯文把手、注口付土器、双耳把手付の丸底アンフォラ様壺をはじめ、幾何学刻線文、刺突充填幾何学刻線文、縄目文土器が出土している(図39)。当該遺跡の資料は少なくともエゼロII~III期に比定される。

⑤オフチャリツァII遺跡(Овчарица)(図5・99:8)(Kǎnčev & Kǎnčeva-Ruseva 1996; Leshtakov et al. 2001)

オフチャリツァ川左岸の台地に位置する集落遺跡である。緊急調査により前期青銅器時代の文化層(2m厚)が確認された。同層から舟形土器(図40:1, 2)、胴部上半に施文される凹線文土器(図40:3, 4)、盤状浅鉢(図40:5)、縄目文小型鉢(図40:6, 8, 9)、円形刺突充填文の小型鉢(図40:7, 9)が出土している。さらに筆者はエゼロ遺跡8~7層に類例のある縄目文小型鉢、円形刺突を充填した鋸歯状文の施された内弯浅鉢を確認している。

オフチャリツァII遺跡の資料は凹線文土器、縄目文と円形刺突充填文の小型鉢、そして盤状浅鉢の存在からエゼロI~II期に併行する。

⑥マドレッツ・グジョヴァ・モギラ遺跡(Мъдрец Гуджова Могила)(図5・99:11)(Leshtakov 2004a; Leshtakov et al. 2001)

ソコリツァ川右岸で2基のテル型集落が確認されており、そのうちの1基(グジョヴァ・モギラ)で前期青銅器時代層の調査が行われている。検出された前期青銅器時代層(2.2m厚)には4

枚の建築層が確認された。

出土資料には双耳状把手付カップ (図 41:8)、注口付土器 (図 41:9)、胴部上半に多条鋸歯文の施文された水差し (図 41:10)、大型のアンフォラ様壺 (図 41:14, 15)、肩部とそこから垂下する刻線文と刺突文の組み合わせをもつ壺 (図 41:7)、漏斗状土器 (図 41:13)、縦位把手のつく C3 類 (図 41:16) が認められる。そのほかには突起付き把手と有稜部のある水差し (図 41:12) と、深鉢口縁部への縄目文 (図 41:4~6) もみられる。これらの資料はエゼロ III 期に位置づけられる。

これより古手の資料に、円形刺突充填帯状刻線文の小型鉢 (図 41:1) と内閉深鉢 C2 類 (図 41:3) がある。さらに外面に縄目文、内面に刺突充填刻線文の施された小型鉢 (図 41:2) も認められている。これらはエゼロ Ib~IIa 期に比定可能である。

⑦ゴリヤマ・デテリナ遺跡 (Голяма Детелина) (図 5・99:9) (Leshtakov et al. 2001)

ポポフスカ川右岸の台地上に立地する平地型集落である。緊急調査により 2 枚の建築層 (0.7m 厚) が検出された。盤状浅鉢 (図 42:1) をはじめ、突起付き把手のある水差し (図 42:2)、有稜の水差し (同 42:3) が認められる。これらの資料からすくなくともエゼロ II 期に比定される。

⑧ズナメノセツ遺跡 (Знаменосец) (図 5・99:7) (Leshtakov et al. 2001; Борисов 1991b)

サズリィカ川右岸に位置する平地型集落である⁴⁹。緊急調査により前期青銅器時代層 (0.8m 厚) が検出されている。出土資料には粗胴深鉢 (図 43:1)、刻目凸帯とこぶ状貼付の組みあわさる深鉢 (図 43:2)、縄目文 (図 43:3~5) が確認されている。これらの資料からズナメノセツ遺跡はエゼロ II 期か III 期に年代付けられる。

⑨ポルスキ・グラデツ・モギラ遺跡 (Полски Градец Могила) (図 5・99:10) (Leshtakov et al. 2001)

マナスティルスキ高地北部に立地するテル型集落である。緊急調査により前期青銅器時代の建築層が 2 枚検出されている。孔列文と刻目凸帯文の組み合わせのある深鉢 (図 44:1) のほかに、縄目文の施文された内湾浅鉢をはじめとした土器片が出土している (図 44:2~4)。公表資料はすくなくともエゼロ II 期に年代付けられる。

⑩ガラボヴォ遺跡 (図 5・99:12) (Leshtakov 2002a; Leshtakov et al. 2001; Панйотов и др. 1991)

⁴⁹ 発掘当事者であるボリスフは当遺跡をテル型集落として報告しているが、調査時に遺跡の文化層堆積全容が明らかにされていないため、本論ではレシュタコフ他 2001 に従って、平地型集落とした。

サズリィカ川河岸段丘面に立地するテル型集落である。銅石器時代と青銅器時代の集落址を対象に緊急調査が実施され、そのうち青銅器時代層から少なくとも 15 枚の建築層 (1a~14 層) が検出された。14~5 層は前期青銅器時代に年代付けられているが、これらの層に関する情報はほとんど公表されていない⁵⁰。

最上層の 3~1a 層からアナトリアに由来を持つ資料として、三つ葉状口縁をもつ水差し、タンカード様土器、デパス・カップ⁵¹、いわゆる「ピルグリム・フラスコ」と「シリア・ボトル」などのロクロ製土器が出土している (図 45:1~8, 12)。そのほかに、縦位ループ状把手つきの内閉深鉢 C3 類、突起付きの把手と有稜部をもつ水差し、アンフォラ様壺 (図 45:13)、漏斗状土器 (図 45:9)、壺のように胴長の注口付土器 (いわゆる「ティーポット」) が認められる (図 45:10~11)。

4 層では、胴部上半に多条鋸歯状文をもつアンフォラ様壺と扁平型注口付土器が見られる (図 46)。4~1a 層には孔列文や縄目文、幾何学刻線文および刺突充填幾何学文の小型鉢に関する出土事例は報告されていない。3~1a 層に関してはレシュタコフの表現を借りれば、前期青銅器時代~中期青銅器時代への移行段階から中期青銅器時代初頭に位置づけられ (Лещиков 2006, 181f.)、4 層資料はエゼロ III 期に比定される。

① アッサラ遺跡 (Acapa) (図 5・99:13) (Leshtakov 2004b)

マリツァ川右岸のアッサラ高地に立地する集落遺跡である。長期にわたる発掘調査の結果、古代の城塞址や教会址の下層から前期青銅器時代の文化層が地山上から検出されている。建築層は 5 枚 (1a 層から 4 層) を数える。

土器に関しては 1 層 (上層) から 3 層のみ公表されており、エゼロ III 期に典型的な土器が出土している。具体的には、多条垂線文のある内弯浅鉢 (図 47:10, 11)、胴部上半に多条鋸歯文の施された水差し (図 47:14, 15)、球型注口付土器 (図 47:21)、有稜の水差し (図 47:12, 15, 16)、刻目凸帯文把手 (図 47:13)、突起付き把手 (図 47:16)、漏斗状土器 (図 47:19) がある。深鉢には縦位ループ状把手をもつ内閉深鉢 C3 類 (図 47:17) や粗胴深鉢 (図 47:18) のほかに、刻目文や刻目凸帯文のある深鉢が看取される。資料中には球型注口付土器、漏斗状土器が認められることから、3~1 層はエゼロ IIIb 期に比定される。なお、アッサラ遺跡ではエゼロ IIIb 期土器とともに赤色スリップのかかったロクロ製と非ロクロ製のデパス・カップ (図 47:1~6)、ユナツィテ・カップに

⁵⁰ レシュタコフ氏によると、青銅器時代最下層は前期青銅器時代第 1 段階に比定される可能性が高いとのことである。

⁵¹ エゼロ遺跡でもデパス・カップと推測される 2 点の破片資料がレシュタコフによって見いだされている (Лещиков 1999, 84, II78, II.79)。

類した尖底カップ（図 47:7）、中心に刺突を伴う円文（以下、円点文）（図 47:8）、いわゆるソーサー形土器（図 47:20）が発見されている点は周辺地域との関係を考えるうえで注目に値する。

⑫ミハリッチ遺跡（図 5・99:14）（Stefanova 2000; Миков 1948）

サカル山地南側のバー・デレ地区にひろがる丘陵部に立地する集落遺跡である。前期青銅器時代第 2 段階の標準資料とみなされているが、公表資料は限定的であり、不明な点が多い。調査は二期に分けて行われ（第 1 次調査：1945 年、第 2 次調査：1998～99 年）、第 2 次調査で前期青銅器時代の建築層が 4 枚検出されている。

調査では多様な形態と装飾を有するトンネル状把手と擬トンネル状把手をはじめ（Миков 1948, обр. 5; 6）、いわゆる「ミハリッチ・スタイル」とよばれる象嵌装飾⁵²をもつ刻線文や刺突充填刻線文の小型鉢（図 48:1, 8）、縄目文土器が認められている（Миков 1948, обр. 7; 8）。刺突充填帯状文の内湾浅鉢（図 48:3）、多条横線縄目文の深鉢（図 48:4）のほかに孔列文や凸帯文の土器、孔列文把手、注口付土器が発見されている（Миков 1948, 15）。さらにミハリッチ遺跡では 6 点のデパス・カップ⁵³が表採されている（図 48:10, 11）。以上のミハリッチ遺跡資料はすくなくともエゼロ II～III 期に年代付けられる。

⑬スヴィレングラット・ブランティエテ遺跡（Свиленград Брантийте）（図 5・99:15）（Валентинова & Ненова 2008; Нехризов 2006）

マリツァ川左岸の段丘面に位置する平地型集落である。緊急調査によって前期青銅器時代文化層と 3 基の土坑（D～F）が確認された。出土した土器は深鉢、浅鉢、水差しから構成されており、縄目文が数多く出土している（図 49）。深鉢には縄目による多条横線文（図 49:6）、浅鉢には多条斜線文と垂線文、斜線充填逆三角文（図 49:10～15）、断面が円形の縦位ループ状把手には多条の斜線文および横線文（図 49:16, 17）が施されている。これらの器形にたいし小型鉢（図 49:1）への施文事例はわずかであり、文様も単純である。このほかには内外面に幾何学刻線文の装飾された小型鉢が数片確認されている（図 49:2～4）。また興味深い資料として、細かい刻線のあいだに三角形の刺突を列状に配した文様をもつ土器片（図 49:18）が 1 点出土している。

当該遺跡では縄目文をもとにエゼロ II 期に比定されると考えられる。

⁵² 白色物質が刻線や刻目のなかに詰め込まれた装飾のことで、象嵌装飾 *incrustation* と呼ばれている。。

⁵³ バー・デレ地区ではデパス・カップが 6 点発見されているが、出土状況は明らかではない。デパス・カップ発見とその後の経緯については Leshtakov 1996, 243ff に詳しい。

⑭スヴェティ・キロヴォ遺跡 (図 5・99:16) (Лещаков 1997)

このテル型集落では発掘により、新石器時代から中世の資料を包含する文化層が 4m 確認されている。テル東部の調査区では前期青銅器時代層が 1.8~2m 検出され、5~6 枚の建築層が堆積していたと想定されている。公表された土器資料には球型注口付土器のほかに、キロヴォ・カップ、粗胴深鉢、多条山形文の施された有稜の水差しと突起付把手が認められる。このことから、当該遺跡資料はエゼロ III 期に年代付けられる (図 50)。

⑮カラスラ・ルプキテ・カレ遺跡 (Карасура Рупките Кале) (図 5・99:17) (Bertemes & Ostriz 2001; Bertram 2002; Georgieva 1996; Георгиева 1994)

チルパン高地に位置する平地型集落遺跡である。ブルガリア-ドイツ隊による共同調査をつうじて、カレトと呼ばれる高台とその周辺で先史から中世の遺構が確認された。調査の対象は古代と中世の城壁や教会址を中心とする遺構であり、それに伴って前期青銅器時代の資料が出土している。当該期の遺構は、高台に位置する 1 号バシリカ教会址と高台の西に位置する 2 号バシリカ教会址の下層、そして高台北斜面で確認された。土器はおもに 1 号バシリカ教会址と丘陵部北斜面から検出された土塁から得られている。

1 号バシリカ教会址下層から、こぶ状貼付と刻目凸帯文のつく深鉢をはじめ、キロヴォ・カップ (図 51:1)、扁平型および球型の注口付土器 (図 51:9, 10)、縦位ループ状把手付きの粗胴深鉢 (図 51:8)、胴部に多条山形文の施された水差し (図 51:4)、突起付刻目凸帯把手 (図 51:3) が出土している。以上の資料は全体的にエゼロ III 期の特徴を示している。特記すべきは、こうした資料とともに、胴部の屈曲とその部分に把手のつくことから、ユナツィテ・カップと思われる資料が出土している点である (図 51:2)。

カレト北斜面調査区で検出された土塁は 5 つの連続した構築段階に区分されている。ただし、土塁の遺物には他の時代の資料が多量に混在しており、出土状況は良好ではない。遺物は最下層の第 1 段階にもっとも多く、刻目文と刻目凸帯文、刻目文と孔列文、そして孔列文と刻目凸帯文の組み合わせをもつ S 字深鉢や内弯浅鉢がみられる (図 51:11, 13)。古手の土器として斜格子充填帯状文が内外面に施文された土器片が認められる一方 (図 51:12)、新しい段階に比定される縦位ループ状把手のつく深鉢も見つかっている (図 51:14)。

第 2 段階には平底のカップ (図 51:15) と凸帯文こぶ状貼付の施される深鉢 (図 51:16)、第 3 段階には凸帯付把手 (図 51:17)、突起付把手 (図 51:18) が出土している。そして第 4 段階には 2 条横位円形刺突列文の施された内弯浅鉢 (図 51:19) が、第 5 段階には注口付土器 (図 51:20) が

ある。

1号バシリカ教会址下層と土塁の資料はおもにエゼロ III 期に比定される。一方で、土塁第1段階から出土した斜格子充填帯状文など、エゼロ III 期以前の特徴を示している資料も認められることから、カラスラ遺跡の資料はすくなくともエゼロ II 期まで遡る。

⑩クラン遺跡 (Крън) (図 5・99:18) (Karastoyanova 2004)

テル型集落の周縁部に設置した計 10 箇所の調査区と、テル中央部の盗掘坑を利用して緊急調査が行われ、後期新石器時代と前期青銅器時代の文化層が検出された。第 I 調査区(前出の盗掘坑)から出土した前期青銅器時代土器には突起付き刻目凸帯文把手(図 52:1~3)、こぶ状貼付と刻目凸帯文の組み合わせをもつ深鉢(図 52:4)、M字状モチーフの刻線文(図 52:5)が見られる。これらの資料はエゼロ III 期に位置づけられる。

⑪ヴェセリノヴォ・マレヴァ・モギラ遺跡 (Веселиново Малева Могила) (図 5・99:19) (Лешаков 1997; Миков 1939)

トゥンジャ川左岸に位置するテル型集落である。発掘調査により厚さ約 5.1m の文化層のうち、青銅器時代の文化層が地表面下 0.2~2.5m 地点から検出された。5 枚を数える建築層堆積が想定されている。地表面下 2.5~2.9m の腐食土層を境に、下層が I 層(カラノヴォ III 期併行⁵⁴)、上層が II 層に分けられた。調査報告によると、地表下 0.2~2.2m 地点で認められた注口付土器が 2.2~2.5m 地点からは出土せず、代わりに孔列文のある深鉢が見つまっていることから、ヴェセリノヴォ遺跡 II 層は地表下 2.2m 地点を境にさらに上下層に分けられている(Лешаков 1997, 58ff.)。

II 層上層からは扁平型と球型の注口付土器(図 53:8~10)をはじめ、M 字状の多条刻線文をもつ水差し(図 53:5, 6)、キリロヴォ・カップ(図 53:2)、アンフォラ様壺(図 53:7)が出土している。さらに口縁に縦位ループ状把手がつく深鉢(図 53:1)と、肩部に刻線文と刺突文の組み合わせと、高い突起付把手をもつ壺(図 53:4)も認められている。これらの資料からヴェセリノヴォ II 上層はエゼロ III 期に比定される。一方の II 層下層中には、刻目文と孔列文の組み合わせをもつ深鉢と舟形土器(図 53:11~14)が見受けられるから、エゼロ I~IIa 期におさまる。

⑫ドラマ・カイリャク遺跡 (Драма Кайряк) (図 5・99:20) (Лихардус и др. 2001)

⁵⁴ 年代的位置付けは Georgiev 1961 のゲオルギエフ編年をもととしている。

カルニツァ川右岸のカイリャク高地に立地する平地型集落である。北東 1.5km のところにドラマ・メルジュメキヤ遺跡が位置する。ブルガリアードイツ隊の共同調査により、新石器時代からローマ時代までの遺構が発掘された。前期青銅器時代の資料はローマ時代の集団墓下層から、新石器時代と銅器時代の遺物と一緒に出土している。図示された資料には深鉢口縁部に多条横線の施文された縄目文が認められることから、エゼロ IIb～IIIa 期に年代付けられる (図 54)。

2) 埋葬遺跡

①ベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡 (Берекетска Могила) (図 5・99:21) (Kalchev 1996; Kalčev 2002)

ベレケト川右岸に位置するテル型集落の東 150m のところに位置する集団墓遺跡である。緊急調査により地表面下 1m のところから 78 基の埋葬址が発出された。このうち 74 基が前期青銅器時代に、残りの 4 基が後期銅器時代に属する。埋葬址はすべて土葬墓であり、ほとんどの被葬者は単独で埋葬されている。埋葬址は密集して配置されているが、遺構相互の切り合いは確認されていない。

52 基の埋葬址から出土した副葬品の総点数は 115 点を数える。そのうち 103 点が土器の副葬品である。おもな器形は水差し、内弯浅鉢、アスコス、片把手付壺、小型鉢からなり (図 55; 図 56)、そのほかに舟形土器 (図 56:6) と縦位ループ状把手がつく外反口縁部の浅鉢 (図 55:6, 9)、横位有孔把手のつく内弯浅鉢 (図 56:2, 4, 9) が見られる。全体的に無文のものが優勢であるが、水差しとアスコスには微細刺突文 (図 55:1, 2, 4) と刻目文が施され、前者には懸垂文が認められる (図 55:3, 5, 10～12; 図 56:1)。このことからベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡の資料はエゼロ Ia～Ib 期に年代付けられる。

②ゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓遺跡 (図 5:23; 図 99:23a) (Кънчев 1995; Лещаков & Попова 1995)

2 号墳の径は 46×41m、高さ 4.2m を測る (図 57)。緊急調査により、前期青銅器時代の埋葬址が 30 基検出された⁵⁵。土器が副葬されている埋葬址は 30 基中 13 基 (8～10、12、18、19、24、27～29、31、33、34 号墓) を数える。墳丘墓の埋葬址は層位的に 3 つの墓群に分けられており、そのなかで土器が副葬されている埋葬址は第 1 群 (31～34 号墓)、第 2 群 (18、19、24、25・26、29 号墓)、第 3 群 (8～10、12 号墓) の順に構築された。副葬品のおもな器形は内弯浅鉢と水差し

⁵⁵ この近隣には前期青銅器時代集落址ゴリヤマ・デテリナ遺跡が位置している。

から成り、浅鉢には横位ループ状把手、舌状把手、縦位ループ状把手がつく（図 58）。ベレケツカ・モギラ集団墓遺跡の事例と類似した土器が見受けられることから、ゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓の埋葬址はエゼロ Ia～Ib 期に位置づけられる。

③ゴリヤマ・デテリナ 4 号墳丘墓遺跡（図 5:23; 図 99:23b）（Лещаков & Борисов 1995）

ゴリヤマ・デテリナ 2 号墳の近くに位置する墳丘墓であり、墳径は 30m、高さは約 2m を測る（図 59）。緊急調査により埋葬址 5 基、祭祀遺構 9 基が検出された。埋葬址のうち、盛土中から検出された 2 号墓にだけ厚い器壁をもつ土器底部が副葬品として確認されている。それ以外の埋葬址は層位的位置関係から前期青銅器時代に年代付けられている。

人骨の代わりに動物骨や土器片を包含する土坑の「祭祀遺構」は前期青銅器時代に比定されているものの、出土遺物のなかには銅石器時代の土器片が混在している。1 号祭祀遺構から壺（図 60:2）と口縁部と肩部の境に刻目凸帯文の施された広口の壺（図 60:3）が、3 号祭祀遺構からは縦位トンネル状把手をもつ深鉢が出土している（図 60:1）。2 号墓からは土器底部が 1 点確認され、この資料をもとに報告者は墳丘墓を前期青銅器時代第 3 段階終末に比定している。上記した資料にはデアドヴォ、エゼロ両遺跡に典型的な土器は含まれていない。報告者が指摘するようにゴリヤマ・デテリナ 2 号墳 12 号墓との関係を考慮するならば（Лещаков & Борисов 1995, 11）、エゼロ I 期に併行する可能性も排除できない。

④メドニカロヴォ墳丘墓群遺跡（Медникарово）（図 5:25; 図 99:24）（Панайотов & Александров 1995）

ソコリツァ川右岸に位置する丘陵上の平地面に立地している墳丘墓群である。墓群は 5 基の墳丘から構成されている。緊急調査により、4 基の墳丘墓が発掘された。

I 号墳は 15×12m、高さ 0.5m の小型墳丘を有し、そこから 3 基の埋葬址が検出された。そのうち 2 号墓から水差しが 1 点出土している（図 61:1）。II 号墳は 28×26.3m、高さ 1.2m を測り、2 基の埋葬址が調査されている。ここでは副葬品は検出されていない。

III 号墳は 13.5×13m、高さ 0.5m を測り、埋葬址が 2 基確認されている。副葬品は III 号墳で最初に築かれた 2 号墓から出土している。その内訳は小型鉢 1、有孔舌状把手つき内弯浅鉢 1 点、大型水差し 2 点、片把手付壺 1 点、銀製リング 1 点からなる（図 61:2～4）。小型鉢には内外面に斜格子充填帯状刻線文が施文されている。2 号墓の上に設置された 2 号土坑から内弯浅鉢、小型と大型の水差しが出土し、大型の水差しには凸帯付把手と刺突充填刻線文が施されている（図 61:5,

6)。IV号墳は径16m、高さ0.8mを測り、2基の埋葬址が発見され、1号墓から14点の銀製ビーズが出土している。

これらの埋葬址はいずれも前期青銅器時代に属するとされており（Панайотов & Александров 1995, 91f.）、副葬された土器はおもにエゼロII期に年代付けられる

⑤ **オフチャルツィ・ゴリヤマタ・モギラ墳丘墓遺跡**（Овчарци Голямата Могила）（図5:24; 図99:25）
（Gaydarska 2007; Kalčev 2002; Nikolova 1999）

ゴリヤマタ川左岸の丘陵上に立地する墳丘墓である。墳丘は径40m、高さ5.5mを測る。緊急調査の際に51基の埋葬址が発見され、前期青銅器時代の埋葬址は1基のみ確認された。埋葬址から副葬品として3点の舟形土器が出土している（図62:1～3）。このことから本埋葬址はエゼロI～IIa期のあいだに年代付けられる。

⑥ **モギラ墳丘墓群遺跡**（Могила）（図5:99:26）（Иliev 2011; Илиев & Бакърджиев 2006）

グレミヤ・カイリヤク地区の丘陵上に立地する墳丘墓群遺跡である。計7基の墳丘墓からなり、このうち最も規模の大きいものが発掘された。墳丘は径37.6m、高さ3.2mを測り、数回にわたる盛土の痕跡が確認された。墳丘から前期青銅器時代の埋葬址は14基検出されている。

3基の埋葬址から土器が出土している。最初の盛り土を掘り込んで構築された30号墓から、端部に刻目文の施された外反口縁をもつ浅鉢と水差しの把手片が発見された（Иlieв & Бакърджиев 2006, обр. 15; 16）。2回目以降の盛り土を掘り込んで設けられた9号墓から突起付把手が、10号墓から口縁部外面には粗雑な凸帯文、内面には蓋受けのような舌状の突起がついた2点の深鉢が出土した（Иlieв & Бакърджиев 2006, обр. 3, 4）。後者については青銅器時代以降に比定される可能性が高い。以上の土器をデャドヴォ、エゼロ両遺跡と対比すると、エゼロIa期とエゼロII期～III期に年代づけられる。

⑦ **ドラジェヴォ墳丘墓群遺跡**（Дражево）（図5:99:27）（Иliev 2009; 2011; Бакърджиев 2005）

サベフ・バイル地区に位置する墳丘墓群遺跡である。4基の墳丘墓から成り、そのうちの1号墳丘墓にのみ前期青銅器時代の埋葬址が確認された。1号墳丘墓は墳丘径37m、高さ2.7mを測り、墳丘基底面から環状列石（径11m）が発見された。さらにその環状列石内側の北部から径2m、高さ0.6mの小規模環状列石遺構が発見され、そこで6基の埋葬址が認められた。6基のうち4基は土葬墓、2基は火葬墓であった。

2基の土葬墓から副葬品として土器が4点ずつ、1基の火葬墓から2点の土器が確認されている。小型環状列石内から検出された1号墓(土葬墓)から片把手付壺と縄目文小型鉢が出土している。同様の特徴をもつ縄目文土器が成人2体、幼児1体の合葬墓に副葬されていた。縄目文小型鉢には金属製の針と銀製装飾品が共伴している。このタイプの小型鉢はエゼロ Ib~II 期に比定される。

⑧ドルノ・サフラネ墳丘墓群遺跡 (Долно Сахране) (図 5・99:22) (Гетов 1965; Лешаков 1994)

トゥンジャ川上流域左岸にひろがる高台に立地する墳丘墓群である。8基の墳丘墓のうち4基が発掘され、3号墳から前期青銅器時代の埋葬址が検出されている。3号墳は墳丘径31m、高さ5mを測る。墳丘上の地表面には中世の埋葬が確認され、盛土中から10基の埋葬址が検出された。副葬品は1号墓から高い把手をもつ広口の水差しと舌状把手をもつ内弯浅鉢が、6号墓から丸底カップが出土している。調査者らはこれらの資料を後期青銅器時代に年代づけているが(Гетов 1965, 210ff.)、6号墓のカップ(図 63)に関しては前期青銅器時代に年代づけることが可能である(Лешаков 1994, 52)。

丸底カップには把手から外面全体にかけて刻線による鋸歯文斜格子充填文と鋸歯文、そして擬縄目文が施されている。また口縁部より高く、断面形が扁平の把手と丸みのある胴部、そしてその胴部から直線的に開く口縁部をもっている(以下「扁平高把手付丸底カップ」とする)。この種のカップの類例はデャドヴォ、エゼロ両遺跡には認められていないが、縄目文と刻線文の装飾からエゼロ II 期に併行すると考えられる。

3) 環溝遺跡

①コニョヴォ・ユルガンジスキ遺跡 (Коньово Юрганзжийски) (図 5・99:28) (Николов 2004)

新石器時代のテル型集落に7箇所調査区を設置して発掘調査が行われた。第3、第5、第7調査区から前期青銅器時代の土器包含層が確認されており、そのうちの第3調査区で大型の角礫による積み石を伴う溝が検出された。この溝から刻線による多条垂線文のある内弯浅鉢(図 64:1)、突起付把手(図 64:2, 3)、口縁部に縦位ループ状把手がつく内閉深鉢 C3 類(図 64:6, 7)、粗胴深鉢、擬トンネル状把手が出土している。これらの土器から溝資料はエゼロ III 期に年代付けることができる。

②カザンラク遺跡 (図 5・99:29) (Nikolov 2010; Лешаков 2005)

トゥンジャ川の支流沿いに位置する新石器時代以降の文化層をもつテル型集落である。緊急調

査により新石器時代と前期青銅器時代の文化層が検出された。前期青銅器時代層から4枚の建築層が認められ、最下層の第4層から石垣とその下に掘り込まれた馬蹄形プランを有する溝が検出された。4枚の建築層から出土した土器は同じ様相を呈しており、キリロヴォ・カップ、注口付土器、押引文のある内弯浅鉢、アンフォラ様壺、粗胴深鉢、有稜の水差しと突起付把手が確認されている⁵⁶。このことからカザンラク遺跡の資料はエゼロ III 期に年代付けられる。

③ドラマ・メルジュメキヤ遺跡 (Драма Мерджумекия) (図 5・99:30) (Лихардус и др. 2001)

カルニツァ川左岸に位置する新石器時代と銅器時代のテル型集落である。ここではブルガリアードイツ隊により、第6章でとりあげるチェルナヴォダ III 期を含む後期新石器時代から前期鉄器時代の遺構が調査されている。前期青銅器時代の遺構として、テル上でC字状プランの環溝(遺構番号 009)、建築遺構(遺構番号 370)、土坑(遺構番号 075)が検出された。このうち環溝と建築遺構は同時期に、土坑はそれよりも古い時期に比定されている。土坑から出土した深鉢と片把手付壺に関しては、年代を示す特徴に乏しく、デャドヴォ遺跡やエゼロ遺跡に正確な類例は見受けられない。一方の環溝からは突起付把手や刻線文の施された大量の水差し(図 65:3,4)をはじめ、丸底カップ(図 65:1)、球型注口付土器(図 65:5)、漏斗状土器(図 65:6)、縦位ループ条把手をもつ内閉深鉢 C3 類(図 65:7)がみつまっている。これらはいずれもエゼロ III 期に特徴的な土器である。

上トラキア平野東部ではデャドヴォ、エゼロ両遺跡で検討した指標資料が、前期青銅器時代第1段階(エゼロ I 期)から第3段階(エゼロ III 期)にかけて分布している(表5)。このことから上トラキア平野東部ではこれら指標土器の組み合わせを特徴とする土器群が展開していたと考えられる。代表的な土器要素には、エゼロ I 期の微細刺突文(懸垂文)、凹線文、アスコスがカラノヴォ VIIa 層やベレケツカ・モギラ平地型集団墓で認められ、これらの土器要素とともに舟形土器がオフチャリツァ II 遺跡、ゴリヤマ・デテリナ 2 号墳から出土している。縄目文および幾何学刻線文の小型鉢はカラノヴォ遺跡 VIIa 層、ビコヴォ・ドンチェヴァ・モギラ遺跡、オフチャリツァ II 遺跡やマドレッツ・グジョヴァ・モギラ遺跡、後者に限ってはカラスラ・ルプキテ・カレ遺跡やミハリッチ遺跡などでも認められた。

エゼロ II 期の盤状浅鉢はオフチャリツァ II 遺跡、ゴリヤマ・デテリナ遺跡から出土しており、

⁵⁶ レシュタコフ氏から未公表の土器実測図面を見せていただく機会を得た。

いずれの遺跡からもエゼロ III 期の指標資料は検出されていない。また縄目文浅鉢と深鉢もまたエゼロ III 期資料のある遺跡からほとんど出土していない。それに対し、粗胴深鉢や突起付把手の水差し、有稜土器は、エゼロ III 期の指標であるキリロヴォ・カップをはじめ、注口付土器や多条山形・鋸歯文をもつ水差しとともにひろく見受けられた。キリロヴォ・カップが認められなかった上トラキア平野南東部のアッサラ遺跡から、外来系土器のデパス・カップをはじめ、ソーサー形土器、ユナツィテ・カップがエゼロ III 期土器とともに出土している。また、ドルノ・サフラネ墳墓の扁平高把手付丸底カップに関しても、上トラキア平野東部では異質の資料であり、これもデパス・カップなどと同様に外部からの搬入品とみなしうる。

5. 1. 2. 上トラキア平野西部

1) 集落遺跡

①ユナツィテ遺跡 (図 5・99:31) (Катинчаров & Мацаонова 1993; Катинчаров и др. 1995; Мишина 2011; Российская академия наук институт археологии 2007)

トボルニツァ川沿いの段丘面上に立地するテル型集落である。発掘調査はブルガリア、ロシア、ギリシアの調査隊により、1939 年から 2013 年にかけて断続的に実施された。テルの規模は径 110 m、高さ 12m を測る。厚さ約 9m の文化層には最下層に銅石器時代層 (B 層)、厚さ 0.2~0.4m の間層をはさんで、前期青銅器時代層 (B 層) が確認された。前期青銅器時代層 (厚さ 4.5m) は 17 枚の建築層からなる。

ユナツィテ遺跡は上トラキア平野西部の標準遺跡と目されているが、遺物資料に関する情報は断片的にしか公表されていないため、その全体像については不明な点が多い。こうした状況のなか近年、T. ミシナが土器装飾を中心に統計的な分析結果を提示し、ユナツィテ遺跡の土器の様相が少しずつ明らかになってきた。ここではミシナとカティンチャロフらによる成果を中心に参考しながら、ユナツィテ遺跡の土器と層位の関係を確認する。

最下層 17 層から 14 層の土器は微細刺突文と凹線文によって特徴づけられている (図 66:1~6; 図 67:1, 2) ⁵⁷。微細刺突文には懸垂文に類した文様と連続菱形文が見受けられる。微細刺突列文や凹線文の施されたアスコス⁵⁸は 17~14 層に、無文のアスコスは 13~10 層で増加する (図 67:3)。出土層位は不明だが、微細刺突懸垂文の施されたアスコスが確認されており、その注ぎ口側の胴

⁵⁷ ボヤジェフ氏の好意により、ブルガリア-ロシア隊によって調査された資料の一部を実見する機会を得た。そのとき凹線文や微細刺突文を有する土器片を確認した。

⁵⁸ 筆者がプロヴディフ考古学博物館を訪問したときに、展示資料のなかにユナツィテ遺跡出土のアスコスを確認した。

部は丸く張り出している。一方、13～10層のアスコスには、注ぎ口側の断面が口縁部から底部にかけてわずかな曲線を描きながら推移する様子がうかがえる。凹線文には斜線充填帯状文、羽状文、多条垂線文が土器の胴部に施文されている。口縁部孔列文をもつ土器は17～14層から集中して出土しており、その器形はおもに深鉢である（Катинчаров & Мацанова 1993, 156）、。

15層から肥厚口縁部内面に刻線文の施された小型鉢が現れる（Мишина 2011, 76）。13～9層では、口縁部内面に斜格子充填幾何学文の施された小型鉢（図 66:8～14）のほか、深鉢や壺などの胴部に斜格子帯状文の施される屈曲浅鉢（図 66:16, 17）、斜格子充填市松文（図 66:19）が施文されるようになる。またこれらの幾何学文を配することで、鋸歯状あるいは菱形を呈した無文部分を浮かび上がらせる効果をもつモチーフも看取される（以下、鋸歯状ネガティブ文、菱形ネガティブ文）。このほかには高台付浅鉢（図 66:22）が13層に現れ、1層まで継続して認められている。

縄目文は13層に出現し、7層まで継続して出土している。破片資料がほとんどのため全体の器形と文様の様子が明らかなものは少ないが、ホールマウス様の器形には円形刺突文と組み合わさる多条横線文や斜線充填三角文、斜線文が配されている（図 66:20; 図 67:4）。

8～1層から尖底をもつユナツィテ・カップが出土している（図 66:23～25; 図 67:5, 7）。ユナツィテ・カップの多くは無文であるが、少量ながら刻線と刺突によるボタン様の文様（ボタン文）（図 66:23）、斜格子充填帯状文（Катинчаров и др. 1995, обр. 25）などの装飾が施される。ユナツィテ遺跡では、尖底と平口縁、そして1つの把手をもつタイプ（平口縁ユナツィテ・カップ）のほか、1つの把手とそこから反対側にむかってややせり上がる注ぎ口をもつタイプ（注ぎ口付ユナツィテ・カップ）と平口縁と2つの把手がつくタイプ（双耳把手付ユナツィテ・カップ）⁵⁹が見受けられる（Катинчаров и др. 1995, 151ff.）。このほか、8層より上層では、把手の高さが口縁部とほぼ同等の形態的特徴をもつ無文の丸底カップ⁶⁰（図 66:26）、注口付土器⁶¹、トンネル状把手も

⁵⁹ 双耳把手付ユナツィテ・カップが平口縁タイプや注ぎ口付タイプのユナツィテ・カップより遅れて出現していた可能性を、1939年のミコフによるユナツィテ遺跡の調査成果から指摘することができる。ミコフは青銅器時代層を上層からⅢ層（深さ1.0～2.2m）とⅣ層（深さ2.2～6.2m）に区分した（Катинчаров и др. 1995, 13）。ユナツィテ・カップはⅢ層からの特徴という認識が示されながらも（Катинчаров и др. 1995, 148）、実際には平口縁タイプと注ぎ口付タイプのユナツィテ・カップは下層のⅣ層よりすでに出土していたのに対し（Катинчаров и др. 1995, 151）、双耳把手付ユナツィテ・カップはⅢ層中の深さ1.8m地点から検出されていた（Катинчаров и др. 1995, 152f.）。残念ながら、ミコフ調査によって提示された各層の値は、カティンチャロフらによる層位区分体系と精確に対応していないため、双耳把手付ユナツィテ・カップの出土地点（地表下1.8m）を、現行の層位区分のなかに位置づけることは困難である。しかし、出土層の違いはこの形態的な差異が時間的な先後関係を反映していることを示す有力な手がかりである。なお、ミシナは1つの把手を持つユナツィテ・カップと双耳把手を持つユナツィテ・カップを型式学的に区別しているものの、タイプごとの出土層位については特に注意を払っていない（Мишина 2011, 76f.）。

⁶⁰ 後述するマルテペ・カップに該当する。

⁶¹ 筆者は現地調査によりユナツィテ遺跡8層より注口付土器片を確認している。

認められている (Катинчаров & Мацанова 1993, обр. 17; обр. 19)。

ユナツィテ遺跡では微細刺突文、凹線文、縄目文、注口付土器など上トラキア平野東部のエゼロ I 期から III 期に認められた指標要素をいくつか有することから、ユナツィテ遺跡資料はエゼロ I~III 期とおおよそ併行すると考えられる。

②オグニャノヴォ・マルテペ遺跡 (図 5・99:32) (Leshtakov 2000; Детев & Мацанова 1976)

マリツァ川右岸に位置するテル型集落である。緊急調査時にはテル南部がかなりの範囲で損壊しており、テル本来の規模に関する情報は失われていたことが明らかにされた。残存する文化層 (厚さ約 3m) に 6 枚の建築層が認められた。

最下層の 6 層からは、刻目文と孔列文をもつ S 字深鉢、刻目文と刻目凸帯文の深鉢 (図 68:1, 2) をはじめ、粗胴深鉢が完形の状態で出土している (図 68:4)。畝のような凹みをもつ縦位ループ状把手のついた土器の胴部には、刻線による斜格子充填幾何学文のモチーフが一部認められる (図 68:3)。5 層からは肥厚口縁部内面に斜格子充填帯状文と三角文、刺突充填鋸歯文、鋸歯文の施文された小型鉢が出土しており (図 68:5~8)、これらはユナツィテ遺跡の事例とよく類似している (図 66:9~12)。このことから 6 層と 5 層の土器はユナツィテ 13~9 層と併行する。

4 層より上層でユナツィテ遺跡上層に特徴的な資料が看取される。主な特徴として単一の把手をもつユナツィテ・カップ、刻線による同心円文やボタン文の内弯浅鉢、平口縁の丸底カップ (マルテペ・カップ)⁶² (図 68:13, 14) が、キリロヴォ・カップと扁平型注口付土器とともに認められる (図 68:9, 12)。このほかには尖底で胴部の丸いカップ (図 68:17) やトンネル状把手をもつ内弯浅鉢、3 層からは低い高台付浅鉢 (図 68:15) が出土している。2 層からは片側に横位ループ状把手とその反対側に注ぎ口をもつ、いわゆるソーサー形土器が出土している (図 68:16)。以上の資料をもとに、オグニャノヴォ・マルテペ遺跡 4~1 層はユナツィテ 8~1 層と併行する⁶³。

③ダベネ・サロフカ遺跡 (図 5・99:33) (Nikolova 1995; 2000a; 2000b)

スレドナ・ゴラの北を流れるストリヤマ川上流の段丘面に立地するテル型集落である。学術調査の結果、前期青銅器時代の建築層 (厚さ 2m) が少なくとも 6~7 枚検出されている。各建築層

⁶² レシュタコフはこのタイプのカップを「スヴェティ・キリロヴォ型カップ西部類型 Sveti Kirilovo type cup western variant」と呼んでいる (Leshtakov 2000, 246)。本論文では本遺跡にちなんで「マルテペ・カップ」と称することとする。

⁶³ ただし、4~1 層には微細刺突列文やアスコス、5 層には丸底カップもみられる。レシュタコフが指摘しているように、出土資料の帰属層位や年代的位置付けには一定の注意を要する (Leshtakov 2000, 245)。

は土器によりダベネ・サロフカ IIA、IIB、IIC の 3 層に分けられている⁶⁴。

IIA 層の土器群は凹線文が特徴的であり、アスコスをはじめ、浅鉢や壺の胴部外面に縦位に施文されている (図 69:1~4)。IIA 層上部では肥厚口縁内面に鋸歯文の施された小型鉢が見つまっている (図 69:5, 6)。

IIB 層からは刻線象嵌文土器が多く出土しており、鋸歯文、斜格子文を充填した三角文、市松文、菱形文が装飾されている (図 69:7~14)。IIA 層とは異なって、深鉢や壺の口縁部および胴部に施文されるようになる。またこれらのなかには斜格子充填三角文を上下に配置した鋸歯状ネガティヴ文と菱形ネガティヴ文も見られる。縄目文は確認されていないが、その代わりに縄目文を模した擬縄目文が IIB 層を特徴づける装飾要素に挙げられる (図 69:12)。また IIB 層では 2 点の丸底カップが認められている (図 69:15, 16)。

IIC 層の資料は攪乱されたテル最上層から出土している。資料数は少ないが、ユナツィテ・カップ、キリロヴォ・カップ、突起付把手、注口付土器が認められている (図 69:17~21)。

ダベネ・サロフカ遺跡各層の土器はユナツィテ遺跡資料と基本的によく表していることから、両遺跡はおおむね同時期に年代付けられる。

④プロヴディフ・ネベト・テペ遺跡 (Пловдив Небет Тепе) (図 5・99:34) (Görsdorf & Bojadziev 1997; Nikolova 1999; Пейков 1994)

プロヴディフ市内にあるネベト・テペという丘陵上に位置する。発掘調査により、古代の祭祀場として利用されていたこと、先史集落址が丘陵の斜面部に位置することが明らかとなった。調査によって確認された文化層は 5 つの時期に区分されている。内訳は上層から 1~3 層が前期鉄器時代、4 層が後期青銅器時代、5~6 層が中期青銅器時代、7~9 層が前期青銅器時代から中期青銅器時代への移行段階、そして 10~11 層が前期青銅器時代となっている。

11 層に関しては公表資料がほとんどないため詳細は明らかではない。10 層からは丸底カップ、トンネル状把手、M 字状刻線文 (Пейков 1994, обр. 4)、そして白色象嵌された縄目文⁶⁵と刻線による斜格子充填帯状文、鋸歯文、市松文を有するアスコスが出土している (図 70)。ユナツィテ遺跡とダベネ・サロフカ遺跡の資料と対比すると、アスコスと M 字状刻線文はユナツィテ遺跡 13~9 層に、丸底カップとトンネル状把手はユナツィテ遺跡 8~1 層に併行すると考えられる。

⁶⁴ ダベネ・サロフカ遺跡 I 層は後期銅石器時代に比定されている。

⁶⁵ レシュタコフやニコロヴァは上トラキア平野西部の特徴の 1 つとして擬縄目文に言及している (Nikolova 2000a, 217; Лещаков 2006, 176)。筆者はプロヴディフ・ネベト・テペ遺跡の事例を実見したわけではないため、縄目文か擬縄目文かの判断は、現時点では困難である。さしあたり本論文では報告者の所見に沿って縄目文としておく。

9～7層では縄目文土器の数が少なくなり、注口付土器、突起付の縦位ループ状把手をもつ水差しが出現する。7層からは白色象嵌された刻目文の施されたユナツィテ・カップが出土している。そして6～5層ではユナツィテ・カップ、注口付土器、擬トンネル状把手が増加し、キリロヴォ・カップとマルテペ・カップ、トンネル状把手も確認されている。さらに口縁部孔列文の施された深鉢が下層から5層まで認められている。このことから9～5層の土器はユナツィテ遺跡8～1層に併行する。

⑤プロヴディフ・ヤサ・テペ I 遺跡 (Пловдив Яса Тепе) (図 5・99:35) (Детев 1959; 1975)

プロヴディフ市内に位置するテル型集落であり、マリツァ川支流の右岸に立地している。学術調査により厚さ 3.5m の文化層を包含する集落が発見された⁶⁶。文化層中には後期新石器時代と前期銅器時代の集落址が確認され、前期青銅器時代の土器は最上層から他の先史時代資料に混ざって出土している。

ずんぐりとした口の狭い小型水差し (図 71:1) には、この器形としては珍しく、白色象嵌の刺突列文と鋸歯文が胴部に施されている。このほかに口唇部に刻目文、口縁部に孔列文と凸帯文をもつ深鉢、刻目文と刻目凸帯文をもつ深鉢、舟形土器、孔列文把手が出土している (図 71:2～6)。いずれも上トラキア平野東部のエゼロ I～II 期の特徴を示している。

⑥プロヴディフ・レストランタ遺跡 (Пловдив Ресторанта) (図 5・99:36) (Koleva 2000)

ネベト・テペ西側斜面に位置する集落遺跡である。ネベト・テペ遺跡から約 300m のところにある。緊急発掘により前期鉄器時代 (A 層) と前期青銅器時代層 (B 層) が検出された。地山上に堆積した前期青銅器時代層は 5 枚の建築層から成る。

マルテペ・カップが最下層の 1 層と 2 層から出土している (図 72:1, 2)。胴部内外面に施文された刺突充填幾何学刻線文 (図 72:3)、口縁部内面に施文される刺突による多条鋸歯文 (図 72:4)、そして擬トンネル状把手のつく浅鉢は、各建築層で認められている。

マルテペ・カップおよび刺突充填幾何学刻線文と刺突による多条鋸歯文によりユナツィテ遺跡 13～1 層と併行する。

⑦マノレ・ラスコパニツァ遺跡 (図 5・99:37) (Detev 1981; Nikolova 1999)

⁶⁶ 調査面積は少なくとも約 1700 m²を測る。

マリツァ川との合流地点近く、ストリヤマ川下流域の左岸に位置するテル型集落である。発掘調査により、8層からなる文化層(4~5m厚)が検出され、下層5層(第1~5層)には青銅器時代、上層3層(第6~8層)には鉄器時代の資料が包含されていた。

第1~5層からユナツィテ・カップ、高台付浅鉢、キリロヴォ・カップ、双耳状把手付カップ、アンフォラ様壺、胴部上半に多条鋸歯文の施された水差し、突起付把手、注口付土器、円点文が出土している(図73)。とくに球型注口付土器(図73:11)が第1層から、短頸壺のような形状を呈した注口付土器⁶⁷が上層の第4層から出土している点は注目に値する(図73:12)。また、デヤドヴォ遺跡I/II層とエゼロ遺跡の資料(図14:4; 図24:4)と類似する双耳状把手付カップが第5層から出土している。平口縁のユナツィテ・カップと注ぎ口付ユナツィテ・カップは第1~5層にかけて出土し、双耳把手付ユナツィテ・カップが第5層で認められている(Detev 1981, fig. 37)。以上の資料により第1~5層をエゼロ IIIb 期と併行させることが可能である⁶⁸。

2) 埋葬遺跡

①ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓(Дъбене Баринов Горун)(図5・99:38, Hristov 2010; Христов 2012)

ダベネ・サロフカ遺跡から南西400mのところに位置する祭祀遺構を伴う墳丘墓である。近年行われた調査報告は概報レベルに留まっているものの、2012年時点で墳丘墓と祭祀遺構が計25基調査されている。そのうちの多くが前期青銅器時代の遺構であると報告されている。この墳丘墓は、前期青銅器時代の遺構から出土した大量の金製品によって調査の行方が注視されている。

本章ではこれまでに公表された5基の祭祀遺構と1基の墳丘墓から出土した資料をとりあげる⁶⁹。祭祀遺構は遺構の高さが25~30cmと低く、葺石が径5.5~14.5mの範囲の円形に配置されている。葺石の下に掘り込まれた土坑から金製品をはじめとする装飾品や土器片、動物骨片が大量に出土している。3号祭祀遺構の中央部と北西部に浅くほりこまれた凹みから、平口縁のユナツィテ・カップと、注ぎ口付ユナツィテ・カップ、内外面に斜格子充填幾何学刻線文が施され、突起部分が方形を呈する把手(方形突起付把手)がT字状口縁につく浅鉢が出土している。ここから

⁶⁷ レシュタコフはマノレ・ラスコパニツァ遺跡第4層とガラボヴォ遺跡第1層の注口付土器の類似関係をもとに、第4層が前期青銅器時代から中期青銅器時代への移行段階あるいは中期青銅器時代に年代付けられると指摘している(Лещиков 2006, 182)。

⁶⁸ ニコロヴァとレシュタコフはマノレ・ラスコパニツァ遺跡の公表資料を、正確な層位情報を欠いたものとみている(Nikolova 1999, 227ff.; Лещиков 2006, 182)。ニコロヴァの批判的意見はおもに古い年代(1960年、1968年)に公表された資料に向けられている。本論文で取り扱った情報はもっとも新しい年に公表された、遺跡調査の最終報告にあたる文献(Detev 1981)に基づいている。

⁶⁹ 2009年10月にブルガリア国立歴史博物館で行われた企画展示で、3~5号、7号祭祀遺構から出土した資料の一部を観察する機会を得た。

は金製ネックレスが共伴して見ついている。

4号祭祀遺構からは葺石下の土坑を覆っていた粘質土層より、金属製ナイフと金製品とともに、球型注口付土器と平口縁のユナツィテ・カップが出土している。5号祭祀遺構を構成している1基の土坑からは、柄の部分に金製プレートがつく金属製ナイフ、銀製の箱、金製品とともに、内外面に象嵌された斜格子充填刻線文と市松文の施された、方形突起付把手のある屈曲鉢と、口唇部と方形突起付把手に斜格子充填方形文が施されたT字状口縁部をもつ浅鉢が出土している。7号祭祀遺構からは高台付浅鉢と、平面観が方形を呈する把手（方形把手）が口唇部につく内弯浅鉢が金製品と共伴して発見された。

16号祭祀遺構からは中央部と南部で土器埋納が発見されている（図74）。計4箇所の埋納遺構から3点のユナツィテ・カップと、1点の高台付浅鉢が出土している。1点のユナツィテ・カップには刻線による円点文が施されている。それ以外の資料はいずれも無文であるが、高台付浅鉢には縦位ループ状把手がついている。

墳丘墓に関しては当該遺跡のなかでもっとも規模の大きい墳丘墓の1つである3号墳が調査されている。規模は径25m、高さ2.7mを測る。祭祀遺構と同じように墳丘は川原石による葺石で覆われており、1号墓には成人男性が埋葬されていた。墓壙からは金製装飾品が、溝遺構の基底面からは内弯浅鉢や水差しが金製装飾品とともに出土している。さらにこの墳丘墓の西周縁部では青銅製とされる金属製の短剣が、北側ではユナツィテ・カップが見ついている。加えて、3号墳北側から凹み状遺構が2基検出され、そこからユナツィテ・カップを含む土器片の集中区が認められている。

ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓で発見された各遺構の年代は平口縁および注ぎ口付ユナツィテ・カップ、高台付浅鉢の存在からユナツィテ遺跡8~1層に併行する。また4号祭祀遺構から出土した球型注口付土器は同IIIb期に比定される。

3) 環溝遺跡

①チェルナ・ゴラ1遺跡（図5・99:39）（Leshtakov 2006; Лещаков и др. 2002）

上トラキア平野西部東端、チルパン高地の西部に位置する環溝遺跡である。遺跡は古代以降の河川による浸食と現代の工事によって著しく損壊していたものの、緊急調査によって外溝（Outer Ditch）と内溝（Inner Ditch）、凹み（Basin）、井戸（Well）、中央土坑（Central Pit）が検出された（図75）。住居址や埋葬址に関連する遺構は確認されていない。

遺物はおもに溝や溝内の埋納遺構をはじめ、凹み、井戸、中央土坑から出土している。各遺構

からユナツィテ・カップ (図 75:1)、キリロヴォ・カップ (図 75:2, 3)、球型注口付土器 (図 75:6)、アンフォラ様壺 (図 75:9)、突起付き把手が認められる。また深鉢と思しき縄目文土器片 (図 75:5) が1点出土している。これらの資料はユナツィテ遺跡 8~1 層と併行する。

上トラキア平野西部ではエゼロ I 期から III 期と併行する資料を認めることができる (表 6)。エゼロ I 期の代表的な資料である微細刺突文と凹線文のアスコスはユナツィテ遺跡では 17~14 層、ダベネ・サロフカ遺跡では IIA 層に限られ、なかでも凹線文は平野東部にくらべ文様や施文される器形、部位の点で多様性に富んでいる。孔列文はユナツィテ遺跡をはじめ、マリツァ川沿いでエゼロ III 期段階まで散見された。

上トラキア平野西部の特徴的な土器要素として、鋸歯文をはじめとする幾何学刻線文が挙げられる。口縁内面に多条鋸歯文や斜格子充填幾何学文の施される小型鉢は、ユナツィテ遺跡ではそれぞれ 15~14 層と 13~9 層で、ダベネ・サロフカ遺跡では IIA 層上部と IIB 層でみられる。また斜格子帯状文や市松文、鋸歯状や菱形のネガティブ文といった装飾要素は、ユナツィテ遺跡 13~9 層、ダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層で出現しており、この段階に文様が複雑化している。こうした刻線文の装飾モチーフは平野東部では採用されず、地域差をよく反映している。

両地域の相違点は縄目文にも見受けられ、この装飾は上トラキア平野西部ではほとんど出土していない。ユナツィテ遺跡では 13~7 層から少量、プロヴディフ・ネベト・テペ遺跡では 10~7 層からわずかに、チェルナ・ゴラ 1 遺跡 (深鉢) では1点のみ見られる程度である。それに対し、擬縄目文がダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層から出土しており、この地域を特徴付ける施文技法として用いられている。

ユナツィテ遺跡 8~1 層に出現するユナツィテ・カップとマルテペ・カップは上トラキア平野西部を代表するエゼロ III 期併行資料であり、その分布範囲は平野西部を中心に周辺にも及んでいる。この段階の指標資料に関しては、注口付土器や突起付把手水差しなど上トラキア平野東西で共通する要素が増えてくる。一方、ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓遺跡ではユナツィテ・カップとともに方形突起付把手が T 字状口縁部につく浅鉢や高台付浅鉢と共伴して出土しており、平野東部ではなく北方との関係を示している点で注目に値する。

5. 1. 3. 黒海西岸域

1) 集落遺跡

①エゼロヴォ II 遺跡 (Езерово) (図 5・99:40) (Топчева 1981)

ヴァルナ湖西岸の水中で発見された集落遺跡である。浚渫船をつかって調査が実施され、湖面下約 6.5～8.5m の地点で前期青銅器時代の文化層が認められたと報告されている。引き揚げられた資料の層位情報は明らかにされていない。

エゼロヴォ II 遺跡では大量の水差しとアスコス (図 76:1, 2) をはじめ、S 字深鉢 (図 76:9)、内湾浅鉢 (図 76:3)、舟形土器 (図 76:7)、アンフォラ様壺 (図 76:8)、注口付土器 (図 76:11)、つまみ付蓋 (図 76:12, 13)、いわゆる儀礼用土器 (図 76:10) が認められる。装飾はおもに縄目文、刻線文、刺突文からなる。孔列文はわずかに確認されている (図 76:4)⁷⁰。縄目文はアーチ文を中心とする曲線系文様と斜線充填幾何学文が特徴的である (図 76:3, 9, 11～13)。また刻線文に関して蓋や浅鉢に施される刺突充填三角文が典型的である (Roman et al. 1992, taf. 41:7; 42:4; 45:1; Tončeva 1981, fig. 13:3, 6, 9; 17: 11, 12)。水差しは口縁部から胴部まで断面形態が滑らかに推移するものがほとんどだが、なかには肩部に段をもつ有稜の水差しも認められる (Tončeva 1981, fig. 9:8, 9)。水差しの把手には凸帯把手と畝状の把手が確認されている (Tončeva 1981, fig. 9:a; fig. 11:4～11, 16, 22, 27)。

エゼロヴォ II 遺跡は層位情報をもたないため、詳細な年代付けは困難だが、デヤドヴォ、エゼロ両遺跡資料と対比すると、エゼロ II～III 期に併行すると考えられる。

②ストラシミロヴォ 1 遺跡 (Страшимирово) (図 5・99:41) (Мароч 1973)

ヴァルナ湖西岸に位置する集落遺跡である。水路工事にともなって、銅石器時代と青銅器時代の資料を包含する文化層が認められた。青銅器時代層の土器はエゼロヴォ II 遺跡と同様の特徴を示している。曲線文系の縄目文 (Мароч 1973, таб. IX:12, 13) のほかに、斜格子充填刻線文 (Мароч 1973, таб. VIII:8)、刺突充填三角文 (Мароч 1973, таб. VIII:11) が見受けられる。とくに曲線文系の縄目文や刺突充填三角文はエゼロヴォ II 遺跡の資料と類似していることから、ストラシミロヴォ 1 遺跡資料はエゼロ II～III 期と併行すると考えられる。

③ソゾポル遺跡 (図 5・99:42) (Draganov 1995)

ソゾポル市内にある港の海中に位置する集落遺跡である。水中での発掘調査により、文化層は 4 枚の層に分けられた。最下層の後期銅石器時代層と間層の上層に堆積した 2 枚の層 (厚さ 0.4m) に前期青銅器時代資料が包含されていた。

⁷⁰ ヴァルナ考古学博物館収蔵における資料調査で筆者は孔列文深鉢を確認している。全体の出土量は不明であるが、その数は他の土器装飾に比べ、少ない印象を受けた。

前期青銅器時代層から出土した土器の器形と装飾は、エゼロヴォ II 遺跡資料とよく類似している。例えば、刺突充填幾何学文 (図 77:1)、縄目文 (図 77:2, 6)、アスコス (図 77:7)、注口付土器 (図 77:8) がある。縄目文には多条アーチ文といった曲線文系が、アスコスの頸部には刺突文が施文されている。ソゾポル遺跡資料はすくなくともエゼロ II~III 期と併行すると考えられる。

④キテン・ウルドヴィザ遺跡 (図 5・99:43) (Draganov 1995; 1998)

キテン市内にあるウルドヴィザ港の海中に位置する集落遺跡である。水中での発掘調査で 5 枚の層に分けられた。1 層の表土層から 5 層まで 2.9m を測り、このうち 3 層と 4 層 (厚さ 0.65m) から前期青銅器時代資料が確認された。

当該遺跡を特徴づける土器資料はつまみ付蓋 (図 78:8)、儀礼用土器 (図 78:6, 7)、そして縄目文土器である。縄目文は内弯浅鉢 (図 78:2)、壺 (図 78:3)、球型注口付土器 (図 78:4, 5) に施文されている。曲線文系の縄目文はエゼロヴォ II 遺跡とソゾポル遺跡のものと同く類似する。また儀礼用土器と蓋もまたエゼロヴォ II 遺跡に認められる特徴的な資料である。このほかには、刻目文と孔列文の組み合わせをもつ浅鉢が出土している (図 78:1)。このようにキテン・ウルドヴィザ遺跡の資料はエゼロ II~IIIb 期に併行すると考えられる。

5. 4. 2. 埋葬遺跡

①デヴニャ遺跡 (Девня) (図 5・99:44) (Иванов 1972)

デヴニャ市のデヴニャ川左岸第 1 河岸段丘上に立地する埋葬遺跡である。緊急調査時に前期青銅器時代の埋葬址が 3 基確認された。いずれにも土器が副葬されている。副葬品となる土器は 1 号墓から 1 点、2 号墓からは 3 点、3 号墓からは少なくとも 1 点認められた。1 号墓からは突起のついた舟形土器 (Иванов 1972, обр. 8)、2 号墓からは縦位ループ状把手のついた内弯浅鉢 (Иванов 1972, таб. IV:4) が出土している。デヴニャ遺跡の前期青銅器時代埋葬址はエゼロヴォ II 資料と類似することからエゼロ II~III 期に併行すると考えられる。

黒海西岸域の土器群は北側に位置するエゼロヴォ II 遺跡とストラシミロヴォ 1 遺跡、南側のキテン・ウルドヴィザ遺跡とソゾポル遺跡とよく類似している (表 7)。この地域における土器の型式学的な特徴は、とくにつまみ付蓋、儀礼用土器、そして曲線文系の縄目文、アスコスに見いだ

される⁷¹。

沿岸域では上トラキア平野東部との関係を示す資料がいくつか認められた。孔列文や注口付土器をはじめ、斜線充填文の施された縄目文内弯浅鉢や深鉢、畝状文把手、アンフォラ様壺がその事例に挙げられる。ただしアスコスや舟形土器に関しては、形態や装飾の点で上トラキア平野のものとは特徴を異にしている様子が窺える。

5. 1. 4. ブルガリア西部・南西部

ブルガリア西部・南西部ではこれまで集落遺跡のみ確認されており、埋葬遺跡や環溝遺跡の分布は認められていない。

①ラドミル・ヴァホヴォ遺跡 (図 5・99:46) (Alexandrov 1994; 1995)

ストルマ川上流の左岸にひろがる低い台地上に位置する集落遺跡である。小規模の発掘調により新石器時代と青銅器時代の文化層が検出された。青銅器時代層は連続した5つの層に区分され、最下層の第5層はチェルナヴォダ III 期に、上層4層が前期青銅器時代に比定されている⁷²。

第4層から内弯浅鉢と屈曲部をもつ浅鉢の刻線による多条鋸歯文と多条垂線文の土器が出土している (図 79:1~6)。第3層では第4層から引き続き認められる刻線による多条鋸歯文と多条垂線文のほかに、円形刺突文および刺突文と多条短線状刺突文の組み合わせが見られる。さらにダイスの5の目に似た刺突文様 (ダイス文) もある (図 79:7)。第2層は口縁部や屈曲する胴部に斜格子帯状刻線文の施文される浅鉢 (図 79:11~14) と、口縁部内面に鋸歯文および鋸歯状無文帯の配される浅鉢 (図 79:15~18)、口縁部外面に施文される斜格子充填帯状文 (図 79:19, 20)、菱形ネガティブ文 (図 79:21) によって特徴づけられる。第1層からは斜格子充填と刺突による方形文を入れ子状にした市松文の施された大型土器が出土している (図 79:22)。

第4層の刻線による多条垂線文の施された浅鉢はエゼロ III 期の指標と特徴が類似するものの、第2~1層にはユナツィテ遺跡 13~9 層やダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層の類例があるため、すくなくともこれらの層はエゼロ II 期の段階かそれ以前に位置づけられる。

②ヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡 (図 5・99:48) (Геннадиева 2001)

エレシュニツァ川左岸に立地する平地型集落遺跡である。調査により厚さ 2.2m の文化層は 7

⁷¹ ニコロヴァは黒海西岸域の土器群をエゼロヴォーソゾボル・グループと称している (Nikolova 1999, 207ff.; 231)。

⁷² 第4層は出土土器をもとに任意に設定された層であり、層位学的に区分されたものではないと指摘されている (Alexandrov 1994, 118)。

つに分けられ、その内訳は最下層の1~4層は新石器時代、5~6層が銅石器時代、7層が前期青銅器時代とされている。

7層から次の土器が出土している。それは口縁部内面に凹線による斜線文の施された小型鉢(図 80:1, 2)、外反する端部をもち、口縁部に多条斜位刻線文の施文される内弯浅鉢(図 80:3)、口縁部外面に凹線文が縦位に施される内弯浅鉢(図 80:4, 5)、胴部に凹線文をもつ鉢(図 80:6, 7)、口唇部に刺突文とやや内反する口縁部をもつ深鉢(図 80:8)、そして横位の短い凸帯文をもつ口縁部が直線状に開く深鉢(図 80:9, 10)である。

7層資料中にはエゼロ I 期の指標である凹線文が認められることから、当該遺跡 7層はエゼロ I 期に併行する。

③ネヴェスティノ遺跡 (Невестино) (図 5・99:47) (Генадиева 1994)

キュステンディル盆地の北部、ストルマ川上流左岸でやや傾斜する段丘面上に立地する。工事中に偶然、遺跡の存在が明らかになった。調査の結果、厚さ 1.9m の文化層に前期青銅器時代と中世の資料が包含されていた。前期青銅器時代層は厚さ 0.6mを測る。

公表された資料は限定的であり、かつ特徴的な土器も数えるほどしかない。そのなかで斜格子充填文の土器が認められる(図 81:4)。この種の装飾はラドミル・ヴァホヴォ 2層に見られることから、ネヴェスティノ遺跡資料はエゼロ II 期に併行するものと考えられる。

④ペルニク・クレポスタ遺跡 (Перник Крепостта) (図 5・99:45) (Радунчева 1981)

ペルニク平原のクラクラという高台に位置する集落遺跡である。当該遺跡では新石器時代の集落から古代の城塞および中世の集団墓が確認されている。先史集落址は遺跡東部で検出されたものの、その文化層は古代および中世の遺構によって攪乱されているため、出土資料は一次的な層位情報が失われている。

ペルニク・クレポスタ遺跡の資料には、微細刺突列による懸垂文の施された土器(図 82:9, 10)、孔列文土器(図 82:11)をはじめ、斜格子充填の帯状文、市松文、三角文(図 82:2~4)、斜格子充填帯状文とその間に配置される鋸歯文の組み合わせ(図 82:5)、斜格子充填三角文と逆三角文と円形刺突を伴う菱形ネガティブ文の組み合わせ(図 82:6)、口縁部に施される 2 段の多条刺突列文(図 82:7, 8)が認められる。このほかに、連続短線状刺突文による市松文と帯状文の組み合わせをもつ鉢(図 82:1)と、円形浮文を列状に配した装飾をもつ土器(Радунчева 1981, обр. 33:1)、そして双耳状把手付カップも発見されている(図 82:12, 13)。

上記の土器にはエゼロ I~II 期、および IIIb 期の指標がみとめられることから、ペルニク・クレポスタ遺跡はエゼロ I~II 期、IIIb 期に併行すると考えられる。

⑤ **ホトヴォ遺跡** (Хотово) (図 5・99:49) (Alexandrov & Gotzev 1990; Grębska-Kulowa & Kulow 2007)

丘陵の傾斜面上に位置する平地型集落である。緊急調査の際に厚さ 1.2m の文化層から前期青銅器時代資料が検出された。ホトヴォ遺跡では前期青銅器時代層は 3 層に区分されているが、各層の土器は同様の特徴を呈している。

ホトヴォ遺跡の土器は刻線文が特徴的である。とくに鋸歯文、斜格子帯状文、刺突充填三角文が浅鉢の口縁部内面と外面、S 字断面をもつ鉢の胴部屈曲部、深鉢口縁部に施されている (図 83:1~9)。その他には胴部に斜格子帯状文、短線状刺突文と鋸歯文および円形刺突文の組み合わせや菱形文も装飾されている (図 83:10~13)。これらの刻線文や刺突文はエゼロ II 期に対応する。

⑥ **コヴァチェヴォ遺跡** (図 5・99:50) (Grębska-Kulowa & Kulow 2007, Kulov 2011; Lichardus-Itten et al. 2002)

ピリン山地の南西側、カトゥンスカ・ビストリツァ川右岸に立地する平地型集落遺跡である。ブルガリア-フランス隊による発掘調査により、大きく 3 つの層に区分された。最下層の I 層が前期新石器時代、II 層が後期新石器時代、そして III 層が前期青銅器時代に比定されている。

コヴァチェヴォ遺跡では凹線文をはじめ、多様な刻線文、刺突文、貼付文をもつ土器が出土している。具体的には以下のような資料が認められる。口縁部および胴部外面に施文される凹線文土器 (図 84:1~8)、肥厚口縁内面に多条鋸歯文の施される小型鉢 (図 84:9~11)、口唇部に刺突文をもち、口縁部が内弯する深鉢 (図 84:12)、短い凸帯をもつ深鉢 (図 84:13)、肥厚口縁内面に斜格子充填三角文が施文される小型鉢 (図 84:14)、口縁部に有孔突起、胴部に斜格子充填三角文と鋸歯状ネガティブ文の装飾要素を持つ土器 (図 84:16)、短線状刺突文 (図 84:16~18)、刻線を不規則に施した装飾 (図 84:19)、刺突を方形に配した市松文 (図 84:20) である。

上記の内容からコヴァチェヴォ遺跡 III 層の資料はエゼロ I~II 期に併行すると考えられる。

ブルガリア西部・南西部の土器群は、おもにエゼロ I~II 期併行に位置づけられる (表 8)。エゼロ I 期併行の特徴は凹線文であり、内弯浅鉢や屈曲胴部に施される縦線文はこの地域を特徴付ける文様である。その一方で、微細刺突懸垂文や孔列文、肥厚口縁部内面に多条鋸歯文をもつ開口浅鉢が上トラキア平野西部と、口縁部に短い凸帯のつく開口または内反口縁の深鉢がエーゲ海

北岸域との関係を示す資料として認められている。

ブルガリア西部・南西部では上トラキア平野西部と類似した幾何学刻線文が見受けられる。具体的には、口縁部の単条鋸歯文、胴部に配される斜格子帯状文、口縁部内面の斜格子充填帯状文や三角文のほかに斜格子充填市松文、鋸歯状および菱形のネガティブ文である。さらにこうした刻線文とともに、上トラキア平野には認められない外来系装飾として単線状刺突文、ダイス文、円形浮文が出現する点もこの地域の特徴である。

双耳状把手付カップが、詳しい層位的な情報は不明であるものの、ペルニク・クレポスタ遺跡から数点出土している。この地域で唯一、エゼロ III 期と併行することを示す発掘資料である。

5. 1. 5. ブルガリア北東部

1) 集落遺跡

① トウトラカン遺跡 (Тутракан) (図 5・99:51) (Alexandrov et al. 1998)

ドナウ川右岸に立地する平地型集落である。調査の結果、第 2 調査区 (30 m²) で前期青銅器時代遺構 (2 号遺構) が検出されている。2 号遺構から、棒状刺突具で口縁部を内側から丸く打ち出した装飾をもつ深鉢 (図 85:1, 2) と、外反口縁に縦位ループ状把手のつく浅鉢が出土している (図 85:3, 4)。大型の粗胴深鉢も 1 点確認されている (図 85:5)。前者 2 点の土器は上トラキア平野や黒海西岸域の土器群に類するものは認められない。粗胴深鉢も認められるが、外反口縁に縦位ループ状把手のつく浅鉢はダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓から出土していることから、トウトラカン遺跡資料はユナツィテ遺跡 8~1 層と併行する。

2) 埋葬遺跡

① マダラ墳丘墓群遺跡 (Мадара) (図 5・99:52) (Панайотов 1989)

マダラ村北の高台に位置する墳丘墓群である。6 基の墳丘墓から構成されており、そのうち 4 基が部分的に発掘された。各墳丘の規模は径 18~24m、高さ 1~3.6m を測る。各墳丘墓から検出された前期青銅器時代の埋葬址は 1 号墳で 4 基、2 号墳で 2 基、3 号墳で 5 基、4 号墳で 4 基を数える。このなかで土器を副葬している埋葬址は、1 号墳 1 号墓、3 号墳 3 号墓と 4 号墓、4 号墳 1 号墓である。

1 号墳の最上層に位置する 1 号墓からは水差しと思われる土器が出土している (図 86:2)。3 号墳で副葬品を伴う埋葬址はいずれも盛り土中から検出されており、3 号墓から口縁部と底部の縁に刺突文が施文された深鉢 (図 86:3)、4 号墓から肩部に逆三角形の刺突文の施された広口壺 (図

86:4) が出土している。4号墳1号墓からは縦位に穿孔された突起のある鉢が出土している(図86:1)。

上述した資料のうち類例を確認することができるのは3号墳4号墓の広口壺であり、これはエゼロヴォⅡ遺跡に器形、装飾ともに類似した土器をみてとることができる(Tončeva 1981, fig. 21:4)。したがって、この資料はエゼロⅡ～Ⅲ期に併行すると考えられる。

②カルゲリツァ墳丘墓群遺跡(Калугерица)(図5・99:53)(Панайотов 1989)

カルゲリツァ村から北東4kmの低い台地のうえに立地する墳丘墓群である。1列に並ぶ7基の墳丘墓から構成される。1934年の発掘により、第1号墳と第3～7号墳が調査された。各墳丘の規模は径20～30m、高0.4～2.5mを測る。各墳丘墓から検出された前期青銅器時代の埋葬址は3号墳が4基、4号墳が2基、5号墳が8基、6号墳が1基、7号墳が2基、8号墳が1基である。このうち埋葬址から土器が出土したものは、5号墳を構成する3基の埋葬址である。

2点の単純口縁の深鉢は5号墳のなかでも上層に位置する1号墓と4号墓から火葬人骨を納めた容器⁷³として検出されている(図87:1, 2)。6号墓の小型土器(図87:3)とともに、エゼロヴォⅡ遺跡に類例を認めることができる(Roman et al. 1992, taf. 39:4～7; Tončeva 1981, fig. 12:2, 5)。このことから上記の副葬品はエゼロⅡ～Ⅲ期に併行すると考えられる。

③プラチドルⅠ墳丘墓群遺跡(Плачидол)(図5:54)(Панайотов 1989)

この墳丘墓群では緊急調査により、6基の墳丘墓のうち1～5号墳が発掘された。各墳丘の規模は径24～55m、高1.0～7.3mを測る。墳丘墓から検出された前期青銅器時代の埋葬址は1号墳で5基、2号墳で9基、3号墳から5号墳でそれぞれ1基ずつを数える。

この墳丘墓群は1号墳から車輪の圧痕が見つかったことでよく知られているが、土器の副葬が確認された埋葬址は2号墳7号墓に限られている。ここからは銀製渦巻き状装飾品、フリント製石刃とともに水差しが1点出土している(図88)。この水差しは年代的位置付けを示す特徴に乏しいため、詳細な年代付けは困難である。

ブルガリア北東部には上トラキア平野東部とのあいだに土器の類似関係はほとんど認められない(表9)。唯一の集落遺跡であるトゥトラカン遺跡では、円形打出文や外反口縁に縦位ループ状

⁷³ ルーマニアのインデペンデンツァ墳丘墓(Independența)4号墳4号墓から類例が認められる(Roman et al. 1992 taf. XVII: 4)。

把手をもつ浅鉢が出土している。ブルガリア北東部の墳丘墓では水差しや壺、深鉢が副葬されており、そのなかには黒海西岸域、とくにヴァルナ沿岸域との類例が認められた。

5. 1. 6. ブルガリア北部

1) 集落遺跡

①ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡 (Джулюница Смърдеж) (図 5・99:55) (Еленски 2006; 2012)

スレドナ・ゴラ北麓、ヤントラ川中流域に立地する平地型集落である。集落址のすぐ西隣に銅石器時代のテル型集落が位置している。小さな調査区を幾つも設置して行われた学術調査により、地表面下 0.4~0.9m 地点で前期青銅器時代層が確認されている。

出土資料中に上トラキア平野に典型的な刻目文と孔列文の組み合わせをもつ深鉢と、刻目凸帯文のある深鉢が認められている (Еленски 2012, обр. 2)。孔列文土器が出土した地点とは異なる調査区からアスコス (図 89:1) と下部がやや張り出した細身の胴長丸底カップが出土している (図 89:2)。アスコスは胴部上半に貼付文を有している。把手側が半欠し、全体的な形態は明らかではないが、残存する注ぎ口側の断面は胴部がやや張り出している点が特徴的である。長胴丸底カップに関しては丸底カップという器形そのものがエゼロ III 期にひろく分布する器形としてみなされる。ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡資料はエゼロ I 期とエゼロ III 期に併行するものと思われる。

②オスマンキン・ドル遺跡 (Османкин Дол) (図 5・99:56) (Илчева 2002)

涸れ谷に立地する平地型集落遺跡である。緊急調査 (210 m²) により、2 枚の建築層からなる厚さ 1m の文化層が検出された。報告では文化層の資料がまとめて記載されており、出土土器をもとに前期青銅器時代と中期青銅器時代に比定されている (Илчева 2002, 30f.)。

オスマンキン・ドル遺跡ではキリロヴォ・カップ (図 90:1, 2)、肥厚口縁内面に施文された多条鋸歯文 (図 90:5)、突起付把手 (図 90:3, 4, 10, 11)、こぶ状貼付と刻目凸帯文の組み合わせ (図 90:8, 9)、擬トンネル状把手 (図 90:6)、盤状浅鉢 (図 90:7) が出土している。キリロヴォ・カップはエゼロ III 期の特徴であるが、それ以外の要素は少なくともエゼロ II 期まで遡る可能性がある。とくに盤状浅鉢はエゼロ II 期併行の資料であることから、オスマンキン・ドル遺跡資料はエゼロ II~III 期に比定されると考えられる。

③ムセリエヴォ・モレニツァ洞窟遺跡 (Муселиево Моленица) (図 5・99:57) (Гергов 1979)

オサム川右岸のカルスト台地に位置する洞窟遺跡である。洞窟の規模は奥行き 37m、幅 3m、天井までの高さ 2.2m を測る。洞窟内部での調査により後期銅石器時代（第1層）と前期青銅器時代（第2層）の文化層が検出された。第2層から口唇部に刻目文をもつ深鉢や刻目文と孔列文の組み合わせのある深鉢が出土している（Гергов 1979, обр. 6）。また、上層の攪乱層からはマルテペ・カップに類した丸底カップが完形の状態で認められた（Гергов 1979, обр. 9:6）。報告者はこれを後期青銅器時代に比定しているが、前期青銅器時代に属する可能性が高い。上トラキア平野の事例に鑑みて、第2層の孔列文土器はエゼロ I~II 期に、丸底カップは同 III 期に位置づけられる。

④デヴェタキ洞窟遺跡（Деведаки）（図 5・99:58）（Миков & Джамбазов 1960）

オサム川中流域左岸に位置する洞窟遺跡である。開洞部は幅 35m、高さ 30m を測り、奥行きは最長で 2km におよぶ。数回にわたる発掘調査をつうじて、中期旧石器時代から鉄器時代の資料が発見された。青銅器時代層は洞窟の中腹に設定された調査区（200 m²）から検出されている。当該期の文化層（1.2m 厚）は、灰・炭層を境に上層の後期青銅器時代層と下層の前期青銅器時代層に分けられた。

下層から把手部分が欠損しているキリロヴォ・カップ、双耳状把手付カップ、平口縁で胴長の丸底カップ、突起付き把手が出土している（図 91:2~4）。上層でも一部で、単一把手付のユナツィテ・カップ（図 91:1）と、底部近くに屈曲部をもつ水差しが認められた（図 91:5）（Roman 1976c, abb. 4:10）。この上下層の土器はエゼロ III 期と併行すると考えられる。

2) 埋葬遺跡⁷⁴

①バティン平地型集団墓遺跡（Батин）（図 5・99:59）（Станчев 1989）

⁷⁴ ブルガリア北部のロヴェチュ遺跡（Ловеч）から 1 基の埋葬址が検出されている（Китов & Павлов 1973）。キトフらは副葬品をもとにこの埋葬址を中期青銅器時代に比定したのに対し（Китов & Павлов 1973, 7）、ニコロヴァとアレクサンドロフは副葬品から前期青銅器時代第 3 段階という年代案を引き出している（Alexadrov 1998, 223; Nikolova 1999, 234）。一方、レシュタコフはブルガス沿岸域に位置するデベルト集団墓遺跡（Debelt）の年代的考察のなかでロヴェチュ遺跡の副葬品をとりあげ、これをデベルト資料と併行する中期青銅器時代に位置づけた（Leštakov 1995, 43）。

キトフらはこの埋葬址の残存状況が粗悪であったため正確な遺跡形態については言及していないが、集団墓が営まれていた可能性を指摘している（Китов & Павлов 1973, 8, ft.1）。それに対し、ニコロヴァは土坑上で検出された葺石をもとに、埋葬址を墳丘墓とみなした（Nikolova 1999, 64, 234）。この埋葬址にはイヌの陪葬が認められる点で前期青銅器時代の墓制としては異例である。副葬品としてやや丸みのある尖底カップ、外反口縁をもつ縦位ループ状把手付壺、トンネル状把手が内屈口縁部につく浅鉢、中央に鎬をもつ青銅製短剣、短剣の柄に用いる金製の銚、金製の渦巻状リングが出土している（Китов & Павлов 1973, 4ft.）。尖底カップそのものは前期青銅器時代に製作された可能性が残されているものの、青銅製短剣など他の副葬品やイヌの陪葬といった要素は前期青銅器時代よりも新しい時期に比定しうるものであると考え、本論文の対象からロヴェチュ遺跡を外している。

ドナウ川右岸の段丘面に立地する平地型集団墓遺跡である。緊急調査により 93 基の中世の埋葬址、古代の城塞、4 基の火葬墓とともに 11 基の前期青銅器時代埋葬址が発見された。埋葬址は土壙墓の形態をとり、8 号墓（合葬）をのぞき、単独葬である。埋葬址間で切り合い関係は成立していない。5 基の埋葬址から副葬品が認められ、そのうち 4 基（1、4、8、9 号墓）から 1 点ずつ土器が出土している。4 点ともに注ぎ口が把手側から鋭くたちあがる水差しであり、そのうち 3 点はやや張り出した丸みのある胴部により特徴づけられる（図 92）。

ブルガリア北部では、上トラキア平野と共通する特徴をもったアスコスと孔列文土器をはじめ、盤状浅鉢、擬トンネル状把手、突起付把手水差し、そして各種カップ類が検出されており、上トラキア平野とのつながりがうかがえる（表 10）。一方、この地域で唯一の平地集団墓であるバティン平地型集団墓から副葬品として水差しが出土しているが、ブルガリア地域にこの類例は認められない。

5. 1. 7. ブルガリア北西部

1) 集落遺跡

①サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡（Садовец Големаново Кале）（図 5・99:60）（Todorova 1968; 1992）

ヴィト川右岸に立地する平地型集落遺跡である。古代の城塞址を対象にした発掘調査の際に検出された文化層は 4 層に区分された。そのうち下層の 2 層と上層の 3 層が前期青銅器時代に比定された。2 層からは、刻目文および刻目文と孔列文の組み合わせをもつ深鉢（図 93:1~4）、凹線文（図 93:11）や刻線による斜線充填帯状文（図 93:5, 6）と羽状文（図 93:7）の施文された浅鉢や鉢などが出土している。3 層からユナツィテ・カップ（図 93:12）、細身の胴長カップ（図 93:13）、方形把手をもつ浅鉢（図 93:14）が出土している。2 層の土器は凹線文、3 層はユナツィテ・カップの存在からそれぞれユナツィテ遺跡 17~15 層と 8~1 層に併行するとみてよい。

②サドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡（Садовец Езеро Кале）（図 5・99:61）（Merkyt 2007; Гергов 2009）

ベリルカ川左岸にひろがる石灰岩の丘陵の縁に立地する集落遺跡である。当該遺跡での緊急調査はエゼロ地区とカレ地区に分かれて実施され、エゼロ地区では厚さ約 3m の文化層が検出された。8 層の建築層からなる文化層の内訳は、第 1~5 層が銅石器時代、第 6 層が「移行期」、第 7 層が前期青銅器時代、第 8 層が後期古代である。エゼロ地区からの出土資料はわずか少量である

が、報告によるとその内容はカレ地区出土の前期青銅器時代資料と同様であったとされている。

カレ地区では約 100mの弧状に展開した石罫遺構 (emplecton) が確認されており、その北東部が発掘された。調査を通じて刻目文と孔列文の組み合わせと刻線文を有する前期青銅器時代の土器が出土している。前者の刻目文と孔列文の組み合わせは深鉢に (図 94:3, 4)、刻線による斜線充填帯状文、羽状文、多条鋸歯文は把手や水差しなどに施文されている (図 94:6~10)。サドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡の資料は、サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡の事例からユナツィテ遺跡 17~14 層に併行する。

③レピツァ遺跡 (Лепица) (図 5・99:62) (Hristov & Hristova 2004)

バラタ川右岸の丘陵部に立地する集落遺跡である。小規模の発掘が行われたところ、前期・後期銅石器時代と前期青銅器時代の文化層が認められた。厚さ 15~30cm の前期青銅器時代層からユナツィテ・カップ (図 95:1, 2)、白色象嵌された斜格子充填刻線文と中央に円形刺突を伴う環状刻線文の施された T 字状口縁をもつ浅鉢 (図 95:3, 4)、突起付き把手、凸帯文把手、注口付土器が出土している (Hristov & Hristova 2004, 101)。ユナツィテ・カップの存在からレピツァ遺跡の資料はユナツィテ遺跡 8~1 層に併行する。

④バガチナ遺跡 (Багачина) (図 5・99:63) (Alexandrov 2007; Бонев & Александров 1993)

ロム川右岸の第 1 段丘面に立地する遺跡である。発掘調査の結果、後期銅石器時代、「移行期」、青銅器時代の資料が発見された。前期青銅器時代の資料は他の時期の資料と混在するかたちで出土しており、層位的コンテクストは良好ではない。

バガチナ遺跡からは、刻線文、凸帯文、円形浮文、刺突沈線文⁷⁵の施された土器が多数出土している。具体的には、口縁部の羽状刻目文とそこから垂下する刻目凸帯文をもつ鉢 (図 96:1, 2)、2 条の円形浮文と袈裟懸文をもつ水差し (図 96:3)、胴部下半に刻線文が施された扁平高ループ状把手付の丸底カップ (図 96:4)、胴部に多条鋸歯文の施されたアスコス (図 96:5)、多条縦位刺突沈線文 (図 96:6)、肩部に円形浮文、胴部に刻線による幾何学文の文様構成 (図 96:7~9)、三角形刺突列による逆三角文 (図 96:10) が認められる。このほかに斜格子充填三角文の施された方形把手をもつ浅鉢 (図 96:11)、同様の装飾をもつ T 字状口縁部をもつ浅鉢 (図 96:12)、ユナツィテ・

⁷⁵ Furchenstich とよばれる施文方法である。上トラキア平野東部の押引文に近い施文方法だが、それより深く細い線で施文されることから、本論では「刺突沈線文」と呼称する。これはコストラツツ文系土器に典型的な施文法であると指摘されている (Nikolić 2000, 50)。

カップ（図 96:13, 14）、そして外反口縁または T 字状口縁部に縦位ループ状把手をもつ浅鉢（図 96:15, 16）、突起付方形把手をもつ浅鉢（図 95:17）が出土している⁷⁶。

バガチナ遺跡の土器群にはコストラツツ II 期の刺突沈線文、コツォフェニ II～III 期の土器の特徴、ユナツィテ・カップが認められることから、ユナツィテ遺跡 13～1 層に併行する。

⑤ マグウラ洞窟遺跡（図 5・99:64）（Джанбазов & Катинчаров 1974; Йоцова 1981）

石灰岩のラビシヤ丘陵南側の傾斜地に位置する洞窟遺跡である。発掘調査より 5 枚の建築層からなる文化層が検出され、そのうち下層 3 層が前期青銅器時代層（厚さ 0.6m）に該当する。

マグウラ洞窟では 3～1 層から沈線による羽状文と魚骨文の把手（図 97:1, 2）と、沈線による袈裟懸け文（図 97:3）、断面形が扁平の高いループ状把手をもつ丸底カップ（図 97:4, 5）、円形浮文（図 97:7, 8）、そして刻線文としては横位羽状文（図 97:9）、肥厚口縁部内面に施文される縦線文（Йоцова 1981, обр. 4:в）と目の粗い斜格子充填带状文（Йоцова 1981, обр. 6:а, ж）が見受けられる（Roman 1976a, Pl. 92:2, 4, 6; 99:9～11）。このほかには円形刺突による市松文が胴部に施文されたアスコスが完形に近い状態で発見されている（図 97:10）。

前期青銅器時代層の資料はおもにコツォフェニ II～III 期の特徴を示していることから、ユナツィテ遺跡 13～9 層と同時期に比定される

⑥ グラデツ・スリナティヤ・ブレク遺跡（Градец Суринатия Брег）（図 5・99:65）（Йоцова 1988）

スリナティヤ・ブレク地区にある高台に立地する集落遺跡である。発掘調査により、4 枚の建築層からなる厚さ 1m の文化層が検出された。各層から出土した土器は同一の特徴をもつとされている（Йоцова 1988, 13）。

すべての建築層から 1 条の円形浮文が出土している。また上層の 1 層と 2 層からは刻線あるいは刺突による市松文様が認められる（Йоцова 1988, обр. 11）。2 層と 3 層からアスコス、2 層から丸底カップ、層位は不明だが、断面が扁平で、高い把手をもつ丸底カップ（Йоцова 1988, обр. 4:б）が出土している。これらの資料から各建築層から出土した資料はユナツィテ遺跡 13～9 層と併行する。

⁷⁶ バガチナ遺跡ではグリナ IV 期の土器として双耳状把手付カップと想定される資料もとりあげられている（Alexandrov 2007, pl. X:4, 7）。図示された資料は把手がつく片側の破片しか残存していないため、把手が 2 つつくかどうか定かではないが、断面形から器形が判断されているものと推測される（Alexandrov 2007, 229）。

2) 埋葬遺跡

①タルナヴァ墳丘墓群遺跡 (Търнава) (図 5・99:66) (Панайотов 1989)

20 基の墳丘墓から構成された墳丘墓群である。これまでに 1～3 号墳が発掘された。各墳丘の規模は径 12～23m、高さ 0.5～3.5m を測る。前期青銅器時代の埋葬址は 1 号墳に 10 基、2 号墳に 1 基、3 号墳に 2 基検出された。このうち土器を副葬した埋葬址は 1 号墳の 8 基 (1～5、9、10 号墓)、2 号墳の 1 基 (1 号墓) である。

1 号墓と 5 号墓から形態、装飾ともに特徴が酷似した壺が 2 点出土している (図 98:1, 6)。5 号墓からは高台と縦位ループ状把手をもつ土器が共伴していた (図 98:5)。2 号墓と 7 号墓では口縁部に刺突列文の施された浅鉢 (図 98:2, 7)、3 号墓では刻線文の施されたアスコス (図 98:3)、4 号墓から斜線充填逆三角文をもつ深鉢 (図 98:4)、9 号墓では水差し (図 98:8)、10 号墓では浅鉢 (図 98:9) が 1 点ずつ副葬されていた。2 号墳 1 号墓では骨壺として土器が 1 点確認されている。この墓址には火葬人骨が埋葬されており、骨は縄目文深鉢のなかから検出された (図 98:10)。副葬品にはコツォフェニ II～III 期の特徴を持つ土器が認められることから、ユナツィテ遺跡 13～9 層と併行する。

ブルガリア北西部のヴィト川流域では孔列文をもつ外屈深鉢、刻線による斜線充填帯状文と羽状文、そして凹線文が認められた (表 11)。これらの要素は上トラキア平野の事例と対比するとユナツィテ遺跡 17～14 層平行段階に位置づけられた。一方、その次の段階にはヴィト川以西で一部ブルガリア西部・南西部でも認められた円形浮文、羽状刻目文、刺突沈線文、高い扁平把手付丸底が見つかった。またこうした要素の一部と縄目文土器がタルナヴァ墳丘墓⁷⁷でも看取された。さらに上トラキア平野西部のユナツィテ遺跡 8～1 層段階で認められたユナツィテ・カップ、方形把手付土器、外反口縁または T 字状口縁および縦位ループ状把手もつ浅鉢が北西部域でも分布しており、両地域の関係性を示している。

5. 2. 各地域における土器の年代的位置付けと地域性

第 II 部第 3 章と第 4 章で上トラキア平野東部のデャドヴォ遺跡とエゼロ遺跡を基礎資料として、

⁷⁷ タルナヴァ墳丘墓の北、ドナウ川下流域にハルレツ墳丘墓 (Хърлец) が位置する。B.ニコロフによって調査されているものの、埋葬址に関する調査情報はほとんど提示されていない。パナヨトフによると、1 号墓とされる墓址から 1 点の水差しが出土している (Панайотов 1989, обр. 151)。水差しの年代に関してはこれまで前期青銅器時代第 2 段階 (Nikolova 1999, 63, 383) と同第 3 段階 (Alexandrov 1998, 225) の 2 つの案が示されている。いずれも前期青銅器時代に属するといふ所見であるが、公表資料が限られているため本論文の検討していない。

前期青銅器時代を3時期6段階に区分し、本章第1節でブルガリア各地の前期青銅器時代土器の基本的な特徴についてみてきた。第2節では第4章で示した指標資料をもとに各地域の土器を比較し、遺跡資料の編年的位置付けと地域性について検討する(表12)。

5. 2. 1. 上トラキア平野東部

上トラキア平野東部でエゼロI期のみの指標資料を有する遺跡は、デヤドヴォ、エゼロ両遺跡を除くと、カラノヴォ遺跡 VIIa 層、オフチャリツァ II 遺跡、ベレケツカ・モギラ集団墓遺跡、ゴリヤマ・デテリナ2号墳、ゴリヤマ・デテリナ4号墳である。カラノヴォ遺跡では第1次調査と第2次調査をつうじて VIIa 層から微細刺突文、凹線文、アスコス、外屈深鉢、縄目文小型鉢が出土している(図35:1~5; 図36:1~18)⁷⁸。外屈深鉢と縄目文小型鉢はエゼロI期とII期に見受けられるが、そのほかの土器要素はエゼロI期のみ認められることから、VIIa層はエゼロI期に年代付けられる。

第2次調査の土坑資料についてヒラーは第1次調査資料との対比が困難であると述べながら、第1次調査の VIIa 層と時期的に併行するという考えを示した(Hiller 1997, 346)。その一方でデヤドヴォ、エゼロ両遺跡の土器群を代表する孔列文が確認されていない点についてとくに言及していない。ニコロヴァはカラノヴォ遺跡における孔列文土器の不在を系統の関係か、時期差か、あるいは調査で偶然発見されなかったという3つの可能性を示している(Nikolova 1999, 195; 2000b, 207)。第2次調査で検出された2基の土坑⁷⁹はけっして小型であるとはいえないことから、第3案を否定的に捉えるには十分な証拠であると言える。それゆえ、この件については系統差と時期差の可能性が残されるのだが、これは表裏一体をなす問題であり、かつエゼロI期における土器群の成立過程と密接に関わる問題でもある。微細刺突文、凹線文、外屈深鉢、アスコスの存在を考慮すると、第2次調査資料はエゼロIa期に位置づけられる可能性が高い。ただし、この点については次章でエゼロI期以前の土器と対比し、あらためて検討することとする。

ベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡からは、埋葬遺跡としては比較的まとまった数のエゼロI期の指標資料が出土している。なかでも微細刺突懸垂文とアスコス(図55:3, 5, 10~12; 図56:1)はデヤドヴォ遺跡 XVI 層(図13:13)、エゼロ遺跡 13~12層で見受けられ、遺跡間の同時性をよく表している⁸⁰。さらにベレケツカ・モギラ平地型集団墓ではエゼロI期の指標資料(微細刺突文、

⁷⁸ ヒラーは微細刺突文と凹線文が編年的指標として重要だという認識を示している(Hiller 1997, 347)。

⁷⁹ 土坑Bは径1.6m、深さ0.8m、土坑Hは径0.75m、深さ2.8mを測る(Hiller 1997, 324ff.)。

⁸⁰ P.カルチェフはベレケツカ・モギラ集団墓遺跡における埋葬址の年代的検討について、エゼロ遺跡をもとに埋葬資料

アスコス) がそれとは別の特徴をもつ土器と共伴しており、編年学的検討に有効な手がかりを与えてくれる。具体的には、25号墓の縦位ループ状把手が外反口縁につく浅鉢(図55:6)、72号墓と73号墓の有孔舌状把手付き内弯浅鉢(図56:2, 4)、77号墓の有孔舌状把手付き内弯浅鉢と1つの舌状把手をもつ内弯浅鉢(図56:9, 11)である。この関係をもとに40号墓の縦位ループ状把手と有孔舌状把手をもつ浅鉢をはじめ、その他の埋葬址(例えば12号墓、16号墓、17号墓、28号墓、32号墓など)をエゼロI期に比定することが可能となる。

ゴリヤマ・デテリナ2号墓の年代的な位置付けに関しては、ベレケツカ・モギラ平地型集団墓で認められたエゼロI期の指標資料と共伴していた土器から紐解くことが可能である。ゴリヤマ・デテリナ2号墳で層位的に3つのグループに分けられた埋葬址の副葬品をベレケツカ・モギラ集団墓遺跡の資料と対比すると、いずれのグループもエゼロI期⁸¹に年代付けられる(cf. Лещаков & Попова 1995, 69)。具体的には、第1グループの34号墓から水差しと口縁部に1つの舌状把手をもつ内弯浅鉢が、33号墓から有孔舌状把手付きの内弯浅鉢が、そして31号墓から舟形土器と有孔舌状把手付きの内弯浅鉢が出土している(図58:1~5)。第2グループの19号墓では微細刺突列による鋸歯文をもつ浅鉢が、24号墓では舌状把手付浅鉢と類似した浅鉢が認められている(図58:6~9)。第3グループの12号墓は、副葬された大型土器の底部(図58:11)によって黒海北岸ステップ地帯のカタコンベ文化(紀元前3千年紀後半)と関連づけられ、前期青銅時代終末に比定されている(Кънчев 1995, 37)。しかし、レシュタコフらも指摘しているように(Лещаков & Попова 1995, 72)、底部の存在だけでこの関係性を論じるには証拠として十分とはいえない。むしろ、第3グループの9号墓に第1グループの34号墓と第2グループの24号墓の副葬品と類似した舌状把手のつく内弯浅鉢が認められることから(図58:2, 10)、第3グループの埋葬址もまたエゼロI期に年代付けられると考えられる。このことを裏付けるように、エゼロI期より新しい時期の年代的指標となる明確な資料はゴリヤマ・デテリナ2号墳では見当たらない。以上のことからゴリヤマ・デテリナ2号墳の第1~3グループの埋葬址は、エゼロI期に年代付けられる。

ゴリヤマ・デテリナ4号墳の資料については、従来考えられてきたエゼロIII期という年代的な位置付けより古くなる可能性がある。この墳丘墓からは表5で取りあげた指標資料は確認されてい

をエゼロI期と併行させている(Kalčev 2002, 45)。そのなかで副葬品の土器を2つのグループにわけ、グループ間の違いを時期差として解釈している(Kalčev 2002, 39ff.)。具体的にはアスコスと微細刺突列による懸垂文はグループBとして本論でいうエゼロIb期に、舟形土器を含む土器群はグループAとしてエゼロIa期に併行させている。しかし、カルチェフは、アスコスと微細刺突懸垂文を年代的指標としてとくに重視していない(Kalčev 2002, 44)。また舟形土器はエゼロIa~IIa期にかけて認められるにもかかわらず、それをIa期の指標とし、グループBより古く位置づけている。

⁸¹ カンチェフは30号墓をゴリヤマ・デテリナ4号墳最初の埋葬址とみなし、エゼロ遺跡13層より古くなる可能性を指摘している(Кънчев 1995, 37)。

ないものの、2号墓からゴリヤマ・デテリナ2号墳12号墓の資料(図58:11)に類した土器底部が出土している。2号墳12号墓に関してはすでにエゼロI期に年代づけたところだが、この底部片が4号墳2号墓を前期青銅器時代第3段階終末に比定される根拠となっている。しかし、調査報告者らが指摘するようにゴリヤマ・デテリナ2号墳12号墓との関係を考慮するならば(Лещаков & Борисов 1995, 11)、2号墓資料もまたエゼロI期に位置付けられる。

4号墳2号墓と同様に盛り土中から検出された3号祭祀遺構の縦位トンネル状把手をもつ深鉢(図60:1)は、調査報告ではノヴァ・ザゴラ・ツィガンスカ・モギラ遺跡VIII~VII層の土器と類似することからエゼロIII期初頭に年代付けられたが(Лещаков & Борисов 1995, 14)、エゼロI期に先行すると考えられる。前節で各地の前期青銅器時代の土器を概観したところ、横位につくトンネル状把手付の土器は数多く認められても、縦位につくタイプは認められなかった。このことから3号祭祀遺構出土の縦位トンネル状把手付深鉢はエゼロIII期特有の土器要素ではなく、むしろチェルナヴォダIII期の特徴を示している(図101:26)。3号祭祀遺構は1号祭祀遺構と4号墓とともに、層位的に4号墳のなかで最も古い5号墓と同じ層か、あるいは一段階新しい上層の遺構群に位置づけられ、かつ2号墓より下層に配されている(Лещаков & Борисов 1995, 13f)。この層位的見解によれば、エゼロI期に比定可能な2号墓の下層にある3号祭祀遺構に、エゼロIII期土器が副葬されていたとは考えにくい。このように各資料の年代的位置付けを従来の想定より古く捉えることで、3号祭祀遺構と層位的に同時期の1号祭祀遺構から出土した壺(図60:2)が、前4千年紀後半の後期トリポリエ文化と関連しているという報告者らの指摘(Лещаков & Борисов 1995, 12ff)も違和感なく受け入れられることとなる。

以上の検討をもとに4号墳2号墓資料はエゼロI期に、そして3号祭祀遺構の資料はエゼロI期以前に年代付けられる⁸²。このことは、4号墳の1号祭祀遺構をはじめ4号墓と5号墓がエゼロI期に先行することを意味する。さらには前期青銅器時代以前に上トラキア平野東部で墳丘墓が築かれていた可能性も浮上するわけだが、各墳丘墓の構築順についてはさらに詳細な分析が必要となる。

墳丘墓の事例として、モギラ墳丘墓のなかで層位的にもっとも古い30号墓について言及しておく。この副葬品の土器はエゼロIa期に併行すると指摘されている(Илиев & Бакърджиев 2006, 95)。報告にあるようにこの土器がS字浅鉢の特徴を呈するのであれば、その種の土器は上トラキア平野東部ではエゼロI~III期に認められるため、Ia期に限定することはできない。ただし、報告書

⁸² この土器の系統関係については第III部第6章で論じる。

での不鮮明な印刷のため詳細に検討することができないため (Илиев & Бакърджиев 2006, обр. 15; 16)、本論では報告者の年代観に従い、図 99 にはエゼロ Ia 期併行と表しておく。

オフチャリツァ II 遺跡ではエゼロ I 期の指標である凹線文が、壺ないし水差しの胴部外面に縦位ないし斜位に施文されている (図 40:3, 4)。エゼロ遺跡の S 字浅鉢口縁内面に施文される凹線文とは施文器形と部位の点で異なるが、施文技法が共通することからこの資料はエゼロ I 期に位置づけられる。またオフチャリツァ II 遺跡ではエゼロ II 期の指標である盤状浅鉢が出土していることから、遺跡の年代はエゼロ II 期まで下る。エゼロ I~II 期の指標である舟形土器、縄目文小型鉢、刺突充填幾何学文が出土している点もこの年代的位置づけと対応している。このことからオフチャリツァ II 遺跡はエゼロ I~II 期に年代付けられるであろう。

つづいて、エゼロ III 期まで認められる孔列文をのぞく、エゼロ I~II 期および II 期の指標だけを有する遺跡について検討する。これに該当するのはノヴァ・ザゴラ・ツィガンスカ・モギラ 8 層、ヴェセリノヴォ遺跡 II 下層、オフチャルツィ墳丘墓、ドラジェヴォ墳丘墓である。ノヴァ・ザゴラ・ツィガンスカ・モギラ遺跡では、エゼロ I~IIa 期の指標資料である幾何学文の施された小型鉢が出土している。8 層と上層の 7 層のあいだにはうすい間層が堆積していること、公表資料は限定的だが、ほかにエゼロ I 期の資料が認められていないことから、8 層資料はエゼロ IIa 期に位置づけられると思われる。

ヴェセリノヴォ・マレヴァ・モギラ遺跡 II 層下部とオフチャルツィ・ゴリヤマタ・モギラ墳丘墓の舟形土器、ドラジェヴォ 1 号墳の縄目文小型鉢は、それぞれエゼロ I~IIa 期および Ib~IIa 期の指標資料である。カルチェフは舟形土器を根拠にオフチャルツィ・ゴリヤマタ・モギラ墳丘墓をエゼロ Ia 期に (Kalčev 2002, 55)、バカルジエフらは縄目文小型鉢をもとにドラジェヴォ 1 号墳をエゼロ IIa 期に位置づけている (Бакърджиев 2005, 151)。しかし、対比可能な資料がほかに十分でないため、これらの指標のみでエゼロ Ia 期から IIa 期のいずれかの時期に限定することはできない。よって、各資料の年代はエゼロ I~IIa 期と Ib~IIa 期のあいだにおさまる。

つづいてエゼロ I~II 期、II 期、II~III 期の指標資料が出土している遺跡をみると、ポルスキ・グラデツ、ゴリヤマ・デテリナ、ズナメノセツ、ドラマ・カイリヤク、スヴィレングラット・ブランティーテ、メドニカロヴォ I 号墳 2 号墓、III 号墳 2 号墓と 2 号土坑、モギラ 9 号墓がある。ポルスキ・グラデツ・モギラ遺跡とゴリヤマ・デテリナ遺跡はともにエゼロ II 期に年代付けられる。これらの遺跡ではエゼロ I 期と III 期の指標資料が認められていない。ポルスキ・グラデツ・モギラ遺跡から孔列文深鉢と縄目文の内弯浅鉢が、ゴリヤマ・デテリナ遺跡からエゼロ II 期の指標である盤状浅鉢のほかに、エゼロ II~III 期の突起付把手と有稜水差しが出土している。とくに

ゴリヤマ・デテリナ遺跡ではうすい文化層堆積しか認められないことから、比較的短期間の居住が営まれていたと推測される。

スヴィレングラット・ブランティーテ遺跡の土器群は縄目文によって特徴づけられる。ただし、縄目文小型鉢(図 49:1)はデヤドヴォ、エゼロ両遺跡の小型鉢にくらべると、文様が単純である。施文部位も口縁部内面に限られていることから、遺跡間で正確な類似関係をみいだすことはできない。それよりも深鉢の多条横線文や浅鉢の垂線文、円形断面をもつ把手に施される多条斜線文はエゼロⅡ期でよく見受けられることから、当該遺跡資料はエゼロⅡ期に併行すると考えられる。くわえて刻線間に三角形刺突を列状に配した装飾は(図 49:18)、エーゲ海北岸域のシタグリ遺跡 Va 層とディキリ・タシュ遺跡ⅢB 層、トロイⅠ期(フェイズⅠc)で知られていることから(Blegen et al. 1950, fig. 241:20; Séfériadès 1996, fig. 6:4; Sherratt 1986, fig. 13. 13. 1, 8)、エゼロⅡ期資料がこれらエーゲ海沿岸域の遺跡資料と時期的に併行する可能性がある。

ドラマ・カイリヤク遺跡とズナメノセツ遺跡からは縄目文土器が出土している(図 43:4, 5; 図 54:1~4)。ドラマ・カイリヤク遺跡にはエゼロⅡb~Ⅲa 期に特徴的な多条横線文のみが、ズナメノセツ遺跡にはエゼロ遺跡 3 層に類例のある器高の高い土器に横位に施される 1 本の縄目文が認められる(Георгиев и др. 1979, таб. 196 тип 43)。このことからドラマ・カイリヤク遺跡はエゼロⅡb~Ⅲa 期にかけて、ズナメノセツ遺跡はエゼロⅢa 期に年代付けられる。

メドニカロヴォ墳丘墓群のⅠ号墳 2 号墓から出土した水差しは、調査者によって前期青銅器時代第 3 段階に比定されている(Панайотов & Александров 1995, 92)。水差しの把手はほぼ欠損しているため正確な年代付けは困難であるが、頸部と肩部のあいだに稜が認められることから、少なくともエゼロⅡb 期まで遡る可能性がある⁸³。Ⅲ号墳 2 号墓の副葬品には刻線文の施された小型鉢と片手付壺がある。小型鉢の類例はデヤドヴォ遺跡ではⅦ層に、エゼロ遺跡では 11 層と 7 層に(Георгиев и др. 1979, таб. 169 тип 15)、片手付壺に関してはエゼロ遺跡 6 層に類例があることから(Георгиев и др. 1979, обр. 185:г)、Ⅲ号墳 2 号墓はエゼロⅡ期に年代付けられる。2 号墓の上層から検出された 2 号土坑は、出土した有稜の小型水差しと刻目凸帯文をもつ水差しをもとにエゼロⅡb~Ⅲ期に併行する。このことからメドニカロヴォ墳丘墓群の各資料はおもにエゼロⅡ期を中心に構成されていると言える。

モギラ墳丘墓 9 号墓の突起付把手はエゼロⅡ~Ⅲ期の指標資料であるが、報告者らは把手がエ

⁸³ Ⅰ号墳 2 号墓は前期青銅器時代第 3 段階に年代付けられているが(Панайотов & Александров 1995, 92)、その論拠となる有稜の水差しは、把手を欠き、無文であるのに対し、類例にとりあげられた 3 点の水差しのうち 2 点は刻線文を(Fol et al. 1988, abb. 104; Кънчев 1973, обр. 55)、もう 1 点にいたっては口縁部から胴部にかけて滑らかな断面形を有しており(Катинчаров 1972, рис. 21)、両者が類似しているようにはみえない。

ゼロ遺跡5層より上層に認められると指摘している (Илиев & Бакърджиев 2006, 90)。しかし、この類似関係の根拠となる把手が報告のなかで図示されていないだけでなく、年代的位置付けの根拠として挙げたエゼロ遺跡資料の引用元も明らかにされていない (Илиев & Бакърджиев 2006, 90)。したがって、ここでは詳細な検討が困難であるため9号墓資料はエゼロⅡ～Ⅲ期に年代付けておく。なお10号墓の深鉢は類似資料が認められなかったため、前期青銅器時代より新しい時期に比定されると考えられる。

エゼロⅠ～Ⅱ期、Ⅱ～Ⅲ期、そしてⅢ期の指標資料を有する遺跡は、エゼロⅠ期のみの指標資料が認められないこと、各遺跡資料にエゼロⅢ期の指標がかならず含まれていることから、これらの資料をエゼロⅠ期に年代付けることは困難であると判断した。エゼロⅠ期からⅢ期にかけての指標資料を擁するピコヴォ・ドンチョヴァ・モギラ遺跡の注口付土器とアンフォラ様壺はエゼロⅢ期に位置づけられる。一方、時期の下限については判然としない。底部と胴部下半に刺突充填幾何学文を施した小型鉢 (図39:4) の類例はデアドヴォ遺跡Ⅸ層 (エゼロⅡb期) で認められ、エゼロ遺跡8～7層に集中している (Георгиев и др. 1979, таб. 178, тип 28)。このことから、ここでは下限を暫定的にエゼロⅡ期としておく。

マドレッツ・グジョヴァ・モギラ遺跡4～1層からエゼロⅡ～Ⅲ期とⅢ期の指標資料が出土している。また正確な建築層は不明であるが、エゼロⅢb期の双耳状把手付カップと漏斗状土器も認められることから、すくなくともエゼロⅢ期に年代付けられる。その一方でエゼロⅠ～Ⅱ期あるいはⅡ期の指標である幾何学文様の縄目文と刻線文の小型鉢、内閉深鉢C2類が確認されていることから、1～4層出土の土器はエゼロⅡ～Ⅲb期に年代付けられる。

ミハリッチ遺跡ではエゼロⅠ～Ⅱa期指標の刻線文と刺突充填刻線文の小型鉢が検出されている。一方で、刺突充填帯状文の内弯浅鉢 (図48:3) はエゼロⅢb期に類例が多く (Георгиев и др. 1979, таб. 178, тип 25)、多条横線縄目文の深鉢 (図48:4) はエゼロⅢb～Ⅲ期にみられる。またエゼロⅢ期の指標である注口付土器も確認されていることから、ミハリッチ遺跡の資料はすくなくともエゼロⅡ～Ⅲ期に年代付けられる。表採されたデパス・カップもまたミハリッチ遺跡の年代 (エゼロⅢ期) と整合的である (Stefanova 2004, 200)。

カラスラ・ルプキテ・カレ遺跡では1号バシリカ教会址下層と土塁から、キリロヴォ・カップや注口付土器をはじめとするエゼロⅢ期の指標資料が出土している。それに対し土塁出土資料中には、エゼロⅠ～Ⅱa期の指標に類した斜格子充填帯状文が内外面に施文された土器 (図51:12) や、エゼロ遺跡7～2層に類例をもつ2条横位円形刺突列文の施された内弯浅鉢 (図51:19) (Георгиев и др. 1979 таб. 178, тип 19) などエゼロⅡ期に遡る資料が散見される。このことからカラスラ・ル

プキテ・カレ遺跡資料はエゼロ II～III 期に年代付けられる。

エゼロ III 期の指標資料が II～III 期の指標資料とともに出土している遺跡に関しては、エゼロ III 期に年代づけた（例えばスヴェティ・キリロヴォ遺跡、クラン遺跡）。各遺跡の指標資料はその多くがエゼロ II～III 期の粗胴深鉢、突起付把手水差しと、III 期の指標であるキリロヴォ・カップ、注口付土器、多条山形文をもつ水差しからなる。カラノヴォ遺跡では、詳細な帰属層位について筆者はまだ把握していないが、ユナツィテ・カップが出土している。ユナツィテ・カップはカラスラ・ルプキテ・カレ遺跡やオグニャノヴォ・マルテペ遺跡（4～1 層）など、キリロヴォ・カップとともに検出されている事例が少なからず確認されていることから、VIIIb 層と対応するエゼロ III 期併行の資料と位置づけられる。

ノヴァ・ザゴラ・ツィガンスカ・モギラ遺跡では、エゼロ IIIb 期の指標である球型注口付土器が 6～1 層のいずれかから検出されているため、7～1 層はエゼロ IIIa～IIIb 期に年代付けられる。本論文ではノヴァ・ザゴラのテル型集落と平地型集落を別々の遺跡として取り扱ってきたが、カンチェヴァらも指摘するように（Кънчева-Русева & Лещаков 2008, 51）、同時期の土器要素と両遺跡の立地状況から、本来は 1 つの集落であったと推測される。

ガラボヴォ遺跡では最上層の 3～1a 層は中期青銅器時代に比定されているため、その下層の 14～4 層が前期青銅器時代層に該当する。ただし、14～5 層の資料は公表されていないため、実質的には 4 層のみ検討が可能である。その 4 層の資料は、3～1a 層にはエゼロ IIIb 期に特有の球型注口付土器と漏斗状土器が認められること、そして 4 層と 3 層のあいだには間層が検出されていないことから、エゼロ IIIb 期に位置づけられる。

アッサラ遺跡ではエゼロ IIIb 期の指標となる球型注口付土器と漏斗状土器が最下層から出土していることから、3～1 層の資料はいずれもエゼロ IIIb 期に年代付けられる。注目すべき資料は、赤色スリップのかかったデパス・カップ（図 47:1～6）、尖底カップ（図 47:7）、刺突を伴う円文（図 47:8）、ソーサー形土器（図 47:20）である。レシュタコフはアッサラ遺跡のデパス・カップ⁸⁴をエーゲ海地域からの搬入品とみなし、トロイ IIId 期以降に位置付けている（Leshtakov 2004b, 51）。トロイ遺跡ではデパス・カップはトロイ IIId 期から IV 期にかけて認められ（Blegen et al. 1950; 1951）、近年では、アナトリア西部沿岸域での初現が前 2300 年ごろに据えられていることから（Şahoğlu 2012, 139）、エゼロ IIIb 期の年代もまたそれ以降にもとめられる。ユナツィテ遺跡資料との併行関係については、デパス・カップの評価と尖底カップ、円点文、ソーサー土器の存在から判断して、

⁸⁴ 底部が幅広いデパス・カップは形態的にエーゲ海のシロス島に類例が認められると指摘されている（Leshtakov 2004, 51）

ユナツィテ遺跡 8~1 層のなかでも上層と併行する可能性が高い (図 68:16; 図 73:1)。

エゼロ III 期の資料のなかでとくに注目すべきは環溝遺跡資料がいずれもこの段階に年代づけられることである (コニョヴォ・ユルガンジスキ遺跡、カザンラク遺跡、ドラマ・メルジュメキャ遺跡)。このうちドラマ・メルジュメキャ遺跡でのみエゼロ IIIb 期の指標である球型注口付土器と漏斗状土器が検出されている。特徴的な類例には、水差しに施文される斜線充填逆三角文と 2 本の垂線のあいだに配される 1 条の円形刺突列文 (図 65:3) がガラボヴォ遺跡 3~1a 層に (Leshtakov 1996, fig. 10:8, 9)、図 65:7 に示した内閉深鉢 C3 類がアッサラ遺跡に (図 47:17)、そして多条山形文と短い刻線で縁取りされた逆三角文 (図 65:4) が上トラキア平野西部のマノレ・ラスコパニツァ遺跡 5 層 (図 73:7) に認められている。これらの遺跡はいずれもエゼロ IIIb 期併行あるいは中期青銅器時代への移行段階に位置づけられていることから、リハルドウスらが指摘するように (Лихардус и др. 2001, 36)、ドラマ・メルジュメキャ遺跡の資料はエゼロ III 期のなかでも比較的新しい段階、つまりエゼロ IIIb 期に年代付けられると考えられる。

ドルノ・サフラネ 3 号墳 6 号墓に副葬されていた扁平高把手付丸底カップは、上トラキア平野東部では類例が一切認められない異質な土器である。装飾要素に関しては上トラキア平野西部のユナツィテ遺跡 13~9 層 (図 66:19)、ダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層 (図 69:10, 12, 13)、プロヴディフ・ネベト・テベ遺跡 (図 70) に、形態的にはブルガリア北西部のバガチナ遺跡 (図 96:4) とマグラ洞窟 (図 97:4) に類例が認められる。このようにこのカップは 2 つの地域の特徴が混在する折衷土器であるといえ、外部から上トラキア平野東部へ搬入されたと考えられる。ドルノ・サフラネ墳丘墓は平野東部のなかでも北西端に位置しており、平野東部より西側地域と交流しやすい環境にあったことが、この土器が平野東部に現れた要因の 1 つであろう。年代に関してはこの装飾要素をもつユナツィテ遺跡 13~9 層、ダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層はエゼロ II 期と併行するとみてよい。

5. 2. 2. 上トラキア平野西部

上トラキア平野東部と西部では土器群の内容に共通する要素があるものの、相違点もまた少なからず見受けられ、前期青銅器時代に異なる土器群が展開していた様子がうかがえる (eg. Nikolova 2000a; 2000b)。上トラキア平野西部の編年的検討においてはユナツィテ遺跡とダベネ・サロフカ遺跡が豊富な情報を提供しており、平野東西の時間的な関係を把握するにはこの 2 遺跡を軸にすることで編年の大枠を理解することが可能となる。

ユナツィテ遺跡 17~14 層、ダベネ・サロフカ遺跡 IIA 層からエゼロ I 期の指標資料である微細

刺突文と凹線文、それらの装飾をもつアスコスが認められており、これら土器要素はエゼロ I 期と併行することをよく示している。詳細な層位は不明だが、ユナツィテ遺跡から微細刺突懸垂文をもつアスコスが出土していることから、おそらくエゼロ Ia 期から両地域間で関係を有していたと考えられる。一方、ユナツィテ遺跡で認められた微細刺突列懸垂文と孔列文はダベネ・サロフカ遺跡では確認されていないため、平野西部内でもマリツァ川流域とストリヤマ川流域では地域的な違いがある可能性を示している。

凹線文に関しては、東部ではエゼロ II 期以降に認められないこと、西部でもユナツィテ遺跡 13 層以降では見られないことから、両地域の同時性を示す 1 つの指標と見なしうる⁸⁵。その一方で、上トラキア平野東部に比べ、西部のほうが施文される器形や文様のヴァリエーションが多い点で平野間における東西の地域差は明らかである。くわえて、ユナツィテ遺跡の凹線文土器に関しては (図 66:3)、ブルガリア北西部のサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 2 層から類例が出土しており (図 93:11)、これらの遺跡間でも併行関係を認めることができる。

ダベネ・サロフカ遺跡 IIA 層上部からは、肥厚口縁内面に刻線による多条鋸歯文の施文される小型鉢が出土している (図 69:6)。ユナツィテ遺跡 15 層に出現する資料もこれに準ずるものと推測される。さらに同タイプの小型鉢はブルガリア南西部のコヴァチェヴォ遺跡でも確認されている (図 84:9~11)。つづいてユナツィテ遺跡 13~9 層とダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層には、小型鉢あるいは浅鉢口縁内面の幾何学文様、胴部外面の斜格子充填幾何学文、鋸歯状あるいは菱形ネガティブ文のように施文された器形と部位、モチーフ、装飾方法の点で文様構造を複雑化させており、こうした装飾要素はこの時期の上トラキア平野西部を代表する指標資料とみなされる (図 66:8~19; 図 69:7~14)。そして、ユナツィテ遺跡 15 層から肥厚口縁部内面に多条鋸歯文の施される小型鉢が出現し、幾何学文や斜格子充填幾何学文などの文様をもつ小型鉢や浅鉢が微細刺突文や凹線文の消失した 13~11 層でピークを迎え、10~9 層で衰退する傾向は (図 67:5)、デヤドヴォ、エゼロ両遺跡でもエゼロ Ib 期から Iib 期にかけて認められる。このことから、ユナツィテ遺跡 15~14 層はエゼロ Ib 期、13~11 層はエゼロ IIa 期、10~9 層はエゼロ Iib 期と併行すると考えられる。

その一方で、上記の刻線文土器の文様構造は平野の東西地域で明確に異なっていることは看過できない。平野東部では小型鉢の文様は斜格子充填幾何学文や刺突充填幾何学文が内外面全体に施文されているのに対し、ユナツィテ遺跡では小型鉢の鋸歯文が口縁部内面に限られる傾向にあ

⁸⁵ レシュタコフはユナツィテ遺跡 17~14 層を 17~16 層、15 層、14 層の 3 段階に細別する案を提示している (Лещакoв 2006, 173)。

る。またユナツィテ遺跡 13～9 層で小型鉢以外の器形胴部にほどこされる斜格子充填の帯状文、市松文などの幾何学刻線文、ネガティブ文は上トラキア平野東部の土器に施文されていない。この時期、上トラキア平野東部と西部の関係は土器においてそれほど密であるようにはみえず、むしろ平野東部よりもストルマ川上中流域との関係が強くなっている様子がうかがえる。このように平野東西での文様構造の違いは顕著であるものの、上トラキア平野東西の併行関係はのちに現れるユナツィテ・カップとエゼロ III 期土器要素の同時性を加味することで首肯されるものとなる。

縄目文は上トラキア平野西部ではユナツィテ遺跡 13 層以降の、擬縄目文はダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層の指標資料である。その数は上トラキア平野東部に比べ少ないだけでなく、その初現は平野東部よりやや遅れている。縄目文はマリツァ川流域のユナツィテ遺跡 (図 67:4) とプロヴディフ・ネベト・テペ遺跡で、擬縄目文はストリヤマ川上流域のダベネ・サロフカ遺跡で認められており、縄目文はストリヤマ川流域には及ばなかった。微細刺突懸垂文や孔列文土器の不在からも見てとることができるように、ドルノ・サフラネ墳丘墓の事例をのぞいて、このとき上トラキア平野東部とストリヤマ川上流域とのあいだでは直接的な交流をもっていなかったものと考えられる。

このほかには、ユナツィテ遺跡の円形刺突文と縄目による多条横線文の組み合わせが (図 66:20)、シタグリ遺跡 Va 層から出土しており (Sherratt 1986, pl. XCVIII:2, 4)、これはユナツィテ遺跡 13～7 層との併行関係を示している。エゼロ II 期に比定されたスヴィレングラット・ブランティーテ遺跡の刻線と連続三角文の組み合わせも同じシタグリ遺跡 Va 層で見つかっている。このことからこれらの資料は上トラキア平野とエーゲ海北岸の東マケドニア地方との併行関係を示す重要な資料であるといえる。

ここまでエゼロ I 期から II 期に併行する指標資料をみてきた。上トラキア平野西部ではユナツィテ遺跡とダベネ・サロフカ遺跡以外に、オグニャノヴォ・マルテペ遺跡の下層 6～5 層でユナツィテ遺跡 13～9 層に特徴的な口縁内面に幾何学文の施された小型鉢と、水差し胴部の斜行充填幾何学文が認められている。さらにエゼロ II～III 期の指標である粗胴深鉢と、エゼロ遺跡 7～3 層で類例が認められる畝状装飾をもつ縦位ループ状把手 (Георгиев и др. 1979, таб. 200, тип 10) も出土していることから、オグニャノヴォ・マルテペ遺跡 6～5 層はエゼロ II 期に併行する。

プロヴディフ・ネベト・テペ遺跡の 10 層から出土した縄目文と斜格子充填市松文をもつアスコスはユナツィテ遺跡 13～7 層で、M 字状刻線文はダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層で認められる (Nikolova 1996, fig. 20:4)。上トラキア平野西部ではアスコスはユナツィテ遺跡 13～9 層まで継続して確認されているため、アスコスと縄目文の時間的關係は相反するものではない。

プロヴディフ・ヤサ・テペ I 遺跡の土器群のなかで、舟形土器と孔列把手はエゼロ I～II 期に認められる。小型水差し（図 71:1）については正確な類例を確認することはできなかったが、装飾に刺突文と象嵌が施されていることから、エゼロ II 期に位置づけられると推測される。こうした資料以外にエゼロ I 期、あるいは III 期と併行する指標資料が認められなかったことから、当該遺跡資料の年代はエゼロ II 期併行としておく。なお、舟形土器と孔列把手は平野西部では非典型的な要素であり、平野東部からの影響によってもたらされたものと推測される。

エゼロ III 期の上トラキア平野西部を併行する代表的な指標にユナツイテ・カップがある。ユナツイテ・カップは平野東部のカラスラ・ルプキテ・カレ遺跡やカラノヴォ遺跡で、エゼロ III 期の指標であるキリロヴォ・カップと同じ層から出土していることをすでに確認している。またユナツイテ遺跡では 8 層から注口付土器とともに出土している。さらに縄目文土器がユナツイテ 6 層以降に衰退、消失する傾向は平野東部でもエゼロ III 期以降に見受けられる。このことからエゼロ III 期とユナツイテ遺跡 8～1 層は併行関係にあるとみてよい。

一方で、上トラキア平野東部ではエゼロ I～III 期に認められたトンネル状把手やエゼロ II～III 期に認められた突起付把手の水差しは、ユナツイテ遺跡では 8～1 層でしか検出されていない。そのため、これらの要素は平野西部ではエゼロ III 期併行の資料とみなしうる。またユナツイテ遺跡ではエゼロ IIIb 期に対応する指標資料は出土しておらず、この時期に対応する層位については不詳であるが、当該期の資料についてはオグニャノヴォ・マルテペ遺跡が参考になる。

オグニャノヴォ・マルテペ遺跡 4～1 層はユナツイテ・カップとマルテペ・カップ、ボタン文、同心円文がキリロヴォ・カップと扁平型注口付土器とともに出土していることから、ユナツイテ遺跡 8～1 層と併行する。さらに 2 層のソーサー形土器はエゼロ IIIb 期のアッサラ遺跡に同様の形態的特徴をもつ資料をみてとることができることから（図 47:20）、オグニャノヴォ・マルテペ遺跡では 4～3 層がエゼロ IIIa 期と、2～1 層が同 IIIb 期と併行すると考えられる。

ダベネ・サロフカ遺跡については、まず IIB 層から出土した 2 点の丸底カップについて検討しておく。ニコロヴァは IIB 層の丸底カップをブルガリア北西部におけるコツォフェニ II～III 期の扁平高把手付丸底カップと関連づけた（Nikolova 2000b, 220）。しかし、IIB 層の資料はコツォフェニ系カップの特徴を帯びているとはいえない。むしろ 2 点のうち 1 点（図 69:16）は形態的にはマルテペ・カップの特徴に近いだけでなく、攪乱の影響をうけた IIB 層最上部から出土しているため（Nikolova 2000b, 217）、マルテペ・カップが上層から混入してきた可能性が疑われる。いま 1 点（図 69:15）は IIB 層最下部から細かな破片として出土しており、この残存状態から高く扁平な把手をもつカップの器形を正確に認定することは難しい。このことから IIB 層のカップは器

形の認定をはじめ、出土層位の状況や形態的な特徴から積極的にコツォフェニ系土器との関係性を論じることはできない。したがって、この丸底カップについてはユナツィテ遺跡 8～1 層やオグニャノヴォ・マルテペ遺跡 4～1 層と併行する資料が下層に混入したと考えられ、小片については丸底カップと同定すること自体に留意が必要である。

ダベネ・サロフカ遺跡 IIC 層とプロヴディフ・ネベト・テペ遺跡 9～5 層からはユナツィテ・カップ、キリロヴォ・カップ、注口付土器が確認されているため、いずれもユナツィテ遺跡 8～1 層と同時期とみなされる。プロヴディフ・ネベト・テペ遺跡最下層の 11 層に関しては、検討対象となる資料がえられなかったため、その年代的な位置付けについては保留しておく。

プロヴディフ・レストランタ遺跡では最下層からマルテペ・カップが出土していることから、文化層の資料はユナツィテ遺跡 8～1 層に併行すると考えられる。ただし、刺突充填幾何学刻線文と刺突による多条鋸歯文はユナツィテ遺跡 13～9 層、ダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層に特徴的な装飾要素である。このことから遺跡の帰属年代は型式学的にやや遡り、プロヴディフ・レストランタ遺跡資料はユナツィテ遺跡 13～1 層と併行する。

マノレ・ラスコパニツァ遺跡ではユナツィテ・カップが最下層の 1 層から 5 層にかけて出土していることから、当該遺跡の青銅器時代層はいずれもユナツィテ遺跡 8～1 層と併行する。さらに球型注口付土器が最下層から出土しており、これらの層はエゼロ IIIb 期と対応するオグニャノヴォ・マルテペ遺跡 2～1 層と同時期とみなしうる。この年代付けを裏付けるように、第 5 層から双耳状把手付カップが出土している。マノレ・ラスコパニツァ遺跡の土器は全体的に無文のものが多く、とりわけ縄目文、刻線幾何学文、刺突充填刻線文の資料が見当たらないこともこの年代的な位置付けと親和的である。

上トラキア平野最西端にある墳丘墓を擁するダベネ・バリノフ・ゴルン遺跡では、ユナツィテ・カップ、球型注口付土器、円点文が認められることから、いずれもユナツィテ遺跡 8～1 層と併行する。本遺跡で年代的な併行関係を検討するうえで注目すべきは、ユナツィテ・カップと共伴する 3 号祭祀遺構の方形突起付把手が T 字状口縁につく浅鉢、16 号祭祀遺構の高台付浅鉢である。7 号祭祀遺構からは高台付浅鉢とともに、方形把手付浅鉢が共伴して出土している。この方形突起付把手および T 字状口縁部をもつ浅鉢と方形把手付の土器は、ブルガリア北西部のサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 3 層、バガチナ遺跡、レピツァ遺跡でユナツィテ・カップとともに検出されていることから、これらの遺跡資料とユナツィテ遺跡 8～1 層は同時期のものとみてよい。

上トラキア平野西部に位置する唯一の環溝遺跡であるチェルナ・ゴラ 1 遺跡では、指標資料がエゼロ III 期の資料から構成されているため、平野東部の環溝遺跡と同時期に位置づけられる。こ

こから縄目文土器が1点出土しており、調査者はこれをもとに環溝利用の開始期を前期青銅器時代第2段階にまで遡る可能性を指摘している (Leshtakov 2006, 412; Лещаков и др. 2002, 23)。しかし深鉢の縄目文はエゼロ IIb～III 期に認められる指標であること、またエゼロ II 期に比定可能な指標資料がほかに認められていないことから、その上限の可能性についてはいまのところ積極的に肯定する材料に乏しいといわざるをえない。

当該遺跡の土器内容は、ユナツィテ・カップをのぞくと、エゼロ III 期土器そのものの特徴を呈している。平野西部を特徴付けるマルテペ・カップや高台付浅鉢、ボタン文や円点文はチェルナ・ゴラ I 遺跡には認められない。カラスラ・ルプキテ・カレ遺跡やカラノヴォ遺跡の事例から判断すると、チェルナ・ゴラ I 遺跡の土器群はエゼロ III 期土器群にユナツィテ・カップが他系統資料としてもちこまれたものと理解できる。この環溝遺跡の性格についてはなお不明な点が多く残されているものの、その立地から上トラキア平野における東西交流の場であった可能性も想定される。

最後に、ユナツィテ遺跡における絶対年代のデータを参照し、上トラキア平野東部と西部の年代比較を行う。ユナツィテ遺跡では各建築層で採取された比較的多くの試料が¹⁴C年代測定法(較正年代)と古地磁気学法によって測定されており、その年代値はデヤドヴォ、エゼロ両遺跡の値とおおむね整合的である (Российская академия наук институт археологии 2007, 218—237)。ユナツィテ遺跡17～8層の値は前3100/3000年から前2500年のあいだにおさまり、5～2層には前2300～2050年という値が付与されている。ユナツィテ遺跡の資料ではエゼロ IIIb 期の明確な証拠は得られなかったが、上記の年代とアッサラ遺跡で推察された年代がおおよそ併行することから、年代的には5層あたりがエゼロ IIIb 期の始まりに対応する可能性がある。

この年代値を参照しながら、上記した資料をもとに上トラキア平野東部とユナツィテ遺跡資料の併行関係を下に示す。結果として区分内容はニコロヴァ (Nikoolova 1999) の区分案⁸⁶ではなく、カティンチャロフらの案に近いことがわかる (Катинчаров & Мацаонова 1993, 156)。

前期青銅器時代第1段階前半：ユナツィテ遺跡 17～16層—エゼロ Ia 期 前3100/3000年～

前期青銅器時代第1段階後半：ユナツィテ遺跡 15～14層—エゼロ Ib 期

前期青銅器時代第2段階前半：ユナツィテ遺跡 13～11層—エゼロ IIa 期

前期青銅器時代第2段階後半：ユナツィテ遺跡 10～9層 —エゼロ IIb 期

前期青銅器時代第3段階 : ユナツィテ遺跡 8～1層 —エゼロ IIIa～IIIb 期 前2500～2050年

⁸⁶ ニコロヴァはユナツィテ遺跡の前期青銅器時代層を3段階に大別している (Nikoolova 1999; 2000a, 47ff.)。その内訳は第1段階が17～15層、第2段階が14～9層、第3段階が8～1層となっている。

5. 2. 3. 黒海西岸域

黒海西岸域では計5基の前期青銅器時代遺跡が確認された。この地域に特有の曲線文系縄目文、つまみ付蓋、儀礼用土器は内陸部とは異なる地域性をよく表している。公表資料数はエゼロヴォ II 遺跡がもっとも豊富であるが、層位的な資料はキテン・ウルドヴィザ遺跡4～3層とソゾボル遺跡2～1層から得られている。

キテン・ウルドヴィザ遺跡の刻目文と孔列文の組みあわせをもつ内弯浅鉢はエゼロ I～II 期に特徴的であり、広口壺に施文された縄目による羽状文(図 78:3)はエゼロ遺跡5層に類例を認めることができる(Георгиев и др. 1979 таб. 194, тип 28)。このほかにはエゼロ III 期の指標資料である扁平型および球型注口付土器も出土している。調査者はキテン・ウルドヴィザ遺跡をエゼロ遺跡8～5層と併行させているが(Draganov 1995, 229ff)、上記の資料をもとにエゼロ II～IIIb 期に併行すると考えられる(cf. Leshtakov 1994)。

ソゾボル遺跡の資料について調査者はエゼロ遺跡6～5層、つまりエゼロ IIb 期に併行させている(Draganov 1995, 236)。事実、口縁部に刺突充填逆三角文をもつ内弯浅鉢はエゼロ遺跡6層に類例が認められる(Георгиев и др. 1979, таб. 174, тип 3)。その一方で注口付土器も出土しており、また曲線文系の縄目文、つまみ付きの蓋、儀礼用土器はソゾボル遺跡とキテン・ウルドヴィザ遺跡で共通する特徴であることから、ソゾボル遺跡の資料はエゼロ II～IIIb 期に併行すると考える。

エゼロヴォ II 遺跡では、曲線文系縄目文、つまみ付蓋、儀礼用土器のほかに縄目文による斜線充填文の幾何学文要素(図 76:5, 11)、凸帯把手、畝状把手がみられる。幾何学文要素はデャドヴォ、エゼロ両遺跡ではエゼロ II～IIIa 期⁸⁷に(図 15:5, 6)(Георгиев и др. 1979, таб. 198, тип 38)、凸帯把手と畝状把手はエゼロ遺跡7～3層に認められる(Георгиев и др. 1979, таб. 200, тип 10)。したがって、これらの要素もまたエゼロ II～III 期に位置づけられ、黒海西岸域ではこの時期に比定可能な資料が中心となって認められることがわかる。

一方、アスコスと舟形土器は上トラキア平野東部ではエゼロ I 期あるいは I～IIa 期の指標資料としたが、黒海西岸域のアスコスと舟形土器には平野東部のものと型式学的な特徴に相違点が看取される。平野東部のアスコス(図 14:1)は把手が口唇部から胴部の末端部についているものが多いのに対し、エゼロヴォ II 遺跡のアスコスは把手が口唇部から肩部のところについている(図 76:1)。またエゼロヴォ II 遺跡では注ぎ口の高さが口縁部側の把手付着部の高さより低いタイプを

⁸⁷ ただし、上トラキア平野東部で認められた格子目の密な斜格子充填幾何学文や縄目文小型鉢はエゼロヴォ II 遺跡では見受けられない。

見てとることができる⁸⁸ (Tončeva 1981, fig. 7:8, 14)。舟形土器に関しては、上トラキア平野東部では口縁部の片側に孔をもつ二又の突起がつくタイプがエゼロ I 期から出土しているものの (Георгиев и др. 1979, обр. 172:a)、エゼロヴォ II 遺跡では高い舌状の突起をもつタイプが見られるのみであり、有孔の二又突起をもつタイプはない (Tončeva 1981, fig. 18:1~6)。こうした差異にくわえ、黒海西岸域ではこのほかにエゼロ I 期の指標資料は見当たらず、むしろエゼロ II~III 期と併行する資料が多く見受けられた。またブルガリアの他の地域ではアスコスや舟形土器がエゼロ III 期併行の遺跡から出土していないことから、暫定的ながらこれらの点に時間差と地域差が介在していると推測し、黒海西岸域ではアスコスと舟形土器の位置付けはやや新しくエゼロ II 期併行となると考えたい。

それゆえ、エゼロヴォ II 遺跡の資料はこれまでエゼロ遺跡 7~6 層 (エゼロ II 期) と併行すると考えられてきたが (Tončeva 1981, 61)、曲線文系縄目文、つまみ付蓋、儀礼用土器、凸帯把手、畝状把手はエゼロ II~III 期、アンフォラ様壺と注口付土器はエゼロ III 期と対応することから (Tončeva 1981, fig. 15:1~7)、エゼロヴォ II 遺跡の資料はエゼロ II~IIIb 期に併行すると考えられる。ストラシミロヴォ I 遺跡とデヴニャ遺跡の 1 号墓と 2 号墓もまた出土土器がエゼロヴォ II 遺跡と類似していることからエゼロ II~III 期のあいだに年代付けられる。

5. 2. 4. ブルガリア西部・南西部

ブルガリア西部・南西部のストルマ川上・中流域では 6 基の前期青銅器時代遺跡が確認された。この地域ではエゼロ I 期に併行する指標資料として微細刺突文、凹線文、多条垂線文、肥厚口縁内面に施文される多条鋸歯文、横位につく短い凸帯文のつく深鉢が挙げられる。ヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡 7 層ではこのうち 4 つの指標が認められ、それ以外の時期の指標はない。口縁部内面に凹線による斜線文の施された小型鉢 (図 80:1, 2) は、施文技法は異なるものの、ダベネ・サロフカ遺跡 IIA 層の小型鉢と類似する (Nikolova 2000b fig. 15.11:6)。外反する口縁部に刻線による多条斜線文の施される内弯浅鉢 (図 80:3) は、良好な類例がラドミル・ヴァホヴォ遺跡 4 層に認められる (図 79:3)。さらに、やや屈曲した胴部に横位管状把手をもち、縦位の凹線文が施される鉢 (図 80:6)、口唇部に刻目とやや内反する口縁部をもつ深鉢 (図 80:8)、そして横位の短い凸帯文をもつ口縁部が直線状に開く深鉢 (図 80:9, 10) は、エーゲ海北岸域の東マケドニア地方に位置するシタグリ遺跡 IV 層に類例が見受けられる (Sherratt 1986, fig. 13.4:5; 13.7:4, 5)。

⁸⁸ エゼロヴォ II 遺跡をはじめ黒海西岸域では、エゼロ Ia 期に典型的な細小刺突による懸垂文の施文されるアスコスはこれまでのところ認められていない。

なお、口縁部外面に凹線文が縦位に施される内弯浅鉢（図 80:4, 5）は他地域で認められないことから、ブルガリア西部・南西部に特有の要素であるといえる。

V.ゲネディエヴァはヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡 7 層の資料をシタグリ Va 層とコツォフェニ II 期と併行させている（Генадиева 2001, 74）。しかし、7 層の凹線文土器はエゼロ I 期併行のユナツィテ遺跡 17~14 層、ダベネ・サロフカ遺跡 IIA 層に特徴的であることから、当該遺跡資料はエゼロ I 期に併行すると考えられる。さらに 7 層資料はシタグリ遺跡 IV 層資料とも対比可能であることが確認されており、この年代的関係はエゼロ II 期に比定されたスヴィレングラット・ブランティエテ遺跡でシタグリ遺跡 Va 層の類例が検出された点とも対応する。つまり、シタグリ遺跡 IV 層はエゼロ I 期と、同 Va 層はエゼロ II 期と併行すると考えられる。そして、シタグリ遺跡 Vb 層からはユナツィテ・カップ、マルテペ・カップ、ボタン文が認められることからこの層の資料はエゼロ III 期と併行することをつけ加えておく（Sherratt 1986, fig. 13.20; 13.27:3, 14, 15）。

エゼロ I 期および II 期併行の指標資料をもつ遺跡にラドミル・ヴァホヴォ遺跡とコヴァチェヴォ遺跡がある。ラドミル・ヴァホヴォ遺跡 4 層の年代に関しては、すでにヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡 7 層資料との類例関係が認められていることから、エゼロ I 期併行とみなされる。4 層を特徴づける刻線による多条垂線文の内弯浅鉢は、上トラキア平野東部ではエゼロ III 期の指標資料の 1 つにとりあげたが、ブルガリア西部ではこのタイプの浅鉢はエゼロ III 期併行の資料に該当しない。おそらく 4 層資料中の多条垂線文浅鉢は、施文技法が刻線と凹線で異なるものの、ラドミル・ヴァホヴォ遺跡における凹線文内弯浅鉢に準ずるものと理解できる。

ラドミル・ヴァホヴォ遺跡 3 層のダイス文や多条短線状刺突文は、ルーマニア南西部で展開していたコツォフェニ II/III 期および III 期と、それと同時期にセルビア東部に分布していたコストラッツ II 期⁸⁹を中心に類例が認められる（Nikolić 2000, T. V:3, 6; T. VI:9; X:1; XIV:5, 7; XXV:6; Roman 1976a, Pl. 81:19; 110:3~5）。後述するように、ブルガリア北西部のサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 2 層からコツォフェニ I 期の土器要素と、ユナツィテ遺跡 17~14 層から特徴的な凹線文土器が出土していることから、コツォフェニ II~III 期の指標を擁するラドミル・ヴァホヴォ遺跡 3 層資料はエゼロ II 期に併行すると考えられる。

ラドミル・ヴァホヴォ遺跡 2 層ではユナツィテ遺跡 13~9 層、ダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層に特徴的な胴部に斜格子充填帯状文や鋸歯文をはじめ、鋸歯状ネガティブ文と菱形ネガティブ文が

⁸⁹ コストラッツ文化とコツォフェニ文化の年代的関係と用語については Nikolić 1995, 59—69 を参照。

よく見受けられることから (図 66:12, 13, 16, 17; 図 69:14)、ラドミル・ヴァホヴォ遺跡 3 層と同様、エゼロ II 期に併行すると考えられる。さらに最上層の 1 層からは斜格子充填市松文の装飾要素 (図 79:22) が認められ、これもユナツィテ遺跡とダベネ・サロフカ遺跡の類似した要素 (図 66:19; 図 69:10) をもとに、2 層と同時期に位置づけることができる。よって、ラドミル・ヴァホヴォ遺跡は 4 層がエゼロ I 期併行、3~1 層が同 II 期併行となる (cf. Alexandrov 1995, tab. 1; Němejcová-Pavúková 1999)。

ブルガリア南西部のコヴァチェヴォ遺跡については、I.クロフがホトヴォ遺跡との併行関係をもとに、コヴァチェヴォ遺跡の土器を前期青銅器時代第 2 段階に比定した (Kulov 2011, 374)。しかし、公表資料をみるとエゼロ I~II 期と併行する資料が少なからず認められる (図 84)。まず、エゼロ I 期併行の資料として口縁部および胴部外面に施文される凹線文があり、これはヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡第 7 層とのあいだに類例が多く認められる。具体的には口縁部外面に施文される内弯浅鉢 (図 84:1~4) (Геннадиева 2004, рис. 83:2, 10)、口縁部に把手様の貼付をもつ内弯浅鉢 (図 84:5) (Геннадиева 2004, рис. 83:3)、肩部に施文される広口壺 (図 84:8) (Геннадиева 2004, рис. 84:1) が挙げられる。とくに屈曲する胴部から直線的に開く口縁部をもつ鉢 (図 84:6, 7)

(Геннадиева 2004, рис. 84:2, 4) は文様、施文部位、断面形態の点でよく類似している。この種の土器はシタグリ遺跡 IV 層でも見受けられる (Sherratt 1986, fig. 13.6:9)。シタグリ遺跡 IV 層との関係については、口唇部に刺突文をもち、口縁部が内弯する深鉢 (図 84:12) と短い凸帯文をもつ深鉢 (図 84:13) も挙げることができる (Sherratt 1986, fig. 13.7:4, 5)。そのほかに肥厚口縁内面に多条鋸歯文の施される開口浅鉢の類例 (図 84:9~11) が、ダベネ・サロフカ遺跡 IIA 層上部 (図 69:5, 6) (Nikolova 1996 fig. 13:1~4; 2000b, fig. 15.11:6) から出土している。

コヴァチェヴォ遺跡におけるエゼロ II 期併行の資料については、ダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層に類例をもつ肥厚口縁内面に斜格子充填三角文が施文される小型鉢が認められる (図 84:14) (Nikolova 2000b, fig. 15.23:6)。図 84:16 の胴部に認められる斜格子充填三角文と鋸歯状ネガティブ文の装飾要素は、ダベネ・サロフカ IIB 層 (図 69:7, 9) とコストラツ系土器に見受けられる (Nikolić 2000, T. IX:10)。また同個体の口縁部につく有孔突起はコストラツ系土器に共通した特徴が認められる一方 (Nikolić 2000, T. VIII:9, 10, 12; XIV:2; XV:3)、この有孔突起と鋸歯文を口縁部にもつ土器はシタグリ遺跡 Va 層でも認められる (Sherratt 1986, fig. 13.13:9)。コストラツ系装飾の短線状刺突文 (図 84:16~18) はホトヴォ遺跡 (図 83:11~13) とペルニク・クレポスタ遺跡 (図 82:1) をはじめ、コツォフェニ II~III 期とコストラツ II 期に類例が見られる。また刻線を不規則に施した装飾 (図 84:19) や刺突を方形に配した市松文 (図 84:20) もコツォフェニ II~

III期とコストラッツII期の土器に類例をみいだすことができる(Nikolić 2000, T, III:5; T.IV:1~4; T. XI:8; T. XIII:4; T. XXVI:8; T. XXXVII:4; Roman 1976a, Pl. 69:14; 108:11)。これらの内容からコヴァチェヴォ遺跡III層の資料はエゼロI~II期に併行すると考えられる。

エゼロII期併行の指標のみを持つ遺跡にネヴェスティノ遺跡とホトヴォ遺跡がある。前者ではわずかに斜線充填刻線文が認められたことからエゼロII期に併行するとした。ホトヴォ遺跡の刻線文はラドミル・ヴァホヴォ遺跡2層の土器とよく類似している(図79:11~21)(Alexandrov 1994, Pl. V, VI)。またホトヴォ遺跡の鋸歯文はダベネ・サロフカ遺跡IIB層(Nikolova 2000b, fig. 15.22:2; 15.27:2)とオグニャノヴォ・マルテペ遺跡5層(図68:6)から、そして肥厚口縁内面に施された刺突充填三角文をもつ小型鉢(図83:2)は、オグニャノヴォ・マルテペ遺跡5層から出土している(図68:7)。このことから当該遺跡の資料はエゼロII期に併行する。ホトヴォ遺跡で凹線文が認められていない点もこの年代付けと整合的である。

エゼロI~III期の指標資料を擁するペルニク・クレポスタ遺跡では、まずユナツィテ遺跡17~14層で確認された微細刺突列による懸垂文(図82:9, 10)と孔列文土器(図82:11)が発見されていることから、エゼロI期に併行する。さらにユナツィテ遺跡13~9層でよく知られた斜格子充填市松文や幾何学文と帯状ネガティブ文が認められ、そのうち斜格子充填三角文と菱形ネガティブ文の組み合わせはコストラッツII期にも見受けられる(Nikolić 2000, T. XXXI:4)。このことから連続短線状刺突文による市松文と帯状文の組み合わせをもつ鉢(図82:1)と、円形浮文を列状に配した装飾(Радунчева 1981, обр. 33:1)といったコツォフェニII~III期とコストラッツII期の要素は(Nikolić 2000, T. IX:11; T. XLI:18, 19; Roman 1976a, Pl. 70:13; 71:15; 72:3; 74:13; 77:4, 7; 79:1; 83:7, 16; 84:4; 109:2, 3, 5)、ユナツィテ遺跡13~9層のエゼロII期に併行すると考えられる。

エゼロIII期の併行資料として、ペルニク・クレポスタ遺跡でこの地域で唯一の発掘資料が出土している。それはいわゆるブバニ・フムIII期の双耳状把手付カップ(Alexandrov 1998, 224)である。類例は上トラキア平野のデャドヴォ遺跡I/II層、エゼロ遺跡、マノレ・ラスコパニツァ遺跡5層のエゼロIIIb期に見られる。さらに同様のカップはセルビア南東部とマケドニア北東部でユナツィテ・カップとともに確認されており(Bulatović 2011, 61ff., fig. 2, map 2)、これら2種類のカップがほぼ同時期に広域にわたって分布していたことがわかる。

5. 2. 5. ブルガリア北東部

トゥトラカン遺跡の土器群は上トラキア平野東部とは特徴を異にする。口縁部の円形打出文をもつ土器は、ルーマニア南部のオダヤ・トゥルクルイ遺跡(Odaia Tulcului)に代表される後期グ

リナの特徴を示している (Schuster 2004, 88-96; Tudor 1982 abb. 2:5, 7; 4:9)。後期グリナの遺跡はコツォフェニ III 期の後、つまり、エゼロ III 期に併行する。その証拠にトゥトラカン遺跡の外反口縁に縦位ループ状把手をもつ浅鉢は、エゼロ III 期に併行するダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓の 5 号祭祀遺構から出土している。

ブルガリア北東部の墳丘墓から出土した副葬品の土器 (マダラ墳丘墓 3 号墳 4 号墓、カルゲリツァ墳丘墓 5 号墳 1 号墓、5 号墓、6 号墓) はいずれもエゼロヴォ II 遺跡に類例が求められた。このことからこれらの埋葬址はエゼロ II~III 期のあいだに位置づけられる。なお、プラチドル I の 1 号墳 1 号墓には、墳丘墓群で唯一水差しが副葬されていたが、特徴に乏しく、年代付けについては不詳である。

5. 2. 6. ブルガリア北部

ブルガリア北部では、エゼロ I 期併行の指標にアスコスと孔列文土器、II 期に盤状浅鉢、III 期にカップ類が挙げられる。一連の指標資料と遺跡の年代的 position は、ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡とオスマンキン・ドル遺跡の事例を対比することで得られる。ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡からはアスコスと孔列文の深鉢が出土しているが、オスマンキン・ドル遺跡ではこれらの要素は認められない。そのかわりに盤状浅鉢、突起付把手の水差し、キリロヴォ・カップが出土している。このように両遺跡では指標資料のあり方が排他的であり、かつオスマンキン・ドル遺跡の土器要素が上トラキア平野東部のエゼロ II 期と III 期をそれぞれ年代付ける指標である。さらにジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡のアスコスは注ぎ口側の断面形が S 字状を描いており、上トラキア平野西部、黒海沿岸域、ブルガリア北西部の事例に比べ (図 66:21; 図 76:1; 図 97:10)、上トラキア平野東部のアスコスに特徴がもっとも近いといえる (図 23:1, 2; 図 55:1, 2, 5)。また孔列文土器は上トラキア平野では年代幅のある要素であるが、ブルガリア北西部のサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡やサドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡ではエゼロ I 期併行資料と孔列文土器が同じ層から出土している点にも注目しておきたい。ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡の資料は前期青銅器時代第 2 段階に年代付けられているが (Еленски 2012)、以上の点から、ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡のアスコスと孔列文土器はエゼロ I 期に併行する可能性が高いといえる。そして、このことから同地域に位置するムセリエヴォ・モレニツァ洞窟 2 層の孔列文土器もエゼロ I 期に位置づけられると判断しておきたい。

ブルガリア北部のエゼロ III 期の指標資料にはカップ類がある。キリロヴォ・カップがオスマンキン・ドル遺跡とデヴェタキ洞窟から、マルテペ・カップがムセリエヴォ・モレニツァ洞窟攪乱

層から、ユナツィテ・カップと双耳状把手付カップがデヴェタキ洞窟から出土している。ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡の丸底カップ（図 89:2）に関しては、形態的な相違点はあるものの、細身胴長で、胴部下部にアクセントとなる稜をもつ点で、サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 3 層の資料を類例として認めることができる（図 93:13）。ここでは同じ層からユナツィテ・カップが出土している点を考慮すると、ジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡の細身胴長の丸底カップはエゼロ III 期に位置づけられる。デヴェタキ洞窟に関しては上層から水差し（図 91:5）が出土しており、この類例が後期グリナに認められる（Roman 1976c, abb. 4:10）。トゥトラカン遺跡資料と同様に、後期グリナとエゼロ III 期は時期的な併行関係にあると考えられることから、この水差しもまた同時期に位置づけられる。

ブルガリア北部で唯一の集団墓であるバティン遺跡では対比可能な指標資料がブルガリア地域で認められない。副葬品の水差しはエゼロ遺跡下層およびベレケツカ・モギラ平地型集団墓と対比されたが（Станчев 1989, 8）、その形態的特徴は両遺跡で異なっている。この類例はドナウ川の対岸に位置するズィミニチェア遺跡（Zimnicea）で確認されている（Alexandrescu 1974, abb. 1）。C.シュスターによると、ズィミニチェア遺跡の資料はコツォフェニ III 期に併行することから（Schuster 2004, 89）、バティン遺跡の副葬品はエゼロ II 期に併行する。

5. 2. 7. ブルガリア北西部

ブルガリア北西部では各時期の指標資料としてルーマニア南部・南西部およびセルビア東部のコツォフェニ系土器とコストラツ系土器、そして上トラキア平野の土器要素が共存している。エゼロ I 期併行の指標資料はサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 2 層とサドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡で認められる。サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡の年代について、トドロヴァは口唇部刻目文と口縁部孔列文の深鉢と胴部の三角形刺突文をもとに、本論でいうエゼロ Ia 期との併行関係を指摘した（Todorova 1992, 373）。しかし、実際にはこれらの要素はエゼロ I～II 期によく認められるため（Георгиев и др. 1979 таб. 149; 181 тип 7）、こうした特徴をもつ資料が必ずしもエゼロ Ia 期に比定されるわけではない。むしろエゼロ I 期の類例には口縁下部に孔列文をもつ外屈深鉢を挙げることができる（図 93:8）。通常、孔列文は口縁部の上部に施文されるが、この外屈深鉢の場合、口縁下部に施される点が特徴的である。これと同様の深鉢がエゼロ遺跡 13～10 層から出土していることから（Георгиев и др. 1979, таб. 156, тип 7a）、この孔列文外屈深鉢をもとに、サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 2 層資料はエゼロ I 期に年代付けられる。近隣に位置するサドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡の孔列文土器（図 94:3, 4）は、外屈深鉢は認められないもの

の、サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡と同時期のものと考えたい。

サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡で注目すべきは、2層から孔列文土器とともにユナツィテ遺跡 17~14層とコツォフェニ I 期土器との併行関係を示す資料が出土していることである。具体的には広口鉢の凹線文は (図 93:11)、ユナツィテ遺跡 17~14層の土器によく似た事例が認められる (図 66:3)。そして口縁部上端の斜線充填帯状刻線文 (図 93:9, 10) と羽状文 (図 93:7) は、ルーマニア南西部のコツォフェニ I 期遺跡に認められる (Roman 1976b, fig. 3:1, 4; 9:3)。とりわけ斜線充填帯状刻線文はコツォフェニ I 期に典型的な文様要素である (Roman 1976a, Pl. 90:9; 61:2, 6, 11, 12; 65:19; 66:2, 4, 11; Roman 1976b: fig. 3:1)。この文様要素はサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡をはじめ、ユナツィテ遺跡 17層 (Лешаков 1986, т. LXVII:1) やサドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡 (図 94:6~10) でも看取される。このことからエゼロ I 期とコツォフェニ I 期は時期的に併行すると考えられる。やや離れているが、この併行関係を示す事例として、孔列文と斜線充填帯状文をもつ土器の相伴関係がカルパチア平原南部のトゥルダシュ・ルンカ (Turdaş Luncă) 遺跡 143号遺構 (土坑) で認められる (Luca et al. 2012, 110ff.)。

エゼロ II 期併行の指標はおもにコツォフェニ系とコストラッツ系装飾から成る。北西部の土器群はパナヨトフによって「マグウラ・コツォフェニ文化」と称されたように (Панайотов 1984, 11)、ルーマニア南西部のコツォフェニ系土器を中心に比較資料が見いだされ、マグウラ洞窟、バガチナ遺跡、グラデツ・スリナティヤ・ブレク遺跡では同様の特徴をもつ土器が数多く認められる。コツォフェニ I~III 期と対応する土器要素には、羽状文と魚骨文をもつ把手 (図 97:1, 2) と袈裟懸け文 (図 97:3) (Roman 1976a, Pl. 56:2; 62:11—コツォフェニ I 期; Pl. 69:22; 73: 9; 76:1; 77:6—コツォフェニ II 期; Pl. 88:3; 94:2; 96:5—コツォフェニ III 期) がある。コツォフェニ II~III 期の要素には扁平高把手付丸底カップ (図 96:4; 図 97:4, 5) (Йоцова 1988, обр. 4:б)、円形浮文 (図 96:3, 7~9; 図 96:7, 8) が挙げられる (Roman 1976a, Pl. 71:19; 72: 3, 5~6; 74:13; 75:4; 77:4; 82:24; 88:3; 89:2; 100:2~3, 5—コツォフェニ II 期; 同 Pl. 99:14, 15—コツォフェニ III 期)。そして、コツォフェニ III 期の要素には、刻線あるいは刺突による市松文をはじめ、横位羽状文と多条縦位刻目凸帯文 (図 96:9)、肥厚口縁部内面に施文される縦位の刻線文 (Йоцова 1981, обр. 4:в) と目の粗い斜格子充填帯状文 (Йоцова 1981, обр. 6:а, ж) がある (Roman 1976a, Pl. 92:2, 4, 6; 97:2; 99:1, 3~4, 9~11; 100:7, 10; 113:9)。アスコス (図 97:10) に関してはブルガリアの他の地域でも認められるが、マグウラ洞窟の事例はコストラッツ II 期とコツォフェニ III 期に特徴的な円形刺突による市松文が施されている (Nikolić 2000, pl. XLI:20, 21; Roman 1976a, Pl. 108:11)。またバガチナ遺跡の多条鋸歯文アスコス (図 96:5) は類例がコツォフェニ III 期に見られる (Roman 1976a, Pl. 97:1)。さらにコストラッツ

II 期土器の要素として、多条縦位刺突沈線文⁹⁰ (図 96:6) と三角形刺突による逆三角文 (図 96:10) も見いだすことができる (Nikolić 2000, T. XVIII:11; XXIV:5, 13; XXV:1; XXXV:8)。このように一連の資料はおもにコツォフェニ II~III 期の土器要素から構成されていることから、これら 3 遺跡はエゼロ II 期と併行すると考えられる。

タルナヴァ墳丘墓群でもコツォフェニ II~III 期の土器要素をもつ土器が認められる。1 号墳 1 号墓と 5 号墓の壺 (図 98:1, 6) は類例がコツォフェニ III 期に認められており (Roman 1976a, Pl. 97:5)、同じ文化集団に由来するものとみて間違いはない。3 号墓には刻線文のアスコスが 1 点副葬されている (図 98:3)。これは器形と文様からコツォフェニ III 期に類例が認められる (Roman 1976a, Pl. 82:12, 12; 84:4,5; 88:4; 97:1)。このほかの土器には正確な類例を確認することはできなかったが、層位的には 1 号墳のなかで 1 号墓がもっとも古い埋葬址であることから、1 号墳はコツォフェニ III 期併行、つまりエゼロ II 期以降に年代付けられる。

2 号墳 1 号墓の縄目文深鉢 (図 98:10) は、正確な類例はブルガリア地域で確認されていない。しいてデャドヴォ、エゼロ両遺跡の縄目文土器と対比すると、縄目文深鉢はエゼロ IIb~III 期に年代付けられる。一方、この類例がルーマニア東部のブライリツァ集団墓遺跡 (Brailița) でチェルナヴォダ II 期資料として報告されている (Harțuche & Anastasiu 1976, no. 304)。チェルナヴォダ II 期はエゼロヴォ II 遺跡やエゼロ IIb~III 期と時期的に対比されている (Lichardus & Lichardus-Itten 1995, 54; Tončeva 1981, 20)。これらの年代的位置付けを参考にすると、2 号墳 1 号墓の年代は 1 号墳とほぼ同時期のものとみなすことができる。

エゼロ III 期併行の指標資料は上トラキア平野西部、とりわけダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓で認められた。サドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 3 層ではユナツィテ・カップ、細身の丸底カップ、方形把手付浅鉢がある。方形把手付浅鉢はダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓 7 号祭祀遺構から出土している。これらの資料をもとにサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 3 層はエゼロ III 期に位置付けられる。

レピツァ遺跡ではユナツィテ・カップ (図 95:1, 2) が T 字状口縁をもつ浅鉢 (図 95:3, 4) と注口付土器と同じ層から出土している。斜格子充填刻線文の施された T 字状口縁をもつ浅鉢はダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓 5 号祭祀遺構でも認められ、やはりエゼロ III 期に対応する。

バガチナ遺跡の土器については、アレクサンドロフがエゼロ III 期併行の指標資料をグリナ IV

⁹⁰ Furchenstich とよばれる施文方法である。押引文に近い施文方法だが、より深く細い線で施文されることから、本論では「刺突沈線文」と呼称する。これはコストラツ文化の土器に典型的な施文法であると指摘されている (Nikolić 2000, 50)。

期土器⁹¹として提示している (Alexandrov 2007, 230ff.)。縦位ループ状把手のつく浅鉢 (図 96:15, 16) はトゥトラカン遺跡 (図 85:3) から、ユナツィテ・カップ (図 96:13, 14)、方形把手のつく土器と T 字状口縁をもつ浅鉢、T 字状口縁に縦位ループ状把手のつく浅鉢は、ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓 3 号・7 号祭祀遺構とサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 3 層で認められる。このことからバガチナ遺跡における後期グリナの土器はエゼロ III 期と併行する。

5. 3. まとめ

本章ではデャドヴォ、エゼロ両遺跡で検討した指標資料とブルアリア各地の遺跡資料を対比させながら、その相対的な年代的位置付けについて考察した。その結果、各地域の遺跡資料がエゼロ I 期から III 期にそれぞれ位置づけられることがわかった (表 12, 図 99)。また、ブルガリア各地域では前期青銅器時代に土器要素をつうじて周辺地域と関係をもちながら、独自の土器群を形成、展開させてきた様子を見てとることもできた。

チェルナヴォダ III 期に特徴的な縦位トンネル状把手付土器が、上トラキア平野東部のゴリヤマ・デテリナ 4 号墳丘墓で確認された。墳丘墓は黒海北岸ステップ地帯を代表する墓制を示している。このことから、墳丘墓で埋葬を執りおこなう集団が「移行期」から上トラキア平野東部に存在していた可能性が浮上した。同墳丘墓の資料はエゼロ I 期土器の形成過程を検討するうえで重要な資料であるといえる。

エゼロ I 期併行段階では、黒海西岸域とブルガリア北東部を除く地域で併行する遺跡が認められた。これらの併行関係はおもに微細刺突文、凹線文、孔列文、アスコスから導き出された。またエゼロ I 期はエーゲ海北部のシタグリ遺跡 IV 層とディキリ・タシュ遺跡 IIIA 層、ルーマニア南部のコツォフェニ I 期、そしてエゼロ Ib 期はトロイ I 期と併行することも明らかとなった。

この時期には各地域を特徴付ける資料も看取された。上トラキア平野東部では微細刺突文と懸垂文のアスコス、幾何学文の施された縄目文および刻線文小型鉢、平野西部では多様な凹線文と多条鋸歯文の小型鉢、そしてブルガリア西部・南西部では縦線状凹線文を施した内弯浅鉢や屈曲胴部をもつ鉢である。ブルガリア北西部では上トラキア平野の孔列文土器と凹線文土器に、コツォ

⁹¹ アレクサンドロフはユナツィテ・カップ、斜格子充填幾何学文の施文された T 字状口縁をもつ浅鉢、方形把手をもつ浅鉢、T 字状口縁に縦位ループ状把手がつく浅鉢を「グリナ IV 土器 Glina IV Pottery」としてまとめている (Alexandrov 2007, 231, pl. VII, VIII, X)。ただし、これらの土器の編年的な位置付けについては論じられているものの (Alexandrov 2007, 228f.)、その文化的帰属についてとくにくわしく述べられていないまま、上記の土器をグリナ IV 系統とみなしている (Alexandrov 2007, 230f.)。土器の系統分析は対象となる資料ごとに行うことが肝要である。すくなくとも上記の資料のうち、ユナツィテ・カップがグリナ IV 期の土器として扱われることは受け入れられない。なおドナウ川下流域におけるグリナ文化の時期区分については Schuster 2004 を参照。

フェニ I 期系装飾の刻線文（斜線充填帯状文）が共存する土器群が展開していた。ブルガリア北部では出土資料が十分ではなく、詳細は判然としないが、アスコスと孔列文土器から上トラキア平野東部との関連性がうかがえた。

エゼロ II 期に併行する前期青銅器時代第 2 段階になると、ブルガリア各地で遺跡の分布が確認された。ただし、ブルガリア北東部の資料はなお限定的である。この時期のおもな指標資料には、刻線文小型鉢の変遷、幾何学刻線文およびネガティブ文、縄目文土器、盤状浅鉢、コツォフェニ系装飾、コストラッツ系装飾が挙げられる。これらの指標資料をもとにシタグリ遺跡 Va 層とディキリ・タシュ遺跡 IIIB 層、コツォフェニ II～III 期、コストラッツ II 期、トロイ I～II 期との併行関係がもとめられた。

エゼロ II 期の上トラキア平野東部では、縄目文と刻線文の施された小型鉢の類が衰退し、縄目文が浅鉢と深鉢に施文されるようになる。この時期を代表する盤状浅鉢も出現する。平野西部とブルガリア西部・南西部では幾何学系刻線文およびネガティブ文が共有される。その一方で、平野西部では縄目文と擬縄目文が、ブルガリア西部・南西部ではコツォフェニ系装飾の円形浮文、コストラッツ系装飾の刺突文が採用されるようになる。ブルガリア北西部ではとくにコツォフェニとコストラッツ系要素が盛行し、上トラキア平野やブルガリア西部に由来する資料が認められないことから、この地域はコツォフェニ系土器群の分布圏を構成しているとみてよい。ブルガリア北部のオスマンキン・ドル遺跡では上トラキア平野東部に由来する盤状浅鉢が認められる程度で、この地域の土器群の詳細は明らかではない。北東部に関しては黒海西岸域のヴァルナ沿岸域に類例をもつ土器が墳丘墓で副葬されていたが、前段階に引き続きこの地域の土器群の様相は不詳である。黒海西岸域ではこの時期から曲線文系の縄目文、つまみ付蓋、儀礼用土器に代表される土器群が成立し、展開した。

エゼロ III 期に対応する前期青銅器時代第 3 段階には、ブルガリア西部・南西部で遺跡の分布が希薄になり、北東部ではなお遺跡資料は限られたままである。この時期のおもな指標資料はキリロヴォ・カップ、ユナツィテ・カップ、マルテペ・カップ、双耳状把手付カップなどの小型カップ類、注口付土器、アンフォラ様壺、T 字状口縁浅鉢、方形把手付浅鉢、縦位ループ状把手のつく外反口縁浅鉢である。この時期はシタグリ遺跡 Vb 層、後期グリナ、ブバニ III 期、トロイ II 期後半～IV 期と併行する。

上トラキア平野東部を代表するカップ類はキリロヴォ・カップであり、このほかに多条垂線文浅鉢や多条山形文水差し、押引文、漏斗状土器が挙げられる。平野西部ではユナツィテ・カップとマルテペ・カップが地域的な特徴を表しているが、それ以外の土器要素の多くは上トラキア平

野東部と共通するようになる。一方、ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓では後期グリナ土器に特徴的な方形把手付浅鉢、縦位ループ状の突起付把手をもつ浅鉢が確認されている。黒海西岸域では前段階に引き続き、独自の土器群を展開させていたと推測される。ブルガリア北東部では円形打出文や縦位ループ状把手のつくの外反口縁浅鉢が認められ、後期グリナ土器群を構成していたとみてよい。一方の北西部では後期グリナ土器が、ユナツィテ・カップと注口付土器といった上トラキア平野の要素と共存していた。北部の土器群についても詳細はなお判然としないが、すくなくともキリロヴォ・カップやマルテペ・カップにみられるように南方との関係が土器にあらわれている。ただし双耳状把手付カップに関してはその由来は明らかではない。

各遺跡資料の年代位置付けを検討したところで、さいごに遺跡類型についてふれてきおきたい。これまでみたようにエゼロ III 期は多様な小型カップ類に特徴づけられ、土器の様相が前段階からおおきく変わったことを示していた。これと並行するように、遺跡類型にも変化をみいだすことができる。1 つは上トラキア平野における環溝遺跡の出現である。この遺跡の性格についてはなお明らかではないが、集落でも墓地でもない新しいタイプの遺跡が突如として現れたことは社会的な変化がこの時期に起きていたことを示す 1 つの重要な傍証となる。アッサラ遺跡やミハリツチ遺跡のデパス・カップから窺えるように、南方からの影響が強く作用していたことを示唆しているのかもしれない。

そしていま 1 つは、エゼロ III 期におけるブルガリア各地での墳丘墓の減少である。正確には、墳丘墓に関しては多くの場合、精確な年代的検討が困難であったため、実際に墳丘墓の数がこの時期に後退したのか定かではない。ただし、今回の検討によって土器を副葬する墳丘墓はエゼロ I 期以前からエゼロ II 期におおむね集中し、エゼロ III 期のみ確実に年代づけられる埋葬址は見あたらなかった。このことから、墳丘墓に土器を副葬する習慣はすくなくともエゼロ III 期に衰退したと判断できるのではないだろうか。このほかに墳丘墓とともに黒海北岸域に由来する資料に縄目文土器がある。上トラキア平野では縄目文土器もまたエゼロ III 期以降に衰退していくことが確認されている。このように黒海北岸ステップ地帯に起源する縄目文土器と墳丘墓といった文化要素がエゼロ III 期に衰退し、それと入れ替わるように、上トラキア平野に南方系土器と環溝が出現していることは、この時期に上トラキア平野で社会的な変化が起きていたことを示しているといえる。

エゼロ III 期以降の上トラキア平野における事象についてはレシュタコフがくわしく考察しているが、そこに至るまでのプロセスについてはなお十分に論じられていない。第 III 部では前期青銅器時代開始期におけるエゼロ I 期土器の成立過程とその後の展開を北方からの影響に注目しな

から検討することとする。

第 III 部 土器文化の成立と展開

第6章 上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりと エゼロ I 期土器の系譜

6. 1. はじめに

第 II 部ではデャドヴォ遺跡とエゼロ遺跡の資料をもとに、ブルガリア各地で前期青銅器時代の土器編年について論じた。その結果、土器の型式学的特徴の変遷とその年代的位置付けがおおむね整理された。そのなかで前期青銅器時代前葉のエゼロ I 期には上トラキア平野東部に遺跡が比較的集中して分布すること、それまでエゼロ I 期以降に年代づけられた資料のなかにはエゼロ I 期に先行する資料が存在することがわかった。一方で、エゼロ III 期にはアナトリア・エーゲ海域からの影響が上トラキア平野に及び、社会変化の兆候が認められた。エゼロ III 期の様相は近年レシュタコフの研究により明らかになりつつあるが（例えば Leshtakov 2005）、社会変化にいたる最初のプロセスを具体的な資料からアプローチしようとした試みは意外と少ない⁹²。

そこで本章ではブルガリア前期青銅器時代前葉の資料が比較的まとまって公表されているデャドヴォ遺跡をはじめ、上トラキア平野東部を対象にエゼロ I 期土器の系統関係を明らかにし上記の課題について考察する。そのためにはまずエゼロ文化の起源に関わる研究史を整理し、これまで述べられてきた問題の所在を明らかにする。そのうえで分析資料には、エゼロ I 期土器と先行する周辺地域の土器装飾と埋葬儀礼に用いられた土器を中心に持ち上げ比較を行う。そしてその結果をもとに、周辺地域の土器との関連性を検討し、エゼロ I 期土器の系譜と形成過程の実態、つまりブルガリア前期青銅器時代の始まりがどのような経緯で成立したのかを検討する。

6. 2. 研究の背景

6. 2. 1. 「間層」の発見

前期青銅器時代と後期銅石器時代の考古資料に著しい相違が認められることは、これまで幾度となく指摘されてきた（例えば、Georgiev 1961; Тодорова 1986）。後期銅石器時代は、ヴァルナ墓地遺跡（Варна）に代表されるような金製品や銅製品、彩文土器などの豊富な副葬品を有する墓

⁹² 数少ない重要な成果にパナヨトフによるヤムナ文化の埋葬研究が挙げられる（Панайотов 1989）。

と、計画的に配置された居住区域を防御施設によって囲われる集落が登場し、ブルガリア先史時代の中で文化的に最も栄えた時期として理解されている (Тодорова 1986, 182—213)。

前期青銅器時代になると、それまでの豪華な副葬品は姿を消し、質素な物質文化にとってかわった。こうした重大な変化を理解する手がかりとして厚さ 30~40cm の「間層」が注目されることとなった。この層の存在は上トラキア平野のテル型集落で後期銅石器時代層と前期青銅器時代層のあいだで確認されている (Лещаков 1997; Тодорова 1986)。レシュタコフは「間層」を腐食土層と表現しているが (Лещаков 2006, 155)、レシュタコフに限らず、それが実際に腐食土層であるかどうか科学的根拠は提示されていない。いずれせよ、「間層」のあいだにおきた出来事こそが、2つの時代の文化的断絶を説明することを可能にすると理解され、数多くの仮説や解釈が提出されることとなった。

6. 2. 2. いわゆる「移行期」について

仮説について述べるまえに、いわゆる「移行期」について再度確認しておく。前項の「間層」と「移行期」が結びつけられることとなった発端は、ブルガリア先史遺跡を対象に行われた 1970年代の理化学的分析による年代測定であった。分析の結果、後期銅石器時代の下限と前期青銅器時代の上限のあいだに数百年以上の開きがあることが判明した。文化的断絶を象徴する「間層」に、間接的ではあるが、具体的な年代上の数値が与えられたことで、この期間は銅石器時代から青銅器時代への「移行期」と呼ばれるようになった (Тодорова 1979: Таб; 3)。

1990年に『ブルガリアにおける、いわゆる「移行期」研究の現状』という題目の討論会がブルガリア考古学研究所で開催され、そのとき議論された内容が学術雑誌 *Археология* 1992, кн.2 で報告されている。報告ではブルガリアにおける「移行期」遺跡の発掘成果が調査担当者によって整理され (Аврамова 1992, Георгиева 1992, Гергов 1992)、討論会の先導役をつとめたヴァイソフが「移行期」の2段階案を提示した (Вайсов 1992)。

90年代には J.ゲールスドルフと Y.ボヤジエフが、それまで公表されていなかった ¹⁴C年代に加えた新たな分析結果を示している (Boyadziev 1995; Gørsdorf & Bojadziev 1997)。そのなかで「移行期」について4つの点を指摘した。①ブルガリアにおける後期銅石器時代と前期青銅器時代間の年代は前 4100/3900~3300/3200年を示す。②ブルガリア北部とロドピ山塊に分布する遺跡の年代は「移行期」前半の前 3900~3700年におさまる。③前 3700~3300/3200年のあいだにおさまる集落遺跡はブルガリアでは知られていない。④上トラキア平野では「移行期」の年代と対応する遺跡そのものが確認されていない (Gørsdorf & Bojadziev 1997, 121)。

ただし、第Ⅱ部第5章ですでに指摘したように、上トラキア平野では「移行期」に比定される遺跡資料（ゴリヤマ・デテリナ4号墳丘墓）が確認された。これにドラマ・メルジュメキヤ遺跡の¹⁴C年代（Gleser 2011）を併せて考慮すると、③と④に関しては見解の修正が必要となっている。

6. 2. 3. 後期銅石器時代から前期青銅器時代への変遷に関する3つの仮説

このように「移行期」は前期青銅器時代の始まりと密接に関連するため、ここでは「移行期」に関する代表的な仮説とその問題点を指摘しておく。1つ目は「移住民仮説」とよばれるもので、M.ギンブタスの解釈がよく知られている。ギンブタスは自らの解釈を「クルガン仮説」⁹³と呼び、黒海北岸のステップ地帯に展開していた騎馬集団が東欧に移住し、各地に大規模な社会変動を招いたと主張した（Gimbutas 1970; 1973; 1977; 1979）。具体例として、上トラキア平野とブルガリア北東部の後期銅石器時代集落には、住居などの焼失遺構を含む焼土層をともなって放棄される事例が挙げられている（Тодорова 1986, 51—77）。その代表例としてとりあげられるユナツィテ遺跡では、約50体の人骨が後期銅石器時代最上層の焼土内から検出され、なかには頭蓋骨に外傷の痕跡をもつ人骨が発見されたことから、ユナツィテ遺跡の集団は外来のクルガン文化集団によって壊滅的な被害を受けたと解釈された（Merpert 1997, 74f.）。

ギンブタスの論考をはじめとする「移住民仮説」に関連した議論は、黒海北岸ステップ地帯から東欧または中欧の一部を含む非常に大きなスケールで展開されたため、エゼロⅠ期土器の成立過程の解明を目的とした研究が具体的な資料を用いて十分に行われてこなかった。また上トラキア平野をはじめブルガリア各地で、外来集団による暴力行為を示すような人骨資料が検出されていないため、ユナツィテ遺跡の資料は一般的な事象とはいえない。したがって、これを上トラキア平野における標準的な「移住民仮説」の資料として受け入れることはできない。

2つ目は「気候・環境破局仮説」と呼ばれるもので、それを主張したのはH.トドロヴァである。トドロヴァは後期銅石器時代終末（前5千年紀末）に起きた地球規模の気候変動（温暖化）によって、ブルガリア各地で生活を営んでいた集団はそれまでの生活形態を維持することができなくなったと論じた（Todorova 1995, 89）。上トラキア平野では気候変動による生態系の変化が、テル型集落の放棄とロドピ山塊への集団移住を引き起こしたと考えられている（Todorova 1995, 90）⁹⁴。

「気候・環境破局仮説」はブルガリア先史時代研究において、気候変動を文化変化の重要な要

⁹³ クルガンとは主に銅石器時代以降に北方ユーラシア大陸を中心に分布する墳丘墓のことである。

⁹⁴ 一方、P.ゲオルギエヴァは当時のブルガリアにおける人口の減少を明確に示すことは、資料的な制限があつて困難であると述べている（Георгиева 2005, 154）。

因として積極的に捉える契機となった。しかし、上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりについては、仮説のなかで特に説明されることはなかった。

3つ目の「社会変動仮説」はL.ニコロヴァによって提唱された。この仮説では後期銅石器時代終末段階の気候変動による適応戦略として、上トラキア平野の在地集団が農耕牧畜を営む定住生活から移動性の高い牧畜生活へと生活形態を変えたと述べられている (Nikolova 2000a, 4ff.)。トドロヴァの「気候・環境破局仮説」との違いは生活形態の変化を迫られた在地集団が、今日まで考古学的な痕跡を残すことなく、上トラキア平野やその周辺地域を季節的に移動する生活を営むようになったと指摘されている点にある。つまり、「社会変動仮説」は「移行期」の上トラキア平野における考古資料の不在を、自然環境の変化にともなう生活形態および生業の変化の結果として解釈しようとしたものである。

しかし、考古資料の不在に関しては、すでに指摘したようにゴリヤマ・デテリナ4号墳が「移行期」にすでに築かれていた可能性があるため、再考の余地がある。さらに、この仮説ではゴリヤマ・デテリナ4号墳といった墳丘墓と在地集団の関係性についてはとくに言及されていない。

6. 2. 4. エゼロ文化の起源に関する解釈と問題点

上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりに関する問題は、「移行期」の問題と関連して編年研究においても言及されてきた。メルペルトらはエゼロ遺跡の調査報告書で、エゼロ遺跡の前期青銅器時代前葉に当たるエゼロI期をトロイI期より古く位置づけた。そして、中欧（縄目文土器と石斧）と黒海北岸ステップ地帯（墳丘墓）における諸文化の要素をもとに、エゼロ文化の源流は小アジア、ギリシア、エーゲ海諸島ではなく、中欧から黒海北岸域にかけての地域にあると考えた (Георгиев и др. 1979, 497—523)。

そこで注目されたのがドナウ川下流域を中心に分布していたチェルナヴォダIII期の資料である⁹⁵。この資料がブルガリアで発見されるまでは、エゼロI期はチェルナヴォダIII期より古く年代付けられていた (Георгиев и др. 1979, 502)。その後、ブルガリアで資料の発見が続き徐々にその数が増してくると、チェルナヴォダIII期をエゼロI期より古く位置付ける意見が優勢となった

(Gleser 2011; Gleser & Thomas 2012; Lichardus & Iliev 2001; Lichardus & Lichardus-Itten 1995; 2003; 2003; Nikolova 1999; 2001; 2008; Němejcová-Pavúková 1982; 1999; Parzinger 1993; Roman 2001; Лихардус & Илиев 2004; Христова 2008)。たとえば、P.ロマンはチェルナヴォダIII期とエゼロI

⁹⁵ 近年、チェルナヴォダIII文化に関する基本的な特徴がまとめられている (Oanță-Marghitu 2003)。英語に翻訳された論文は次のURLで読むことができる。http://www.archaeology.ro/so_cernav_eng.htm。

期の先後関係を示す証拠としてブルガリア西部のラドミル・ヴァホヴォ遺跡を取り上げ、間接的にではあるが、チェルナヴォダ III 期がエゼロ I 期に層位的に先行すると論じた (Roman 2001, 17)。D. アンソニーと I. マンズラもドナウ川下流域のチェルナヴォダ III 期資料をエゼロ遺跡より古く、前 3600/3500～前 3100/3000 年に位置付けている (Anthony 2007, 492; Manzura 2005, 316)。また、同様の較正年代は上トラキア平野のドラマ・メルジュメキャ遺跡でも測定されている (Gleser 2011)。このようにドナウ川以南においてもエゼロ I 期に先行する遺跡の存在が確認されることとなったが、これらの所見は基本的にチェルナヴォダ III 期を議論の中心にすえながらエゼロ I 期の時間的関係を論じたものであり、両者の系統関係が述べられていたわけではない⁹⁶。

ドラマ・メルジュメキャ遺跡での調査に携わった研究者によって、エゼロ文化の成立について 2 つの異なる意見が述べられている。リハルドゥスらはドラマ遺跡群の資料をもとに後期銅石器時代から上トラキア平野東部と黒海ステップ地帯との間に交流関係が成立していたと指摘しながら、エゼロ文化の起源については黒海ステップ地帯から南下してきたヤムナ文化の影響が強く作用していたと論じた (Lichardus & Lichardus-Itten 1995, 48ff.; 2003, 57ff.)。一方、グレーザーらはドラマ・メルジュメキャ遺跡の調査報告書をまとめるにあたり、チェルナヴォダ III 期の土器資料を詳細に検討した。リハルドゥスらの解釈を批判しながら、チェルナヴォダ III 文化がエゼロ文化の基盤をなしていた可能性を指摘している (Gleser & Thomas 2012, 322f.)。リハルドゥスとグレーザーの所見はチェルナヴォダ III 文化に関する考察の枠内にとどまるものの、具体的な資料をもとにエゼロ文化の成立について論じた点でそれまでとはおおきく異なる。

ドナウ川下流域や黒海北岸ステップ地帯をはじめとする北方の地域にエゼロ文化の溯源を求めようという気運が高まるなか、他方では西アジア地域との関係を重視する意見も提出された。その背景には、前 4 千年紀半ばにメソポタミア地域で勃興した都市とその広域にわたる影響が検討された (Merkyte 2007, 54)。しかし、第 II 部で確認したように、上トラキア平野でいち早く西アジア地域、とりわけアナトリアとの関係が明瞭なたちで認められるようになるのは、エゼロ III 期以降のことであり、前期青銅器時代の開始期に西アジア地域の影響を考慮する材料に乏しい。

これに対してもう 1 つの解釈として内的要因説を支持するニコロヴァの最新の説では、上トラキア平野におけるエゼロ I 期土器の登場について次のように述べている。つまり、当該期の土器は後期銅石器時代から上トラキア平野に居住していた在地集団が気候環境の回復に伴ってテルに再

⁹⁶ リハルドゥスらはドラマ・メルジュメキャ遺跡におけるチェルナヴォダ III 期土器とエゼロ遺跡の土器を対比して両者の類似点と差異点を挙げ (Lichardus & Iliev 2001, 174f.)、グレーザーらはその有効性を指摘している (Gleser & Thomas 2012, 322)。

居住し始め、農耕牧畜を主生業とする定住生活を営むようになったことで生じたと考えられている (Nikolova 2001, 248; 2005, 91f.)。

レシュタコフはニコロヴァと同様、内的要因説の可能性を指摘しているものの、この問題についてはチェルナヴォダ III 期の編年的位置付けを確定させることが先決であるとし、最終的な結論を示していない (Лешаков 2006, 155)。またパナヨトフは将来的に上トラキア平野で「移行期」の遺跡が見つかる可能性に言及し (Панайотов 1984, 11)、遺跡不在の原因を調査不足に求めている⁹⁷。ニコロヴァやレシュタコフの主張はエゼロ I 期土器が後期銅石器時代から「移行期」を経て上トラキア平野で成立したと考えるものだが、資料による裏付けがなされていない点に難がある。

このようにこれまでエゼロ文化とチェルナヴォダ III 文化の関係が数々の研究者によって指摘されてきたものの、エゼロ文化の資料を基本とした議論は十分に進められてこなかったことがわかる。裏を返せば、多くの研究者が両者の時間的關係に言及しながら、チェルナヴォダ III 文化、あるいはヤムナ文化との単系的な関係にのみ注目してきたことを意味している。このことはリハルドウスら (Lichardus & Lichardus-Itten 2003) が指摘したようなチェルナヴォダ III 期とエゼロ遺跡間の土器に認められる差異が、エゼロ I 期土器の成立においてどのような意味をもつのか、換言すれば、エゼロ I 期土器がどのようにして生じたのか、まだ解明されていないことを意味する。

こうした背景のもと次節以降では、ブルガリア前期青銅器時代の始まりを該期の資料をもとにして考察を試みる。第 II 部で述べたように、ブルガリア前期青銅器時代の開始過程を解明するには、公表資料の質・量の点で上トラキア平野東部を対象とすることがもっとも適切であるといえる。そこで上トラキア平野で青銅器時代の開始過程について考察するために、エゼロ I 期土器とその周辺地域の資料を比較しながら、そこに居住し始めたエゼロ文化集団の系統関係を検討する。

6. 3. エゼロ文化の遺跡と周辺地域の諸文化

6. 3. 1. 分析対象としてのエゼロ I 期遺跡

本節では、第 II 部で示した遺跡のなかから、発掘調査で得られたエゼロ I 期の集落遺跡と埋葬遺跡の土器を分析対象としてとりあげる。具体的にはデアドヴォ、エゼロ、カラノヴォ、ベレケツカ・モギラ平地型集団墓、ゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓と 4 号墳丘墓の資料である。これらのテル型集落では前期青銅器時代層と後期銅石器時代層のあいだに「間層」が確認され、そのうえに青銅器時代初頭の集落が築かれている。一方の墓地遺跡にはテル型集落で認められたような「間

⁹⁷ パナヨトフの指摘はドラマ・メルジュメキヤ遺跡 (Лихардус и др. 2001) をはじめ、バダ・ブナル(Бадъ Бунар)遺跡の発見 (Христова 2008) によって立証される。

層」は明確なかたちで検出されていない。

エゼロ I 期の資料として、デャドヴォ遺跡では XVI～IX 層、エゼロ遺跡はブルガリア-ソ連隊によって調査された 13～9 層、カラノヴォ遺跡はブルガリア-オーストリア隊によって検出された 2 基の土坑 (B、H) から出土した VIIa 層の土器を採用する。埋葬遺跡としてはベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡から検出された 74 基のうち土器の副葬品をもつ 52 基を、おなじくゴリヤマ・デテリナ 2 号墳は層位グループの第 1 群を構成する 13 基の埋葬址を対象とする。

6. 3. 2. 周辺地域文化の様相

東欧には後期銅石器時代から前期青銅器時代にかけて多くの土器文化が存在していたことは、これまでの編年研究によって明らかにされている (例えば Nikolova 1999; Parzinger 1993; Todorova 1995)。その成果を基にした編年的枠組の略表を図 100 に、該期の南東ヨーロッパに代表的な土器文化の土器と遺跡分布を図 101～103 に示した。

前 4 千年紀前半から始まる「移行期」には、ブルガリア北西部のガラティン遺跡 (Галатин)、北部のホトニツァ・ヴォドパダ遺跡 (図 101:11～16)、北東部とドナウ川下流域のチェルナヴォダ I 期遺跡 (図 101:17～22)、そしてロドピ山塊のヤゴディナ洞窟 (Ядогиния) を代表とする土器が認められている。この他にギリシア北部のテッサリア地方ではラフマニ遺跡 (Rachmani)、アナトリア北西部ではクムテペ (Kumtepe) 遺跡 IB 段階の資料、そして黒海北西岸域ではククテニ AB 期と B 期の遺跡が展開していた。

その後、前 4 千年紀中葉から後葉にかけて、ドナウ川下流域から上トラキア平野とブルガリア西部にかけてチェルナヴォダ III 期の遺跡 (図 101:23～26) が拡がり、黒海北西岸域にはククテニ・トリポリエ文化の衰退後にウサトヴォ文化 (図 101:27～31) が登場する (Anthony 2007; Gleser 2011)。続く前 4 千年紀終末には上トラキア平野にエゼロ I 期、ドナウ川下流域の黒海沿岸域にチェルナヴォダ II 期、ブルガリア北西部にコツォフェニ I 期、ギリシア北部・東マケドニア地方にシタグリ遺跡 IV 層併行の遺跡が出現する。

一連の資料のなかでエゼロ I 期直前段階のチェルナヴォダ III 期とウサトヴォ期のものは特に注目に値する。チェルナヴォダ III 期の遺跡はドナウ川下流域を中心に分布している。その標識遺跡であるチェルナヴォダ遺跡は、ドナウ川右岸のデャルル・ソフィアと呼ばれる丘の上に位置し、当遺跡の調査区 (A、B、C/D) から出土した土器を基に、チェルナヴォダ I、II、III という 3 つの文化期が設定された (Morintz & Roman 1968, 47—115)。

チェルナヴォダ諸文化の集落構造はまだ十分に明らかにされていない。テルを利用した生活痕

跡が散発的に確認されているものの、全体的に集落の文化層の堆積は薄く、移動性の高い生活が営まれていたと考えられる (Morintz & Roman 1968, 97; Manzura 1999, 115)。埋葬址については、墳丘墓 (ドゥランクラク遺跡など) と平地集団墓 (ブライリツァ遺跡など) の事例がチェルナヴォダ I 期の資料として知られているが、チェルナヴォダ III 期にかんしては埋葬址が数基確認されている程度であり、全体的な様相を把握する手がかりは得られていない。

ウサトヴォ期の遺跡は黒海北西岸域からドナウ川河口北側に分布が集中している (Manzura 2003, fig. 13; Збенович 1974, рис. 1)。代表的な遺跡にはウサトヴォ (Усагово) 遺跡とマヤキ (Маяки) 遺跡が挙げられる。ウサトヴォ遺跡からは墳丘墓と平地集団墓、集落址が検出されており、住居は石壁をもつ地上式が採用された。ウサトヴォ遺跡は黒海北西岸内陸部の終末期トリポリエ土器文化 (精製彩文土器)、ステップ文化 (縄目文土器、胎土に貝殻を混和する土器、墳丘墓)、そしてチェルナヴォダ III 文化 (管状把手付き土器) とのつながりを示す資料を有している (Manzura et al. 1995: 20; Патокова 1979, 160)。墳丘墓から副葬品としてヒ素銅製の武具や装身具などが出土していることから、ウサトヴォ期の黒海北西岸域では周辺地域に強い影響力をもった首長制社会が営まれていたと考えられている (Anthony 2007, 349—359)。

6. 4. エゼロ I 期土器について

6. 4. 1. 器形と装飾要素

上述した土器文化と比較するために、ここであらためてエゼロ I 期土器の基本的特徴を確認しておく。エゼロ I 期土器は、深鉢、浅鉢、水差し、壺、舟形土器、アスコスを基本組成 (図 104) とする。装飾は 9 つのグループに分けわれ、その内訳は A: 凹線文、B: 孔列文、C: 刻目凸帯文、D: 刻目文、E: 貝殻押圧文、F: 微細刺突文、G: 刻線刺突文、H: 刻線文、I: 縄目文となる (図 104)。

凹線文 (A) は幅広で浅い沈線装飾で、エゼロ I 期では縦位か斜位の凹線が直線状に施される。エゼロ遺跡では浅鉢口縁内面に施されている事例がわずかに確認されているのに対し、カラノヴォ遺跡では浅鉢のほかに壺や深鉢などの内外面への施文が認められる (図 105:14, 15)。

孔列文 (B) は主に深鉢と浅鉢の口縁部に施され、ほぼ一定の間隔で口縁部を全周する装飾である (図 105:1~3, 5)。孔列文はエゼロ I 期に典型的な装飾であるが、カラノヴォ遺跡では確認されていない (Hiller 1997, 324ff)。

刻目凸帯文 (C) は 1 条の横位凸帯を口縁部に施文するものが多く見受けられる (図 105:3)。エゼロ I 期土器の典型的な資料であるが、カラノヴォ遺跡では少量見つまっている程度である。

刻目文 (D) は先端の尖った施文具で施文されている。土器の口唇部に連続して刻み目をつける刻目文 (D-1) は、孔列文と凸帯文と共にエゼロ I 期の集落遺跡でよく認められる (図 105:2)。カラノヴォ遺跡から出土した口縁屈折浅鉢には屈折部内面に刻目文 (D-2) が施文されている (図 105:6)。

貝殻押圧文 (E) は貝殻の縁辺を器面に押しつけて文様を施す装飾である。三日月状の押圧が胴部 (図 105:16) や口唇部に施文される深鉢 (図 105:4) がデヤドヴォ遺跡で観察されている。

微細刺突文 (F) は径 1~2mm の先の細い櫛歯状を呈した骨製あるいは木製の道具を器面に押しつけて、細かい円形刺突を列状に配置した装飾である。多くは肩部から胴部にかけて施文される。文様には 2~4 条の横位列点とそれと直交する 2~4 条の縦位列点による懸垂文 (F-1)、三角文 (F-2)、斜めに列点を充填した三角文 (F-3) が特徴的である。懸垂文 (F-1) はエゼロ遺跡の水差し、デヤドヴォ遺跡の小形鉢やアスコス、ベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡の水差しとアスコスに施文されている (図 105:8)。三角文 (F-2) と刺突充填三角文 (F-3) (図 105:17, 18) の他にも、カラノヴォ遺跡では微細刺突文をもつ破片資料が確認されている (Hiller 1997, taf. 145:9, 11; 148:20)。

刻線刺突文 (G) は 1 本の刻線の両側あるいは片側に列点を刺突した装飾である。土器の口縁部か胴部に直線状の文様が配される (図 105:19)。この種の装飾はエゼロ遺跡とデヤドヴォ遺跡から出土し、おもに横位及び縦位に施される直線状の文様と幾何学文が認められる。

刻線文 (H) は先端の細い施文具で口縁部から胴部に施文される。おもな文様は斜線充填された逆三角形のモチーフであり、デヤドヴォ遺跡の浅鉢に施文されている (図 105:20)。

縄目文 (I) は土器の器面に撚った縄目原体をそのまま押し当てて文様を施す装飾である。この装飾に関してはエゼロ Ib 期の小型鉢への施文が特徴的である (図 122:1~5; 図 125:1~8)。

6. 4. 2. カラノヴォ遺跡の土器について

エゼロ I 期土器の内容を概観したところで、カラノヴォ遺跡の資料について言及しておく。第 II 部第 5 章で確認したように、カラノヴォ遺跡第 2 次調査で検出された 2 基の土坑資料には、エゼロ I 期に典型的な刻目凸帯文、口唇部刻目文、微細刺突文が認められるのに対し、孔列文土器が出土していない。凹線文はヴァリエーションがほかの遺跡にくらべ豊かである。

このようにカラノヴォ遺跡の土坑出土土器は、デヤドヴォ遺跡やエゼロ遺跡のようなエゼロ I 期土器とはやや異なる様相を呈しているといえる。土坑の規模は決して小さいものではないことから、孔列文土器が調査時に偶然発見されなかった可能性は低いと思われる。詳細については比較検討を行ったうえで述べることにするが、論の展開上、エゼロ I 期土器とカラノヴォ遺跡の土

器を区別して記載する。

6. 5. 土器装飾の比較と系統関係

6. 5. 1. ブルガリア北部・北東部とドナウ川下流域との比較：チェルナヴォダ III 系装飾

「移行期」のガラティン、ホトニツァ、チェルナヴォダ I (以下まとめて「移行期」文化と略称) の土器 (図 101:11~22) は後期銅石器時代の伝統を維持しつつ、チェルナヴォダ III 期とエゼロ I 期と共通して認められる装飾要素を有している。それは凸帯文 (C)、口唇部刻目文 (D-1)、刻線刺突文 (G) である。横位凸帯文 (C) はチェルナヴォダ I 期、ホトニツァ期、チェルナヴォダ III 期土器で観察される (図 106:2, 6)。なかでも刻目凸帯文はチェルナヴォダ III 期土器の装飾で優勢を占めている要素である。口唇部刻目文 (D-1) は後期銅石器時代の北ブルガリアやドナウ川下流域でほとんど見受けられないのに対し、「移行期」に多く施文されるようになることから、「移行期」以降の特徴的な装飾要素と言え (Georgieva 1988, abb. 19:14, 15; Manzura 2003, fig. 9; Илчева 2002 таб. 51:1; таб. 57:7)、チェルナヴォダ III 期にも認められる (図 106:3, 7) (Manzura 2003, fig. 11)。刻線刺突文 (G) はクリヴォドル-サルクツァ-ブバニ・フム期とチェルナヴォダ I 期では知られていないが、ホトニツァ期とチェルナヴォダ III 期で確認されている (図 106:4, 8) (Manzura 2003, fig. 10; Morintz & Roman 1968, abb. 29:20)。

チェルナヴォダ III 期とエゼロ I 期土器に共通して観察される文様要素は凹線文 (A) と刻線文 (H) である。凹線文 (A) は「移行期」には胴部外面を横位に施文されていたが (図 106:1)、チェルナヴォダ III 期土器では口縁部内面あるいは胴部外面に縦位あるいは斜位に施文されるようになる (図 106:5)。縦位と斜位の凹線文を内面と外面に施文する資料はカラノヴォ遺跡に、口縁部内面の施文事例はエゼロ I 期土器に看取される (図 106:10, 13)。

刻線文 (H) に関しては、斜線充填三角文がチェルナヴォダ III 期のドウランクラク遺跡 IIa 層から (図 106:9) (Драганов 1990, фиг. IV:3, 11)、カラノヴォ遺跡の口縁屈折部内面に刻目文をもつ浅鉢 (D-2) (図 105:6) は、チェルナヴォダ III 期に比定されているブルガリア北部のコプリヴェツ (Копривец) 遺跡から出土している (Nikolova 1996, 156, fig. 8: 4, 5)。

エゼロ I 期に典型的な孔列文土器 (B) は、ブルガリア北西部のサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡とサドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡で前期青銅器時代層から出土しているが (図 93:1~4; 図 94:3, 4)、これらはすでにエゼロ I 期併行に位置づけられた。一方、サドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡の後期銅石器時代層から 1 点のみ孔列文土器が出土しており (Merkyte 2007, Pl. 11:5)、ブルガリアでは「移行期」以前の後期銅石器時代にも認められることになる。

縄目文 (I) はチェルナヴォダ I 期とウサトヴォ期に特徴的な装飾である。撚り糸による押圧文も認められているものの、典型的な文様は自縄自巻の原体を押圧した三日月文と、いわゆるキャタピラ文である。それに対し、ホトニツァ期とチェルナヴォダ III 期では自縄自巻のキャタピラ文がわずかに数点しか見つかっていない (Manzura 2003, 328; Morintz & Roman 1968, 100, 111; Vajsov 1993, abb. 13-2)。上トラキア平野東部にいたっては、縄目文土器が現れるのはエゼロ Ib 期以降のことであり、さらに原体も自縄自巻ではなく 1 段の撚り糸が使用されている。このことからチェルナヴォダ I 期とウサトヴォ期の縄目文がエゼロ I 期のはじまり (エゼロ Ia 期) に採用されることはなかったと考えられる。

チェルナヴォダ III 期の土器を検討した結果、装飾要素のうち凸帯文 (C)、口唇部刻目文 (D-1)、口縁屈折部内面刻目文 (D-2)、刻線刺突文 (G) は「移行期」からチェルナヴォダ III 期とエゼロ I 期に、縦位と斜位の凹線文 (A) と斜線充填逆三角文の刻線文 (H) はチェルナヴォダ III 期とエゼロ I 期で認められた (図 106)。したがって、エゼロ I 期土器はチェルナヴォダ III 期土器との関連性を示していると理解することができ、この 6 つの要素をチェルナヴォダ III 系装飾とする。なお、このチェルナヴォダ III 系装飾はカラノヴォ遺跡でも特徴的である。

6. 5. 2. 黒海北西岸域とギリシア・アナトリア西部との比較：ウサトヴォ系装飾

孔列文 (B) はギリシア、アナトリア西部、ブルガリア北西部のほかに、黒海北西岸域のウサトヴォ遺跡とマヤキ遺跡から出土している (図 107:2)。このなかでブルガリア北西部のサドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡から出土した孔列文土器は、さきにみたとおり後期銅石器時代に属することから、これとエゼロ I 期の孔列文土器が系統的なつながりをもっていたとは考えにくい。

ギリシアやアナトリアの南方地域については、孔列文土器がテッサリア地方、マケドニア地方、エーゲ海諸島、アナトリア南西部を中心に分布している (図 103; 図 107; 図 108)。テッサリア地方以南に位置する遺跡で確認された孔列文土器の年代をみると、前 5 千年紀前半から 4 千年紀前半の後期新石器時代から銅石器時代のものと、前 3 千年紀終わりの前期青銅器時代終末のものに分けられる (Christman 1996; Coleman, 1977; Eslick 1992, Chart 4, 101; Hanschmann & Milojcic 1976; Hood 1981, 80; Petrakis 2002; Sampson 2002)。この地域における孔列文土器の初現は上トラキア平野の事例より古くなるものの、エゼロ I 期とのあいだには数百年以上の時期差がある。また後半の資料に関しては時期的に新しく、エゼロ I 期土器とのあいだに系統関係を考えることはできない (Hood 1981, fig. 141:431~434; Joukowsky 1986, tab. 138; Parzinger 1991, abb. 7; Weisshaar 1989, taf. 145)。

テッサリア平原と上トラキア平野のあいだにひろがるエーゲ海北岸域、東マケドニア地方、トルコ北西部、ロドピ山塊では、後期銅石器時代から前期青銅器時代以前にかけて孔列文土器は出土していない (Blegen et al. 1950; Sherratt 1986; Sperling 1976)。この地域に孔列文土器が登場するのは、エゼロ Ib 期以降のエーゲ海北岸域に限られる (Aslanis 1985, 204—320)。

以上のことから、現段階において南方地域およびブルガリア北西部と上トラキア平野とのあいだで、孔列文土器の系統関係を説明することのできる資料は認められないことがわかった。それに対し、ウサトヴォ期の資料は前2つの候補地に比べると上トラキア平野からやや遠方であるものの、エゼロ I 期と時間的關係がもっとも近い。このことから黒海北西岸域の孔列文が上トラキア平野にもたらされた可能性がこれらの地域のなかでもっとも高いと考えられる。

続いて、エゼロ I 期の貝殻押圧文 (E) と微細刺突文 (F) をみると、「移行期」、チェルナヴォダ III 期はもとより、ウサトヴォ期でも採用されていない。しかし文様構成に着目してみると、貝殻押圧による三日月文はチェルナヴォダ I 期とウサトヴォ期の縄目文土器に (図 107:1, 3) (Manzura 1999, fig. 7. 8. 4; Патокова 1979, рис. 30:4, 17, 18, 21; 31:3)、そして懸垂文 (F-1) と三角文 (F-2) の文様構成はマヤキ遺跡とドニエステル川左岸に位置するヴィフヴァティンツィ (Выхвятицы) 平地集団墓遺跡から出土した副葬品の縄目文土器に類似した文様が施文されている (図 107:4, 5) (Дергачев 1978, рис. 9:19; 10:16; 11:1, 8; Патокова 1980, рис. 1:3; 2:4; Патокова & Петренко 1989, рис. 20:1, 7, 11, 15; 27:3, 7, 8)。さらに、刺突充填三角文 (F-3) の文様構成をもつ縄目文土器はウサトヴォ遺跡と、チェルナヴォダ III 期チェレイ・グループのオルリャ (Orlea) 遺跡で観察することができる (図 107:6) (Morintz & Roman 1968, abb. 45:2; Збенович 1974, рис. 4:1)。

このようにエゼロ I 期の貝殻押圧文 (E) と微細刺突文 (F-1~3) に関しては、ウサトヴォ期の縄目文土器の文様構成と酷似している点が注目される。これらの装飾要素を孔列文土器 (B) とともにウサトヴォ期との関連性をしめす資料と考え、エゼロ I 期における装飾要素 (B、E、F-1~3) をウサトヴォ系装飾とする (図 107)。

6. 5. 3. 葬送儀礼関連の遺構から出土したエゼロ I 期土器

1) 副葬品としてのエゼロ I 期土器

集落資料につづいて埋葬や儀礼の場に残された土器をみると、上トラキア平野では後期銅石器時代と前期青銅器時代で副葬品の内容が明らかに異なる。後期銅石器時代では広口の浅鉢と蓋を副葬する事例が多く見受けられるのに対し (Тодорова 1986)、エゼロ I 期のゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓と 4 号墳丘墓、ベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡では水差しやアスコス、片把

手付壺、内弯浅鉢が優勢である（図 55; 図 56; 図 58）。また、副葬されたエゼロ I 期土器の類例は、周辺の「移行期」遺跡やギリシア北部でも基本的に確認することはできない。

上トラキア平野では後期銅石器時代と前期青銅器時代にアスコスが認められており、かねてより時代をまたいだ継続的な利用が指摘されていた（Georgiev 1961, 87）。しかし、アスコスにおいても両時代をつなぐ関係性は乏しいように思われる。まず、アスコスは後期銅石器時代の副葬品に用いられていない。また、両時代のアスコスには明らかな形態的な相違がある。具体的には、エゼロ I 期のアスコス（図 105:10）は把手側の口縁部高より注ぎ口のほうが高いのに対し、後期銅石器時代のものは低い（図 101:9）（Marinescu-Bilcu 1990, figs. 1~6; Колева 1993, обр. 1~6）。このように両時代のアスコスは、形態や出土コンテクストの点であきらかな違いが見いだされること、そして後期銅石器時代タイプのアスコスは「移行期」には認められないことから、前期青銅器時代のアスコスに銅石器時代からの系譜を積極的に求めることはできない。

一方で、エゼロ I 期のアスコスに形態的に類似した例がチェルナヴォダ I 期の副葬品としてチェルナヴォダ遺跡から出土している（図 109:1）。このタイプのアスコスはベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡でも副葬品として発見されていることから、チェルナヴォダ遺跡のアスコスはエゼロ I 期土器と関連性を有していた可能性がある（Manzura 1999, 116）。このようにチェルナヴォダ遺跡の例は、エゼロ I 期のアスコスと形態的特徴が類似しているだけでなく、ともに副葬品として利用されている点もまた注目に値する。

他方で、後期銅石器時代のブルガリア北部に位置するテリシュ（Телиш）遺跡をはじめ（Gergov 2007, abb. 3）、ギリシア本土とエーゲ海域、アナトリア西部ではエゼロ I 期に先行して、エゼロ I 期の副葬品を構成する水差しや片把手付き壺が観察されているが、それらは概して副葬品として出土したものではない。それに対し、黒海北西岸域のウサトヴォ遺跡とマヤキ遺跡では、水差しと片把手付壺が副葬品として検出されている（図 109:2~4）（Патокова 1979, рис. 29:5, 10; Патокова & Петренко 1989, рис. 22:11）。さらに、これらの土器に施文された縄目文は、ベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡の水差しに施文される微細刺突懸垂文（F-1）の文様構成とよく類似する（図 55: 3, 5, 11, 11; 図 105:8）。このようにウサトヴォ期土器とエゼロ I 期土器との関係性は、副葬品として採用される水差しと片把手付壺、そして副葬品の土器に施される文様（懸垂文）をとおして見いだすことが可能である。

2) ゴリヤマ・デテリナ 4 号墳出土の土器

水差しや懸垂文は「移行期」文化やチェルナヴォダ III 期の副葬品にみられないが、チェルナヴォダ III 期資料と墳丘墓をつなぐ資料にゴリヤマ・デテリナ 4 号墳丘墓が挙げられる。第 II 部第 5 章

で指摘したように、3号祭祀遺構から出土した縦位管状把手をもつ深鉢（図109:7）の類例は、ブルガリア前期青銅器時代の資料中で一切確認することができなかった。その一方で、チェルナヴォダ III 期には縦位管状把手付土器が認められている（図101:26）（Morintz & Roman 1968, abb. 26:13; abb. 35:9, 13）。さらに縦位管状把手は3号祭祀遺構下層の1号祭祀遺構から出土した後期トリポリエの土器群にも採用されていない（Дергачев 1980）。このことから、ゴリヤマ・デテリナ4号墳丘墓の縦位管状把手付深鉢は、エゼロ I 期以前のチェルナヴォダ III 期に位置づけられると考えられる⁹⁸。

これらの点を考慮すると、上トラキア平野東部では「移行期」後半にすでに墳丘墓が構築されていた可能性が浮上する。年代的位置付けについてはさらに検証する必要はあるものの、上トラキア平野ではこのほかにも「移行期」に属するとされる墳丘墓やそれと関わりのある遺物が報告されている（Dimitrov 2007; Кънчев 1991）。一連の資料は「移行期」の上トラキア平野に墳丘墓の担い手が存在していた可能性を示すものである。その一方で、チェルナヴォダ III 期の墳丘墓はこれまで知られていないことから（Morintz & Roman 1968, 97）、同文化集団が墳丘墓で埋葬儀礼を執りおこなったとは考えられない。縦位管状把手が出土した遺構は厳密には埋葬址ではないため、同集団が墳丘墓の盛り土を埋葬以外の目的で利用したとみなすべきであろう。それゆえ、すくなくとも「移行期」後半には墳丘墓を構築した集団とチェルナヴォダ III 系統の集団が上トラキア平野に併存していたと推測され、その墳丘墓の担い手の由来する地域に関しては「移行期」に墳丘墓で埋葬を執り行っていた北方の黒海地域が挙げられるだろう。

6. 6. エゼロ I 期土器の成立

6. 6. 1. カラノヴォ遺跡資料の時間的位置付けについて

これまでエゼロ I 期土器の系統関係を探るために、該期の土器を周辺地域の資料と比較してきた。その結果、エゼロ I 期土器の装飾はチェルナヴォダ III 期とウサトヴォ期の土器とのあいだに関連性を見出すことができた。そこで本節ではまず装飾要素をもとにカラノヴォ遺跡の資料について検討し、それからエゼロ I 期土器の成立に関する考察を試みたい（図110）。

カラノヴォ遺跡 VIIa 層の土器群はチェルナヴォダ III 系装飾を土器要素としてそなえているが、ウサトヴォ系装飾の孔列文を欠いている。孔列文はエゼロ I 期土器を代表する装飾の1つであることから、カラノヴォ資料を評価するうえでも重要である。すでに指摘したように孔列文の欠如

⁹⁸ グレザーらによるゴリヤマ・デテリナ4号墳の年代に関する所見は Gleser & Thomas 2012, 316 を参照。

は調査上の理由からくるものではないと判断した。その一方で、現時点ではカラノヴォ資料とエゼロ I 期土器間の時間差を説明するための層位学的根拠も絶対年代も得られていない。

そこで凹線文の型式学的な変遷から先後関係に関する解釈を提示する。この点に関して着目すべきは凹線文の施文部位と方向である。「移行期」のホトニツァ期とチェルナヴォダ I 期で認められる凹線文は、胴部外面の横位施文を基本としている（図 106）。つづくチェルナヴォダ III 期では、胴部外面と口縁部内面に、横位と縦位の施文が中心となる。カラノヴォ遺跡では、胴部外面と口縁部内面を施文部位とし、施文方向には縦位と斜位に加え、縦横の組み合わせが見られる。そして、そのほかのエゼロ I 期土器に関しては口縁部内面に縦位か斜位方向の施文に限られるようになり、エゼロ II 期には凹線文そのものが消失する。このように凹線文の変遷は、「移行期」からチェルナヴォダ III 期にかけて量的なピークを迎えた凹線文が施文部位と凹線の方向をかえながら、カラノヴォ遺跡では文様のヴァリエーションを増やし、その後エゼロ I 期から II 期にかけて衰退、消失していくという過程を描出することができる。

カラノヴォ遺跡における凹線文の型式学的特徴はチェルナヴォダ III 期土器のそれと近いともいえそうだが、当該遺跡の土器群がチェルナヴォダ III 期土器そのものに属するわけではない。カラノヴォ遺跡ではチェルナヴォダ III 期で典型的な刻目凸帯文は少量しか見受けられず、管状把手も出土していない。また、カラノヴォ遺跡にはエゼロ I 期土器に典型的な微細刺突文がある。つまり、カラノヴォ資料はチェルナヴォダ III 期土器の要素だけから構成されているわけではない。このことからカラノヴォ資料はさしあたりエゼロ I 期土器の枠内で捉えられるべきである。ただし、孔列文の欠落と凹線文の特徴は上トラキア平野東部において、これらの要素の受容過程に若干の時間差があった可能性を示している。すなわち、チェルナヴォダ III 期土器の凹線文伝統を色濃く残すカラノヴォ資料がやや先行して現れ、そのあとに孔列文がもたらされて、本来のエゼロ I 期土器が成立するという過程が考えられるのである。

6. 6. 2. エゼロ I 期土器の形成過程

これまでの比較により、エゼロ I 期土器はチェルナヴォダ III 系装飾要素とウサトヴォ系装飾要素をもつことが分かった。ウサトヴォ系要素は孔列文と、施文法は異なるが類似した文様構成 (E、F-1~3) をもつ土器装飾として登場する。その施文法とは、エゼロ I 期土器の貝殻押圧文および微細刺突文と、ウサトヴォ期の縄目文のことであり、いずれも器面に施文具を押し当てて文様を作出する施文法である。つまり、貝殻押圧文 (E) と微細刺突文 (F) によって同様の文様の施されたエゼロ I 期土器は、縄目押圧によって形成される点列状の装飾効果を模倣したものではない

かと考えられるのである。

縄目原体を製作する技術を備えている者であれば、生活地が変わり、同じ原体の素材が移動先で入手できなくても、居住地や生活圏内で手に入る別の素材（植物の繊維や動物の毛など）を使って縄原体を作ることができたはずである。また移動の際には原体そのものを携えていくことも可能である。それゆえ、E・F 装飾要素は土器伝統に縄目文を元来もたない集団が同じような装飾効果を得るために、異なる施文具で類似した文様を施した代替現象であると考えられる。つまり、土器や人が移動した結果ではなく、情報の移動によって上トラキア平野東部のエゼロ I 期土器に E・F の文様が現れたとみなしうるのである。

こうした情報の移動を担った集団は、縄目文土器をもつウサトヴォ集団自身とは考えにくいことから、担い手の候補として時空間的に近い位置にを占めていたチェルナヴォダ III 集団を挙げておきたい。ただし、チェルナヴォダ III 期の遺跡から孔列文や微細刺突文が出土したという例はまだ知られていないため、チェルナヴォダ III 集団がウサトヴォ系装飾の伝達を担ったとする所見はさらなる検証を必要としている。しかし、上トラキア平野とその周辺地域における土器装飾をめぐる状況から判断して、この仮説は妥当性の低いものだとただちに断言することはできない。たとえば黒海北西岸域から上トラキア平野まで遠く離れているとしても、このことは大きな問題にはならない。第 8 章で述べるように、黒海北西岸域に端を発する縄目文がのちのエゼロ Ib 期に上トラキア平野東部に到達していたことがわかっているからである。

このように黒海北西岸域から上トラキア平野にかけて結ばれたネットワークを介して、北方系の文化要素がチェルナヴォダ III 集団によって南方へ伝達されてエゼロ I 期土器が成立したと考えられる。ただし、カラノヴォ遺跡の資料にみたように、ウサトヴォ系要素がセットとして一律に上トラキア平野東部に到達したわけではなく、その受容過程には要素によって時間差があったと推測される。こうした様相はつぎの墳丘墓の存在によってさらに複雑なものとなる。

6. 6. 3. 葬送儀礼に用いられたエゼロ I 期土器

前節でゴリヤマ・デテリナ 4 号墳丘墓を構築した集団とチェルナヴォダ III 集団は、上トラキア平野東部に同時期に存在していた可能性がある」と述べた。この時期から墳丘墓の分布が数多く確認されているのは、チェルナヴォダ I 期とその亜型と目されるハジデルーチェルナヴォダ I 期グループが展開するドナウ川下流域と南ベッサラビア (Manzura 1999, 116)、ウサトヴォ期の黒海北西岸域、そしてさらに北方のステップ地帯である。ブルガリア各地域で確認されている該期の墳丘墓は非常に少ないことから、上トラキア平野の墳丘墓はドナウ川下流域から北方の草原地帯か

らもたらされたと考えて問題ない (Lichardus & Lichardus-Itten 2003)。

一方、ベレケツカ・モギラ平地型集団墓遺跡とゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓の副葬品を構成する水差しと片手把手付壺は、黒海北西岸域のウサトヴォ期でも副葬品として利用されていることが確認されている。このことから副葬品としての水差し／片手把手付壺利用という共通点をもとに、ウサトヴォ期とエゼロ I 期とのあいだに儀礼上のつながりを見てとることができる。それに對し、チェルナヴォダ III 期やチェルナヴォダ I 期のドナウ川下流域では埋葬地に水差し／片手把手付壺を副葬する習慣は認められない。このことから黒海北西岸域から上トラキア平野にかけてのネットワークを介して、上トラキア平野に副葬品に関する影響が及んだという考え方もあるかもしれないが、ここで論じているのは、土器装飾の情報というレベルではなく、葬送儀礼という高度な社会的行為に関わることである。むしろ、そうした伝統を担う集団が直接こうした墓制をもたらしたと考えたほうが自然である。

6. 7. まとめ

本章では、エゼロ文化の成立を明らかにするためにエゼロ I 期土器を周辺地域資料と比較し、その系統関係について検討した。結果的に、エゼロ I 期土器はドナウ川下流域のチェルナヴォダ III 期土器と、黒海北西岸域のウサトヴォ期土器に系譜を求めることができた。またおなじ平野内でもカラノヴォ遺跡 VIIa 層の資料はやや古く年代付けられる可能性を指摘した。ここでは本章で得られた所見をこれまでの解釈と対比して整理しておきたい。

ゴリヤマ・デテリナ 4 号墳とドラマ・メルジュメキャ遺跡の検討から見てきたことは、上トラキア平野にはエゼロ I 期以前にすでにチェルナヴォダ III 集団とウサトヴォ集団が存在していた可能性があるということである。ニコロヴァは上トラキア平野に居住していた在地集団をチェルナヴォダ III 集団とは異なると考えていたが (Nikolova 2001)、その一方でグレーザーらも指摘したように (Gleser & Thomas 2012)、エゼロ I 期土器はチェルナヴォダ III 期土器とのあいだに共通する特徴をもつ。このことからエゼロ I 期土器は銅石器時代の土器伝統の延長線上にあったのではなく、チェルナヴォダ III 期土器とのあいだに系統関係が導き出されると考えられる。

一方で、リハルドゥスらはエゼロ文化が黒海北岸ステップ地帯のヤムナ文化との関係のうえに成立したと述べた (Lichardus & Lichardus-Itten 1995; 2003)。このヤムナ文化の詳細についてリハルドゥスはとくに指摘していないが、エゼロ I 期土器にはチェルナヴォダ III 期土器の要素とともに、黒海北西岸域で墳丘墓をもつウサトヴォ期の土器要素も見いだされた。このことからエゼロ I 期土器は、リハルドゥスやグレーザーらが言及していたチェルナヴォダ III 期土器およびウサト

ヴォ期土器と個別の関係ではなく、その両方との関係をもとに成立したと考えられるのである。

もちろん、エゼロ I 期土器の形成は、チェルナヴォダ III 期やウサトヴォ期の土器群の要素だけからすべて説明できるわけではない。たとえば、エゼロ I 期土器を特徴づけるアスコスを、これら 2 つの文化から説明するのは困難である。これと類似した形態的特徴をもつアスコスは、チェルナヴォダ I 期土器に見いだすことができる (図 109:1)。チェルナヴォダ I 期土器はウサトヴォ期土器と関連性をもちながら、想定よりも長い期間ドナウ川下流域に展開していた可能性も指摘されていることから (Manzura 2003)、ウサトヴォ期土器の要素が南下する過程で、別のルートを通じてエゼロ I 期土器に受容された可能性も考えられるかもしれない。

さいごに、エゼロ文化の形成にいたるまで、チェルナヴォダ III 期とウサトヴォ期土器の諸要素がどのようにして上トラキア平野東部に到達したのか、その背景について所見をのべておきたい。この点に関しては、ドナウ川下流域から北のルーマニア北東部およびウクライナ西部にかけて、前 5 千年紀から前 4 千年紀末ごろにかけて展開していたククテニ・トリポリエ文化の動向が注目される。ククテニ・トリポリエ文化はウサトヴォ文化が登場する前段階 (ククテニ B-トリポリエ B2-C1 段階: 前 3700 年~前 3400 年) の黒海北西岸域で、最大 400ha を超える巨大集落がいくつも登場するまで発展したと言われている (Anthony 2007, 277)。しかし、巨大集落はウサトヴォ期初頭には、急激に衰退、消失する (Anthony 2007, 346ff)。凋落の要因に関する最終的な結論はまだ出ていないようだが、この時期に黒海北西岸域で重大な社会変化の画期を迎えていたのは確かなことのようなのである。

それと同時に、そのような巨大集落に住んでいた集団は集落の衰退時にどこへ行ったのか、という疑問が生じる。この現象を今回考察した内容とあわせて勘案すると、エゼロ文化の形成はククテニ・トリポリエ文化の衰退と消失を震源とした一種の玉突き現象の発生に起因したと考えられないだろうか。筋書きの一例として、巨大集落を支えていた社会システムの崩壊したククテニ・トリポリエ文化はウサトヴォ集団を、ウサトヴォ集団はチェルナヴォダ III 集団を南へと押しやり、チェルナヴォダ III 集団が上トラキア平野に到達する。そしてウサトヴォ集団の一部とその集団がもっていた情報もこのとき上トラキア平野に及んできた。こうしたカオス的ともいえる状況のなかでカラノヴォ資料の土器群が成立し、その後、ウサトヴォ文化要素が受容されてエゼロ I 期土器が形成されたというものである。ここにいたるまで、段階的かつ漸進的な集団の移動および情報の伝達が複雑な過程として文化要素の変異や部分的な要素の伝播を生じさせ、エゼロ I 期土器が成立したと考えられるのである。

本章の結論として、ギンブタスの「移住民仮説」をそのまま受け入れることはできないが、黒

海北西岸域に端を発する集団の移動が、エゼロ文化の形成につよく作用していたという点は評価されるべきである。このことから「移住民仮説」という大きな枠組のなかに上トラキア平野東部の考古資料を位置づけて考えることも可能である。しかし、その要因はたんに集団が移住したことだけに起因するのではなく、仮説で論じられていること以上に複雑な地域間の関係性や自然環境の変動が影響していたと推測される。

今回は各文化の考古資料の僅かな残滓をかき集めて結論を導き出した観は否めないが、これまでに具体的に問われてこなかったエゼロ文化の系譜とその形成過程に関する新たな解釈を資料に沿って指摘した。上トラキア平野東部における前期青銅器時代の社会がはじめから黒海北西岸域からドナウ川下流域との関係性のなかで形成、展開していったと考えれば、同地域に墳丘墓や縄目文土器がブルガリアの他地域にくらべて数多く発見されていることもけっして偶然のことではないだろう。

第7章 前期青銅器時代における土器生産と産地推定： デャドヴォ遺跡資料の胎土分析をもとに

7. 1. はじめに

土器は新石器時代以降の先史遺跡からもっとも大量に出土する代表的な考古資料であり、今日においてもブルガリア先史時代研究の主要な研究対象である。土器の形態や装飾に着目した型式学的分析をもとに、各地の編年や交流関係の様相について明らかにした研究成果がこれまでも数多く提示されてきた（例えば Georgiev 1961）。その一方で、土器がどこの原料を利用してどのように作られていたのか、という基本的な問いについて実証的に研究した事例はなかなか見当たらない。土器原料の分析をつうじて土器の生産地域を特定することができれば、型式学的分析によるアプローチだけではみえてこなかった土器の移動形態および動態の把握を可能にし、その歴史的背景の解明にそれまでとは異なった観点から迫ることできるようになる。本章では前期青銅器時代のデャドヴォ遺跡で得られた土器と遺跡周辺に産出する粘土試料の分析を実施して、土器につかわれた原料の産地推定を行う。その成果を土器の型式学と民族誌の所見とあわせて検討しながら、デャドヴォ遺跡における前期青銅器時代における土器生産の様相について考察する。

7. 2. ブルガリア前期青銅器時代研究における土器胎土分析

まずブルガリア前期青銅器時代研究における胎土分析の位置付けについて確認しておく、土器は主要な研究対象でありつづけてきたが、胎土に対する関心は低いものであった。1979年に出版されたエゼロ遺跡の報告書をはじめ、1980年代に公表された先史遺跡の調査報告書に胎土に関する体系的な記載は見当たらない。90年代に入ってようやく、報告書のカタログ欄で記載が散見されるようになる（例えば Панайотов и др. 1991）。

それ以降今日に至るまで、記載の形式は様々であるが、考古学研究者が胎土を観察し、その内容を記すことは珍しいことではなくなっている。しかし、記載内容は必要最小限の観察記録に留まっていることが少なくない。また、ほとんどの場合、胎土内混入物として記載された岩石鉱物の種類をどのように特定したのか明らかではなく、全ての内容が学術的要求に応えるほどの水準に到達しているとは言い難い。

ブルガリア先史考古学研究のなかで最初に土器胎土に言及したのは V.ミコフであり、先史土器製作技術を復元する試みのなかで胎土についてふれている (Миков 1966)。それ以降は、ときおり特定の地域や遺跡内の時期差、集団の移動を示す指標としてとりあげられてきた (Krauß 2006; Nikolov 1997; Вайсов 1992)。一方、前期青銅器時代の土器生産については、レシュタコフが遺跡単位での土器作りと遺跡近くの原料利用について言及している (Лешаков 2006, 169)。ニコロヴァは世帯単位での土器生産の可能性を指摘している (Nikolova 1999, 346)。しかし、一連の指摘は研究者自身の経験的な側面がつよく、胎土の内容を特定するための自然科学的な裏付けは明示されていない。また、各遺跡近辺で採取できる粘土と土器胎土の比較も実施されていないため、土器原料の供給源に関する具体的な研究も進められてこなかった。

とはいつても、ブルガリアで胎土分析がまったく行われてこなかったわけではない。世界的には胎土分析は今日にいたるまで体系的に行われており、その有効性と限界について各研究者によって議論されている (Orton 1993; Peterson 2009; Quinn 2010; 2013; Rice 1987; Tite 2008; 大屋 2005; 松田, 建石 1999)。ブルガリアでも近年ようやくこの分野に注目が集まりつつあり、2008 年秋にはブルガリアで「Geoarchaeology and Archaeomineralogy (地質考古学と考古鉱物学)」と題するシンポジウムが開催されている。しかし、ブルガリアの土器胎土分析に関する報告は 80 件中 2 件を数えるのみであることが象徴しているように (Kostov et al. 2008)、胎土分析にかんする研究の蓄積はまだ浅く、胎土分析の成果を考古学的所見と併せた議論になかなか結びついていないのが現状である。

7. 3. 分析方法と対象

7. 3. 1. 分析方法

こうした背景のもと、本章では胎土分析として岩石学的方法と分析化学的方法を採用した。端的に言えば、岩石学的方法とは土器や粘土から薄片 (プレパラート) を作製して、偏光顕微鏡で試料内容を直接観察する手法である。この方法により岩石鉱物の種類、形状、多寡などの特徴を把握する。一方の分析化学的方法とは、素地土の化学組成と特徴を明らかにする方法である。この方法を通じて、土器や粘土の化学成分の特徴を把握することが可能である。

1) 岩石学的方法

岩石学的分析⁹⁹は次のような手順で行った。土器試料および粘土試料の一部から作製した薄片

⁹⁹ 偏光顕微鏡をもちいた分析は東海大学の柴田氏の協力のもと行われた。

の偏光顕微鏡観察を基本に、試料に含まれる粗粒粒子の種類や形、大きさを観察し記載した。偏光顕微鏡の倍率は、主に40倍と100倍を用いた。また、土器薄片を作製する際に残った小片を研磨粉で磨き、肉眼観察用の標準試料および後述する化学的分析試料とした。

薄片の作製方法であるが、まずダイヤモンドカッターで土器および粘土試料の一部を切断し、切断面を研磨し平滑にした。最終的には2000番の研磨粉（アランダム）で磨き、スライドガラスに接着剤（レーキサイトセメント）で接着した。試料を研磨する前に樹脂などを滲透させ固める方法は粘土試料には採用し、土器試料には採用しなかった。土器試料に採用しなかった最大の理由は薄片作製時間の短縮であるが、作製および観察上の問題は生じなかった。スライドガラスに接着後再度ダイヤモンドカッターで厚さ5mmほどに切断し、そのあと研磨粉で研磨した¹⁰⁰。研磨粉は120番・400番・800番のカーボランダムで、最後に2000番のアランダムで仕上げの研磨を行い、厚さ0.03mmにして、カバーガラスをはり完成する。

胎土分析のための偏光顕微鏡による土器薄片の観察は、ポイントカウンターを用い岩石・鉱物種毎の点数をカウントすることがよく行われるが、1試料の分析に多くの時間がかかる。そのため、多くの土器の薄片を観察するには必ずしも適当な方法でない。今回は1試料毎の詳細なデータを得るのではなく、大まかではあってもできるだけ多くの試料を観察し、全体的な状況を捉えることを第一の目的とした。それゆえポイントカウンターは用いず、見た目の印象を記載し、量については「多い」、「少ない」など、定性的な表現を基本とした。岩石鉱物の判定には従来の岩石学で行われるものと同じ手順で行った。

定性的な観察とはいえ偏光顕微鏡による分析には試料の作製から観察までに多大な時間を要するため、わずかな試料の観察だけで大量に出土する土器の全体的な傾向を把握することは困難である。こうした課題に対処するために本研究では偏光顕微鏡観察と併行して実体顕微鏡観察を実施し、より多くの土器胎土を観察する。実体顕微鏡観察では偏光顕微鏡観察のように岩石鉱物の種類を特定することはできないため、観察精度の差を補うために偏光顕微鏡観察で類型化した土器片を標本として利用し、土器胎土と標本間の見かけ上の特徴を比較して分類を行う。少量の試料に精度の高い分析を施して一定程度の自然科学的な裏付けを付与し、その結果を参照しながら一定程度の数量を分析するのである。なお、実体顕微鏡観察に際し、土器片に付着した石灰質の物質が肉眼観察の妨げとなってしまうため、今回は土器片の一部を上記の研磨粉で研磨し、石灰物質を取り除いた平滑面を観察することとした。

¹⁰⁰ 切り取られた細片をEDXRSで分析してから、肉眼観察用の胎土標本として利用した。

2) 分析化学的方法

化学分析は蛍光 X 線分析を実施し、明治大学黒耀石研究センターに所管されているエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (JSX-3100s; 日本電子株式会社) (Energy Dispersive X-ray Fluorescence Spectrometer. 以下 EDXRF) を使用した¹⁰¹。X 線管球はターゲットが Rh (ロジウム) のエンドウインドウ型を用いた。管電圧は 30kV、電流は最適計数率 (25000 counts) になるように自動設定とした。X 線検出器は Si (ケイ素) / Li (リチウム) 半導体検出器を使用した。真空雰囲気下で、コリメータは 1mm、測定時間は 360 秒とした。測定箇所は薄片作製時の研磨面で、粗粒粒子を極力避け、粘土部分とした。測定回数は 3 回とし平均値を求めたが、分析値にバラツキが認められた場合は測定回数を増やした。測定元素は主成分元素である Na、Mg、Al、Si、P、K、Ca、Ti、Mn、Fe の 10 元素と、微量元素である Zn、Rb、Sr、Y、Zr の 5 元素である。定量値はファンダメンタルパラメーター (FP) 法により求めた。主成分の単位は酸化物重量 (wt) %、微量成分は ppm である。

EDXRF で分析した試料の一部を、ブルガリア金属・化学技術大学の S.ジャンバゾフ准教授と有限会社 Gravelita 研究員の O.マリノフ氏に依頼して、誘導結合プラズマ発光分光分析装置 (ICP-AES) で測定をおこなった¹⁰²。両氏によると、分析はつぎのような工程で実施された。土器試料¹⁰³を 200 メッシュですりつぶし、105 度で乾燥させた。0.1g に秤量した分析試料を白金るつぼに入れ、0.3g のメタホウ酸塩リチウムを加えて混合した。試料の入ったるつぼを、マッフル炉を用いて 1000 度で 20 分間加熱した。その後、試料を 40 倍で薄めた硝酸の入った容量 100ml のビーカーにいれ攪拌して溶解した。これを 250ml のメスフラスコに移し、純水で定容して均一な液状試料を作成してから、試料測定を実施した。

7. 3. 2. 分析対象

1) 考古資料

胎土分析を実施するにあたり、デャドヴォ遺跡から土器片を合計 278 点抽出し、そのうち 31 点については偏光顕微鏡観察と化学分析 (EDXRF) を、残りの 247 点については実体顕微鏡観察を実施した¹⁰⁴。31 点の土器片は型式学的、または層位的に前期青銅器時代のものとし、胎土には

¹⁰¹ 試料の計測は明治大学の金成太郎氏によって実施された。

¹⁰² 残念ながら、分析機器に関する情報を得ることができなかった。

¹⁰³ 正確な土器資料の重量は把握していないが、ジャンバゾフ氏らに委託した資料はいずれも 1cm 四方以上である。

¹⁰⁴ このほかにデャドヴォ遺跡からは時期の異なる試料を 13 点も分析されている。時代の内訳は後期銅器時代 7 点、前期鉄器時代 3 点、中世 3 点である。また、エゼロ遺跡で表採した後期新石器時代から中世の土器 28 点も岩石学的分析

特段の注意を払わなかった。

31 点の土器片はいずれも、前期青銅器時代の上トラキア平野東部の特徴をもつ土器から構成されている (図 111)。典型的な例は口唇部に刻目文、口縁部に刻目凸帯文、そして孔列文をもつ深鉢、内湾浅鉢、刻目凸帯文が縦位につく把手が挙げられる。CT011 の縄目文小型鉢は外来系土器である。CT013 の深鉢はデヤドヴォ遺跡ではあまり認められないタイプの土器だが、トゥンジャ川下流域のドラマ・メルジュメキャ遺跡に類例が認められる(Лихардус и др. 2001, фиг. 13:1)

247 点の土器片は前期青銅器時代層上部から下部で検出された 6 基の遺構 (XV~IV 層) から得られたもので、それぞれ無作為で抽出した。一定程度の観察数を確保するため、図面作成をはじめとする資料化作業を必要としない無文で器形判定の困難な土器片を対象とした。ICP-AES 分析については、上記した 31 点の土器片の偏光顕微鏡観察をもとに分類した各胎土類型から 8 点の土器片を抽出し、分析対象とした。

2) 粘土試料

土器は通常、粘土¹⁰⁵、砂、水を原料としている。粘土と砂からなる粘質土は自然地質に由来するものであり、土器製作にはこうした粘土が採取、利用されていた。つまり、胎土素材の由来を知るためには、土器胎土だけを分析しても明らかにすることはできないため、自然に産する粘土試料と土器胎土の比較を行う必要がある。

遺跡周辺の詳細な地質図によると、デヤドヴォ遺跡の地質は遺跡基盤層となる低地の古第三紀累層と、遺跡東方にあるスヴェティ・イリヤ (Sveti Iliya) 丘陵の古生代~中生代系の累層、そして第四紀の沖積作用による堆積土から構成されている (図 112)。このことから粘土は遺跡基盤層およびその周辺の低地と東方丘陵のものを中心に採取した¹⁰⁶。

結果として、遺跡から約 5km の範囲で計 28 地点の試料採取を行った。デヤドヴォ遺跡の文化層や遺跡周辺の沖積土層でサンプルリングした試料のほとんどは可塑性に乏しく、分析に耐える試料を作製することができなかった。本論では試料を作製することのできた 14 地点の試料を分析対象とする (図 113)。

粘土試料の採取地点は地形的な特徴をもとに二つに分けることができる。1 つはデヤドヴォ遺跡の基盤層およびその周辺の低地、いま 1 つは遺跡東方の丘陵地である。前者はおもに新第三紀の石灰質層に該当する。後者は南ブルガリア花崗岩地帯を中心とするもので、古生代に属する。

されており、その結果は千本他 2010 に記した。

¹⁰⁵ ここでいう粘土とは必ずしも地質学や土壌学などの定義に沿うものではなく、粒径の粗い粒子を含み、粘性、可塑性などの性質をもつものとする。

¹⁰⁶ 調査は K.カンチェフ教授、S.ジャンバゾフ准教授と O.マリノフ氏の協力を得た。

本論では地形上の特徴から、前者を低地試料 (7, 10, 12, 13, 14, 15, 19, 20, 28)、後者を丘陵試料 (18, 23, 24, 26, 27) と呼びわける。なお、粘土試料はブルガリアから持ち帰った粘土に水を加えてブロック状に整形した後に、小型電気窯を用いて 700 度で 1 時間焼成して分析試料を作製した¹⁰⁷。

7. 4. 岩石学的方法の結果と考察

7. 4. 1. 土器資料

土器資料を鏡下で観察した結果、すべての資料に石英、長石、白雲母をはじめとする主要な鉱物が含まれていた (図114)。そこで鉱物は分類基準から除外し、岩石の種類とその内容量をもとに胎土の分類を行なった。

結果的に、土器資料を 6 つの胎土類型に分けることができた (表 13)。内訳は次の通りである。

I 類：形状の角張った粗粒の花崗岩質岩を多量に含む。24 点。

I' 類：I 類と基本的な岩種構成は類似しているが、岩石の粒径は小さく、形状はやや丸みを帯び、量も少ない。1 点。

II 類：砂岩と少量の碧玉、粘板岩を含む。1 点。

III 類：多量の粘板岩と砂岩を含む。2 点。

IV 類：中量の砂岩と火山岩を含む。1 点。

V 類：目立った岩石を含まない。2 点。

なお、偏光顕微鏡観察を行った結果、特徴の異なる粘土を複数種類混合した明確な痕跡を認めることはできなかった。このことから土器の素地は同種の原料に由来するものと推測される。

7. 4. 2. 粘土試料

東方丘陵の18、23、26、27地点の粘土試料には粗粒の花崗岩質岩が多量に含まれていた (図114; 表 13)。18地点は地質図上では輝緑岩質凝灰岩地帯、26地点は第四紀堆積地帯に類別されるが、いずれも南ブルガリア花崗岩質岩地帯に隣接しており、採取した試料も花崗岩質岩地帯のものと同様の岩種構成を有していた。一方、東方丘陵地のやや北に位置する24地点 (第四紀堆積地帯) で採取した粘土試料は、花崗岩質岩、砂岩、粘板岩、火山岩を少量含んでいた。以上の点から、今回採取した東方丘陵の試料を2種類に分類することができる。1つは18、23、26、27地点に代表される試料、いま1つは24地点に代表される試料である。前者を1類、後者を2類としておく。

¹⁰⁷ 粘土試料作製に際しては、東海大学文学部歴史学科考古学専攻の秋田かな子准教授から協力を得た。

低地試料は全体的に石灰質岩を多量に含む点が特徴的である（3類）。また1類とは異なって粗粒の花崗岩質岩がほとんど含まれていない。19地点は地質図上では第四紀堆積地帯に分類されているが、採取試料は遺跡基盤層の低地試料（7、10、12、13、14、15、20、28地点）と類似する特徴を呈していることから、19地点試料も他の低地試料と同様、新第三紀系のものと判断した。

7. 4. 3. 実体顕微鏡観察

偏光顕微鏡観察で分類した胎土類型を標本として参照しながら、247点の土器資料を実体顕微鏡で観察した。I類胎土は粗粒粒子を多量に含んでおり、標本を用いることで鏡下の肉眼レベルでも比較的容易に識別することが可能である。ここではI類以外の胎土類型を「非I類」と一括りにしてI類との区別を図った。

土器資料を分類した結果、全資料のうち9割以上（238/247点）がI類胎土に分けられた（図115）。この結果は先の偏光顕微鏡観察による結果とおおむね親和的である。観察方法そのものの精度を考慮したとき、観察上の誤認は避けられないだろうが、結果の大局におおきな影響を与えることはないと思われる。

7. 4. 4. 小結

偏光顕微鏡観察によってI類胎土に分類された土器資料は31点中24点を数え、全体のおよそ8割を占めている。そのI類胎土の内容は粘土試料1類と類似している。一方、遺跡から原料産地までの距離が最も近く、入手のしやすさの点で最も効率のよい3類の低地試料と対応する土器資料は、今回観察したもののなかで認められなかった¹⁰⁸。同様に、粘土試料2類と対応する土器資料も確認することができなかった。

以上の点からI類胎土の原料は、東方丘陵の粘土試料1と関連すると指摘することができる¹⁰⁹。I類胎土以外のI'類～IV類胎土（計5点）に関しては未知の産地粘土、V類胎土（2点）に関しては未知の産地粘土かあるいは精製粘土の可能性が高い。

偏光顕微鏡で分類した胎土類型をもとに、土器片の一部を磨って実体顕微鏡観察によって分類

¹⁰⁸ デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代層から得られた住居やカマドの建材を本章と同じ方法で分析したところ、低地試料と同様の特徴を示した。このことから、デャドヴォ遺跡では集落近くで入手可能な低地粘土を建材に用いていた可能性が高いことが明らかとなった（千本他2012; 2014b）。

¹⁰⁹ なお本論文では、I類胎土と採取した粘土試料1に含まれる粗粒粒子の構成と化学成分が近い特徴を呈するという分析結果が得られたことから、混和材が実際に添加されたか否かにかかわらず、粘土試料1に由来する地質帯の粘土および粗粒粒子が土器胎土に素材として用いられたと考えている。ただし、本論で採用した分析方法では資料および試料の詳細な化学成分まで明らかにすることができない。この点は今後の重要な課題の1つである。

をした結果、ほとんどの土器片がI類胎土であった。この結果は偏光顕微鏡観察で得られた傾向とおおむね親和的である。このことから前期青銅器時代デアドヴォ遺跡の土器生産には東方丘陵内の花崗岩質岩地帯で得られた粘土と対応するI類胎土が、中心的な役割を担っていた可能性を示す証拠を得ることができた。

7. 5. 分析化学的方法の結果と考察

7. 5. 1. 分析値について

EDXRFは比較的簡便な工程で分析が可能であり、比較的短い時間で分析数をこなすことができるという利点をもっている。その反面、分析精度に関しては重元素にくらべ軽元素に対する感度が低く、定量値そのものの信頼性は高くない。一方のICP-AESは高感度かつ高精度の分析方法であり、微量元素まで定量することができる。しかし、分析工程は複雑であり、EDXRFの作業にかかる時間と費用で同じ量の分析数をこなすことはできない。

本論で採用した方法では土器胎土および粘土試料を対象としたEDXRFの測定値は、確度の低い定量値しか得ることができない。そこで同一資料を用いたICP-AESによる分析値と比較してみると、下記でとりあげるMgO、Al₂O₃、CaOは相関関係が良いことがわかったため、相対的な指標としてEDXRFのFP法による分析値で議論することが可能である(図116)。

7. 5. 2. EDXRFによる分析結果と考察

岩石学的分析で対象とした31点の土器資料をEDXRFで分析した。測定した主要元素のうちSiO₂、Al₂O₃、MgO、CaOに着目すると、有意な所見を得ることができた(図117)。まずSiO₂、Al₂O₃、CaOをみてみると、粘土試料のSiO₂は41.2~63.7wt%の範囲を示している。そのなかでも低地試料はSiO₂がおおむね60.0wt%未満で、CaOが6.0wt%以上である。一方の丘陵試料はA、BともにSiO₂が60wt%以上、CaOが2.0wt%未満に集中する。Al₂O₃に関しては丘陵試料(1類と2類)が20wt%以上、低地試料が20wt%未満におさまる傾向を示す。このことから上記3元素間の比によって、丘陵試料と低地試料を区別することができる。

土器資料の元素をみてみるとSiO₂は59.0~65.4wt%、Al₂O₃は18.6~24.5wt%、CaOは4.3wt%未満であった。このことから土器胎土と低地試料は成分組成の点でも特徴を異にしている。とくにCaO値に注目すれば、低地試料が土器胎土に使用されたとは考えにくい。一方、丘陵試料と土器胎土はおおよそ同様の傾向を示している。

土器資料をI類胎土と非I類胎土に分けてみると、SiO₂とAl₂O₃の2元素間では分布の差を

看取することが可能である。ただし、CaO について言えば、それほど明確な違いを認めることはできなかった。MgO と Al₂O₃ の比をみると、I 類胎土は MgO の値が 1.8wt% 未満、Al₂O₃ の値が 20wt% 以上という傾向をみてとることができる。それに対し、非 I 類は MgO の値が 2.0wt% 以上、Al₂O₃ の値は 20wt% 未満である。したがって、SiO₂、Al₂O₃、MgO の 3 元素に着目すると、岩石学的方法と同様、I 類胎土と非 I 類胎土を化学組成の観点から区分することができる。さらに I 類胎土を丘陵試料と比較してみると、両者は同様の傾向を示す一方で、非 I 類胎土と丘陵試料の分布は重複していないことも明らかとなった。

7. 5. 3. ICP-AES による分析結果と考察

EDXRF で取りあげた化学元素をみてみると、SiO₂ の値は I 類が 68.9wt% 前後、非 I 類胎土は 63.7～66.3wt% (II 類が 63.7wt%、III 類が 65.5～66.3wt%、IV 類が 64.6wt%、V 類が 65.1～66.0wt%) であった (図 118)。Al₂O₃ の値は、I 類が 15.3wt% 前後、非 I 類は 14.4～15.0wt% (II 類が 14.6wt%、III 類が 14.7wt%、IV 類が 15.0wt%、V 類が 14.4～16.5wt%) である。MgO をみると、I 類が 1.1～1.8wt%、非 I 類が 1.8～2.2wt% (II 類が 2.2wt%、III 類が 2.0wt%、IV 類が 2.2wt%、V 類が 1.8～2.1wt%) という値が得られた。

分析資料数はわずか 8 点と少ないが、岩石学的に分類された I 類と非 I 類の胎土類型は上記 3 元素で区分可能であることが ICP-AES による測定結果からも看取された。このことから ICP-AES と EDXRF でとりあげた元素間の比はすくなくならず親和的であると見なすことが可能である。

7. 5. 4. 小結

同一資料を EDXRF と ICP-AES で分析した複数の元素比を比較したところ相関が良好であった。したがって、EDXRF の分析結果を一定程度の信頼性が与えられた相対的な指標と見なすことが可能となる。そのうえで EDXRF の分析結果をもとに次の 3 点を指摘することができる。1) 丘陵試料と低地試料の区分が可能である。2) I 類胎土と丘陵試料間の分布に親和的な傾向を見出すことができる。3) 非 I 類胎土は I 類胎土および丘陵試料と区分することができる。

岩石学的所見と符合するように、I 類胎土、非 I 類胎土、低地試料の区別と、I 類胎土と丘陵試料の類似という結果が化学分析を通じて得ることができた点は重要である。ただし化学分析では丘陵試料を明瞭に区分することはできなかったため、粘土試料の区分は鏡下観察によって粗粒粒子の種類と多寡に著しい相違が認められた点を重視する。したがって、I 類胎土は粘土試料 I 類が産出する花崗岩質岩地帯に由来するという推測が成立する。

一方の非 I 類胎土はそれぞれ異なる成分値を示していた。この背景には何かしらの地質環境が反映されていることが予測される。このことから非 I 類の各胎土類型にはそれぞれ異なる素材が利用されていたという推測が得られる。

7. 6. 考古学的解釈

7. 6. 1. I 類胎土と原料産地に関する民族誌との比較

民族誌は民族考古学 (Ethnoarchaeology) という分野が成立しているように、考古学研究にとって広い視野と示唆に富んだ所見を提示してくれる。ただし民族誌の内容は多様であり、考古学的な事例と直接結びつけることには十分な注意が必要である。この点に注意しながら、本項では土器原料産地に関わる定住社会の民族誌を参照する。

土器作りに関する民族誌は数多く報告されている。そのなかで居住地から土器の原料産地までの具体的な距離を体系的に調査した研究事例に関しては D.アーノルドの成果が重要である (Arnold 1985)。117 件の民族事例を収集したアーノルドは原料獲得に必要なエネルギーと経済的なコストに注目し、D.L.ブrouman の閾値モデル (Threshold model) を下地にして自ら土器資源閾値モデル (Ceramic Resource Threshold Model) を考案した (Arnold 1985, 32—60)。このモデルを自ら収集した民族誌に適用したところ、居住地から粘土原料までの距離では 1km (37%)、4km (70%)、7km (86%) が閾値となることが示された (図 119)。

アーノルド自身は居住地から原料産地までの距離が短いほど、専門化への変化の兆しが高まることを示唆しているが (Arnold 1985, 57)、ここでは多くの事例で原料までの距離が 7km 圏内に収まっている点に注目したい。アーノルドほど網羅的なデータを取り扱った訳ではないが、これと同様の指摘は他の研究でも認めることができる (たとえば Bredwa-Mensah 1996 ; Rice 1987, 120-124 ; 小林正史 2005, 36 ; 常木 2005, 62)。地形や地質環境など考慮すべき要素は幾つもあるが、7km といえは歩いて 2 時間程度で移動することができる距離であり、半日もあれば往復も可能であろう。このことから土器生産は基本的に居住地の近くにある粘土を原料に用いていたと理解することができる。

土器原料までの距離に関する一連の民族誌は、前期青銅器時代デアドヴォ遺跡における土器生産を考察する上で参考になる。土器胎土と粘土試料を岩石学的・分析化学的方法を通じて分析したところ、粗粒の花崗岩質岩を多量に含む I 類胎土が主要な土器胎土であり、かつ粘土試料 1 類と対応することから、東方丘陵地の花崗岩質岩地帯に土器胎土に使われた原料の産地があったと推定された。デアドヴォ遺跡から粘土試料 1 類採取地点までは 5km、花崗岩質岩地帯の東端まで

はおよそ 10km を測り (図 120)、上述の民族誌による粘土原料産地までの距離をカバーしている。くわえて、デヤドヴォ遺跡の北、南、そして西の方向には第四紀の沖積層および新第三紀の石灰質土壌が広がっており、これらの地域には岩石学的にも分析化学的にも粘土原料の候補地は見当たらない。このことからデヤドヴォ遺跡では、東方丘陵の花崗岩質岩地帯で産する粘土が土器生産の主要な原料として利用されていたという推測が成り立つものと考えられる。

7. 6. 2. 非 I 類胎土の位置付け

非 I 類胎土をもつ土器は、縄目文小型鉢 (CT011・II 類)、深鉢 (CT013・V 類)、浅鉢 (CT058・III 類、CT055・IV 類)、薄手精製の水差しまたは壺 (CT070・I 類、CT054・III 類、CT017・V 類) である。CT011 の縄目文小型鉢については次章で詳細に触れるが、CT013 とともにデヤドヴォ遺跡で非在地的な型式学的特徴を有していると言える。そのほかの土器資料は I 類胎土の事例と同様、デヤドヴォ遺跡で典型的なものが中心であった。

非 I 類胎土は今回採取した粘土試料と合致しなかったため、それらの胎土には未知の粘土が素地土として利用されていたことになる。デヤドヴォ遺跡の位置するスリーヴェン県内の詳細な地質図 (縮尺 10 万分の 1) を参照して原料産地の可能性を探ってみると、II 類胎土に含まれる碧玉はスタラ・プラニナを構成するスリーヴェン山地南麓とその周辺に¹¹⁰、III 類と IV 類に含まれる火山岩、砂岩、粘板岩は東方丘陵の花崗岩地帯北側に分布していることがわかる¹¹¹。I 類胎土の花崗岩質岩は岩片が細かく円磨されている点と化学組成が異なる点から I 類と区別されたわけであるが、花崗岩質岩地帯は東方丘陵の東部やスタラ・プラニナ南麓に分布していることから、I 類胎土の由来もこうした地域に求められうる。精製土器の V 類胎土については、目立った岩石が含まれていないため原料産地の候補をあげることは困難である。V 類胎土に限っては水簸された素地土が用いられていたか、あるいは水成層由来の原料が用いられていた可能性がある。

以上のことから、II 類胎土の小型鉢は型式学的にも胎土内容的にも外来産と理解することができる。一方の III 類胎土と IV 類胎土の浅鉢は在地型式の特徴を帯びていることから、同一型式圏内の別の集落で作られた土器がデヤドヴォ遺跡にもたらされた可能性がある。V 類胎土の由来は不明であるが、同一型式圏内で製作されたことは確かである。

¹¹⁰ II 類胎土については次章で改めて言及する。

¹¹¹ たとえばピトヴォ累層や火山系堆積岩が該当する。

7. 7. まとめ

本章では岩石学と分析化学の方法を援用して土器胎土と粘土試料を分析し、その結果を考古学と民族誌の所見と統合させて考察を行った。その結果、デアドヴォ遺跡のⅠ類胎土をもつ前期青銅器時代土器は、東方丘陵の花崗岩質岩地帯およびその周辺地域から産出する粘土や砂を主な原料として生産されていたという結論を導きだした。このことから、まだ仮説の域をでるものではないが、一連の分析結果にデアドヴォ遺跡で大量生産の痕跡が検出されていない点を踏まえて考えると、前期青銅器時代に東方丘陵の粘土を用いた小規模の家内生産的な土器づくり体制が敷かれていたと推測される。

一方、わずかな割合で確認された非Ⅰ類胎土のうち、Ⅱ類胎土に関しては未知の粘土で作られた搬入品の可能性を、Ⅲ類とⅣ類に関しては異なる産地の原料を利用し、かつ同一土器型式圏に属する集落で製作された可能性を指摘した。Ⅴ類に関しては今回の分析からその由来を特定することはできなかったが、同一土器型式圏内で製作されたものと考えた。

本章でえたもう1つ重要な成果は、在地土器の定義項目として胎土を利用することができるようになった点にある。これによりこれまで型式学的に外来系と判断されていた土器のなかに在地で生産されたものと認定すべき資料が出てくる可能性がある。この点をふまえ、次章では外来系土器の代表的存在である縄目文土器に焦点をあわせて検討してみたい。

第8章 ブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の変遷： デャドヴォ遺跡の事例を中心として

8. 1. はじめに

前4千年紀終末、ヨーロッパ南東部の一角を占めるバルカン半島では青銅器時代の幕開けという歴史的な画期を迎えていた。一説では、クルガン（Kurgan、墳丘墓）を築いた遊牧集団が黒海北岸の草原地帯から西方のヨーロッパ世界へ広がっていく過程で社会変容を引き起こしたといわれている（例えば Anthony 2007）。同じころ縄目文土器も北から南、あるいは東から西へと拡散していった。その存在は各地で指摘されてきたが、多くは議論百出の態をなすクルガン研究のなかに埋没している（Rassamakin 1999）。本章ではデャドヴォ遺跡から出土した縄目文土器の型式学的分析と胎土分析を出発点とし、第7章の所見を踏まえながらブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の動態からエゼロ土器文化の成立過程について論じることとする。

8. 2. 縄目文土器研究の背景

8. 2. 1. 縄目文土器をめぐる議論：「移住民搬入説」と「施文法伝播説」

縄目文土器は東欧先史考古学研究において、民族や文化、時代や地域を表象する資料と目されてきた（たとえば Garašanin 1959, 51ff.; Georgiev 1961, 88f.; Nikolova 1999; Мерперт 1976）。縄目文土器がブルガリア前期青銅器時代に現れる経緯は、おもに2つの仮説で説明されている。1つ目は遊牧集団が黒海北岸の草原地帯からブルガリアに移住した際に、縄目文土器を持ち込んだとする「移住民搬入説」である。いま1つは黒海北岸の草原地帯に起源をもつ遊牧集団とブルガリア在地の定住集団が交流し、縄目文土器の施文技術が伝わったとする「施文法伝播説」である。

第1の説はM.ギンブタスに代表される（Gimbutas 1970; 1973; 1977; 1979）。ギンブタスは前5千年紀から前3千年紀に黒海北岸から東欧と中欧にかけて分布するクルガンを、ヨーロッパ各地へ侵入する印欧語族ならびに騎馬遊牧民と結びつけた。この「クルガン仮説」として知られる一連の解釈のなかで、遊牧民の移住を示す資料の1つに取りあげられたのが縄目文土器であった。

2つ目の「施文法伝播説」は今日ひろく支持されている。ブルガリア南部の上トラキア平野を舞台にした議論では、黒海草原地帯に由来する縄目文土器が平野に伝播し、そこで製作されるよ

うになったと述べられている (Lichardus & Lichardus-Itten 1995, 51; Nikolova 1994, 68f; Roman et al. 1992, 89f.; Катинчаров 1974, 15ff.)。さらには縄目文土器の生産拠点の存在まで想定されることもあった (Georgiev 1967, 124)。この仮説の根拠としては、北方の縄目文土器とのあいだに見られる特徴の相違や、上トラキア平野独自の刻線文と縄目文間のモチーフの類似、上トラキア平野の在地的な土器の器形への施文などが示された¹¹²。

8. 2. 2. 縄目文土器研究の問題点

第1の仮説は、多くの場合、縄目文土器を印欧語族やクルガンを築いた集団と関連づけていた。ところが、クルガン仮説を提唱したギンブタス自身は縄目文土器そのものを対象とした研究には着手しなかった。そして、その後もクルガンをはじめとする墓制研究は一層の展開をみせているにもかかわらず、縄目文土器への関心は低調なままであった (Rassamakin 2004; Панайотов 1989)。

ブルガリアでも縄目文土器の発見が報告されたり、年代的な指標として取りあげられたりすることはあっても、これを対象とした体系的な研究は実施されてこなかった。例外としては、黒海北岸の草原地帯から東欧および中欧にかけての縄目文土器に関する論考 (Мерперт 1976) や、バルカン半島東部の資料集成 (Roman et al. 1992) のなかで触れられている程度である¹¹³。

このように縄目文土器を対象とした研究の蓄積は非常に限られているが、上述の仮説から2つの解釈を導き出すことが可能である。第1の仮説では北方地域からの移住集団がブルガリアに縄目文土器を持ち込んだとしている。そうであるならば、北方地域と同じような特徴を備えた縄目文土器が移住先にあらわれるはずで、これは「搬入土器」として遺跡で見つかることになる。第2の仮説では、上トラキア平野の定住集団が北方の縄目文土器製作者かそれに関わる集団から縄目施文法を受容し、その情報をもとに縄目文土器を製作したとする。よって、この仮説では「折衷土器」が生じることとなる。

一連の仮説と解釈との関連で特に指摘しておきたいのは次の点である。まず移住民搬入説にしても施文法伝播説にしても、縄目文土器の製作地や移動を実証するための具体的な分析が十分ではなかった。またブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の出現にのみ焦点をあわせ、そのあり方を一過性的な現象として捉えようとする傾向があった。それに対し縄目文土器がある程度の存続期間を有していることは、すでに標準遺跡であるエゼロでの調査を通じておおよそ明らか

¹¹² ブルガリア在地集団と交流した結果、北方系移住民自身が縄目文を在地の土器スタイルと折衷させたとの意見もある (Anthony 2007, 362ff.)。

¹¹³ 近年では中欧のポーランドから東欧のウクライナにかけて分布する縄目文土器に残された圧痕を実体顕微鏡で観察し、縄圧痕の研究を展開させようとする試みもある (Burdo et al. 2010)。

かにされてきており、一定の時間幅を考慮に入れるべきである。そして土器の動態にアプローチするためには考古学的分析に加えて、自然科学的分析を併行して行うことで有力な手がかりが得られるだろう。

8. 2. 3. 縄目文土器研究の対象と方法

縄目文土器の変遷を追いかけるには、前期青銅器時代初頭から長期にわたる層位堆積をもつ遺跡資料が有用になる。エゼロ遺跡はこの条件に該当するが、出版された年代の問題もあり報告書の内容はかならずしも万全なものではない。そこで本章ではこの要件に少なからず当てはまるデャドヴォ遺跡をとりあげる。

デャドヴォ遺跡はエゼロ遺跡近隣に位置するテル型集落で、2012年まで東海大学によって発掘調査が実施されてきた。調査面積はエゼロ遺跡に比べ狭いが、資料は調査概報を通じて継続的に公表されており、豊富な情報を提供している。本章では未公表資料も併せてここに示し、分析対象とする(表14)。また比較資料として、ブルガリアの上トラキア平野東部と西部、黒海西岸域に分布する縄目文土器をとりあげる(図121)。

分析に当たっては、型式学的属性として土器の形態、文様、施文具に着目する。施文具とは縄原体のことを指すが、原体そのものの出土例は知られていないため、土器の器面に残された原体の圧痕から施文具の特徴である撚りの方向と縄幅の把握を試みる。なお、施文具についてはこれまであまり注目されてこなかったため、実見することのできた4遺跡(デャドヴォ遺跡、ユナツイテ遺跡、エゼロヴォII遺跡、キテン・ウルドヴィザ遺跡)の資料を中心にとりあげることにする。

上記の観察項目に加えて、本論では土器の胎土分析を行う。胎土分析は一般に、素地土に含まれる粗粒粒子に着目する岩石学的方法と、素地土の化学組成を明らかにする化学的方法に分けられる。ここでは岩石学的方法を採用し、顕微鏡を用いて土器の素地土に含まれる岩石鉱物組成を明らかにする。分析対象は胎土分析を実施する際に資料の一部を破壊する必要があったためデャドヴォ遺跡のみとした。

8. 3. デャドヴォ遺跡の縄目文土器

8. 3. 1. 縄目文土器の型式学的特徴

これまでに「中央住居群地区」で得られた縄目文土器の個体数は32点である(表14)。すべて破片の状態で見つかった。このうち21点については出土状況や層位に関する情報が得られている。

1) 器形

縄目文の多くは小型鉢（図 122:1～5）、内弯浅鉢（図 122:6～13）、深鉢（図 122:14～18）、水差し（図 122:19～21）に施される。内訳は内弯浅鉢が 12 点、深鉢と小型鉢が 6 点ずつ、水差しが 3 点、そして広口の壺が 1 点（図 122:22）である。そのほか器形不詳のものが 4 点ある。形態的にはいずれも上トラキア平野東部に典型的なものである。

2) 装飾

基本的には縄目文のみで装飾される。文様構成は横線文や斜線文といった単純なものから、鋸歯文、斜線充填逆三角文、斜格子充填幾何学文といった複雑なものまで認められる。

文様と器形の関係については、複雑な文様構成の斜格子充填幾何学文をもつ小型鉢が注目される（図 122:1～5）。さらに斜線文および鋸歯文は浅鉢口縁部（図 122:6～13）に、斜線充填三角文は深鉢（図 122:15～18）に認められる。施文部位に関しては、小型鉢は口縁部から底部の内外面に、深鉢は口縁部から肩部の外表面に、浅鉢は口縁部外表面に文様が配される。このように特定の器形と部位に特定の文様が施される傾向を看取できる。

3) 施文具：縄の撚りの方向

縄の撚りの方向は集団や社会を考察するうえで看過されてはならない分析項目であると言える。なぜならば、撚りの方向は素材そのものの性質や人間の生来的な利き手の問題というよりも、文化的、社会的に要求された身体技法による習得内容を反映している可能性が高いと考えられるためである（Barber 1990）。また、日本の縄文土器研究でも撚りの方向の重要性が指摘されている（例えば戸田 1983）。

デアドヴォ遺跡の縄目文土器はいずれも 1 個体に対し撚りの方向は 1 つで対応している。縄文土器研究で採用される用語（山内 1979）に従えば、デアドヴォ遺跡の縄目文にはすべて 1 段の縄が使われている。撚りの方向は R 撚りが 14 点、L 撚りが 18 点あり、その数はほぼ拮抗している。

4) 施文具：縄圧痕の幅

撚りの方向だけではなく、どの程度の太さの縄を必要としたのか、という点もまた縄目文の構成要素として重要であろう。というのも、作り手は縄の太さを目的に応じて作り分けることができ、そこに社会文化的、技術的な要因が反映されている可能性が潜んでいると考えられるからである。

縄圧痕の幅を測定する際には、縄本来の幅とは異なる圧痕が器面に残されることも十分に考えられるため、縄目の押捺具合が良好な部分を少なくとも 3 箇所選んで測定し、その平均を求めた。測定値は小数点第 1 位までにしたが、おおよその傾向を知るには十分であると判断した。

測定の結果、縄の幅は 1.0mm から 3.8mm の範囲におさまった。これと撚りの方向の関係を示した図 123 をみると、R 撚りの縄目は幅が狭く、L 撚りのものは幅が広いという傾向をみることができる。仮に 2mm を境とすると、2mm 未満のものでは R 撚りが 14 点中 11 点であるのに対し、2mm 以上のものでは L 撚りが 18 点中 15 点となり、撚りの方向と縄の幅（すなわち原体の太さ）とのあいだに何らかの関連性があるように見える。ここでは便宜的に 2mm 未満のものを「細縄」、2mm 以上のものを「太縄」とすると、撚りの方向と縄幅では R 撚りには細縄が、L 撚りには太縄が対応する傾向を指摘することができる。

5) 施文具と器形

斜格子充填幾何学文の小型鉢（6 点）はすべて R 撚りの細縄で施文され、施文部位もこの器形だけ内外面全体に装飾される。内弯浅鉢は 12 点中 8 点が L 撚りの太縄で、その他の 3 点が R 撚りの細縄と前者が多い。L 撚り太縄の内弯浅鉢は斜線文が多く、それとは対照的に R 撚り細縄の内弯浅鉢に斜線文は施されない。深鉢は 6 点中 5 点が L 撚りの太縄で、斜線充填三角文が特徴的である。唯一 R 撚りのものは細縄で、デャドヴォ遺跡では珍しく深鉢の口縁部に横位把手のようなものがついている（図 122:18）。この他 8 点は水差しと壺、あるいは器形の特定できない破片資料であり、顕著なパターンを見出すことはできなかった。

8. 3. 2. 縄目文土器の出土層位

デャドヴォ遺跡では縄目文土器 32 点のうち 21 点は出土コンテクストが明確である。これらの縄目文土器はいずれも 4 つの住居対応層のあいだから出土している¹¹⁴。住居層は下層から 14 号住居対応層（XIII 層）、9 号住居対応層（VII 層）、7 号住居対応層（V 層）、2 号住居対応層（III 層）であり、ここでは便宜的に層位を XIII-VIII 層、VII-VI 層、V-IV 層に区分する。

出土した縄目文土器の内訳は下層から順に 4 点、4 点、13 点となった。このうち最下層の XIII-VIII 層ではすべて R 撚りの縄目文で、うち 2 点は小型鉢である¹¹⁵。続く VII-VI 層では R 撚り細縄の縄目文のほかに L 撚り太縄が 1 点認められ、浅鉢はこの層から登場する。V-IV 層では L 撚りが 10 点（このうち太縄 7 点）、R 撚りが 3 点（このうち細縄 2 点）を数え、深鉢が現れる。出土コンテクストの明らかな資料は少ないため、年代的な問題を論じるには十分とは言えないか

¹¹⁴ デャドヴォ遺跡で検出されている前期青銅器時代の住居址は、すべて平地式である。

¹¹⁵ もっとも低い小型鉢の出土地点から前期青銅器時代最下部まで、厚さ 70cm ほどの堆積層が認められる。日本隊調査区では前期青銅器時代層の最下層部に限って、層位確認を目的としたトレンチによる狭い範囲での調査しか行われていない（約 25 m²）。このため、将来的には下層部の調査によって縄目文土器がさらに発見される可能性は低い。ただし、70 年代に行われた試掘調査で前期青銅器時代最下部から縄目文土器は出土していない（Катинчаров и др. 1980, 32）。

もしれないが、敢えて言うならばR 撚り細繩の複雑な装飾をもつ小型鉢から、L 撚り太繩の単純な装飾をもつ浅鉢と深鉢へ移り変わるとみることができる（図 124）。

8. 4. 縄目文土器の年代と地域性

8. 4. 1. 編年的位置付けの検討

調査報告書¹¹⁶によると、上トラキア平野東部のエゼロ遺跡では、土器の資料数 10,215 点のうち、240 点が縄目文土器である（図 125）。縄目文土器は器形と文様で分類されており、全部で 53 タイプを数える（Георгиев и др. 1979, таб. 189~199）。縄目文土器は 11 層から安定して現れ始め、5 層で一時減少するものの、3 層まで認められる（図 126）。エゼロ遺跡でもデアドヴォ遺跡で注目した小型鉢、内弯浅鉢、深鉢の器形に縄目文が施されている。小型鉢は 11 層から 7 層まで確認され、それより上層には認められない。内弯浅鉢は 11 層から 2 層までみられるが、おもに 8 層と 7 層で優勢となる。深鉢は 11 層と 10 層にわずかに見受けられるが、おもに 6 層より上層から優勢となる。

各器形の文様の多くはデアドヴォ遺跡のものと類似し、ここでも複雑な文様から単純な文様へ、という傾向をみてとることができる。具体的な例を挙げれば、小型鉢の斜格子充填幾何学文は 11 層から 7 層まで分布するのに対し、斜線文などの比較的単純な文様は 8 層より上層で優勢となっている（Георгиев и др. 1979, 191, таб. 189）。

以上のことから、エゼロ遺跡では縄目文土器の登場から衰退までの移り変わりを 6 つの時期に区分できる。第 1 期は縄目文土器出現以前（13~12 層）、第 2 期は小型鉢が出現、展開する時期（11~9 層）、第 3 期は小型鉢の衰退と、内弯浅鉢の増加によって特徴付けられる時期（8~7 層）、第 4 期は深鉢が縄目文土器のなかで多くなる時期（6~5 層）、そして第 5 期は縄目文の文様がより単純になり、衰退しはじめる時期（4~3 層）、第 6 期は縄目文が消失する時期（2~1 層）、である。

これをデアドヴォ遺跡と対比すると、第 1 期は XVI~XIV 層（エゼロ Ia 期）に、第 2 期は XIII~VIII 層（エゼロ Ib 期）に、第 3 期は VII~VI 層（エゼロ IIa 期）、第 4 期は V 層（エゼロ IIb 期）、第 5 期は IV~III 層（エゼロ IIIa 期）に、第 6 期は II/I 層（エゼロ IIIb 期）に対応する。デアドヴォ遺跡では V 層と IV 層の区分が明瞭ではなかったが、両遺跡のあいだでは、施文器形と文様

¹¹⁶ 報告書では 2 層と 1 層の資料数に関する情報が著しく、あるいは完全に損なわれている。その原因についてはすでに第 3 章で述べたため、ここでは詳述しない。2 層から上層の前期青銅器時代層はミコフによって調査されていて、その調査成果は報告書に記載されていない。上層資料の統計データを補う見解はレシュタコフ論文（Лещяков 1997）で参照することが可能であり、本論は同論文の説を参考としている。

で共通する特徴とその時間的推移の併行関係をエゼロ Ia～IIIb 期におおむね認めることができる。

エゼロ遺跡の資料からは施文具に関するデータを得ることはできないが、デヤドヴォ遺跡の状況を加味することによって次の3点を指摘することができるのではないと思われる。まず、縄目文土器は、第II部でもみたように、前期青銅器時代初頭のエゼロ Ia 期よりやや遅れたエゼロ Ib 期に上トラキア平野東部に現れる。次に、最初に出現する縄目文土器は R 撚りで複雑な斜格子充填幾何学文をもつ小型鉢である。最後に、小型鉢出現後に L 撚りの施文具による比較的単純な縄目文様をもつ内弯浅鉢と深鉢が登場し、増加する。

8. 4. 2. 分布上の特徴に関する検討

デヤドヴォ、エゼロ両遺跡の縄目文土器と類似する事例は、上トラキア平野東部に分布する他の遺跡でも認められる。器形ごとにみると、内外面に斜格子充填幾何学文の施される小型鉢は、カラノヴォ遺跡、ドラマ遺跡群、ドラジェヴォ墳丘墓から出土している (Бакърджиев 2005, 151; Лешаков 1986, tab. 53:7; 1997, обр. 26:a, б)。オフチャリツァ II 遺跡とカラスラ遺跡で報告されている小型鉢は、内面にのみ施文されている点でそれまでの小型鉢と特徴をやや異にする (Leshtakov et al. 2001, fig. 27:f; Георгиева 1994, обр. 28:2)。

上トラキア平野東部では小型鉢の事例数が少ないのに対し、浅鉢と深鉢の出土事例は比較的多い。分布の範囲も比較的広域に拡がり、北はスタラ・プラニナ南麓から南はブルガリア-トルコ間の国境付近まで、東はトゥンジャ川下流域から西は平野中央部まで、上トラキア平野東部のほぼ全域で確認されている (Hiller 1997; Leshtakov et al. 2001; Валентинова & Ненова 2008; Кънчева-Русева & Лешаков 2008; Лешаков 1986; 1997; Лихардус и др. 2001)。公表資料の多くはエゼロ II 期 (前期青銅器時代第2段階) からエゼロ III 期 (同第3段階) にかけて特徴的な土器¹¹⁷とともに出土している。

このようにデヤドヴォ、エゼロ両遺跡と類似する縄目文土器は上トラキア平野東部に分布していることが確認できる。そのなかでも斜格子充填幾何学文の小型鉢は平野の北東寄りに、浅鉢と深鉢は平野東部全域に広く認められることが明らかとなった。これに時間的な変遷を加味すると、第2期 (エゼロ Ib 期) の小型鉢の時期から第3期および第4期 (エゼロ II 期) の浅鉢と深鉢の時期へ移り変わるときに、縄目文土器の分布も平野北東部から平野東部全域に拡散したと理解することができる。

¹¹⁷ 例えば、突起付把手を有する水差し、注口付き土器がある。

8. 4. 3. 地域性の検討

1) 上トラキア平野西部

上トラキア平野西部では東部とは異なって縄目文土器はほとんど見当たらない (Nikolova 1999; Лещаков 2006)。唯一まとまった公表資料はユナツィテ遺跡から得られている¹¹⁸。17枚の建築層からなる前期青銅器時代層は下層から順に17~14層、13~9層、8~1層に区分され、それぞれ前期青銅器時代第1段階から第3段階に比定されている(調査面積1500 m²) (Российская академия наук институт археологии 2007)。

T.ミシナによると計12,748点の土器資料のうち、縄目文土器は全体の0.1%以下で(図67:4)、層位的には11~7層に集中する(Мишина 2011, 70ff.)。筆者は11点の縄目文土器を観察する機会を得たが、その出土層位はミシナが提示したものとは必ずしも一致していなかった。15~4層から出土した縄目文土器は小片がほとんどで器形の特定は困難であったが、2点はいわゆるホールマウス状の球形胴部をもつ無頸壺であった(図66:20)。装飾は全て外面に認められ、斜線充填三角文や斜線文、多条横線文が施される。撚りの方向は11点中10点がL撚りで、撚りの方向には偏りが認められる。

ユナツィテ遺跡でもデャドヴォ、エゼロ両遺跡と同様に、前期青銅器時代最下層から縄目文土器は出土していない。15層の1点の資料に対する評価如何によるが、縄目文土器の出現は上トラキア平野東部に比べてやや遅れると考えられている(Мишина 2011, 75)。一方、無頸壺の文様は北ギリシアの東マケドニア地方・トラキア地方との関係を想起させる(Renfrew et al. 1986, pl. 98 Bottom: 1~8)。

2) 黒海西岸地域

黒海西岸域では水中から発見されたエゼロヴォ II 遺跡とキテン・ウルドヴィザ遺跡から縄目文土器が出土している。調査者によると、前期青銅器時代中葉から後葉に比定されている(Draganov 1995; Tončeva 1981)。

縄目文土器はエゼロヴォ II 遺跡で139点、キテン・ウルドヴィザ遺跡で31点が確認された¹¹⁹。器形として際立っているのは蓋、祭祀用土器、水差しである。文様としては連弧文や波状文といった曲線文系の文様と斜線充填幾何学文が特徴的で、上トラキア平野のものとは全体的に異なる様相を呈している。

¹¹⁸ レシュタコフはプロヴディフ平野以西に縄目文土器は分布せず、その模倣品となる擬縄目文土器しか認められないと述べている(Лещаков 2006, 176)。しかし、筆者はユナツィテ遺跡の縄目文土器は擬縄目文ではなく真正の縄目文であることを筆者は確認している。

¹¹⁹ エゼロヴォ II 遺跡とキテン・ウルドヴィザ遺跡の土器に関しては第 II 部第 5 章第 4 節を参照。

撚りの方向に関してはエゼロヴォ遺跡でR撚り91点、L撚り48点、キテン・ウルドヴィザ遺跡でR撚り29点、L撚り2点を数える。両遺跡ともにR撚りのほうが優勢で、これまでのところ器形、文様、施文具のあいだに特別な相関関係は認められなかった。

3) 小括

上トラキア平野東部と西部、黒海西岸域に分布する縄目文土器¹²⁰の特徴を比較してみると、上トラキア平野東部のデアドヴォ遺跡ではL撚りとR撚りが拮抗する。上トラキア平野西部のユナツィテ遺跡ではほぼ全ての縄目文土器がL撚りで施文され、一部の資料ではエーゲ海北岸域の東マケドニア地方との関係性が窺えた。黒海西岸域のエゼロヴォ遺跡とキテン・ウルドヴィザ遺跡ではR撚りが優勢で、曲線系文様とつまみつき蓋および祭祀用土器が特徴的である。また上トラキア平野東部では器形、文様、施文具間の相関性が強いのにに対し、上トラキア平野西部と黒海西岸域ではそれらの相関性は弱い(図127)。以上の点を考慮すると、3つの地域ではそれぞれ独自の縄目文土器の特徴を有しているといえる。このことは縄目文土器の導入過程がそれぞれ異なっていた可能性を暗示している。

8. 4. 4. 縄目文土器の起源に関する検討

上トラキア平野東部では縄目文土器は前期青銅器時代第1段階後半から認められ、平野西部と黒海西岸域の2地域(前期青銅器時代第2段階以降)に先行している。このことから平野東部の斜格子充填幾何学文をもつ小型鉢は、ブルガリア前期青銅器時代で最初の縄目文土器とみることができる。縄目文小型鉢は他の研究者によってすでに指摘されているように、器形と文様の点ではエゼロ遺跡においてその祖型となる資料を見出すことができるが(Георгиев и др. 1979, таб. 169)、施文法に関してはブルガリアの資料中からそうした要素を看取することはできない。したがって縄目文はブルガリア以外の地域に起源をもつことが予測される。

ヨーロッパ先史時代で最初に縄目文土器が現れるのは前5千年紀中頃の黒海北岸域とされている(Kotova 2010)。前4千年紀前半には黒海北西岸域からドナウ川下流域にかけて縄目文土器の分布が確認されるようになる。その黒海北西岸域では、前4千年紀後半から前3千年紀初頭に年代付けられているウサトヴォ遺跡とマヤキ遺跡から縄目文土器が大量に出土しており、その数は少なくとも千点以上に達していたと推測される(Збенович1974; Патокова 1979; Патокова &

¹²⁰ ブルガリア北西部でも縄目文土器の存在は確認されているが、詳細についてはほとんど明らかではない。ただし、縄目文土器の年代は前期青銅器時代中葉に比定されている(Alexandrov 1995)。なお、タルナヴァ2号墳1号墓の縄目文深鉢を国立歴史博物館で観察したところ、R撚りの縄で施文されていた(図98:10)。

Петренко 1989)。

両遺跡の縄目文はおもに壺、深鉢、外反口縁をもつ浅鉢の口縁部から胴部の外面に施される(図 107:2~6)。文様は自縄自巻による三日月文や長楕円形を呈した、いわゆる「イモムシ文」が多く、その他には多条鋸歯文と横線文、斜格子文、懸垂文、斜線充填三角文が少量存在する。これら文様と器形の間特別な相関関係は認められなかったと指摘されている(Збенович 1974, 88)。

ウサトヴォ遺跡と併行する時期に、黒海北西岸域の南に位置するドナウ川下流域ではチェルナヴォダ遺跡に代表されるチェルナヴォダ III 期土器が展開していた(Manzura 2005)。この土器群にはウサトヴォ遺跡とは異なり、例外を除いてとくに縄目文土器が採用された形跡は認められていない(Roman et al. 1992, 53f., taf. 24)。

黒海北西岸域ではウサトヴォ遺跡に続いてヤムナ文化のクルガンが少なくとも 350 基、クルガンから検出された埋葬址は 1300 基以上確認されている(Субботин 2000)。そのうち 1000 基の埋葬址を分析した E.ヤロヴォイによると、副葬品された土器は計 143 点を数え、そのうちの 40 点が縄目文土器であった(Яровой 1985)。縄目文はおもに深鉢の外面上半部に施文され、文様は多条横線文や鋸歯文、三角文が特徴的である(Иванова и др. 2005, 112ff., рис. 62; Субботин 2000, 361f., рис. 4; Яровой 1985, рис. 19:I~IV; 20:VII; 21:X; 22:XIII)。

北方地域における縄目文土器が青銅器時代以前から認められるのに対し、南方のギリシアとトルコのそれは前 3 千年紀に入ってようやく現れる(Roman et al. 1992, 99)。これらの地域では縄目文土器の事例数が少なく、その分布もまばらであるため、縄目文土器はギリシアから北の地域に起源をもつ外来系土器とみなされている(Hood 1986, 55, 62)。このように縄目文土器の時空間的な分布状況に照らしてみると、ブルガリア前期青銅器時代の縄目文土器は北方の黒海北西岸域に端を発すると考えてよい。

しかし、ウサトヴォ、マヤキ両遺跡やヤムナ文化、そしてチェルナヴォダ III 期の土器においても、デヤドヴォ遺跡のような縄目文小型鉢は見あたらなかった。つまり、北方地域では縄目施文法以外の諸要素を、上トラキア平野と直接的な関連性を示す土器資料として見いだすことはできなかったのである。この一連の問題については紙数を割いて詳しく論じるべきであろうが、およその見通しとして、北方移住民が縄目文土器を故地から上トラキア平野に直接もたらしたという解釈は成立し難いように思われる。

8. 5. 縄目文土器の胎土と特徴の推移

北方からの搬入品でないとすると、縄目文土器の由来についてどのように考えることができる

だろうか。この問題に迫る手がかりを得るうえで、胎土分析は有効な手段の1つである。すでに第7章で示したとおり、1点の縄目文土器を含む、デアドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器片と遺跡周辺の粘土試料¹²¹を分析し、土器胎土を6類型に分け、そのうち形状の角張った粗粒の花崗岩質岩を多量に含むI類胎土を在地土器の指標として位置づけた(図128)。

胎土分析によって得た標本を参照しながら、デアドヴォ遺跡の縄目文土器胎土を対象とした非破壊での実体顕微鏡観察を行った。分析に用いた縄目文土器は今回実見できなかった2点(10番と32番)を除く30点である。

観察の結果、縄目文土器はI類16点、I類を除く胎土類型からなる非I類14点に分けられた。土器全体ではI類胎土が圧倒的多数を占めるにもかかわらず、縄目文土器では両者がほぼ拮抗していることが大きな特徴である。非I類に分類したものをさらに標本と比較検討したところ、II類、III類、IV類は各2点、V類に認定できたのは8点であった。

デアドヴォ遺跡では特定の器形は特定の文様と施文具(撚りの方向と縄幅)と対応関係にあることをすでに確認している。胎土と施文具との関係をみると、6つのパターンが存在する。内訳は①I類/R撚り細縄、②I類/L撚り太縄、③非I類/R撚り細縄、④非I類/R撚り太縄、⑤非I類/L撚り細縄、⑥非I類/L撚り太縄である(図129)。

このなかで注目すべきは②I類/L撚り太縄と③非I類/R撚り細縄で、前者(計13点)は深鉢(5点)と浅鉢(7点)、後者(計8点)は小型鉢(6点)が中心であった。斜格子充填幾何学文をもつ小型鉢は、6点全て③非I類/R撚り細縄に該当する。また、11点ある浅鉢のうち斜線文をもつ7点と、6点中5点の深鉢はともに②I類/L撚り太縄に比定された。このように小型鉢、浅鉢、深鉢は胎土類型とも高い相関を示している。

小型鉢が非I類胎土と、浅鉢と深鉢がI類胎土と主に対応する点に注意しながら、層位的所見をもとに縄目文土器の推移をみてみると、XIII-VIII層の胎土はいずれも非I類であった。VII-VI層はI類と非I類が2点ずつ、続くV-IV層はI類が6点、非I類が6点となった。

これらをまとめると、まず縄目文土器の非I類胎土は下層からすべての住居層を通じて認められた。縄目文土器のI類胎土はVII-VI層(エゼロIIa期)より出現し、V-IV層(エゼロIIIb~IIIa期)でその数は増加して非I類胎土と同数になる。これを器形との組み合わせでみてみると、内外面全体に複雑な文様をもつ非I類/R撚り細縄の小型鉢から、口縁部外面に単純な文様をもつI類/L撚り太縄の浅鉢と深鉢へ、という推移をみることができる。

¹²¹ 本章の粘土試料数は10地点と28地点を除く12点であるが、分析結果は第7章と同様である。

8. 6. ブルガリア前期青銅器時代縄目文土器の変遷

8. 6. 1. 縄目文小型鉢の製作地域と移動

デャドヴォ遺跡の縄目文土器を中心に検討したところ、最初に現れる縄目文小型鉢には在地的なⅠ類胎土が用いられていないことが明らかになった。実体顕微鏡観察により小型鉢の胎土はⅡ類とⅤ類に分けられ、Ⅱ類に分類した縄目文土器のうち1点は下層のXIII-VIII層(エゼロⅡ期)から出土した小型鉢(図122:3)である。ここで注目すべきは、個体が異なる点に留意する必要はあるものの、偏光顕微鏡観察でⅡ類胎土中には碧玉が視認されている点である。

今日ブルガリア国内で知られているフリントと玉髓の原産地はよく調査されていて、その分布地域が明らかにされている(Nachev 2009)。デャドヴォ遺跡を含め、ブルガリア先史遺跡から出土する打製石器の素材は主にフリントである。その原産地はブルガリア北東内陸部の下部白亜紀のもの(図130:2)と、ドナウ川沿いのブルガリア北中央部および北東内陸部の上部白亜紀のもの(図130:3)が中心的な役割を担っている。

両地域で採取されたフリントと遺跡出土の遺物はその多くが鏡下観察によって肌理が細かく、良質であることが確認されている(Gurova & Nachev 2008)。これらのフリントと比べて、Ⅱ類胎土中の碧玉は粒子が粗く、質が悪い。このことからⅡ類胎土中のものは、ブルガリア北部および北東部の白亜紀起源のものではないとみてよい。

上トラキア平野にはブルガリア北部とは別に、上部白亜紀に由来するフリントあるいは玉髓の原産地が散在していることが知られている(図130:4の破線範囲内)。詳細な地質図によると、フリントを含む地質帯はスレドナ・ゴラ地帯のスリーヴェン山地南麓とその周辺に所在している(Кънчев, И. 1995; Цанков 1992)¹²²。これは上トラキア平野とスタラ・プラニナの境に位置し、デャドヴォ遺跡から最も近いところでも北東方向におよそ25km離れている¹²³。

筆者はスリーヴェン山地南麓から産出する碧玉を含む粘土試料をまだ分析できていない¹²⁴。また、この地域周辺ではこれまでのところ前期青銅器時代の遺跡は確認されていない(Лешаков

¹²² ブルガリアのフリント研究の第一人者であるCh.ナチェフ博士から、スレドナ・ゴラ地帯のフリントは質が粗悪であり、先史時代の製品に適した素材ではないとの所見を得た。同様の意見はGurova & Nachev 2008, 34にも記されている。

¹²³ 広い範囲の情報を掲載している小縮尺のフリント分布図をみると、スリーヴェン山地南麓とさらに南のトゥンジャ川流域でフリントの原産地が示されている(Nachev 2009, fig. 1)。他方、より詳細な情報を掲載している大縮尺の地質図ではトゥンジャ川流域のフリント原産地が示されていない(Кънчев, И. 1995)。こうした齟齬を解消するためには実地調査を行う必要があるが、本論ではより詳細な情報を掲載している大縮尺の地質図の表記に従い、スリーヴェン山地南麓のものに焦点を当て論ずることとする。

¹²⁴ この地域で採取した岩石試料を観察したところ、碧玉であることが分かった。鏡下での特徴はⅡ類胎土のそれと類似していることから、Ⅱ類胎土中の鉱物は碧玉とすべきかもしれない。調査の進展を待つて、別の機会に改めて見解を示すこととしたい。なお、岩石試料はナチェフ博士から提供していただいた。

2006, 6p. 4)。しかし、縄目文土器の由来を考えると、Ⅱ類胎土をもつ縄目文土器の器形が小型鉢である点は必ずしも偶然の所産だと言い切れない。むしろこの対応関係は非常に示唆的である。というのも、小型鉢が集中的に分布する上トラキア平野北東部は、スリーヴェン山地南麓にひろがるフリント原産地と隣接するように位置しているからである。

縄目文小型鉢は上トラキア平野北東部に共通する資料であるから、小型鉢間の比較を経なければ最終的な結論を得ることはできない。しかし、素材そのものが各集落にもたらされたものでない限り、小型鉢がスリーヴェン山地南麓に所在する碧玉を含む粘土の産出地域およびその近隣で製作された可能性は高いと思われる。次節で詳述するように、デアドヴォ遺跡においてⅠ類胎土とⅡ類太縄の縄目文をもつ浅鉢と深鉢が在地的特徴であるとする、それとは対照的に非Ⅰ類胎土でありⅢ類細縄によって施文された小型鉢は非在地的な要素と捉えることができる。以上の点から推測すると、縄目文は北方から上トラキア平野に伝播し、スリーヴェン山地南麓およびその近辺で縄目文小型鉢が作られてから¹²⁵、その一部がデアドヴォ集落に製品として搬入されたとの見解が得られるのではないだろうか。

8. 6. 2. 縄目文土器の「在地化」

デアドヴォ遺跡最初の縄目文土器は搬入された小型鉢であったと思われる。しかし、それ以降も縄目文土器は外部から運ばれ続けてきたのだろうか。この点については施文法伝播論者が指摘する「折衷土器」が考察の足がかりとなる。折衷土器は端的に言えば、外部のモノあるいは情報や他の素材でできた製品をモデルにして自らの技術で製作したときに生じる。縄目文土器の場合、縄目文が在地集団にとって非伝統的な外来要素であり、それ以外の器形や文様のモチーフが伝統的な在地要素であると考えられてきた。

問題はこうした在地要素がどのように生み出されたのか、換言すれば、集落の住人が自ら土器を製作したかどうかの判断基準と関連している。器形や文様は土器の在地性を説明するには必要な属性ではあるが、状況によっては十分ではない。デアドヴォ遺跡で認められていた縄目文土器の在地要素はもとより上トラキア平野東部で共通していた要素でもあったため、型式学的にそれらを区別することは現時点で困難であり、土器製作の担い手や平野東部内での土器の移動に関する議論の進展は望めない。

¹²⁵ ただし、縄目文小型鉢にはⅤ類胎土をもつものも在るため、その製作地としてスリーヴェン山地南麓以外の地域を想定に入れておかねばならない。残念ながら今回実施した胎土分析ではⅤ類胎土の素材産地まで特定することはできなかった。碧玉含有胎土の素材産地に迫る調査・研究と併せて今後の課題としておきたい。

本論では製作技術に関する分析に代わって、胎土分析から一集落における土器製作の様相解明にアプローチし、結果としてデアドヴォ遺跡の土器生産で中心的な役割を担っていたのはI類胎土であることを指摘した。縄目文土器の胎土類型から、デアドヴォ遺跡における縄目文土器製作の様相を把握する手がかりが得られたのである。

デアドヴォ遺跡における縄目文土器の特徴をみると、下層のXIII-VIII層（エゼロIb期）から出土した非I類/R撚り細縄小型鉢は上層まで見られ¹²⁶、中層のVII-VI層（エゼロIIa期）からは小型鉢のほかに、I類/L撚り太縄の斜線文浅鉢とI類/R撚り細縄の浅鉢が認められるようになる。そして上層のV-IV層（エゼロIIb期～IIIa期）では単純な文様をもつI類/L撚り太縄の深鉢と浅鉢が優勢となる。つまり、デアドヴォ遺跡でL撚り太縄の縄目文土器がI類胎土をもつようになるのはエゼロIIa期以降のことである。

加えて、デアドヴォ遺跡資料のなかには出土層位が明確でないL撚り太縄の浅鉢と深鉢が7点ある。デアドヴォ、エゼロ両遺跡の層位的見解を参照すると、これらは小型鉢出現後の第3期以降に比定される。このことからI類胎土/L撚り太縄の縄目文土器の数は、前期青銅器時代中葉にかけてデアドヴォ遺跡で増加したと推測できる。

以上のことから、もともと外来要素であった縄目文土器がデアドヴォ遺跡の土器生産体制に組み込まれていった様子を認めることができる。すなわち、一連の現象はデアドヴォ遺跡における縄目文土器の「在地化」として解釈することが可能となる。そのうえで縄目文土器の変遷を示すと、外来要素としての縄目文土器（小型鉢）の搬入→縄目文土器の在地生産の開始（＝「在地化」の始まり）→在地生産された縄目文土器の増加（＝「在地化」の進行）、という構図を描くことができるのである。

8. 7. まとめ

本章ではブルガリア前期青銅器時代縄目文土器の変遷過程を、その出現期からデアドヴォ遺跡資料をもとにできるだけ具体的に描写するように試みた（図131）。縄目文土器の動態を各段階に沿ってまとめると、次のようになる。

前期青銅器時代第1段階前半（エゼロIa期）には、縄目文土器が上トラキア平野にまだ登場していない。

¹²⁶ 上層から出土した1点の小型鉢（表1、No.9）は継続して搬入された土器であったかもしれない。ただしエゼロ遺跡では小型鉢は縄目文土器の第2期までしか認められていない。小型鉢の製作期間は出土資料の増加を待って再考すべき論点である。

前期青銅器時代第1段階後半（エゼロ Ib 期）に、上トラキア平野に縄目文の情報が伝播する。おそらくスリーヴェン山地南麓で採取可能と推測される碧玉を含む粘土を素材にして縄目文土器（小型鉢）が製作され、上トラキア平野北東部に拡がる。拡散した遺跡の1つにデャドヴォ遺跡が含まれる。

前期青銅器時代第2段階（エゼロ IIa～IIb 期）にはデャドヴォ遺跡で主に用いられていた、東方丘陵地の花崗岩質岩地帯に由来する I 類胎土で、L 撚り太縄の縄目文浅鉢と深鉢がそれぞれ製作されるようになる。縄目文土器の在地生産の開始である。その後、L 撚りの浅鉢や深鉢といった縄目文土器は小型鉢分布圏からさらに拡散し、上トラキア平野東部のほぼ全域に及んだ。

前期青銅器時代第3段階（エゼロ IIIa～IIIb 期）にはデャドヴォ遺跡をはじめ上トラキア平野で縄目文様は複雑なものから単純なものへと変わり、衰退、消失していく。この時期の下限は前期青銅器時代の終焉とおおよそ一致する。

このように縄目文の変遷を復元した結果、前期青銅器時代にエゼロ文化が開花したエゼロ Ia 期から、縄目文が伝播するエゼロ Ib 期まで北方系集団による直接的な働きかけが作用していたことが分かる。エゼロ II 期になると縄目文土器が在地の土器生産体制に組み込まれ、その後、エゼロ III 期には衰退していく様子が窺えた。こうした経過は北方系集団が在地集団との交流のすえ上トラキア平野に定着し、同化していく過程を映していると解釈することができる。ただし、上トラキア平野においても、縄目文土器の動向だけで地域文化の変遷とその背景を詳細に把握することは困難である。次章では本論文の結論として、これまでに得た所見を統括し、周辺地域との関係をふまえながら、上トラキア平野東部を中心にしてブルガリア前期青銅器時代土器の歴史的位置付けについて評価する。

第IV部 結論

第9章 ブルガリア前期青銅器時代土器にみる地域間交流

本論文では、「東欧」のブルガリア南部に位置するデャドヴォ遺跡から出土した前期青銅器時代土器の型式学的特徴とその変遷を明らかにすることから着手し（第Ⅱ部第3章）、標準遺跡であるエゼロ遺跡資料との比較をつうじて上トラキア平野東部における土器編年の指標について検討した（第Ⅱ部第4章）。そしてその指標資料をもとに、ブルガリア各地の遺跡資料の年代的位置付けと地域性について考察した（第Ⅱ部第5章）。つづいて第Ⅲ部では、第Ⅱ部で提示した編年の枠組に沿って、上トラキア平野東部に焦点を絞りながら、前期青銅器時代土器の成立と系譜（第Ⅲ部第6章）、在地土器生産の様相（第Ⅲ部第7章）、外来系である縄目文土器の変遷（第Ⅲ部第8章）について検討し、前期青銅器時代土器の成立と展開について考察した。本章では、はじめにこれまでの成果をまとめてから、上トラキア平野を中心に前期青銅器時代土器から地域間の関係を明らかにし、ブルガリア前期青銅器時代の歴史的な位置付けを試みる。

9. 1. 本論の成果

①上トラキア平野東部のデャドヴォ、エゼロ両遺跡における土器の特徴と変遷

第3章と第4章で上トラキア平野東部に位置するデャドヴォ遺跡とエゼロ遺跡の資料比較を行い、当該地域の土器編年を確立するための指標資料について検討した。これまでエゼロ遺跡の層位と資料がブルガリア前期青銅器時代の編年研究の中核に据えられてきたが、エゼロ遺跡資料そのものが批判的に検証されてこなかった。つまり、エゼロ遺跡資料によって提示された前期青銅器時代編年案の妥当性について、基本のところから体系的な議論はおこなわれてこなかったといえる。編年研究は歴史研究の基本であるため、この問題にまず取り組む必要があった。

第3章でははじめにデャドヴォ遺跡の前期青銅器時代層を、住居床面の配置をもとに16層にわけた。各層の土器を器形と装飾をもとに分類し、属性の層位分布について検討してから、時期区分に有意な土器要素の抽出を試みた。検討の結果、デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代層を5つの段階に区分し、各段階の指標となる資料を提示した（図20）。各層の年代については、AMS法による測定値（校正年代）と測定試料の層位的な位置関係を対比した結果、第1段階の下限は前3200／3100年に、第5段階の下限は前2500年ごろに求められた。

第4章では第3章でとりあげたデャドヴォ遺跡の資料をエゼロ遺跡と比較検討し、上トラキア平野東部における編年研究の指標資料を提示した。エゼロ遺跡資料にはおもに報告書に掲載された層位ごとの統計データとレシュタコフの研究成果（Лещаков 1997）を採用した。検討の結果、エゼロ遺跡の資料中に、デャドヴォ遺跡で認められた指標資料の変遷とおおむね同様の様相を呈する指標を見いだすことができたことから、これを上トラキア平野東部の指標とし、その消長関係からデャドヴォ、エゼロ両遺跡資料を6つの段階にわけた（図33）。各段階の代表的な土器要素を挙げると以下のとおりである。

エゼロ Ia 期：微細刺突懸垂文、凹線文、アスコス、幾何学刻線文小型鉢、外屈深鉢

エゼロ Ib 期：縄目文小型鉢、孔列文と刻目凸帯文の組み合わせをもつS字深鉢、内閉深鉢 C1 類

エゼロ IIa 期：縄目文内弯浅鉢、突起付把手、内閉深鉢 C2 類、粗胴深鉢、盤状浅鉢

エゼロ IIb 期：縄目文深鉢、有稜土器（内閉深鉢 C1 類、水差し、壺）

エゼロ IIIa 期：キリロヴォ・カップ、扁平型注口付土器、アンフォラ様壺、内閉深鉢 C3 類、縦位ループ状把手付粗胴深鉢、多条山形文水差、押引文、多条垂線刻線文

エゼロ IIIb 期：双耳状把手付カップ、球型注口付土器、漏斗状土器

各段階の指標のなかには複数の時期に及ぶものが多く見受けられた。これまでの研究ではエゼロ遺跡の資料との対比によって時期認定が行われてきたが、単独の要素で時間的な関係を求めようとすると誤った結論をだしてしまうおそれがあった。たとえば粗胴深鉢はエゼロ III 期の指標と目されてきたが（たとえば Лещаков 1997）、実際にはエゼロ IIa 期から IIIb 期にかけて認められた。

②ブルガリア前期青銅器時代の土器編年と地域性

第4章ではデャドヴォ遺跡とエゼロ遺跡の資料を基準にして、上トラキア平野東部を代表する指標資料を抽出した。第5章では、まず両遺跡の指標資料の拡がりを明らかにするために上トラキア平野東部の資料を比較した。それから平野東部の資料をもとに、ブルガリア各地の遺跡資料の年代的位置付けを交差年代法にもとづいて検討した。その結果、エゼロ I～III 期と併行する遺跡資料が上トラキア平野東部をはじめ、平野西部、黒海西岸域、ブルガリア西部・南西部、ブルガリア北東部、北部、北西部で確認できた（図99）。ブルガリア各地の併行関係および地域性を表す代表的な指標資料には、エゼロ I 期併行の微細刺突文、凹線文、孔列文、アスコス、エゼロ II 期併行の刻線文小型鉢の変遷、幾何学刻線文およびネガティブ文、縄目文、盤状浅鉢、コツォフェニ系装飾、コストラッツ系装飾、エゼロ III 期併行のキリロヴォ・カップ、ユナツィテ・カップ、マルテペ・カップ、双耳状把手付カップなどの小型カップ類、注口付土器、アンフォラ様壺、

T字状口縁浅鉢、方形把手付浅鉢、縦位ループ状把手のつく外反口縁浅鉢がある。

上トラキア平野東部ではデャドヴォ、エゼロ両遺跡の指標資料のひろがりをもつ前期青銅器時代をつうじて認めることができた。そのなかでカラノヴォ遺跡 VIIa 層（第2次調査）はエゼロ I 期のなかでやや古くなる可能性と、カップ類や注口付土器といった新器形が環溝遺跡とともにエゼロ III 期に集中する点を指摘した。上トラキア平野西部ではユナツィテ遺跡とダベネ・サロフカ遺跡に代表される土器群がエゼロ I～III 期と併行して展開していた。平野西部のおもな指標資料はエゼロ I 期併行の凹線文、多条鋸歯文、II 期併行の幾何学刻線文とネガティブ文、縄目文、擬縄目文、III 期併行のユナツィテ・カップ、マルテペ・カップを挙げることができる。

黒海西岸域のヴァルナ沿岸域とブルガス沿岸域では、エゼロヴォ II 遺跡に代表される特徴的な土器群（曲線文系縄目文、つまみ付蓋、儀礼用土器）が認められた。層位的に調査された集落遺跡の数が少ないため、詳細な年代的位置付けにはまだ議論の余地があるが、各資料はエゼロ II～III 期のあいだに年代付けられるものと思われた。ブルガリア西部・南西部では遺跡はいずれもエゼロ I～II 期に比定され、これまでのところエゼロ III 期の資料は稀薄であることが明らかになった。またこの地域には墓制に関する資料を確認することができなかつた。

北ブルガリアでは公表資料が全体的に限られているものの、ルーマニア南西部で展開するコツォフェニ系土器や後期グリナ系土器が各地で認められた。また南ブルガリアとのつながりで注目されたのは、上トラキア平野に典型的な孔列文土器やキリロヴォ・カップ、そしてユナツィテ・カップ、方形把手付浅鉢などが確認されたことである。

埋葬址の年代的位置付けについてとりわけ注目されたのが、墳丘墓の年代である。墳丘墓は上トラキア平野東部と黒海西岸域、北ブルガリアを中心に分布しており、そのほとんどがエゼロ I 期から II 期併行に年代付けられるものであった。それに対し、エゼロ III 期併行の墳丘墓資料は非常に限られていることが明らかになった。また、その例外的な資料のうちの1つが上トラキア平野西部でゆたかな副葬品をもつダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓であり、その特異性は平野でも際立つものであった。さらに上トラキア東部を中心に環溝遺跡の分布が認められたことから、この時期は土器組成と墳丘墓における儀礼習慣の変化、環溝遺跡の出現という物質文化の様相が大きく変容する時期であることを確認した。

③エゼロ I 期土器の系譜と成立

編年について検討した結果、エゼロ I 期土器はブルガリア前期青銅器時代で最も古い段階に比定される土器群の1つであることが明らかとなった。そこで第6章ではブルガリア青銅器時代が

どのように始まったのか、その成立過程を明らかにするために、おもに装飾をもとに上トラキア平野東部におけるエゼロ I 期土器の系統関係を検討した。

エゼロ I 期の土器装飾を分類し、周辺の土器装飾と比較した結果、エゼロ I 期土器はドナウ川下流域のチェルナヴォダ III 文化と黒海北西岸域のウサトヴォ文化の土器と系統関係をもつことが明らかとなった。チェルナヴォダ III 期土器とエゼロ I 期土器のあいだには、文様、施文技法、施文部位の点でつよい系統性を看取することができた。これに対し、ウサトヴォ期の土器に関しては、施文法を代替して施された文様構成に類似性が看取されたことから、この要素は黒海北西岸域から直接もたらされたのではなく、チェルナヴォダ III 集団を介して伝播した可能性を指摘した。

一方でカラノヴォ遺跡の土器にはチェルナヴォダ III 系装飾が認められたが、ウサトヴォ系装飾の孔列文は採用されなかった。またバレケツカ・モギラ平地型集団墓やゴリヤマ・デテリナ 2 号墳丘墓の埋葬址には、ウサトヴォ期の遺跡で認められた副葬品としての水差し様土器の利用をみてとることができた。このことから、黒海北西岸域およびドナウ川下流域から上トラキア平野にかけて生じた集団の移動と情報の伝播により、文化要素が複雑に入り組みながらエゼロ I 期土器が成立したと推測した。

④前期青銅器時代における土器生産：在地系土器の把握

第 7 章ではエゼロ I 期土器成立後、前期青銅器時代に土器がどのように生産されていたのか、在地土器の特徴を明らかにするために胎土分析を実施し、土器胎土の産地推定を行った。デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器 31 点と遺跡周辺で採取した粘土試料 14 点を対象に、偏光顕微鏡観察による岩石学的方法と EDXRF による化学的方法を採用した。さらにこれらの分析結果にもとづいて 31 点の土器から 8 点を抽出し、ICP-AES による分析を行った。また上記の方法による分析結果を反映させた胎土標本作製し、それをもとにさらに 248 点の土器片を対象に実体顕微鏡観察を実施し、胎土の分類を行った。

分析の結果はいずれも整合性がとれており、それをもとに前期青銅器時代の土器を 3 つのタイプに分けることができる。1 つは遺跡から東 5km はなれた丘陵地の花崗岩質岩を大量に含む粘土で作られた在地型式の土器、2 つ目は胎土の産地が明らかではない粘土で作られた在地型式の土器、3 つ目はおなじく胎土の産地が明らかではない粘土で作られた外来系土器である。分析した土器の 9 割近くが第 1 のタイプに分類されており、デャドヴォ遺跡の土器の多くは少なくとも遺跡から 5km のところに位置する原料を利用してつくられていたと考えてよい。このことは土器

製作に用いられた粘土産出地域と集落までの距離のデータを集成した民族誌とよく対応している (Arnold 1985)。

実体顕微鏡観察を行った資料はデャドヴォ遺跡のエゼロ I~III 期にかけてのものであることから、土器片の分析数が少ないものの、強いていえばデャドヴォ遺跡では集落が存続している期間のほとんどは、同じ粘土を用いて土器生産が行われていたという見通しがえられた。それにくわえて、デャドヴォ遺跡ではロクロ成形の土器や工房址などの遺構が検出されていないことをふまえて、規模の小さい家内生産的な土器作りがおこなわれていた可能性を指摘した。

⑤上トラキア平野東部のデャドヴォ遺跡における縄目文土器の変遷

第 8 章では前期青銅器時代が開始してから、外来系の縄目文土器がどのようにしてブルガリア地域に出現、展開していったのか、そのプロセスを明らかにするためにデャドヴォ遺跡の縄目文土器を中心に分析し、各地の縄目文土器と比較することで、その変遷過程の解明を試みた。縄目文土器がブルガリア地域で最初に認められるのは、上トラキア平野東部のエゼロ Ib 期である。R 撚り細縄で施文された小型鉢に続いて、L 撚り太縄の内弯浅鉢と深鉢がそれぞれエゼロ IIa 期と IIb 期に現れる。上トラキア平野西部と黒海西岸域には縄目文土器はエゼロ II 期以降に現れ、前者では L 撚り主体の縄目文が、後者では R 撚り主体の曲線文系の縄目文が認められたことから、いずれも上トラキア平野東部の縄目文とは異なる地域の特徴を有していることが明らかになった。

このことからブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の由来はブルガリア以外の地域に求められ、周辺地域の事例を検討したところ、黒海北西岸域におけるウサトヴォ期の土器が有力視された。しかし、そこには縄目による斜格子充填幾何学文の施文された小型鉢が認められなかったことから、縄目文という施文法が黒海北西岸域から伝播したと考えた。そこで伝播の過程を把握するために縄目文土器胎土を、標本資料 (第 7 章) を用いて分類したところ、デャドヴォ遺跡では R 撚り細縄の小型鉢には非在地粘土が、L 撚り太縄の内弯浅鉢と深鉢には在地粘土が用いられていた。小型鉢の非在地粘土には碧玉が含まれていた。ブルガリアではフリントや玉髓の産地が限られており、良質なブルガリア北部・北東部産のものと、粗悪なスリーヴェン山地南麓産のものが知られている。小型鉢の胎土は後者の特徴を呈していたことから、R 撚り細縄の小型鉢はデャドヴォ遺跡から北東 25km 離れたスリーヴェン山地近くで製作された可能性を指摘した。

一方で、L 撚り太縄の内弯浅鉢と深鉢には在地粘土が利用されていたことから、これらの縄目文土器はデャドヴォ遺跡で製作された可能性が高い。つまり、最初に縄目文が北方からスレドナ・ゴラ南麓へ伝播すると、そこで小型鉢が作られ、上トラキア平野北東部に拡散し、その過程でデャ

ドヴォ遺跡にも縄目文小型鉢がもたらされた。その後、デャドヴォ遺跡で縄目文の内弯浅鉢と深鉢が製作されるころになると、上トラキア平野東部全域に同様の器形を呈した縄目文土器がひろがり、次第に衰退していくという変遷を示した。

9. 2. 上トラキア平野における前期青銅器時代土器の歴史的位置付け

本論文ではブルガリア各地域における土器群の年代的位置付けと、その枠組のなかで上トラキア平野東部のデャドヴォ遺跡を中心に前期青銅器時代土器の成立と展開について検討した。この過程において、地域ごとに特有の土器群の特徴や地域間での土器の類似関係を見いだすことができた。本節では本論文の結論として、この類似関係を上トラキア平野東部との地域間関係を読み解くための資料としてとらえなおし、これまで得られた所見を踏まえながら、デャドヴォ遺跡とそれを取りまく周辺地域における前期青銅器時代各段階の土器に反映された歴史的動向を読みとりたい。

1) エゼロ I 期における土器群の形成過程と北方からの影響

かつて「移行期」に人間集団が住んでいなかったと考えられていた上トラキア平野には (Todorova 1995)、ドナウ川下流域に中心に分布するチェルナヴォダ III 期の集落址と儀礼の痕跡がわずかながら平野東部で確認された (図 103)。その一方で、平野東部にはエゼロ I 期以前から黒海北西岸域に分布するウサトヴォ文化と関連のある墳丘墓 (ゴリヤマ・デテリナ 4 号墳) が築かれていた。つまり、エゼロ I 期土器が成立する条件は「移行期」段階からすでに上トラキア平野の北方から到来した集団によって整いつつあったといえる。ここではまず土器要素の在り方から地域間関係を明らかにして、エゼロ I 期土器における北方からの影響について検討する。

①上トラキア平野西部との関係

上トラキア平野の東部と西部ではエゼロ I 期に成立した土器の関係性は緩やかなものであり、要素によって東西の地域差は顕著なものにうつる。たとえば凹線文は両地域で共通する施文技法であるが、東部では凹線文土器がわずかに認められる程度であるのに対し、西部ではアスコス (図 69:1) や屈曲胴部をもつ浅鉢 (図 69:2) などの器形に羽状文 (図 66:5) や袈裟懸け文 (図 66:6) をはじめとする多様な文様が施文されている。またアスコスの形態的特徴に関しても、東部では注ぎ口側の胴部が張り出しているのに対し (図 14:1; 図 23:1, 2; 図 35:5; 図 55:1, 2, 5; 図 56:3)、平野西部では注ぎ口から底部まで直線的に滑らかに推移しており、製作技術上の差異が看取される (図 66:21)。

このなかで微細刺突懸垂文を肩部に配したユナツィテ遺跡のアスコスは、形態的にも文様的にも平野東部のものによく類似しており、例外的に平野東部からもたらされたことをうかがわせる。おそらくそのほかの微細刺突文も平野東部からアスコスとともに伝わっていったのだろう。一方のダベネ・サロフカ遺跡では微細刺突文と孔列文が認められず、いわゆるウサトヴォ系装飾を欠いている。マリツァ川流域のユナツィテ遺跡とストリヤマ川流域のダベネ・サロフカ遺跡では土器要素の在り方が異なっており、両遺跡における土器の様相は平野西部内での地域差を示している可能性がある。

②ブルガリア西部・南西部との関係

上トラキア平野西部はエゼロ I 期からブルガリア西部・南西部との関係を有していた。その具体例として、ペルニク・クレポスタ遺跡の微細刺突懸垂文（図 82:9, 10）、ヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡とコヴァチェヴォ遺跡の凹線文と口縁内面に多条鋸歯文の施された小型鉢が挙げられる（図 80:1; 図 84:9~11）。ペルニク・クレポスタ遺跡の土器はブルガリア西部・南西部でわずか 2 点だけである点を考慮すると、隣接する上トラキア平野西部からの影響によってもたらされたものと考えられる。

コヴァチェヴォ遺跡と上トラキア平野西部の多条鋸歯文をもつ小型鉢は、器形、施文部位、施文技法、文様の点で同じ特徴を有していることから（図 69:6; 図 84:9~11）、直接的な相互交流が行われていたと考えられる。一方、ヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡の凹線文を有する小型鉢（図 80:1, 2）は施文技法がやや異なるものの、器形と施文部位、文様は共通していることから、製作技法の変移幅のなかで理解することができ、やはり近い関係性が考えられる。

このタイプの小型鉢は上トラキア平野東部¹²⁷やエーゲ海北岸域の東マケドニア地方では認められていないものの、アナトリア西岸地方のトロイ I 期（最下層の Ia フェイズ）からよく似た特徴をおびた資料が出土している（Blegen et al. 1950, fig. 253:4, 7, 11; 254）。エゼロ I 期のマリツァ川中流域に遺跡の分布は確認されていないが、仮にトロイ遺跡と上トラキア平野西部間の交流が想定されるならば、それはアナトリア西岸地方からマリツァ川に沿って行われたと推測される。この種の小型鉢の由来についてはなお不明な点が多く残されているが、ブルガリア南西部から上トラキア平野西部、そしてアナトリア西岸地方のあいだをむすぶ交流がエゼロ Ib 期まで遡って行われ

¹²⁷このタイプの刻線文小型鉢がエゼロ遺跡ではタイプ 10 として報告され、本論でいうエゼロ Ib 期とトロイ I 期が併行する 1 つの資料としてみなされている（Георгиев и др. 1979, 500）。しかし、これは正確には口縁部内面の肥厚するタイプではない（Георгиев и др. 1979, таб. 167, тип 10）。またこの時期にデャドヴォ遺跡をはじめ、上トラキア平野東部ではこのタイプの小型鉢は見当たらない。

ていた可能性がある点を重視しておきたい¹²⁸。トロイ I 期の開始期は較正年代で前 3000 年前後に比定されており (Düring 2011, tab. 7.1)、エゼロ Ib 期の下限の値に近い。このことから、絶対年代の値からみても、これらの地域で交流が行われていたとしても矛盾はない。

ヴァクセヴォ・ストウデナ・ヴォダ遺跡とコヴァチェヴォ遺跡では、器形、文様、施文部位の点で共通する特徴をもつ土器が多く認められる。凹線文土器に関しては縦位凹線が口縁外面に施される内弯浅鉢 (図 80:4, 5; 図 84:1~4)、口縁部に貼付文をもつ浅鉢 (図 80:5; 図 84:5)、直線的に開く口縁部と凹線文の施された屈曲胴部をもつ鉢 (図 80:6; 図 84:6, 7)、肩部に縦位凹線文の施された壺 (図 80:7; 図 84:8) がある。深鉢に関しては、口唇部に刺突文と内反口縁の深鉢 (図 80:8; 図 84:12)、横位の短い凸帯文をもつ開口深鉢 (図 80:9, 10; 図 84:13) が挙げられる。このうち開口口縁と凹線文の施された屈曲胴部をもつ鉢 (Sherratt 1986, fig.13.6.8, 9) と深鉢 (Sherratt 1986, fig.13.7.4, 5) は、シタグリ遺跡 IV 層とディキリ・タシュ遺跡 IIIA 層 (Séfériadès 1996, fig.12:1, 3) に類似度の高い土器が認められる。このようにブルガリア西部・南西部ではエゼロ I 期からストルマ川を介してエーゲ海北岸域 (東マケドニア地方) との関係が築かれていた。一方、上トラキア平野とエーゲ海北岸域との直接的な関係はこの時期にはまだ明確な形であらわれていない。

③ブルガリア北西部および北部との関係

ブルガリア北部と北西部ではルーマニア南西部および上トラキア平野との関係を示す、刻線文土器、孔列文土器、凹線文土器、アスコスが確認されている。ブルガリア北西部のサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡 2 層とサドヴェツ・エゼロ・カレ遺跡 7 層から出土した刻線による斜線充填帯状文と羽状文の土器は、ルーマニア南西部のコツォフェニ I 期土器でも認められることから、両地域での接触が考えられる。孔列文土器はコツォフェニ系土器要素ではないことから (Roman 1976a)、上トラキア平野との関係を示すとみてよい。とくにサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡の口縁部下部に孔列文をもつ外屈深鉢 (図 93:8) は上トラキア平野東部でのみ確認されており、平野東部とサドヴェツ・ゴレマノヴォ・カレ遺跡を結ぶ重要な資料である。一方、同遺跡の凹線文土器 (図 93:11) は、ユナツィテ遺跡の土器 (図 66:3) と器形、部位、文様の点で類似していることから、両地域間でも関係をもっていたと考えられる。このようにヴィト川流域ではエゼロ I 期に、スタラ・プラニナをまたいで南北のつながりを持つ土器群が展開していた。

ブルガリア北部のジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡では、孔列文土器が上トラキア平野東部の事例と形態的特徴の近いアスコスとともに認められたことから、いずれも平野東部との関係性

¹²⁸ エゼロ遺跡報告書でもこの時期からトロイ I 期との併行関係について指摘されている (Георгиев и др. 1979, 500ff.)。

の結果現れたものと判断できる。また、ムセリエヴォ・モレニツァ洞窟でわずかに確認された孔列文土器もまた上トラキア平野とのつながりを示している。このことからブルガリア北部の資料に関しても、北西部と同様、上トラキア平野と交流していた様子がうかがえる。

上トラキア平野東部におけるエゼロ I 期土器成立後の各地域の資料を検討したところ、上トラキア平野東部のエゼロ I 期土器が周辺地域に分布することはあっても、反対に平野東部では周辺地域から土器が搬入されたり、影響を受容したりする様子はほとんど見受けられなかった。平野東部とブルガリア各地とのあいだの相互関係を土器から看取することはできなかった。一方で、その例外的な資料に黒海北西岸域に由来する縄目文土器がある。その縄目文の施文された小型鉢はエゼロ Ib 期に製作され始め、黒海北西岸域からの搬入品ではなく、平野東部で特徴的な土器器形と文様に倣って施文された折衷土器であった。縄目文は文化的に特異な施文技法であることから、本論文ではさしあたりウサトヴォ系土器と関連する北方系集団によって上トラキア平野東部にもたらされたと考えたい。

墳丘墓で埋葬儀礼が執りおこなわれていた痕跡がエゼロ Ia 期以前の「移行期」から認められた。一般に埋葬儀礼は重層的な社会行為であると考えられている（内堀・山下 1986）。こうした前提にたてば、ゴリヤマ・デテリナ 4 号墳と 2 号墳にみられる「移行期」とエゼロ I 期の埋葬は、墳丘墓を固有の文化としてもつ黒海北西岸域の北方系集団が到来してきたと考えられる。このことからウサトヴォ集団は「移行期」からエゼロ Ib 期にかけて黒海北西岸域から継続的に南下を繰り返し、その過程のなかで斜格子充填幾何学刻線文の小型鉢を有する上トラキア平野東部の集団との交流を通じて、縄目文小型鉢がエゼロ Ib 期に製作されたと考えられる。この時期に縄目文小型鉢の分布が上トラキア平野北東部に集中し、その南側や西側から出土していないのは、縄目文が北方系集団の移動によって北側からもたらされ、これ以外の地域に及んでいなかったためと理解できる。また、デヤドヴォ遺跡で縄目文小型鉢の胎土に見いだされた碧玉が、平野北東部のスリーヴェン山地南麓に求められた点も同様の理由からであろう。詳細な年代付けに関してはなお議論の余地があるが、縄目文小型鉢の分布域のなかでもっとも北東寄りに位置し、実際に副葬品として縄目文小型鉢を有するドラジェヴォ墳丘墓の被葬者は、縄目文を上トラキア平野に最初にもたらしたウサトヴォ系集団の構成員であったかもしれない。

このように上トラキア平野東部のエゼロ I 期土器は、黒海北西岸域のウサトヴォ集団と、ドナウ川下流域を中心に展開していたチェルナヴォダ III 集団による移住および情報の伝達が混在した結果、成立した。その後、エゼロ Ib 期には縄目文施文技法を有するウサトヴォ集団が平野東部

の集団と交流し、縄目文土器が平野東部に出現した。このことから、黒海北西岸域から上トラキア平野にかけて複雑に展開していた集団の移動や情報の伝達が、エゼロⅠ期土器の成立過程に深く関与していたと解釈することができる。したがって、エゼロⅠ期土器はその成立過程においてブルガリア各地域および南方の地域よりも、北方地域とのあいだにつよい関係性を有していたと考えられる。

さいごにウサトヴォ系装飾とした孔列文土器がスタラ・プラニナの北側に散見される要因について検討しておく、これはエゼロⅠ期集団によるフリント獲得にともなって拡散したと考えられる。デャドヴォ遺跡では打製石器の石材に、おもにブルガリア北東部（ラヴノ産、クリヴニャ産）と北部（ニコボル産）から産出するフリントが利用されていた（柴田 2014）。石器製作に適した良質なフリント石材の獲得可能地域はおもにこれらの産地に限られており（図 130:2, 3）、孔列文土器出土のジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡とムセリエヴォ・モレニツァ洞窟はそれぞれ北東部と北部のフリント産地の近くに位置している。孔列文土器とフリント産地の分布が近接していることは決して偶然ではないのだろう。そのことを示すようにフリント産地の北側、つまりドナウ川左岸域にひろがるコツォフェニⅠ期土器は孔列文を欠いている（Roman 1976a）。孔列文土器が北ブルガリアに分布している理由の1つとして、良質のフリントを獲得する活動が関連していたと理解してきおきたい¹²⁹

2) エゼロⅡ期における地域文化の形成と北方系要素の融合

上トラキア平野東部ではエゼロⅠ期に北方系集団との交流や影響のもと、エゼロⅠ期土器が形成された。Ⅰ期土器の分布範囲はマリツァ川支流のサズィリカ川流域とトゥンジャ川中流域に集中し、周辺地域の土器群との相互関係は認められなかった。エゼロⅡ期になると、遺跡の数はやや増加し、その範囲は西側と南側に拡大するものの、周辺地域との関係性はエゼロⅠ期からそれほど大きく変わってはいない。

①上トラキア平野西部との関係

この時期、両地域間の関係を示す資料は少なく、エゼロⅠ期につづいてその関係性は緊密ではなかった。平野東部から西部への影響、あるいは集団の移動の可能性は認められても、その逆は見受けられず、土器から見た場合、相互間の関係は考えにくい。東部から西部へもたらされた土器要素の代表は縄目文である。エゼロⅠb期に上トラキア平野東部に北方からもたらされた縄目

¹²⁹ 上トラキア平野西部の遺跡でも資源獲得のためにスタラ・プラニナを越えていった可能性も想定されうるが、この点についてはユナツィテ遺跡やダベネ・サロフカ遺跡から出土したフリント資料の分析結果を待たねばならない。

文が、エゼロ IIa 期に平野西部へと伝播した。プロヴディフ・ネベト・テペ遺跡のアスコスやユナツィテ遺跡のホールマウス状の土器は、いずれも平野東部で縄目文土器に施文される器形とは異なる。このことから施文法が平野西部へと伝わり、そこで採用されていた器形に縄目文装飾が施されたものとみられる。状況としては北方から平野東部に縄目文がもたらされたときと類似し、平野西部の在地集団と東部にいた縄目文の担い手が接触した結果であると考えられる。

ダベネ・サロフカ遺跡 IIB 層の擬縄目文土器は縄目文を模した装飾であり、平野西部に縄目文が伝播したあとに在地の集団が独自に製作を試みたものであろう。こうした現象はダベネ・サロフカ遺跡が前段階に続いて上トラキア平野東部と直接的な関係をもっていなかった状況を反映している。東西地域をむすぶ主要な経路はマリツァ川であって、マリツァ川支流のストリヤマ川流域と平野東部を直接むすぶ証拠は見当たらなかった。

マリツァ川沿いの関係でそのことを示す例として、プロヴディフ・ヤサ・テペ I 遺跡がある。ここから出土した舟形土器と孔列把手は平野東部の典型的資料であり、いずれも平野西部には見当たらない。くわえてこの遺跡では平野西部で典型的な幾何学刻線文などが認められないことから、平野東部とのつよい繋がりを示す証拠とみなすことができよう。

②黒海西岸域およびブルガリア北東部との関係

黒海西岸域では独自の土器群が展開しており、上トラキア平野東部との交流を示す資料は少ない。関係性を示す資料には孔列文土器、水差しにつく畝状把手、斜線文や斜線充填三角文といった縄目文モチーフやこの文様をもつ深鉢が挙げられる（図 76:9, 12; 図 78:1）。孔列文土器は当該地域では事例の少ない資料であることから、平野東部からもたらされたものであろう。畝状把手は平野東部でも目立って普及しているわけではないが、両地域の関係性を示す資料に含めることができる。縄目文土器に関してはとりわけ口縁部から胴部上半部に斜線充填三角文の描かれた文様帯をもち、両地域で共通する構図が深鉢に用いられている。一方、アスコスや舟形土器は地域間で形態的特徴が異なることから、その由来については判然としない。

ブルガリア北東部の資料には上トラキア平野とのつながりを示す資料は見当たらない。墳丘墓から出土した副葬品はヴァルナ沿岸域のエゼロヴォ II 遺跡との関係をしめしており、平野東部との関係性は前期青銅器時代を通じて変わらず、稀薄であるようにみえる。ただしこの地域には詳細な時期比定が困難な墳丘墓が上トラキア平野東部とならんで、ブルガリアのなかでもっとも多く分布している。これらの墳丘墓はヤムナ文化に属し（Панайотов 1989）、同様の埋葬址が上トラキア平野東部にも分布していることから、ヤムナ文化集団の一部が平野東部と北東部のあいだを往来していた可能性もあるが、その具体的な様相は明らかではない。

③ブルガリア西部・南西部およびエーゲ海北岸域との関係

上トラキア平野西部の幾何学刻線文およびネガティブ文の施された土器は、今回検討したブルガリア西部・南西部の資料と、文様と施文器形・部位においてよく共通しており、両地域の土器群にみる紐帯はこの時期にピークを迎える。こうした刻線文の一部はエーゲ海北岸域の東マケドニア地方でも共有され、前段階で構築され始めていた関係性がこの時期に3地域間でさらに発展したとみてよい (Němejcová-Pavúková 1999) ¹³⁰。

その一方で共有されない要素もあり、このことは各地の地域差および地域間関係の違いをあらわしている。ブルガリア西部から南西部ではこの時期にコツォフェニ系土器やコストラツ系土器の装飾がストルマ川流域までひろがったものの、上トラキア平野西部にまで及ぶことはなかった。反対に上トラキア平野西部からブルガリア西部・南西部に縄目文土器が移動することもなかった。ただし、平野西部とエーゲ海北岸域の東マケドニア地方から同じ文様構成の描かれた縄目文土器が出土していることから、この地域間においては人の往来があったと判断できる。

上トラキア平野南東部のスヴィレングラット・ブランティーテ遺跡の刻線と三角刺突列文はトロイI期と東マケドニア地方で共有されている土器装飾である (図 49:18)。同様の土器装飾は東ロドピ地方のセドラリ遺跡 (図 5:67) でも確認されており (Hexrizov & Иванов 2011, таб. 2)、上トラキア平野南東部からエーゲ海北岸域の一带にかけて交流関係が成りたっていた可能性がある。一方、平野東部の中央から北寄りの地域はエーゲ海北岸域との関係を示す具体資料に乏しい (Лещаков 1997, 101f.)。またこの時期には、平野西部とトロイ遺跡とのつながりを示す資料も認められなくなる。

④ブルガリア北西部および北部との関係

エゼロII期になると、ブルガリア北西部では上トラキア平野との直接的な関係性は認められなくなる。ドルノ・サフラネ3号墳6号墓の丸底カップは例外であり (図 63)、その形態的特徴はコツォフェニ系土器に、文様要素は上トラキア平野西部に特有である。このカップは製作地が判然としないが、コツォフェニ系土器文化圏か平野西部から搬入されたと考えられる。

ブルガリア北部のジュリュニツァ・スマルデシュ遺跡では土器群の全体的な様相は不詳であるものの、盤状浅鉢の存在から上トラキア平野東部との関係性が前段階からつづいていた様子が窺える。一方、ドナウ川沿いのバティン平地型集団墓は副葬品の内容から上トラキア平野との関連性はなく、コツォフェニ系集団の埋葬伝統が反映されている。

¹³⁰ V.ネメイコヴァ・パヴコヴァはブルガリア西部・南西部、上トラキア平野西部、北ギリシアにおける土器群の類似性をもとに、ユナツィテ・シタグリ土器グループとしてまとめる案を提起している (Němejcová-Pavúková 1999, 55ff.)。

各地域との関係性をみたところ、エゼロⅡ期には独自の土器群が各地で形成され、一部では地域をまたいで土器群の特徴がまとまりをみせている。具体的には上トラキア平野西部からブルガリア西部・南西部とエーゲ海北岸域の東マケドニア地方、黒海西岸域、北西部のコツォフェニⅡ～Ⅲ期の遺跡に見受けられる。一方、上トラキア平野東部のエゼロⅡ期土器は、エゼロⅠ期について周辺地域とのあいだに明確な相互関係性を基本的に成立させておらず、平野東部の土器群は独自に展開していたようにみえる。分布範囲はエゼロⅠ期に比べ西側と南側へやや拡大し、その南側の遺跡（ミハリッチ遺跡、スヴィレングラト・ブランティーテ遺跡）に限ってはエーゲ海北岸域とのあいだに関係性が構築し始めた兆候が認められ、エゼロⅢ期土器の状況に鑑みると注目に値する。

この時期にひろく確認された共通の要素は縄目文土器である。ただし平野東部と西部、そして黒海西岸域を中心にそれぞれ異なる地域性を示していた。デャドヴォ遺跡ではエゼロⅠb期に、北方から伝播した施文法によるR撚り細縄の施された縄目文小型鉢がもたらされたのに対し、エゼロⅡ期以降からL撚り太縄の縄目文浅鉢と深鉢が在地で生産されるようになった。縄目文は平野東部に元来ある施文技法ではなかったことから、原体は精緻なR撚りではなく、やや質の粗いL撚りの縄が用いられたと読み取ることができる。つまりエゼロⅡ期に上トラキア平野東部で在地集団が縄目文の施文法をみずからの土器製作技術にとりいれたと考えられる¹³¹。

そこでR撚りを北方系、L撚りを在地系にわけて、あらためて黒海西岸域と上トラキア平野西部の縄目文をみてみると、黒海西岸域の縄はR撚りが主体で、上トラキア平野西部ではL撚りが主体となっている。このことから黒海西岸域の縄目文土器の多くは北方系、平野西部のものは平野東部に由来するとみることができる。実際に黒海西岸域を特徴づける曲線文系の多条アーチ文はドナウ川下流域のリシュコテアンカ墳丘墓(Lișcoteanca)4号墓で認められている(Roman et al. 1992, taf. 51:4)。この類例がR撚りで施文されているのかどうかは不詳であるが¹³²、すくなくとも黒海西岸域に典型的な曲線系文様の類例をドナウ川下流域で認めることができる。また同地域に位置するブライリツァ平地型集団墓の34号墓からタルナヴァ2号墳1号墓の深鉢(R撚り)と類似した資料が出土している(Roman et al. 1992, taf. 51:2)。これらの類例を参考にすると、黒海西岸域およびブルガリア北西部の縄目文土器は、エゼロⅡ期にドナウ川下流域からもたらされた可能性がある。このように考えれば、R撚りの縄目文土器が墳丘墓から出土したり、あるいはその近

¹³¹ 在地集団がR撚りからL撚りに縄目施文法を変えた理由の解明は今後の重要課題の1つである。この点に関しては原体に使用された素材が鍵になるかもしれない。

¹³² 図示された実測図の縄目文の施文方向はRとLの両方で表現されている。通常、撚りの方向は1つの土器で1方向に統一されることが多いことから、実測図の撚りの方向は信頼性のあるものとはいえない。

くに分布したりしていることは、決して偶然の所産ではないといえるのではないだろうか。

このことは上トラキア平野西部の事例をみても明らかであるように、L 撚りの縄目文土器が主体を占める平野西部では、エゼロ II 期に比定される墳丘墓が見あたらない。墳丘墓の不在はこうした墓制の伝統をもつ北方系集団が平野西部まで展開してこなかったことの傍証になる。それだけではなく、L 撚りの縄目文土器が平野東部の在地集団によって平野西部へもたらされたと考えれば、平野西部に墳丘墓が分布しない理由も首肯できる。このことからこの時期に墳丘墓の分布しない上トラキア平野西部から東マケドニア地方へ縄目文土器をもたらした集団もまた北方系集団ではなく、上トラキア平野東部の在地集団であったと推測される。

さいごに上トラキア平野東部における縄目文土器の在地化に伴って、平野東部の副葬品に認められる変化について指摘しておきたい。エゼロ I 期における副葬品の土器にはウサトヴォ系要素の文様をもつ水差しやアスコス、そして、年代付けにはさらなる検討も必要だが、縄目文小型鉢といった北方系要素が看取されていた。それがエゼロ II 期になると、ウサトヴォ系文様や縄目文は副葬品のレパートリーから姿を消し、代わりに墳丘墓に在地土器を副葬するようになる (Лещаков & Попова 1995, 78)。この時期に、墳丘墓に各地域の在地土器を副葬することは、南東ヨーロッパではよく認められていることだが (Heyd 2011, 540)、上トラキア平野東部に関していえば、墳丘墓自体は北方系文化の伝統として残存したが、副葬品は在地のものに置き換えられ、縄目文土器をふくむウサトヴォ系要素は在地土器伝統のなかに組み込まれていったと考えられる。このことからエゼロ II 期という時期は、北方系要素が平野東部の在地文化と融合し、定着した段階であるといえる。

3) エゼロ III 期における文化変化と南方からの影響

エゼロ III 期はブルガリア前期青銅器時代土器において 1 つの画期と見ることができる。エゼロ II 期の変化がそれまでの土器組成内における要素の変化であるとしたら、エゼロ III 期の変化は土器組成そのものの変化である。ただし、すべての要素が一変したわけではなく、前段階の土器伝統をある程度維持、変化させながら、それまでにない新しい要素が加わるという様相を呈している。こうした土器組成の変化とともに、上トラキア平野東部と各地域との地域間関係の構図もエゼロ II 期からおおきく変わった。

① 上トラキア平野西部との関係

エゼロ III 期になると上トラキア平野東部と西部の関係は前段階から一変し、土器群の内容に共通する要素が多く見受けられるようになる。またエゼロ II 期には東部から西部への影響のみ認め

られていたものの、エゼロ III 期にはユナツィテ・カップや円点文にみられるように、西部から東部へのモノの移動を明確に追うことができ、地域間で相互の関係性が築かれていたと判断できる。

②黒海西岸域およびブルガリア北東部との関係

黒海西岸域の状況は前段階から大きく変わっておらず、独自の土器群を展開している。注口付土器は上トラキア平野東部との関係を示す好例である。その一方で、キリロヴォ・カップなどの小型カップ類は黒海西岸域には認められない。ブルガリア北東部でもエゼロ II 期から引き続き上トラキア平野との関係は認められない。ドナウ川沿いのトゥトラカン遺跡の土器は後期グリナ文化の一部を構成している。

③ブルガリア西部・南西部およびエーゲ海北岸域（東マケドニア地方）との関係

エゼロ III 期になると、ブルガリア西部・南西部では遺跡の分布がほとんど認められなくなり、エゼロ II 期に構築された関係性は解消される。ただし、ブルガリア西部では表採資料としてユナツィテ・カップが見つかるなど (Alexandrov 1998, fig. 2:7; 6:6)、両地域の関係はまったくなくなったわけではなさそうである¹³³。また上トラキア平野東部のデャドヴォ、エゼロ両遺跡で見つかった双耳状把手付カップも、ブルガリア西部とのつながりを示しているのかもしれない。

エーゲ海北岸の東マケドニア地方と上トラキア平野西部との関係性は、ユナツィテ・カップとマルテペ・カップ、ボタン文がシタグリ遺跡から出土していることから、前段階から継続している。一方、平野東部とのつながりはこの時期にふたたび途絶えてしまう。

④ブルガリア北西部と北部との関係

上トラキア平野ではダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓の祭祀遺構から、ブルガリア北西部の後期グリナ土器と関連する方形突起付把手土器、T 字状口縁の浅鉢、縦位ループ状把手のつく外反口縁浅鉢が、大量の金製品とともに認められた。それに対しユナツィテ・カップと注口付土器はブルガリア北西部に分布していることから、ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓と北ブルガリアの後期グリナ文化は儀礼に関わる社会的関係で結ばれていたと考えられる。

ブルガリア北部においては、デヴェタキ洞窟とムセリエヴォ・モレニツァ洞窟から上トラキア平野由来のカップ類が出土しており、平野からブルガリア北部へ影響を及ぼす範囲は前段階よりひろがっていた。後期グリナ土器の要素も前段階よりひろい範囲で南下しており、ブルガリア北部内陸部を中心に上トラキア平野の土器要素と交錯する様子が窺える。

¹³³ アレクサンドロフによると、この地域のデャコヴォ遺跡 (Дяково)、ガルロ遺跡 (Гърло)、ネゴヴァンツィ遺跡 (Негованци) で、エゼロ III 期併行に比定される資料の存在が指摘されている (Alexandrov 1998, fig. 5:4, 6; 4:2, 5, 6)。いずれも表採資料であるため、本論文ではとくに検討の対象に含めなかったが、デャコヴォ遺跡ではユナツィテ・カップが出土している (Alexandrov 1998, 223)。

⑤エーゲ海北西岸域および東トラキア地方との関係について

上トラキア平野南東部に位置するアッサラ遺跡とミハリッチ遺跡で発見されたデパス・カップは、エーゲ海のシロス島とトロイⅡ期の資料との関連性が指摘されている (Leshtakov 2004b, 51)。実際の製作地についてはなお議論の余地が残されているものの、デパス・カップはアナトリア・エーゲ海地域との関係を示す明確な資料であることは疑いない。

東トラキア地方の集落址カンルゲチット遺跡¹³⁴ (Kanlıgeçit) からは、上トラキア平野東部のエゼロⅢ期土器と近い特徴をもつ土器群が出土している (Ambronn 2012; Özdoğan & Parzinger 2012, 268ff.)。たとえば、カンルゲチット遺跡第3層から多条垂線文の施された内弯浅鉢 (Ambronn 2012, abb. 77:8; abb. 78:4; abb. 89:3; abb. 90:2) と縦位ループ状把手付粗胴深鉢 (Ambronn 2012, abb. 94:2)、第3/2層から漏斗状土器 (Özdoğan & Yılmaz 2012, fig. 109:7)、第2層から注口付土器 (Ambronn 2012, abb. 75:11) やデパス・カップ片、精製赤色スリップ土器、ロクロ製浅鉢が認められる (Özdoğan & Parzinger 2012, 268ff.)。カンルゲチット遺跡と上トラキア平野東部の土器群はよく類似し、相互関係性が窺える。なかでもキリロヴォ・カップが出土していない点でアッサラ遺跡の土器内容と高い相関性が認められる。

エゼロⅡ期に認められた地域間関係の構図に関して、エゼロⅢ期で大きく変わった点は3つある。1つは黒海北西岸域からの集団の移動や情報の伝達の痕跡が確認されなくなったことである。いま1つは、とりわけ上トラキア平野東部と西部の関係性がエゼロⅠ期とⅡ期にくらべると強化されている。エゼロⅢ期には、東のキリロヴォ・カップ、西のユナツィテ・カップとマルテペ・カップにみられるように地域差もあるが、平野間で共通する土器要素が増加しており、相互交流が進んでいたと考えられる。さらに注目すべきは、この時期に東トラキア地方とのつながりがうまれたことである。この地域にはこれまで上トラキア平野との関係を示す遺跡資料は確認されていなかったが、エゼロⅢ期から新たな集落が営まれ始め、上トラキア平野東部とのあいだに新しい関係が構築された (Özdoğan & Parzinger 2012)。

上トラキア平野東部ではエゼロⅢ期になると、北方系要素の縄目文土器と孔列文土器にも変化が見受けられる。エゼロⅡ期に在地土器に組み込まれた縄目文土器は、エゼロⅢ期には装飾の質が粗雑になる (Лещаков 1997, 15)。R 撚りの小型鉢は姿を消し、複雑な文様から単純なモチー

¹³⁴ 東トラキア地方の内陸部に位置するテル型集落である。文化層は4つの層に分けられ、最下層の第4層から第1層までいずれも前期青銅器時代に比定されている (Özdoğan & Parzinger 2012)。各層の資料はおおむねエゼロⅢ期に併行するものと思われる。

フが施文されるなど質的衰退の傾向をしめしている。そしてエゼロ IIIb 期には縄目文そのものが上トラキア平野から消失する。また、ながらく採用されていた孔列文もエゼロ II 期を境に減少傾向に転じ、エゼロ IIIb 期をむかえるころには土器群から消失していくこととなる。

北方系資料を代表する墳丘墓についても、エゼロ I 期と II 期にくらべてブルガリア各地域で減少している (図 99; 図 132)。ただし、本論でとりあげた墳丘墓は土器を副葬したものに限定されているため、ここでは実際にすべての墳丘墓が利用されなくなったということの意味しているわけではない。ここで指摘することができるのは、墳丘墓の伝統そのものが絶えたということではなく (ただし Heyd 2011, 544)、それまでつづいていた墳丘墓で土器を副葬するという儀礼習慣が部分的に放棄されたということである。土器が副葬されている墳丘墓の事例数はこの時期に必ずしも多いわけではないが (Heyd 2011, 540)、持続していた墓制の一部をとりやめることは社会的な意味として決して小さくないように思われる¹³⁵。

エゼロ III 期には、衰退していく北方系資料に代わって、新しい器形の 1 つとして小型カップが出現した。各カップ類の分布範囲をみると (図 133)、キリロヴォ・カップは上トラキア平野北東部を中心に認められ、ブルガリア北部にも一部拡がるのに対し、ユナツィテ・カップは、東は上トラキア平野東部、北はブルガリア北西部、西はセルビア南東部のヴェリカ・モラヴァ地域、南はエーゲ海北岸域・東マケドニア地方の広範囲に及ぶ (Alexandrov 1998; Bulatović 2011)。双耳状把手付カップはユナツィテ・カップとほぼ同範囲を占めるが、よりまばらに分布し、マルテペ・カップはユナツィテ・カップ分布範囲内のブルガリア北部から上トラキア平野西部、東マケドニア地方で認められた。このように各カップ類はバルカン半島東部から中央部にかけてひろく分布している。この要因には、カップ類はそれぞれ形が異なるものの、小型であること、自立しないこと、把手をもつことという共通点を持ち、いずれも携行性に優れている点があげられる。

新しい器形の出現には社会経済的な変化が背景にある可能性が想定されるものの、従来の生業活動である牧畜やフリントなどの資源獲得はエゼロ I 期から行われていたことから、エゼロ III 期における新器形の出現の説明には不十分である。新しい生業活動についてレシュタコフは該期から移牧と長距離交易が専業として行われ始めたと指摘しているから (Лещаков 2006, 207)、こうした広範囲の移動をとまなう経済活動がカップ類の出現と拡散に一役買った可能性がある。

エゼロ III 期には土器に見られる変化と併行するように、環溝遺跡が上トラキア平野東部に、墳丘墓が平野西部に出現している。前者に関しては第 II 部第 5 章で検討したように、エゼロ III 期

¹³⁵ この例外がダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓であるが、この点については後述する。

に突如として出現し、これより以前に同じタイプの遺跡がブルガリア各地で認められないこと、そして上トラキア平野東部を中心に分布することを特徴とする（図 99; 図 132）。第 1 部第 2 章で言及したように、環溝遺跡の性格については「聖域」説を支持する論調がある。この点について筆者自身なお明確な解答を持ち合わせているわけではないが、環溝遺跡から出土した土器の内容はほかの遺跡類型の資料と特段変わる様子はなかった。くわえて居住痕跡や埋葬施設が検出されていないこと、溝によって区画された空間をもつことにも注目すると、環溝遺跡は儀礼的性格にのみ特化した場と断定することはできなくても、地域の構成員が利用する、複合的な用途をそなえた公共の場（cf. Leshtakov 2002b）として機能していたという推測は可能である。

一方のダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓は、上トラキア平野西部で明らかにエゼロ III 期に土器の副葬を行っている例外的な遺跡である。その土器は上トラキア平野に由来するユナツィテ・カップや注口付土器と、ドナウ川下流域の後期グリナ土器に由来する方形把手付浅鉢、T 字状口縁をもつ浅鉢、T 字状口縁に縦位ループ状把手のつく浅鉢から構成されている。葬送儀礼に関わる遺構から 2 つの地域の土器が膨大な金製品とともに出土していることから、ダベネ・バリノフ・ゴルン墳丘墓はスタラ・プラニナの北側の北ブルガリアと南側の上トラキア平野の集団間関係を反映した特別な公共施設であったと考えられる。

以上のように、エゼロ III 期の上トラキア平野では平野東西の相互交流の増進、カップ類などの新しいタイプの土器と公共の場の出現、黒海北西岸域からの影響の減退と北方系要素の消失という現象が見出された。エゼロ III 期にこのような文化現象が起きた要因の 1 つの可能性として今回の検討からみえてくるのは、上トラキア平野東部の北方から南方への関係性の移行である。そこでこうした関係性の変化の背景について、想像の域を出ないが、若干の仮説を述べてみたい。

エゼロ III 期初頭の前 3 千年紀なかごろ、西アジアのメソポタミア地方で展開していた都市的経済の影響が西アナトリアの内陸部からアナトリア西岸域にまでおよび、当該域の社会構造に多大な影響を与えていたと考えられている（Düring 2006; Efe 2007; Rahmstorf 2006; Sabancı Üniversitesi & Şahoğlu 2012）。この時期にアナトリアからエーゲ海域をむすぶ組織的な長距離交易が盛んにおこなわれ¹³⁶、その経路に沿って防御施設や公共施設をそなえた拠点集落が築かれていった（Düring 2006, 257ff.）。このプロセスはヨーロッパ最南東端の東トラキア地方にまで達し、カンルゲチット遺跡にあらたな集落が造築されるにいたったと推測される（Özdoğan & Parzinger 2012）。

隣接する東トラキア地方と上トラキア平野の土器群はよく類似しており（Ambronn 2012, 124ff.）、

¹³⁶ この時期のことは「アナトリア交易網時代 Anatlian Trade Network Period」（Şahoğlu 2005）や「大キャラバン・ロード Great Caravan Road」（Efe 2007）と称されている。

カンルゲチット遺跡下層の土器はすくなくともエゼロ IIIa 期から上トラキア平野東部との関係を有していたことを示している。この関係性は、南方からもたらされた第2層出土のデパス・カップ、赤色スリップ土器、ロクロ製品をアッサラ遺跡の資料と対比してみると、エゼロ IIIb 期にはさらに強くなったように見える。こうした南方の動向とエゼロ III 期の上トラキア平野でおきた現象について確実にいえることは、上トラキア平野ではアナトリア西部とエーゲ海域にみるような都市的集落が築かれることはなかったということである。つまり、南方の文化伝統や社会的な制度が上トラキア平野にまるごともたらされたのではなく、その影響の範囲は部分的であり、おもに経済活動の関わりのうえに築かれた関係性であったと考えられる (Leshtakov 1996)。たとえばヒツジやヤギの乳や毛を獲得するための経済活動¹³⁷の痕跡として、エゼロ IIIb 期に採用され始めた漏斗状土器はチーズ作り用の容器¹³⁸として利用されていた可能性がある (三宅 1997)。また今回は分析していないため詳細は控えたいが、この時期には羊毛利用の面でも新たな局面をむかえていた可能性がある¹³⁹。このようにカップ類などの新しい器形や環溝遺構といった公共の場があらたな社会的要請のもとで出現したとするならば、その背景にはエゼロ III 期に徐々に浸透しつつあった南方からの経済的な影響を考えておきたい。

エゼロ III 期の考古資料にみられる変化は、1つの器形や遺構などの単発的な変化ではなく、複数の要素がほぼ同時期に変化し始める複合的なものとしてとらえることができる。現段階では各文化要素の変化にまつわる因果関係についてはなお不明なままであるが、この時期に黒海北西岸域からの影響はほとんどみられなくなり、北方系要素とその伝統が次第に衰退、消失していった。これとは対照的に、南方のアナトリア・エーゲ海域から及ぼされる影響が拡大していったことは、前期青銅器時代における上トラキア平野の文化や社会にとって1つの転機となったといえる。

4) 小結

本項であらためて各段階の様相をふりかえると、前期青銅器時代第1段階は、「移行期」末葉に

¹³⁷ 中世以降の事例であるが、バルカン半島で移動生活を営んでいた牧畜民「ヴラフ」の存在は参考になる (ノヴァコヴィチ 2003)。

¹³⁸ さらにエゼロ遺跡とカザンラク遺跡では攪拌用のチャーンに似た容器がエゼロ III 期に認められている (Лещиков 1997, обр. 10:и л)。なお、乳製品の製作を実証するためには、理化学的手法、動物考古学および民族考古学的手法など多角的に検討する必要がある (三宅 1997)。

¹³⁹ これは本論文の具体的な分析対象ではなく、それ専用の分析が必要であるものの、1点所見を述べておきたい。デヤドヴォ遺跡、エゼロ遺跡、シタグリ遺跡では重量の軽い土錘につづいて、エゼロ III 期から大振りの角錐形を呈した土錘が出土し始める (Elster 2003, 240ff.; Георгиев и др. 1979, 390f.; 東海大学トラキア発掘調査団 1987, 57)。想像の域をでないが、重量のある角錐形タイプの土錘の出現は機による織物生産の開始を示し、これがエゼロ III 期の上トラキア平野における経済環境の変化に対応したものと考えられないだろうか。機の出現は技術的かつ経済的に重要な歴史的背景をともなうものであり、上トラキア平野における大型土錘との関係は検討すべき課題の1つである。

ドナウ川下流域を中心に展開していたチェルナヴォダ III 集団と、黒海北西岸域のウサトヴォ集団が交流した結果、エゼロ I 期土器が形成された。エゼロ Ib 期には黒海北西岸域からウサトヴォ集団がふたたび南下してきて、上トラキア平野で在地集団と交流した結果、縄目文小型鉢が折衷土器として上トラキア平野北東部にもたらされた。

前期青銅器時代第 2 段階には北方系要素が在地の土器伝統に浸透し、地域文化として発展した。北方系要素の縄目文が在地の土器製作伝統に組みこまれることで、在地集団が主体となって縄目文土器の製作が行われた。また墳丘墓に副葬される土器から北方系要素が消え在地土器に置き換わったように、葬送儀礼の一部でも在地化が進んだ。

前期青銅器時代第 3 段階には、社会、文化ともに 1 つの転換期をむかえた。北方系要素の縄目文は次第に姿を消し、墳丘墓における土器副葬伝統は衰退していった。それと併行して、南方から西アジア型都市的経済の影響が徐々に浸透してきて、上トラキア平野東部にまで及んだ。その結果、乳や羊毛を調達するための移牧とそれらの製品の交易を担う集団が出現し、地域間の交流を促進させた。それと同時に公共的な場が地域内および間の関係を維持する装置として創設された。

当初、上トラキア平野の前期青銅器時代は、第 1 段階が在地的なバルカン-カルパチア-ドナウ川流域の要素からなる段階、第 2 段階がエーゲ海-アナトリアの文化要素が増加する段階、第 3 段階が独自発展した段階と評価されていた (Георгиев и др. 1979, 367)。その後、第 1 段階が文化的統合期、第 2 段階が社会的隆盛期、第 3 段階が土器変容期と評価されるようになった (Nikolova 1999, 337—348)。これまでの見解に対し、本論文で上トラキア平野東部を中心に検討したところ、第 1 段階 (エゼロ I 期) は黒海北西岸域とドナウ川下流域の北方と、第 3 段階 (エゼロ III 期) はアナトリア・エーゲ海域の南方との関係性が優勢を占めていたことを明らかにした。そして第 2 段階 (エゼロ II 期) はその中間期にあたり、第 1 段階からの在地的發展段階と解釈した。つまり、前期青銅器時代における上トラキア平野東部と周辺地域との関係性は、エゼロ I 期から III 期への経過とともに北方から南方へシフトしていったといえる。

中期青銅器時代にはいると、上トラキア平野とブルガリア各地域の状況はさらに大きく変わっていった。デャドヴォ遺跡をはじめ、上トラキア平野に位置するテル型集落は、ガラボヴォ遺跡をのぞいて、すべて放棄される。しかし、実際のところ、各集落遺跡がいつ、どのように放棄されたのか、ほとんど明らかにされていないし、現状においてそのことを示す有力な資料、有意な解釈は得られていない。1 つ確からしいことは、この時期、南方のアナトリア・エーゲ海域では経済や社会が前期青銅器時代から継続的に進展していったのに対し、ブルガリアでは前期青銅器

時代第3段階の社会を支えていたシステムは崩壊し、新しい局面に入ってしまったと推測されることである。

9. 3. 課題と展望

本論文ではデアドヴォ遺跡の土器を出発点として、エゼロ遺跡をはじめブルガリア各地の遺跡資料との比較をすすめながら、ブルガリア前期青銅器時代土器の年代的 position 付けと地域間交流の通時的復元を試みた。その考察結果についてはこれまで記してきたとおりである。ここでは主要な課題に絞って列記し、今後の展望を描くこととする。

①編年研究

本論文ではデアドヴォ遺跡資料を中心に分析を進め、前期青銅器時代編年について論考した。デアドヴォ遺跡の調査はなお継続中であり、前期青銅器時代最下層まで面的な発掘調査が行われていない。今回提示した編年案は大枠として問題があるとは思われないが、下層資料に関する分析が中層と上層に比べ十分なものでないことは確かである。今後、デアドヴォ遺跡における前期青銅器時代層下部の調査を進め、層位情報をもつ資料をもとに編年研究の検討を継続して行く必要がある。その際には前期青銅器時代層全体をつうじて土器属性の統計分析を実施することも重要課題の1つに挙げられる。

いま1つは北ブルガリアにおける資料の充実を図り、ブルガリア前期青銅器時代編年網の構築をおおきく前進させることが肝要である。そのためには博物館などの研究施設の収蔵資料と新たな発掘資料の充実をはかり、資料化を着実に進めていく作業が必要となる。

そして編年研究にとって喫緊の課題として、墳丘墓の詳細な年代を決定する方法を模索することが挙げられる。本論文では土器をもちいて墳丘墓資料の年代的 position 付けを検討したため、資料全体の年代に関する考察には至っていない。土器以外の副葬品および考古学的な情報からアプローチするだけでなく、理化学的手法など多角的な分析方法を採用して状況を改善する必要がある。

②エゼロ I 期土器の系譜と成立

エゼロ I 期土器の成立については、チェルナヴォダ III 期とウサトヴォ期の土器との系統関係を明らかにした。今回はおもに土器装飾の分析から両土器文化との関係を検討したが、なお立証すべき課題が残されている。まず、ブルガリア前期青銅器時代初頭に属する資料の充実と分析の実

施が挙げられる。この課題については、さしあたり上述したデヤドヴォ遺跡前期青銅器時代層下部の調査を行うことで解決を図ることが可能であると考え。そのさいには詳細な系統関係の把握のために、装飾だけではなく、土器の細かな形態や製作技術（器面調整や成形方法など）にも着目するべきであろう。

ウサトヴォ期の土器については、黒海北西岸域から上トラキア平野東部へと至った足跡を考古資料からより正確に跡づける作業を進めたい。そのためにはブルガリア北部および北東部からドナウ川下流域にかけて資料の実態を把握することが肝要となる。チェルナヴォダ III 期土器については、ドナウ川下流域から上トラキア平野東部にかけて分布している遺跡資料の拡散過程について不明な点が多く残されているため、その解明を進める必要がある。そのためには同土器文化の詳細な編年研究を推し進めていかななくてはならない。

③前期青銅器時代における土器の生産体制

本論文ではデヤドヴォ遺跡の資料に胎土分析を実施して、土器の産地推定と生産体制について所見を述べた。デヤドヴォ遺跡で土器生産を行っていたという所見を立証するためには、デヤドヴォ遺跡 1 件の事例を検討しただけでは不十分である。デヤドヴォ遺跡の場合、在地土器生産に使われた粘土資源は遺跡から東へ 5～10km の範囲にひろがる花崗岩質岩の地質帯を考慮しており、この地質帯の近くには例えばエゼロ遺跡やノヴァ・ザゴラ・ツイガンスカ・モギラ遺跡をはじめ数件の前期青銅器時代集落が立地している。このことから、理論上はエゼロ遺跡でつくられた土器がデヤドヴォ遺跡に供給されていたという可能性もまだ残されている。周辺集落の土器胎土分析と粘土試料の調査を継続して行うことで、本論文で提起した仮説を検証していく必要がある。それと同時に、同一型式の在地土器が広い範囲に同時に分布する理由も探らねばならない。

④縄目文土器研究

本論文ではデヤドヴォ遺跡の縄目文土器を中心に分析し、その出現から消失にいたるまでの変遷を明らかにした。その一方で、縄目文土器の起源地である黒海北西岸域の様相をはじめ、縄目文小型鉢がスリーヴェン山地南麓地域で製作された歴史的背景、上トラキア平野北西部や黒海西岸地域、そしてエーゲ海北岸域へ伝播した過程、そして最終的に縄目文が衰退していく直接的な要因を解明していくことが今後の課題として残されている。これまでに公表されている実測図のなかには撚りの方向まで正確に表現されていない例が少なからず見受けられた。こうした課題に取り組むためには、黒海北西岸域からバルカン半島にかけて分布する縄目文土器を 1 つ 1 つ丹念

に観察し、施文法と製作技術を含む型式学的特徴について基礎データを蓄積して、分析を着実に進めていくしかない。

⑤バルカン半島における前期青銅器時代社会の理解にむけて

本論文の構成はブルガリアを中心とした土器論が軸となっている。ブルガリア各地のことを理解するためにはより俯瞰的な視点を得ることが必要であり、そのためにはバルカン半島やアナトリアの資料をさらに幅広く吟味していくことが求められる。今回得られた土器をもとにした所見を足がかりに、今後は該期のその他の遺物をはじめ、墓制や集落構造の分析に着手し、前期青銅器時代社会の様相解明に迫る研究を進める必要がある。そしてバルカン半島における前期青銅器時代が人類史のなかでどのように位置づけられるのか、継続的に熟考していくことである。

謝 辞

本論文は金原保夫先生、松本建速先生、三宅裕先生、近藤英夫先生、禿仁志先生のご指導のもと執筆した。とりわけ禿仁志先生には筆者が学部生の頃から長年にわたってご指導を賜り、ブルガリア留学をふくめデャドヴォ遺跡での発掘調査や南東ヨーロッパでの調査・研究の機会を幾度となく与えていただいた。本論文のおもな分析対象であるデャドヴォ遺跡の資料を手にとって観察し、考える時間をもつことができたことはなにもものにも代え難い経験であった。また、ソフィア大学のクラスィミル・レシュタコフ先生には、筆者が2004年にブルガリアに留学した時から今日にいたるまでの研究活動においてお世話になり、現地の若手研究者や学生のあいだにはいつてブルガリア考古学を肌で感じる機会を与えていただいた。ブルガリア考古学を支えていく彼ら／彼女らとの議論は、研究の展望を見据えるうえで重要な判断材料の1つになった。

本論文の冒頭に記したように、ブルガリアはヨーロッパのなかでいち早く青銅器時代が幕を開けた地域の一角を占めており、そこには未解決の課題がまだまだ山積している。本論文は膨大な課題に取り組んでいくための第一歩であり、今回の成果をさらに発展させて研究を推しすすめていくことで、南東ヨーロッパ・バルカン地域の青銅器時代研究に寄与することができればよいと考えている。

ご指導いただいた先生がたに心から感謝申し上げます。またこれまで調査と研究でお世話になった多くの方々につきましては、以下にご芳名を記して、謝意を表します。(50音順・敬称略)

秋田かな子、ステファン・アレクサンドロフ、ゲオルギ・イヴァノフ、イリヤ・イリエフ、上杉彰紀、スヴェトラナ・ヴェネリエヴァ、小高敬寛、タティアナ・カンチェヴァ・ルセヴァ、カンチョ・カンチェフ、金成太郎、ディアナ・ゲルゴヴァ、ヴェンツィスラフ・ゲルゴフ、紺谷亮一、ターニャ・ジャンフェゾヴァ、柴田徹、関根孝夫、田尾誠敏、スタニミラ・タネヴァ、ストヤンカ・ディミトロヴァ、藤盛美郎、ロスイツァ・フリストヴァ、オルガ・ペネリエヴァ、北條芳隆、ヤヴォル・ボヤジエフ、前田修、ロスイツァ・ミトコヴァ、宮原俊一。

なお、現地調査に関しては、一部、財団法人日本科学協会の平成24年度笹川科学研究助成、平成25年度公益財団法人高梨学術奨励基金から援助を受けました。記して感謝申し上げます。

参考文献

RPRP : Reports of Prehistoric Research Projects

АОР : Археологически открития и разкопки, София: Археологически институт с музей-Българска академия на науките

ГСУИФСА : Годишник на Софийския университет “Св. Климент Охридски” Исторически Факултет-Специалност
Археология

ИАИ : Известия на археологическия институт

ИБАИ : Известия на Българския археологически институт

ИВАД : Известия на Варненското археологическо дружество

ИМСЗБ : Известия на музеите в северозападна България

ИМЮБ : Известия на музеите от южна България

ИНМВ : Известия на Народния музей—Варна

МИАП : “Марица-Изток” археологически проучвания

《英独仏語文献》

Alexandrescu, A. D. 1974: “La nécropole du bronze ancien de Zimnicea (dép. de Teleorman),” *Dacia* N. S. 18, 79—93.

Alexandrov, S. 1994: “The prehistoric site of Radomir-Vahovo: some problems of the Early Bronze Age in south-western Bulgaria (northern connections),” in P. Roman & M. Alexianu (eds.), *Relations Thraco – Illiro – Hellenique*, Bucuresti: Repro – Art S. R. L, 117 – 129.

Alexandrov, S. 1995: “The Early Bronze Age in western Bulgaria: periodization and cultural definition,” in D. Bailey & I. Panayotov, 253—270.

Alexandrov, S. 1998: “Pottery from the end of the Early Bronze Age in west Bulgaria,” in M. Stefanovich et al. (eds.), *In The Steps of James Harvey Gaul*, vol. 1, Sofia: The James Harvey Gaul Foundation, 223—233.

Alexandrov, S. 2007: “Bronze age materials from Bulgaria (north-west Bulgaria),” in M. Stefanovich & Ch. Angelova (Hrsg.), 225—248.

Alexandrov, S. 2010: “Prehistoric barrow graves with extended inhumations between the Danube and the Balkan range,” *Studia Praehistorica* 13, 277—292.

Alexandrov, S. & Gotzev, A. 1990: “Așezarea prehistorică de la Hotovo (Bulgaria de sud-vest),” *Thraco-Dacica* 1-2, 21—32.

Alexandrov, S. et al. 1998: “Trial excavations of a Bronze Age site near Tutrakan, north-east Bulgaria,” *Archaeologia Bulgarica* 2(3), 7—30.

- Ambronn, M. 2012: "Die frühbronzezeitliche Keramik aus den Grabungen 1994-1998," in M. Özdoğan & H. Parzinger (Hrsgs.), 53—147.
- Anthony, D. 2007: *The Horse, the Wheel, and Language: How Bronze-Age riders from the Eurasian steppes shaped the Modern World*, Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Arnold, D. 1985: *Ceramic theory and cultural process*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Aslanis, I. 1985: *Kastanas. Ausgrabungen in einem Siedlungshügel der Bronze- und Eisenzeit Makedoniens 1975-1979. Die frühbronzezeitlichen Funde und Befunde*, Berlin: Wissenschaftsverlag Volker Spiess.
- Bailey, D. & Panayotov, I. (eds.) 1995: *Prehistoric Bulgaria*, Monographs in World Archaeology 22, Madison: Wisconsin: Prehistory Press.
- Barber, E. 1990: *Prehistoric Textiles : the development of cloth in the Neolithic and Bronze Ages with special reference to the Aegean*, Princeton: Princeton University Press.
- Bertemes, F. 1998: "Der mittelbronzezeitliche Kultgraben von Drama und seine kulturhistorische Stellung in Südosteuropa," *Archäologisches Nachrichtenblatt* 3/4, 322—330.
- Bertemes, F. & Ostriz, S. 2001: "Vorbericht zu den prähistorischen Funden und Befunden der deutsch-bulgarischen Grabungen in Karasura," in M. Wendel (Hrsg.), *Karasura: Untersuchungen zur Geschichte und Kultur des alten Thrakien*, Wessbach: Beier & Beran, 33—44
- Bertram, J. K. 2002: *Karasura – Die prähistorischen Funde und die Münzen (Ausgrabungen 1981—1997)* , Bd. II, Langenweissbach: Beier & Beran, 5—142.
- Blegen, C. W. et al. 1950: *Troy. General Introduction. The First and Second Settlement*, Vol. I, Princeton: Princeton University Press.
- Blegen, C. W. et al. 1951: *Troy. The Third, Fourth, and Fifth Settlements*, Vol. II, Princeton: Princeton University Press.
- Boyadziev, J. 1995: "Chronology of prehistoric cultures in Bulgaria," in D. Bailey & I. Panayotov (eds.), 149—191.
- Bulatović, A. 2011: "Relations between cultural groups in the Early Bronze Age in Southeastern Serbia, Western Bulgaria and Northeastern Macedonia," *Archaeologia Bulgarica* XV(2), 59—72.
- Bredwa-Mensah, Y. 1996: "The production and use patterns of Ga Pottery in the Lower Densu Valley, Western Accra plains, Ghana," *Papers from the Institute of Archaeology* 7, 47—58.
- Burdo, N. et al. (eds.) 2010: *'Cord' ornaments on pottery in the Vistula and Dnieper interfluvial region: 5th – 4th mill. BC*, Baltic-Pontic Studies 15, Poznań: Institute of Prehistory, Adam Mickiewicz University.
- Childe, V. 1956: *Piecing together the Past: the interpretation of archeological data*, London: Routledge and Kegan Paul.
- Christman, E. 1996: *Die deutschen Ausgrabungen auf der Pevkakia-Magula in Thessalien II: Die frühe Bronzezeit*, Bonn: Dr. Rudolf Habelt GmbH.

- Coleman, J. E. 1977: *Kephala - A Late Neolithic settlement and cemetery*, Glückstadt: Princeton University Press.
- Dennell, R. 1978: *Early farming in South Bulgaria from the Vth to IIIrd millennium b.c.*, BAR International Series 47.
- Dennell, R. & Webley, D. 1975: "Prehistoric settlement and land use in southern Bulgaria," in E. Higgs (ed.), *Palaeoeconomic: being the second volume of papers in economic prehistory by members and associates of the British Academy Major Research Project in the Early History of Agriculture*, London: Cambridge University Press, 97—108.
- Detev, P. 1981: "Le Tell Razkopenica," *HAH* 35, 141—181.
- Dimitrov, K. 2007: "Stone scepters type zoomorphic figure from Sozopol – steppe influences on the West Black Sea Coast at the beginning of the 4th mill. BC –," in M. Stefanovich & Ch. Angelova (Hrsg.), 145—158.
- Draganov, V. 1995: "Submerged coastal settlements from the final eneolithic and the early bronze age in the sea around Sozopol and Urdoviza Bay near Kiten," in D. Bailey & I. Panayotov (eds.), 225—241.
- Draganov, V. 1998: "The present state of Eneolithic research in Northeastern Bulgaria and Thrace," in M. Stefanovich et al. (eds.), *In the Steps of James Harvey Gaul in Memoriam*, vol. 1, Sofia; The James Harvey Gaul Foundation, 203—221.
- Düring, B. 2011: *The Prehistory of Asia Minor - From Complex Hunter-Gatherers to Early Urban Societies*, Cambridge; Cambridge University Press.
- Efe, T. 2007: "The theories of the 'Great Caravan Route' between Cilicia and Troy: the Early Bronze Age III period in inland western Anatolia," *Anatolian Studies* 57, 47—64.
- Elster, E. S. 2003: "Catalog of the Tools of the Spinner, Weaver, and Mat Maker", in E. S. Elster & C. Renfrew (eds.), *Prehistoric Sitagroi: Excavations in Northeastern Greece, 1968-1970*, Vol. 2: The Final Report, Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology University of California, 258—282.
- Eslik, C. 1992: *Elmalı-Karataş - The Neolithic and Chalcolithic Periods: Bağış and Other Sites*, Vol. I, Bryn Mawr: Science Press.
- Fokkens, H. & Harding, A. 2013: *The Oxford Handbook of the European Bronze Age*, Oxford: Oxford University Press.
- Fol, A. & Lichardus, J. (Hrsg.) 1988: *Macht, Herrschaft und Gold: Das Gräberfeld von Varna (Bulgarien) und die Anfänge einer neuen euroäischen Zivilisation*, Saarbrücken: Moderne Galerie des Saarland-Museums.
- Fol, A. et al. (eds.) 1989: *Djadovo: Bulgarian, Dutch, Japanese Expedition, Vol. 1, Mediaeval Settlement and Necropolis (11th—12th Century)*, Tokyo: Tokai University Press.
- Garašanin, M. 1959: "Neolithikum und Bronzezeit in Serbien und Makedonien: Überblick über den Stand der Forschung 1958," 39. *Bericht der Römisch-Germanischen Kommission 1958*, Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1—130.
- Gatsov, I. 2006: "The state of research into the problem of pleistocene-holocene transition in the present area of Bulgaria," in I. Gatsov & H. Schwarzberg (eds.), *Aegean-Marmara-Black Sea: Present state of the research of the Early Neolithic*, Langenweissbach: Beier & Beran, 151—156.

- Gaul, J. 1948: *The Neolithic period in Bulgaria: early food-producing cultures of Eastern Europe*, American School of Prehistoric Research, Bl. 16, Harvard: Harvard University. Peabody Museum Of Archaeology And Ethnology.
- Gaydarska, B. 2007: *Landscape, Material Culture and Society in Prehistoric South East Bulgaria*, BAR International Series 1618, Oxford: Archaeopress.
- Genadieva, V. 2007: "Prehistoric settlements in the province of Kjustendil," in H. Todorova et al. (eds.), *The Struma/Strymon River Valley in Prehistory*, Proceedings of the International Symposium Strymon Preahistoricus, Sofia: Gerda Helkel Stiftung, 239—246.
- Georgiev, G. 1961: "Kulturgruppen der Jungstein- und der Kupferzeit in der Ebene von Thrazien," in J. Böhm & S. J. De Laet (eds.), *L'Europe à le Fin de l'Age de Pierre*, Prague: l'Académie tchécoslovaque des Sciences, 45—100.
- Georgiev, G. 1967: "Beiträge zur Erforschung des Neolithikums und der Bronzezeit in Südbulgarien," *Archaeologia Austriaca*, 42, 90—144.
- Georgiev, G. 1972: "Die Gemeinsamkeit der Kulturen Südbulgariens und Nordgriechenlands während des Neolithikums, Aeneolithikums und der Frühbronzezeit," in E. Arditis (ed.), *Acta of the 2nd International Colloquium on Aegean Prehistory: The first arrival of Indo-European elements in Greece*, Athens: Ministry of Culture and Sciences, General Directorate of Antiquities, 115—128.
- Georgieva, P. 1988: "Die prähistorische Siedlung in der Gegend Čukata beim Dorf Galatin bei Vraca (Bulgarien)," *Studia Praehistorica* 9, 111—146.
- Georgieva, P. 1996: "A fortified settlement from the early bronze age in Thrace," in C. G. Doumas & V. La Rosa (eds.), *He Poliochne kai he proime epoche tu Chalku sto Voeio Aigaio : diethnes synedrio Athena, 22-25 Apriliou 1996*, 311—328.
- Gergov, V. 2007: "Die pastös bemalte Keramik aus der finalkupferzeitlichen Siedlung Teliš-Redutite, Zentral-Nordbulgarien," in M. Stefanovich & Ch. Angelova (Hrsg.), 135—138.
- Gimbutas, M. 1970: "Proto-Indo-European culture: the Kurgan Culture during the fifth, fourth, and third millennia B.C.," in C. George et al. (eds.), *Indo-European and Indo-Europeans: Papers presented at the Third Indo-European Conference at the university of Pennsylvania*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 155—197.
- Gimbutas, M. 1973: "The beginning of the Bronze Age in Europe and the Indo-Europeans: 3500-2500 B.C.," *The Journal of Indo-European Studies* 1(2), 163—214.
- Gimbutas, M. 1977: "The first wave of Eurasian Steppe pastoralists into Copper Age Europe," *The Journal of Indo-European Studies* 5, 277—338.
- Gimbutas, M. 1979: "The three waves of the Kurgan People into Old Europe, 4500-2500 B.C.," *Archives suisses d'anthropologie générale, Genève* 43(2), 113—137.

- Gleser, R. 2011: "Radiokarbon daten aus Drama: Stand der Forschungen bis zum Jahre 2010," *Studia Praehistorica* 14, 177—204.
- Gleser, R. & Thomas, M. (Hrsg.) 2012: "Merdžumekja"-Südosthang. Späte Kupferzeit und Früheste Bronzezeit: Ergebnisse siedlungsarchäologischer Forschungen, Drama - Forschungen in einer Mikroregion, Band 1, Bonn: Dr. Rudolf Habelt GmbH.
- Görsdorf, V. J. & Bojadžiev, J. 1997: "Zur absoluten Chronologie der bulgarischen Urgeschichte - Berliner ¹⁴C -Datierungen von bulgarischen archäologischen Fundplätzen," *Eurasia Antiqua* 2, 105—173.
- Grębska-Kulowa, M. & Kulow, I. 2007: "Prehistoric Sites in the Middle Struma River Valley between the end of the VIIth mill. BC and the beginning of the I st mill. BC", in H. Todorova et al. (eds.), *The Struma/Strymon River Valley in Prehistory*, Proceedings of the International Symposium Strymon Preahistoricus, Sofia: Gerda Helkel Stiftung, 279—296.
- Gurova, M. 2012: "'Balkan Flint'-fiction and/or trajectory to Neolithization: evidence from Bulgaria," *Bulgarian e-Journal of Archaeology* 1/2012, 15—49. <http://be^ja.org>.
- Gurova, M. & Nachev, Ch. 2008: "Formal early neolithic flint toolkits: archaeological and sedimentological aspects," in R. Kostov et al. (eds.), *Geoarchaeology and Archaeomineralogy. Proceedings of the International Conference, 29-30 October 2008*, Sofia: St. Ivan Rilski, 29—35.
- Hanschmann, E. & Milošević, V. 1976: *Die deutschen Ausgrabungen auf der Argissa-Magula in Thessalien III: Die frühe und beginnende mittlere Bronzezeit*, Bonn: Dr. Rudolf Habelt GmbH.
- Hartuče, H. & Anastasiu, F. 1976: *Catalogul selectiv al colecției de arheologie a Muzeului Brăilei*, Brăilei: Muzeul Brăilei.
- Heyd, V. 2011: "Yamnaya groups and tumuli west of the Black Sea," in E. Borgna & S. M. Celka, *Ancestral landscapes : burial mounds in the Copper and Bronze Ages (Central and Eastern Europe, Balkans, Adriatic, Aegean, 4th-2nd millennium B.C.) : proceedings of the international conference held in Udine, May 15th-18th 2008*, Lyon: Maison de l'Orient et de la Méditerranée, 535—555.
- Heyd, V. 2013: "Europe at the Dawn of the Bronze Age," in V. Heyd et al. (eds.), *Transitions to the Bronze Age. Interregional Interaction and Socio-Cultural Change in the Third Millennium BC Carpathian Basin and Neighbouring Regions*, Archaeolingua Main Series, Vol. 30, Budapest: Archaeolingua, 9—66.
- Hiller, S. 1997: "Bronzezeitliche Keramik Gruben, B, H, C, D und S," in S. Hiller & V. Nikolov (Hrsg.), *Karanovo. Die Ausgrabungen im Südsektor 1984-1992*, Band I, Wien: Phoibos Verlag, 323—350.
- Hiller, S. & Nikolov, V. 2000: "Karanovo 1947-1997. Das Neolithikum Forschungsgeschichte und Daten zur Stratigraphie," in S. Hiller & V. Nikolov (Hrsg.), *Karanovo. Beiträge zum Neolithikum in Südosteuropa (Gebundene Ausgabe)*, Band III, Wien: Phoibos Verlag, 7—9.
- Hood, S. 1981: *Excavations in Chios 1938-1955 Prehistoric Emporio and Ayio Gala*. Vol. I, Oxford: Thames and Hudson.
- Hood, S. 1986: "Evidence for invasions in the Aegean area at the end of the Early Bronze Age," in G. Cadogan (ed.), *The End of the*

- Early Bronze Age in the Aegean*, Leiden: E. J. Brill, 31—68.
- Hristov, M. 2010: “Early Bronze Age ritual structures and cemetery at Dabene, near Karlovo (Preliminary Report),” *Studia Praehistorica* 13, 293—317.
- Hristov M. & Hristova, T. 2004: “Eine prähistorische Siedlung aus dem Chalkolithikum und der Frühbronzezeit bei Lepica, Bez. Pleven (Vorläufiger Bericht),” in V. Nikolov & K. Băčvarov (Hrsg.), 99—105.
- Iliev, I. 2009: “Über das Eindringen der Grubengrabkultur in das Gebiet Thrakiens”, in V. Becker et al. (Hrsgs.), *Zeiten-Kulturen-Systeme Gedenkschrift für Jan Lichardus*, Langenweißbach Beier & Beran, 241—246.
- Iliev, I. 2011: “The Pit Grave culture in the lower Tundzha valley,” *Studia Praehistorica* 14, 381—398.
- Ivanov, I. 2000: “Varna and the birth of the European Civilization,” in I. Ivanov & M. Avramova (eds.), *Varna Necropolis – The Dawn of European Civilization*, Sofia: Agató Publisher, 5—14.
- Ivanova, S. & Sirakova, S. 1995: “Chronology and cultures of the Bulgarian Palaeolithic,” in D. Bailey & I. Panayotov (eds.), 9—54.
- Joukowsky, M. S. 1986: *Prehistoric Aphrodisias*, Vols. I and II, Belgium: Court-St-Étienne.
- Kalchev, P. 1996: “Funeral rites of the Early Bronze Age flat necropolis near the Bereket Tell, Stara Zagora Funeral rites of the Early Bronze Age flat necropolis near the Bereket Tell, Stara Zagora”, *RPRP* 1(2-4), 215—225.
- Kalčev, P. 2002: *Das Frühbronzezeitliche Gräberfeld von Stara Zagora - "Bereketska Mogila"(Bulgarien)*, Saarbrücker Studien und Materialien zur Altertumskunde 8, Bonn: Dr. Rudolf Habelt GmbH.
- Karastoyanova, D. 2004: “Archäologische Ausgrabungen von Tell Krăn, Bez. Kazanlāk,” in V. Nikolov & K. Băčvarov (Hrsg.), 79—86.
- Katinčarov, R. 1972: “Habitations de l'age du Bronze Moyen du tell de Nova Zagora (Bulgarie du Sud),” *Thrace* 1, 43—55.
- Katinčarov, R. 1978: “Sur la synchronisation des civilisations de l'age du Bronze Ancien en Thrace et dans la region d'Egee et d'Anatolie,” *Thracia Praehistorica. Supplementum Pulpudeva* 3, 132—149.
- Kănčev, M. & Kănčeva-Ruseva, T. 1996: “Architektur der prähistorischen Siedlung Ovčariza II,” *RPRP* 1(2-4), 227—238.
- Koleva, B. 2000: “An Early Bronze settlement on the western slope of Nebet Tepe in Plovdiv,” in L. Nikolova (ed.), 273—276.
- Kostov, R. et al. (eds.) 2008: *Geoarchaeology and Archaeomineralogy. Proceedings of the Internatinal Conference, 29-30 October 2008*, Sofia: St. Ivan Rilski.
- Kotova, N. S. 2010: “The first ‘Corded’ ceramics ornamentation of Eneolithic Steppe and Neolithic forest-steppe cultures,” *Baltic-Pontic Studies* 15, 75—109.
- Krauß, R. 2006: *Die prähistorische Besiedlung am Unterlauf der Jantra*, Rahden: Verlag Marie Leidorf.
- Kulov, I. 2011: “Early Bronze Age pottery from the prehistoric settlement of Kovačevo, near Sandanski, Southwest Bulgaria,” *Studia Praehistorica* 14, 357—380.

- Leshtakov, K. 1993: "The end of the Early Bronze Age in Thrace," in *Actes du IIe Congrès International de Science Préhistoriques et Protohistoriques, Bratislava, 1-7 septembre 1991*, 556—560.
- Leshtakov, K. 1994: "The detachment of the early bronze age ceramics along the south Bulgarian Black Sea coast," *Thracia Pontica V: les ports dans la vie de la Thrace ancienne: 7-12 octobre 1991, Sozopol: actes du symposium international*, 23—38.
- Leshtakov, K. 1996: "Trade centers from Early Bronze Age III and Middle Bronze Age in Upper Thrace (notes on the interpretation of Baa Dere – Konstantia – Gulubovo)," *RPRP* 1(2-4), 239—287.
- Leshtakov, K. 2000: "The pottery from Maltepe tell near Ognyanovo (characteristics, chronology and interrelations)," in L. Nikolova (ed.), 241—271.
- Leshtakov, K. 2002a: "Galabovo pottery and a new synchronization for the Bronze Age in Upper Thrace with Anatolia," *Anatolica* 28, 171—211.
- Leshtakov, K. 2002b: "Some suggestions regarding the formation of the 'Thracian Religion': in the light of new archaeological data from South Bulgaria," *RPRP* 5, 19—51.
- Leshtakov, K. 2004a: "Stratigraphie und Datierung der Schicht aus der frühen Bronzezeit des Siedlungshügels Gudžova (Mädrec 1)," in V. Nikolov & K. Băčvarov (Hrsg.), 117—132.
- Leshtakov, K. 2004b: "The Thracian settlement at Assara (Constantia) near Simeonovgrad," *Известия на Исторически Музей Хасково* 2/2003, 33—86.
- Leshtakov, K. 2006: "Structure, function and interpretation of Cherva Gora 1 enclosure in Upper Thrace (Southeast Bulgaria)," in M. Lichardus-Itten (ed.), *Des trous...: Structures en crex pré- et protohistoriques*, Actes du colloque de Dijon et Baume-les-Messieurs, 24-26 mars 2006, Montagnac: Éditions Monique Mergoïl, 405—430.
- Leshtakov, K. et al. 2001: "Prehistoric studies. settlement sites," *МИАИТ* 5, 15—68.
- Leštakov, K. 1995: "Bronze age graves at Debelt, Bougas region," *Thracia Pontica* 5, 39—44.
- Lichardus, J. & Iliev, I. 2001: "Die Cernavodă III-Siedlung von Drama-Merdžumekja in Südostbulgarien und ihre Bedeutung für Südosteuropa," in P. Roman & S. Diamandi (eds.), 166—198.
- Lichardus, J. & Lichardus-Itten, M. 1995: "Nordpontische Beziehungen während der frühen Vorgeschichte Bulgariens," *Thracia* 11, 31—62.
- Lichardus, J. & Lichardus-Itten, M. 2003: "Noch einmal zu den nordpontischen Beziehungen während der frühen Vorgeschichte Bulgariens," *Thracia* 15, 55—65.
- Lichardus-Itten, M. et al. 2002: "The site of Kovačevo and the beginnings of the Neolithic period in southwestern Bulgaria: the French-bulgarian excavations 1986—2000," in M. Lichardus-Itten et al. (Hrsg.), *Beiträge zu jungsteinzeitlichen Forschungen in Bulgarien*, Saarbrücker Beiträge zur Altertumskunde Band 74, Bonn: Dr. Rudolf Habelt Verlag GMBH.

- Luca, S. A. (ed.) 2012: *Cercetările arheologice preventive de la Turdaș-Luncă (Județul Hunedoara) Campania 2011*, Sibiu: Muzeul Național Brukenthal.
- Manzura, I. 1999: "Cernavoda I Culture," in L. Nikolova (ed.), 95—174.
- Manzura, I. 2003: "Innovations in the ceramic style and the Bronze Age genesis in the Northeast Balkans," in L. Nikolova (ed.), *Early Symbolic Systems for Communication in Southeast Europe*, Part I, BAR Int. Series 1139, Oxford: Archaeopress, 313—335.
- Manzura, I. 2005: "Steps to the steppe: or, how the North Pontic region was colonised," *Oxford Journal of Archaeology* 24(4), 313—338.
- Manzura, I. et al. 1995: "East-West interactions in the Eneolithic and Bronze Age cultures of the North-West Pontic region," *The Journal of Indo-European Studies* 23(1-2), 1—51.
- Marinescu-Bîlcu, S. 1990: "Askoï et rhytons Enéolithiques des régions Balkano-Danubiennes et leurs relations avec le Sud, à la lumière de quelques pièces de Căsciarele," *Dacia* 34, 5—21.
- Merkyte, I. 2007: "Ezero-Kale - from the Copper Age to the Bronze Age in the Southern Balkans," *Acta Archaeologica* 78(2), 1—78.
- Merpert, N. 1997: "The earliest Indo-Europeanization of the North Balkan area in light of a new investigation in the Upper Thracian Valley," in J. Marler (ed), *From the Realm of the Ancestors : An Anthology in Honor of Marija Gimbutas*, Connecticut: Knowledge, Ideas & Trends, 70—77.
- Mikov, V. 1959: "The prehistoric mound of Karanovo," *Archaeology* 12(2), 88—97.
- Miller, D. 1985: *Artefacts as categories: A study of ceramic variability in Central India*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Morintz, S. & Roman, P. 1968: "Aspekte des Ausgangs des Äneolithikums und der Übergangsstufe zur Bronzezeit im Raum der Niederdonau," *Dacia* 8, 45—128.
- Nachev, Ch. 2009: "Flint raw materials in Bulgaria," in I. Gatsov & Y. Boyadzhiev (eds.), *The First Neolithic Sites in Central/South-East European Transect: Volume I Early Neolithic Sites on the Territory of Bulgaria*, Oxford: BAR International Series 2048, 57—58.
- Němejcová-Pavůková, V. 1982: "Periodisierung der Badener Kultur und Ihre chronologischen Beziehungen zu Südosteuropa," *Thracia Praehistorica. Supplementum PULPUDEVA* 3, 150—176.
- Němejcová-Pavůková, V. 1999: "Bemerkungen zur Frühbronzezeit in Westbulgarien und Nordostgriechenland (im Licht der "Importe" aus dem Karpatenbecken)," *Slovenská Archeológia* 47(1), 45—65.
- Nikolić, D. 2000: *Kostolačka Kultura na Teritoriji Srbije*, Centar za arheološka istraživanja Knjiga 19, Beograd: Univerzitet u Beogradu Filozofski fakultet.

- Nikolov, V. 1997: "Die neolithische Keramik," *Karanovo*, in S. Hiller & V. Nikolov (Hrsg.), *Karanovo. Die Ausgrabungen im Südsektor 1984-1992*, Band I, Wien: Phoibos Verlag, 105—146.
- Nikolov, V. 2010: "Early Bronze Age sanctuary at Tell Kazanlak," *Studia Praehistorica* 13, 319—337.
- Nikolov, V. & Bačvarov, K. (Hrsg.) 2004: *Von Domicia bis Drama. Gedenkschrift für Jan Lichardus*, Sofia: Archäologisches Institut mit Museum der Bulgarischen Akademie der Wissenschaften.
- Nikolova, L. 1994: "Data about sea contacts during the Early Bronze Age in South-Eastern Europe (c. 3500/3400-2350/2250 B.C.)," *Thracia Pontica* 5, 57—86.
- Nikolova, L. 1995: "The Sarovka Tell near the village of Dubene, Karlovo District," *RPRP* 1(1), 15—31.
- Nikolova, L. 1996: "Settlements and ceramics: the experience of Early Bronze Age in Bulgaria," *RPRP* 1(2-4), 145—186.
- Nikolova, L. 1999: *The Balkans in Later Prehistory: periodization, chronology and cultural development in the Final Copper and Early Bronze Age (fourth and third millennia BC)*, BAR International Series 791, Oxford.
- Nikolova, L. 2000a: "Yunatsite Culture. periodization, chronology and synchronizations", *RPRP* 2-3, 33—99.
- Nikolova, L. 2000b: "Dubene-Sarovka, Yunatsite Culture and the integrations in the Early Bronze Balkans," in L. Nikolova (ed.) 201—239.
- Nikolova, L. 2000c: "The Balkan Proto-Indo-Europeans in the fourth and third millennia BC," *The Journal of Indo-European Studies* 28(1-2), 197—220.
- Nikolova, L. (ed.) 2000d: *Technology, Style and Society: contributions to the innovations between the Alps and the Black Sea in Prehistory*, BAR International Series 854, Oxford: Hedges.
- Nikolova, L. 2001: "Approach to the genesis and initial development of the Early Bronze Age cultures in the Lower Danube basin and in the Southern Balkans," in P. Roman & S. Diamandi (eds.), 236—260.
- Nikolova, L. 2005: "Social changes and cultural interactions in Later Balkan Prehistory –later fifth and fourth millennia cal. BCE," *RPRP* 6-7, 87—96.
- Nikolova, L. 2008: "Baden-Anatolian cultural horizons from the fourth millennium BC and their relations to the Baden cultural complex," in M. Furholt et al. (eds.), *The Baden Complex and the Outside World*, Proceedings of the 12th Annual Meeting of the EAA 2006, Cracow, Bonn: Dr. Rudolf Habelt GmbH, 157—166.
- Oanță-Marghitu, S. 2003: "'Fenomenul Cernavoda III-Boleráz': dupa 30 de ani," *Cercetări Arheologice* 12, 109—138.
- Orton, C. et al. 1993: *Pottery in Archaeology*, Cambridge Manuals in Archaeology, Cambridge: Cambridge University Press.
- Özdoğan, M. & Parzinger, H. (Hrsg.) 2012: *Die Frühbronzezeitliche Siedlung von Kanlıgeçit bei Kirklareli: Ostthrakien während des 3. Jahrtausends V. Chr. im Spannungsfeld von anatolischer und balkanischer Kulturentwicklung*, Berlin: Philipp Von Zabern Verlag GmbH.

- Özdoğan, M. & Yılmaz, Ö. 2012: Pottery appendix, in M. Özdoğan & H. Parzinger (Hrsgs.), 148—182.
- Panajotov, I. 1988: “Studies on the Bronze Age in the Bulgarian Lands (Historiographic Notes),” *Thracia*, 8, 157—175.
- Panayotov, I. 1995: “The Bronze Age in Bulgaria: studies and problems,” in D. Bailey & I. Panayotov, 243—252.
- Parzinger, H. 1991: “Zur Rachmani-Periode in Thessalien,” *Germania* 69(2), 359—388.
- Parzinger, H. 1993: *Studien zur Chronologie und Kulturgeschichte der Jungsteinzeit, Kupferzeit und Frühbronzezeit zwischen Karpaten und Mittlerem Taurus*. Mainz am Rhein: Philipp von Zabern.
- Petrakis, S. L. 2002: *Aiyoryitika –The 1928 Excavations of Carl Blegen at a Neolithic to Early Helladic settlement in Arcadia–*, Philadelphia: The Institute for Aegean Prehistory Academic Press.
- Petrova, V. 2004: “The ceramic assemblage of the Late Chalcolithic Karanovo VI culture, phase III,” in V. Nikolov et al. (eds.), *Prehistoric Thrace-*, Sofia: Institute of Archaeology with Museum – BAN and Regional Museum of History – Stara Zagora, 425—432.
- Quinn, P. [ed.] 2010: *Interpreting Silent Artefacts: Petrographic Approaches to Archaeological Ceramics*, Oxford: Archaeopress.
- Quiinn, P. 2013: *Ceramic Petrography: the interpretation of archaeological pottery & related artefacts in thin section*, Oxford: Archaeopress.
- Rahmstorf, L. 2006: “Zur Ausbreitung vorderasiatischer Innovationen in die frühbronzezeitliche Ägäis,” *Praehistorische Zeitschrift* 81(1), 49—96.
- Rassamakin, J. 1999: “The Eneolithic of the Black Sea steppe: dynamics of cultural and economic development 4500-2300 BC,” in M. Livine et al. (eds.), *Late Prehistoric Exploitation of the Eurasian Steppe*, Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research, 59—182.
- Rassamakin, J. 2004 : *Die nordpontische Steppe in der Kupferzeit: Gräber aus Mitte des 5. Jts. bis Ende des 4. Jts. v. Chr.*, 2 vols., Mainz: Verlag Philipp von Zabern GmbH.
- Renfrew, C. et al. (eds.) 1986 : *Excavations at Sitagroi, a prehistoric village in Northeast Greece*, Vol. 1, Los Angeles: Institute of Archaeology, University of California.
- Rice, P. 1987: *Pottery Analysis: a sourcebook*, Chicago: University of Chicago Press.
- Roman, P. 1976a: *Cultura Coșofeni*, Biblioteca de arheologie, 26, București: Academiei Republicii socialiste România.
- Roman, P. 1976b: “Complexul Orlea-Sadovec,” *Studii și Cercetaări de Istorie Veche și Arheologie* 27(2), 147—169.
- Roman, P. 1976c: “Die Glina III-Kultur,” *Praehistorische Zeitschrift* 51, 26—42.
- Roman, P. 2001: “Die Cernavodă III-Boleráz-Kulturercheinung an der unteren Donau,” in P. Roman & S. Diamandi (eds.), 13—59.
- Roman, P. & Diamandi, S. (eds.) 2001: *Cernavodă III—Boleráz. Ein vorgeschichtliches Phänomen zwischen dem Oberrhein und der unteren Donau, Simposium Mangalia/Neptun (18.-24. Oktober 1999)*, Studia Danubiana. Series Symposia II, București:

Internationale Beratungskommission für die Förderung der Indo-Europäischen und Thrakischen Forschung.

- Roman, P. et al. 1992: *Beiträge zur Problematik der schmurverzierten Keramik Südosteuropas*, Mainz am Rhein: Verlag Philipp von Zabern.
- Sabancı Üniversitesi & Şahoğlu, V. (eds.) 2012: *Across the Cyclades and Western Aantolia during the 3rd Millenium BC*, Istanbul: Sabancı University Sakip Sabancı Museum.
- Sampson, A. 2002: *The Neolithic settlement at Ftelia, Mykonos*, Rhodes: University of the Aegean Department of Mediterranean Studies.
- Schier, W. 2001: "Tellstratigraphien als Zeitmaßstab," in R. Boehmer & J. Maran (Hrsg.), *Lux Orientis : Archäologie zwischen Asien und Europa : Festschrift für Harald Hauptmann zum 65. Geburtstag*, (Internationale Archäologie, Studia honoraria ; Bd. 12), Rahden/Westf.: Verlag Marie Leidorf.
- Schuster, C. 2004: "Zu der Problematik der Frühbronzezeit an der unteren Donau (Rümanien)," *Acta Archaeologica Carpathica* 34, 87—122.
- Schwenzer, S. 2005: "Zum Beginn der Frühbronzezeit in Bulgarien," in H. Barbara (ed.), *Interpretationsraum Bronzezeit: Bernhard Hänsel von seinen Schülern gewidmet*, Universitätsforschungen zur prähistorischen Archäologie ; Bd. 121, Bonn: Rudolf Habelt, 181—198.
- Séfériadès, M. 1996: "Deshayes' excavations at Dikili Tash: the early bronze age levels," *RPRP* 1(2-4), 95—128.
- Shepard, A. 1956: *Ceramics for the Archaeologist*, Washington, D.C.: Carnegie Institution of Washington Publication.
- Sherratt, A. 1986: "The Early Bronze Age pottery," in C. Renfrew et al. (eds.), *Excavations at Sitagroi, a Prehistoric Village in Northeast Greece*, Vol. 1, Los Angeles: University of California, 429—476.
- Slavchev, V. 2010: "The Varna Eneolithic Cemetery in the context of the Late Copper Age in the East Balkans," in D. Anthony & J. Y. Chi (eds.), *The Lost World of Old Europe – The Danube Valley, 5000-3500 BC –*, Princeton and Oxford: The Institute of the Study of the Ancient World at New York University and Princeton University Press, 193—210.
- Sperling, J. 1976: "Kumtepe in the Troad: Trial Excavation, 1934," *Hesperia* 45, 305—364.
- Stefanova, M. 2000: "Control excavations at Mikhalich in 1998-1999 (Preliminary Communication)," *RPRP* 4, 21—31.
- Stefanova, M. 2004: "Kontextuelle Probleme der Becher depas amphikepellon in Thrakien," in V. Nikolov & K. Băčvarov (Hrsg.), 197—201.
- Stefanovich, M. & Angelova, Ch. (Hrsg.) 2007: *PRAE - In Honorem Henrieta Todorova-*, Sofia: The Bulgarian Archaeological Institute and Museum.
- Şahoğlu, V. 2005: "The Anatolian Trade Network and the Izmir Region during the early bronze age," *Oxford Journal of Archaeology* 24(4), 339—361.

- Şahoğlu, V. 2012: "Early bronze age pottery in coastal western Anatolia," in Sabancı Üniversitesi & V. Şahoğlu (eds.), 136—143.
- Tasić, N. 1995: *Eneolithic cultures of central and west Balkans*, Belgrade: The "Draganić" Co..
- Tite, M. S. 2008: "Ceramic production, provenance and use – a review", *Archaeometry* 50(2), 216—231.
- Todorova, H. 1968: "Die vorgeschichtlichen Funde von Sadovec(Nordbulgarien)," *Jahrbuch des Römisch-Germanischen Zentral-museums Mainz* 15, 15—63.
- Todorova, H. 1982: *Kupferzeitliche Siedlungen in Nordostbulgarien*, München: Verlag C. H. Beck.
- Todorova, H. 1992: "Bericht über die Kontrollgrabung von 1979 aus Golemanovo Kale und Neuauswertung der prähistorischen Fundgutes," in S. Uenze et al. (eds.), *Die spätantiken Befestigungen von Sadovec, Bulgarien: Ergebnisse der deutsch-bulgarisch-österreichischen Ausgrabungen 1934-1937*, München: C. H. Beck., 361—374.
- Todorova, H. 1995: "The Neolithic, Eneolithic and Transitional Period in Bulgarian Prehistory," in D. Bailey & I. Panayotov (eds.), 79—98.
- Todorova, H. (Hrsg.) 2002: *Durankulak, Band II, Die prähistorischen Gräberfelder*, Teil I & II, Sofia: Publishing House Anubis Ltd..
- Todorova, H. 2003: "Prehistory of Bulgaria," in D. V Grammenos (ed.), *Recent research in the Prehistory of the Balkans*, Tessaloniki: Publications of the Archaeological Institute of North Greece 3, 257—328.
- Tončeva, G. 1981 : "Un habitat lacstre de l'age du Bronze Ancien dans les environs de la ville de Varna (Ezerovo II)", *Dacia* 25, 41—62.
- Tudor, E. 1982: "Neue Angaben zur frühen Bronzezeit in Südromänien," *Dacia* 26(1-2), 59—75.
- Vajsov, I. 1992: "Die früheste Dolche Bulgariens," *Anatolica* 18, 61—69.
- Vajsov, I. 1993: "Die frühesten Metalldolche Südost- und Mitteleuropas," *Praehistorische Zeitschrift* 68(1), 103—145.
- Vajsov, I. 2002: "Das Grab 982 und die Protobronzezeit in Bulgarien," in H. Todorova (Hrsg.), 159—176.
- Weisshaar, H.-J. 1989: *Die Deutschen Ausgrabungen auf der Pevkakia-Magula in Thessalien, Bd I; Das späte Neolithikum und das Chalkolithikum*, Vol. I, Bonn: Dr. Rudolf Habelt GMBH.
- Wendel, M. (Hrsg.) 2001: *Karasura, band 1. 15 Jahre Ausgrabungen in Karasura*, Weißbach: Beier und Beran.
- Weninger, B. 1995: "Stratified ¹⁴C Dates and ceramic chronologies: case studies for the Early Bronze Age at Troy (Turkey) and Ezero (Bulgaria)," *Radiocarbon* 37(2), 443—456.
- Zmeykova, I. 2001: "The Cernavodă III culture in north-eastern Bulgaria", in P. Roman & S. Diamandi (eds.), 213—235.

《ブルガリア・ロシア語文献》

Аврамова, М. 1992: Централните Родопи и проблемът за преходния период от енеолита към бронзовата епоха, *Археология*

34(2), 51.

- Александров, С. 1994: По Въпроса за погребалните обреди на култура Коцофени (южен вариант), *МИАП* 2, 85—90.
- Александров, С. 2003: Ранната бронзова епоха в югозападна България (проблеми на проучването), *Годишник на Софийския университет. Исторически факултет. специалност Археология, Сборник в памет на д-р. Петър Горбанов, Studia Archaeologica, Supplementum I*, София: Университетско издателство Св. Климент Охридски, 50—61.
- Бакърджиев, С. 2005: Спасителни археологически проучвания на могилен некропол в м. Събев Баир при с. Дражево, Община Тунджа, *АОР през 2004 г.*, 150—153.
- Бонев, А. & Александров, Г. 1993: Багачина—тракийски култов център (предварително съобщение), *Археология* 35(1), 24—30.
- Борисов, Б. 1991a: Състояние, проблеми и перспективи на археологическите проучвания в района на комплекса ‘Марица—Изток’, *МИАП* 1, 13—31.
- Борисов, Б. 1991b: Средновековното селище и некрополи край с. Знаменосец, *МИАП* 1, 205—305.
- Вайсов, И. 1992: Състояние на проучванията на т. нар. ‘Преходен Период в България’, *Археология* 34 (2), 45—49.
- Валентинова, М. & Ненова, Д. 2008: Обект от ранната бронзова епоха при Свиленград, в Г. Нехризов & В. Николов (ред.), *Спасителни археологически разкопки по трасето на железопътната линия Пловдив—Свиленград през 2005 г.*, Велико Търново: БАН-Археологически институт с музей, 494—526.
- Генадиева, В. 1994: Селище от ранната бронзова епоха край село Невестино, Кюстендилско, *МИАП* 2, 79—83.
- Генадиева, В. 2001: 6. Ранна бронзова епоха — VII хоризонт, в С. Чохаджиев (ред.), *Ваксево—праисторически селища*, ВеликоТърново: Faber, 75—79.
- Георгиев, Г. 1974: Стратиграфия и периодизация на неолита и халколита в днешните Български земи, *Археология* 16(4), 1—18.
- Георгиев, Г. и др. 1979: *Езеро-раннобронзовото селище*. София: Българската академия на науките.
- Георгиева, П. 1987: Материалите от преходния период между каменномедната епоха и бронзовата епоха от северна България, *Археология* 24(1), 1—15.
- Георгиева, П. 1992: Към проблема за Преходния период от енеолита към бронзовата епоха в България, *Археология* 34 (2), 51.
- Георгиева, П. 1994: Селищната могила Калето при с. Руките, Чирпанско, *ГСВИФСА* 1, 7—50.
- Георгиева, П. 2005: За зооморфните скиптри и последните етапи на късноенеолитните култури Варна, Коджадермен-Гумелница-Караново VI и Криводол-Сълкуца,” in Т. Stoyanov et al. (eds.), *Studia Archaeologica Universitatis Serdicensis*, Suppl. IV, Stephanos Archaeologicos in honorem Professoris Ludmili Getov, Sofia: St. Kliment Ohridski

University Press, 144—166.

- Гергов, В. 1979: Праисторически находки от пещерата при с. Муселиево, Плевенски окръг, *ИМСЗБ* 3, 37—55.
- Гергов, В. 1992: Мястото на селището Телиш-Редутите, в проблема за Преходния период в България, *Археология* 34 (2), 49.
- Гергов, В. 2009: Археологически проучвания на праисторическото селище в м. 'Езерото' при с. Садовец, общ. Долни Дъбник, *АОР през 2008 г.*, 106—108.
- Гергова, Д. 2008: Селищната могила при с. Дядово, Новоагарско, системата от ровове в устройството и функциите на селището от бронзовата епоха, *Археологически и исторически проучвания в Новоагарско* 2, 14—20.
- Гетов, Л. 1965: Могилни погребения при с. Долно Сахране, Старозагорско, *ИАИ* 38, 203—229.
- Дергачев, В. А. 1978: *Выхватинский могильник*. Кишинев: Штиинца.
- Дергачев, В. А. 1980: *Памятники позднего Триполья (Опыт систематизации)*, Кишинев: Штиинца.
- Детев, П. 1954: Селищната могила при с. Биково, *Годишник на музеите в Пловдивски Окръг* 1, 151—193.
- Детев, П. 1959: Материали за праисторията на Пловдив, *Годишник на народния археологически музей Пловдив* 3, 3—80.
- Детев, П. 1975: Разкопки на селищната могила Ясатепе в Пловдив през 1970 и 1971 г., *ИМЮБ* 11, 81—141.
- Детев, П. & Мацанова, В. 1976: Праисторическото селище при село Огняново, *ИМЮБ* 3, 45—86.
- Джанбазов, Н. & Катинчаров, Р. 1974: Разкопки в пещерата Магура през 1971 г., *ИАИ* 34, 107—138.
- Драганов, В. 1990: Културата Чернавода III на територията на България и по западното черноморско крайбрежие, *Добруджа* 7, 156—179.
- Збенович, В. Г. 1974: *Позднетрипольские племена северного причерноморья*. Киев: Наукова Думка.
- Змейкова, И. 1992: Раннобронзовото селище при с. Мировци, Варненски област, *Хелис* 1, 33—37.
- Еленски, Н. 2006: Сондажни проучвания на раннеолитното селище Джлуница-Смърдеш, Великотърновско. (предварително съобщение), *Археология* 47(1-4), 96—117.
- Еленски, Н. 2012: Сондажни проучвания на раннеолитното селище Джулоница - Смърдеш, *АОР през 2012 г.*, 40—42.
- Иванов, И. 1972: Енеолитно селище и гробове от бронзовата епоха при град Девня, *ИНМВ* 8(23), 246—259.
- Иванова, В. Г. и др. 2005: *Курганы ревиц скотоводов междуречья южного Буга и Днестра*, Одеса: Институт Археологии Национальной Академии Наук Украины.
- Илиев, И. & Бакърджиев, С. 2006: Археологически проучвания на могилен некропол от ранната бронзова епоха край село могила, област Ямбол, *Известия на музеите от югоизточна България*, 22, 89—107.
- Илчева, В. 2002: *Хотница. стари селища и находки*, част I—праистория, Велико Търново: ПАН-ВТ.
- Йоцова, А. 1981: Разкопки в рещерата Магура, *ИМСЗБ* 6, 11—25.

- Йоцова, А. 1988: Разкопки на селище от ранната бронзова епоха до с. Градец, Михайловградска област (предварително съобщение), *ИМСЗБ* 14, 11—18.
- Катинчаров, Р. 1972: Основные результаты раскопок первобытного поселения в г. Нова Загора (южная Болгария) в 1968 и 1970 гг., *Советская Археология* 1972(1), 242—247.
- Катинчаров, Р. 1974: Периодизация и характеристика на културата през бронзовата епоха в южна България, *Археология* 16(1), 1—24.
- Катинчаров, Р. 1975: Проучвания на бронзовата епоха в България (1944-1974), *Археология* 17(2), 1—17.
- Катинчаров, Р. 1999: Разкопки на праисторически селища в Новозагорско и значението им за проучването на бронзовата епоха в България, *Археологически и исторически проучвания в Новозагорско* 1, 49—56.
- Катинчаров, Р. & Маданова, В. 1993: Разкопки на селищната могила при с. Юнаците Пазарджишко, във В. Николов (ред.), 155—170.
- Катинчаров, Р. и др. 1980: Селищна могила до с. Дядово: сондажен изкоп (археологически разкопки 1977/1978 г.), *Expeditio Thracia* 1, 8—94.
- Катинчаров, Р. и др. 1995: *Селищна могила при село Юнаците (Пазарджишко)*, Т. 1, София: Агато & Диос.
- Китов, Г & Павров, П. 1973: Гробна находка от бронзовата епоха в Ловеч, *Музеи и паметници на културата* 4, 4—9.
- Колева, Б. 1993: Къснохалколитни аскоси от Долнослав, Пловдивско, във В. Николов (ред.), 121—128.
- Копралев, И. (ред.) 2002: *География на България*, София: ФорКом.
- Кънчев, И. 1995: *Геоложка карта на България: Сливен*, София: Геология и Геофизика АД.
- Кънчев, М. 1973: *Праисторически и антични материали в музея град Нова Загора*, София: ДП “Дечо Стефанов”.
- Кънчев, М. 1991: Некропол от бронзовата епоха в района на “Марица Изток”, *МИАП* 1, 41—70.
- Кънчев, М. 1995: Надгробна могила II (Голямата Могила) до село Голяма Детелина, община Раднево (част I), *МИАП* 3, 35—63.
- Кънчева-Русева, Т. 2000: Гробове от бронзовата епоха в праисторическо селище в Нова Загора, *Археология* 41(3-4), 31—34.
- Кънчева-Русева, Т. & Лещиков, К. 2008: Характеристика и датировка на праисторическо селище от бронзовата епоха до селищна могила Нова Загора, *Археологически и исторически проучвания в Новозагорско* 2, 51—84.
- Лещиков, К. 1986: Класификация, типология и развитие на керамиката от ранната бронзова Епоха в Тракия, Докторска дисертацията, Софийски университет “Климент Охридски”.
- Лещиков, К. 1988: Основни класификационни принципи за керамиката от ранната и средната бронзова епоха в Тракия, *Археология* 30(3), 1—13.
- Лещиков, К. 1994: Опит за датиране на I—IV строителни хоризонти на селищната могила до село Дядово, бронзова епоха,

- МИАП 2, 95—103.
- Лещаков, К. 1997: Изследвания върху бронзовата епоха в Тракия I. сравнителна стратиграфия на селищните могили от ранната бронзова епоха в югоизточна България, *Годишник на софийския университет "Св. Климент Охридски" исторически факултет* 84-85(за 1992), 5—119.
- Лещаков, К. 1999: Раннобронзови съдове от обекти в новозагорския район, *Археологически и исторически проучвания в Новозагорско* 1, 57-90.
- Лещаков, К. 2005: Относителна хронология на пласта от бронзовата епоха в селищна могила Казанлък, в М. Милчева (ред.), *Stephanos Archaeologicos in honorem Professoris Ludmili Getov* (Studia Archaeologica Universitatis Serdicensis, Supl. IV), София: Университетско изд-во "Св. Климент Охридски", 442—452.
- Лещаков, К. 2006: Бронзовата епоха в горнотракийската низина, *ГСУИФСА* 3, 141—216
- Лещаков, К. & Борисов, Б. 1995: Надгробна могила IV до село Голяма Детелина, община Раднево (част II), *МИАП* 3, 65—86.
- Лещаков, К. & Попова, Ц. 1995: Надгробна могила IV от ранната бронзова епоха в землището на село Голяма Детелина, община Раднево, *МИАП* 3, 9—33.
- Лещаков, К. и др. 2002: Спасителни разкопки на светилището Черна Гора 1: предварителни резултати от разкопките 1997 – 1999 г., *Известия на Старозагорския Исторически Музей* 1, 19—44.
- Лихардус, Я. & Илиев, И. 2004: Относителна хронология на неолита и халколита в микрорегиона на Драма и връзките му с централна Тракия, във В. Николов и др. (ред.), 26—45.
- Лихардус, Я. и др. (ред.) 2001: *Изследвания в микрорегиона на с. Драма (югоизточна България): обобщение на основните резултати на Българо-Германските разкопки от 1983 до 1999г.*, София: Университетско издателство "Св. Климент Охридски".
- Маргос, А. 1973: Праисторическо наколно селище Страшимирово-1, *ИНМВ* 9(24), 267—284.
- Маргос, А. & Тончева, Г. 1962: Праисторическото наколно селище при с. Езерово, Варненско, *ИВАД* 13, 1—16.
- Мерперт, Н. 1976: Древняя культура и историческая область и вопросы формирования Кельтур Шнуровой Керамики, в Л. В. Кольцов и др. (ред.), *Восточная Европа в эпоху камня и бронзы*, Москва: Наука, 101—127.
- Мерперт, Н. & Георгиев, Г. 1973: Поселение Эзеро и его место среди памятников раннего бронзового века восточной Европы," in V. Chropovský (ed.), *Symposium über Entstehung und Chronologie der badener Kultur*, Bratislava: Verlag der Slowakischen Akademie der Wissenschaften, 215—257.
- Миков, В. 1939: Селищна могила от бронзовата епоха в с. Веселиново, *ИБАИ* 13, 195—227.
- Миков, В. 1948: Предисторическо селище до Михалич, Свиленградско, *Разкопки и Проучвания* 1, 7—25.

- Миков, В. 1966: Техника на керамичното производство през праисторическата епоха в България, *ИИИ* 29, 165—210.
- Миков, В. & Джамбазов, Н. 1960 : *Деветаишката пещера*, София: Издание на Българската Академия на Науките.
- Мишина, Т. 2011: Орнаментираная Керамика Епохи Раннего Бронзового Века Телля Юнаците, *Годишник на Регионален Исторически Музей Пазарджик* 2, 69—81.
- Нехризов, Г. 2006: Ямно светилище от желязната епоха и селище от ранната бронзова епоха при Свиленград, във В. Николов и др. (ред.), *Спасителни археологически разкопки по трасето на железопътната линия Пловдив—Свиленград през 2004 г.*, Велико Търново: БАН-Археологически институт с музей, 397—501.
- Нехризов, Г. 2010: Спасителни разкопки на селище от ранната бронзова епоха при с. Седлари, мах. Градинка, общ. Момчилград (обект No196 по трасето на път I-5, участък Подкова-разклон за Джебел), *АОР през 2009г.*, 115—117.
- Нехризов, Г. & Иванов, Г. 2011: Селище от ранната бронзова епоха при с. Седлари, мах. Градинка, общ. Момчилград, *АОР през 2010г.* 110—113.
- Николов, Б. 1981: Епоха бронзы в Северо-Западной Болгарии и некрополь у с. Тырнава, *Tracia Praehistorica. Supplementum* 3, 192—200.
- Николов, В. (ред.) 1993: *Праисторически находки и изследвания – Сборник в памет на проф. Георги, И. Георгиев*, София: Българска Академия на Науките.
- Николов, В. 2004: Сондажни проучвания на Юрганджийската селищна могила до Коньово, Новозагорско, *Археология* 45(3-4), 37—46.
- Николов, В. (ред.) 2010: *Солта е Злато : праисторически солодобивен център Провадия – Солницата*, София: Национален Археологически Институт с Музей - Българска Академия на Науките.
- Николов, В. и др. (ред.) 2004: *Праисторическа Тракия*. София-Стара Загора: Археологически Институт с Музей –БАН, Регионален Исторически Музей-Стара Загора.
- Панайотов, И. 1984: За формирането на раннобронзовите култури в Българските земи, *Археология* 26(2-3), 5—15.
- Панайотов, И. 1989: *Ямната Култура в Българските земи*, Разкопки и проучвания, Кн. XXI, София: Българската Академия на Науките.
- Панайотов, И. 1991: Ранна и средна бронзова епоха в горнотракийската низина. нови проблеми, *МИАП* 1, 33—39.
- Панайотов, И. 2003: Проблеми на периодизацията на бронзовата епоха в Българските земи, *Studia Archaeologica, Supplementum I: Сборник в памет на д-р Петър Горбанов*, София: Университетско изд-во "Св. Климент Охридски", 27—31.
- Панайотов, И. & Александров, С. 1988: За Култура Магура-Коцофени в Българските земи, *Археология* 30(2), 1—15.
- Панайотов, И. & Александров, С. 1995: Могилен некропол от ранната бронзова епоха в землищата на селата Медникарово и

- Искрица, *МИАП* 3, 87—113.
- Панайотов, И. и др. 1991: Селищна могила Гълъбово-халколитна, ранна и средна бронзова епоха, *МИАП* 1, 147—170.
- Патокова, Э. Ф. 1979: *Усатовское поселение и могильники*, Киев: Наукова Думка.
- Патокова, Э. Ф. 1980: Новый могильник Усатовского типа у с. Маяки, *Северо-западное причерноморье в эпоху первобытно-общинного строя*, Киев: Наукова Думка, 71—87.
- Патокова, Э. Ф. & Петренко, В. Г. 1989: Новые источники и проблемы изучения познегориполя на западе причерноморских степей, в Э. Ф. Патокова (ред.), *Памятники Трипольской культуры в северо-западном причерноморье*, Киев: Наукова Думка, 50—81.
- Пейков, А. 1994: Стратиграфия в крепост на древнотракийския град Евмолпия, *ИМЮБ* 21, 23—42.
- Радунчева, А. 1981: Праисторически селища (V-II хил.пр.н.е.), в Й. Чангова (ред.), *Перник. Том 1. Поселен живот на хълма Кракра*, 11—52.
- Российская академия наук институт археологии 2007: *Тель Юнаците: эпоха бронзы*, Том II часть первая, Москва: Восточная Литература РАН.
- Сираков, Н. и др. 2014: No.1 Терени проучвания на обект Козарника: къснопалеолитни пещерни обиталища в Белоградчишкия карст, *АОР през 2013*, 23—25.
- Станчев, Д. 1989: Некропол от бронзовата епоха до село Батин, Русенско, *Годишник на музеите от северна България* 15, 7—13.
- Субботин, Л. В. 2000: Северо-Западное Причерноморье в эпоху ранней и средней бронзы, *Stratum Plus* 2000-2, 350—387.
- Тодорова, Х. 1979: *Енеолит Болгарии*, София: София Пресс.
- Тодорова, Х. 1986: *Каммено-медната епоха в България*, София: Наука и Изкуство.
- Тодорова, Х. & Вайсов, И. 1993: *Новокамменна Епоха в България*, София: Наука и Изкуство.
- Тончева, Г. 1967: Новооткрити антропоморхни плочи край с. Езерово, Варненско, *ИНМВ* 3, 3—19.
- Христов, М. 2012: Една ритуална структура от м. Балинов Горун край село Дъбене, Карловско, *Известия на Националния Истрочески Музей* 24, 9—33.
- Христова, Р. 2008: Керамика от началото на ранната бронзова епоха от м. Бадъ Бунар край Карнобат, *Археология* 49 (1-4), 93—102.
- Цанков, Ц. 1992: *Геоложка карта на България: Нова Загора*, София: Геология и Геофизика АД.
- Яровой, Е. В. 1985: *Древнейшие скотоводческие племена юго-запада СССР (классификация погребального обряда)*, Кишинев: Штиинца.

《日本語文献》

内堀基光 & 山下晋司: 1986『死の人類学』弘文堂.

大塚達朗 2004: 「型式 けいしき」安斎正人(編)『現代考古学事典』(縮刷版), 同成社, 105—109.

大屋道則 2005: 「土器類の産地推定についての基礎的検討—理論的背景の整理という研究史的課題の明確化—」

『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』20, 1—56.

ルメン・カティンチャロフ [著], 金原保夫 [訳] 1987: 「ブルガリア先史文化の特徴について」『文明』49, 5—12.

禿仁志 2001: 「エゼロとデャドヴォ: ブルガリア・東トラキアにおける前期青銅器時代集落の構造 (予察)」『日々の考古学』東海大学考古学教室開設20周年記念論文集, アルファ, 409—424.

禿仁志 2004: 『デャドヴォ発掘』東海大学トラキア発掘調査団.

禿仁志(編) 2005: 『ブルガリア・デャドヴォ遺跡の第16次発掘報告(2004)』Dyadovo Studies 4, 東海大学トラキア発掘調査団.

禿仁志(編) 2006: 『ブルガリア・デャドヴォ遺跡の第17次発掘報告(2005)』Dyadovo Studies 5, 東海大学トラキア発掘調査団.

禿仁志 2011: 「東海大学のブルガリア調査: 2000年以降」東海大学考古学研究室『日々の考古学2』六一書房, 445—458.

禿仁志(編) 2014: 『ブルガリア・デャドヴォ遺跡の資料分析を通して見る青銅器時代開始期の背景: ブルガリア・デャドヴォ遺跡の第21次・第22次・第23次調査報告(2010~2012)』Dyadovo Studies 7, 東海大学トラキア発掘調査団.

禿仁志, 千本真生 2008a: 「ブルガリア・上トラキア平野の青銅器時代研究-青銅器時代の始まりに関する2、3の問題について」『日本考古学協会第74回総会研究発表要旨集』日本考古学協会, 102-103.

禿仁志, 千本真生(編) 2008b: 『ブルガリア・デャドヴォ遺跡第18次(2006)・第19次(2007)発掘調査報告』Dyadovo Studies 6, 海大学トラキア発掘調査団, 15-113.

禿仁志, 千本真生 2009: 「ブルガリア・デャドヴォ遺跡の2008年度(第20次)発掘調査: 中世石壁住居と先史時代の溝」『平成20年度考古学が語る古代オリエント—第16回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会, 135—140.

ミティヨ・カンチェフ(金原保夫編訳) 1990: 「ノヴァ・ザゴラ地区における先史集落址」『バルカン・小アジア研究』16, 59—80.

金成太郎他 2014: 「可搬型蛍光X線分析装置を用いた古代オリエント博物館収蔵金属製品の素材識別」『古代オリエント博物館研究紀要』33(2013), 75—84.

金原保夫 1987: 「ブルガリアにおけるテル集落址について」『東海大学紀要文学部』48, 99—136.

小杉 康 1995: 「土器型式と土器様式」『駿台史学』94, 58—131.

- 小林正史 2005: 「バングラデシュの西部の伝統的土器づくりにおける成形手法の選択」佐々木, 齋藤 (編), 27—60.
- 小林達雄 1989: 「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観 後期・晩期・続縄文』小学館, 248—257.
- 小林行雄 1959: 「けいしき」水野清一他『図解考古学事典』東京創元社, 296—297
- 佐々木幹雄, 齋藤正憲 (編) 2005: 『世界の土器づくり』同成社.
- 佐原眞 1985: 「分布論」近藤義郎他『研究の方法』岩波講座 日本考古学 1, 115—160.
- 柴田徹 2014: 「デャドヴォ遺跡出土のフリントのタイプ毎特徴記載と石材産地採集試料との比較」, 禿仁志 (編), 160—169.
- 鈴木公雄 1969: 「土器型式における時間の問題」『上代文化』38, 6—13.
- 関根孝夫, 禿仁志 (編) 1998: 『Djadovo Studies 1 デャドヴォ遺跡 (ブルガリア) 第11次発掘調査報告 (1997)』東海大学トラキア発掘調査団.
- 関根孝夫, 禿仁志 (編) 1999: 『Djadovo Studies 2 デャドヴォ遺跡 (ブルガリア) 第12次発掘調査報告 (1998)』東海大学トラキア発掘調査団.
- 関根孝夫, 禿仁志 (編) 2000: 『Djadovo Studies 3 デャドヴォ遺跡 (ブルガリア) 第13次発掘調査報告 (1999)』東海大学トラキア発掘調査団.
- 千本真生 2006: 「7. 住居群地区から出土した土器の編年的位置づけについて」『Djadovo Studies 5: ブルガリア・デャドヴォ遺跡の第17次発掘調査報告』東海大学トラキア発掘調査団, 80—84.
- 千本真生 2009: 「ブルガリア、テル・デャドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器とその編年的位置づけ」東海大学文学部考古学研究室 (編) 『日々の考古学 2』, 429—444.
- 千本真生 2010: 「ブルガリア・トラキア地方における前期青銅器時代エゼロ文化の系譜と成立—主に土器装飾を手がかりにして—」『西アジア考古学』11, 1—21.
- 千本真生 2012: 「ブルガリア共和国カラノヴォ遺跡」『考古学研究』59(1), 116—118.
- 千本真生 2013: 「黒海西部の新石器化」『日本西アジア考古学会第18回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会, 17—20.
- 千本真生 2014: 「ブルガリア前期青銅器時代における縄目文土器の変遷: デャドヴォ遺跡の事例を中心として」『オリエンツ』56(2), 16—36.
- 千本真生, 禿仁志 2014: 「AMS年代測定によるデャドヴォ遺跡の絶対年代と層位: 上トラキア平野における前期青銅器時代初頭の年代によせて」禿仁志 (編), 77—88.
- 千本真生他 2010: 「ブルガリア先史土器の胎土研究に関する予察」『東海史学』44, 105—118.
- 千本真生他 2012: 「ブルガリア・デャドヴォ遺跡における土器胎土・カマド構築材料の基礎的研究—考古学・岩石学・分析化学の視点から」『日本文化財科学会第29回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会, 260—261.
- 千本真生他 2014a: 「デャドヴォ遺跡における前期青銅器時代土器の胎土分析と産地推定」禿仁志 (編), 116—126.

- 千本真生他 2014b:「前期青銅器時代デャドヴォ遺跡に見られるカマド構築用粘土の産地推定」禿仁志 (編), 127—134.
- 田中琢 1978:「型式学の問題」大塚初重 他『日本考古学を学ぶ(1)』有斐閣, 14—26.
- 常木晃 2005:「シリアの民族誌から見た土器生産の専門化」佐々木, 齋藤 (編), 61—82.
- 東海大学トラキア発掘調査団 1987「デャドヴォ遺跡(ブルガリア)発掘調査概報(1986)」『バルカン・小アジア研究』13, 55—71
- 東海大学トラキア発掘調査団 1990:「デャドヴォ遺跡(ブルガリア)第6次発掘調査概報(1989)」『バルカン・小アジア研究』17, 39—78.
- 東海大学トラキア発掘調査団 1996:「デャドヴォ遺跡(ブルガリア)第10次発掘調査概報(1995)」『バルカン・小アジア研究』20, 65—96.
- 戸田哲也 1983:「縄文」加藤晋平他『縄文文化の研究』5, 縄文土器Ⅲ, 雄山閣, 170—190.
- 西秋良宏(編) 2013:『考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究3:「交代劇」A01 斑 2012年度研究報告』東京大学総合研究博物館.
- 西田泰民 2008:「情報としての縄文土器」小杉康他『縄文時代の考古学 7 土器を読み取る:縄文土器の情報』同成社, 3—15.
- ストヤン・ノヴァコヴィチ [著], 越村勲, 唐沢晃一 [訳] 2003:『セロ:中世セルビアの村と家』刀水書房.
- パレオ・ラボ AMS年代測定グループ 2014:「放射性炭素年代測定」禿仁志 (編), 89—110.
- 松田光太郎, 建石徹 1999:「関連科学研究 胎土分析」『縄文時代』10(3), 308—318.
- 松本建速 2011:『蝦夷とは誰か』ものが語る歴史25, 同成社.
- 三宅裕 1997:「西アジア先史時代における乳利用の開始について—考古学的にどのようなアプローチが可能か」『オリエント』39(2), 83—101.
- 山内清男 1979:『日本先史時代土器の縄紋』先史考古学会.
- 横山浩一 1985:「3 型式論」『岩波講座 日本考古学1 研究の方法』岩波書店, 43—78.
- クラスィミル・レシュタコフ [著], 千本真生 [訳] 2010:「上トラキア平野の青銅器時代(1)」『東海史学』44, 139—166.
- クラスィミル・レシュタコフ [著], 千本真生 [訳] 2011:「上トラキア平野の青銅器時代(2)」『東海史学』45, 69—93.
- クラスィミル・レシュタコフ [著], 千本真生 [訳] 2012:「上トラキア平野の青銅器時代(3)」『東海史学』46, 63—70.